（財）大阪府文化財センター調査報告書　第217集

吹田市

吹田操車場遺跡Ⅵ

吹田(信)基盤整備工事(貨物専用道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011年3月

財団法人　大阪府文化財センター

吹田操車場遺跡Ⅵ

二〇一一年三月

財団法人　大阪府文化財センター

吹田市

吹田操車場遺跡Ⅵ

吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人　大阪府文化財センター

1．吹田操車場（西端付近）『産業と風光の大阪』昭和 7(1932) 年より転載

2．現在の吹田操車場（西端付近）　片山彰一氏撮影　平成 21(2009) 年 7 月 14 日(西から)

序　　文

吹田操車場遺跡が所在する吹田市は、平成22（2010）年に市制70年を迎えました。大阪市に程近い場所に位置するため、ニュータウンの建設・交通網の整備や日本万国博覧会の開催など、大きな開発が行なわれ、活気溢れる街となっています。

現在も活気漲る当地は、山城と難波を結ぶ幹線道「三嶋路」に接し、淀川の水運にも恵まれ、古くから交通の要衝として栄えてきました。また、市域北側に広がる千里丘陵には、古墳時代から奈良時代に営まれた須恵器窯跡群、難波宮や平安宮に供給する瓦を生産した七尾瓦窯・吉志部瓦窯といった官営瓦窯が操業され、我が国でも指折りのコンビナートでもあり、歴史的にも重要な地域でありました。

さて、今回報告いたします吹田操車場遺跡は、平成10（1998）年度から当センターが調査を重ね、これまでに古墳時代から奈良時代にかけての密集土坑や古代の集落跡の発見、中国越州窯系青磁や七尾瓦窯産軒瓦の出土など衆目を集め、広範に亘る遺跡の各時代の様相を明らかにして参りました。

今回は遺跡の西端部における調査となり、今まで詳らかではなかった部分に光を当てることが出来ました。これまでの調査のような華々しい出土遺物や遺構はありませんが、遺跡中心部と周辺部との土地利用の相違や吹田市域でも数少ない中世墓の発見など、地域の文化・歴史を復元する上で貴重な資料を提供することが出来ました。

折しも、吹田市では「1町5村アーカイブ（郷土館）」構想をもとに、地域の文化や歴史を再確認すべく様々な展示や事業が行なわれております。今回、そしてこれまでの吹田操車場遺跡における調査成果がこのような地域発信の活動にも活用され、文化財に対する意識をより高めてくれるものと確信してやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な協力を賜りました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社、同吹田事務所、大阪府教育委員会、吹田市教育委員会、吹田市立博物館をはじめ、関係各位に深く謝意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

財団法人　大阪府文化財センター

理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は大阪府吹田市片山町１丁目地内に所在する吹田操車場遺跡 09 － 1 の発掘調査報告書である。

2．調査は、吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う吹田操車場遺跡発掘調査 10 として、平成 21（2009）年４月１日～平成 22（2010）年７月 30 日、続いて同 12 として平成 22（2010）年８月２日～平成 23（2011）９月 30 日まで、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地における調査は平成 21（2009）年５月８日～平成 22（2010）年７月 23 日の間に行なった。遺物整理作業は平成 22（2010）年８月２日～ 12 月 28 日の間に行ない、平成 23（2011）年３月 31 日に本書の刊行を以って完了した。

3．調査および整理作業は以下の体制で実施した。

〔平成 21 年度（2009 年度）〕

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　金光正裕、調査グループ長　寺川史郎

中部総括主査　秋山浩三、技師　新海正博、専門調査員　前田俊雄

〔平成 22 年度（2010 年度）〕

調査部長兼調査課長　福田英人、調整グループ長　江浦　洋、調整グループ主幹　岡本茂史、調査グループ長　岡戸哲紀、中部総括主査　秋山浩三、技師　新海正博

4．遺物写真撮影は調査グループ主査　片山彰一が、木製品の保存処理・樹種鑑定・骨の同定は総括主査　村上年生、調査グループ主査　山口誠治、専門調査員　倉賀野健が行なった。

5．発掘調査および整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。

岡本敏行・山上　弘・竹原伸次（大阪府教育委員会）、賀納章雄・増田真木（吹田市教育委員会）

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構国鉄清算事業西日本支社吹田事務所

6．発掘調査において、以下の機関に分析を委託した。

花粉・珪藻分析：パリノ・サーヴェイ（株）

放射性炭素年代測定：（株）パレオ・ラボ

7．本書の作成は、執筆・編集を新海が担当した。

8．本書に関わる写真・実測図などの記録類は当センターにおいて保管しており、広く活用されることを希望する。

凡　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2．座標値は世界測地系（測地成果 2000）で表示し、単位はmである。
3．全体図および遺構実測図の方位は座標北を示す。
4．現地調査および遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2003 に準拠した。
5．土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
6．遺構名は、貨物専用道路部分・通信ケーブル防護管発信立坑部分・下水管確認調査部分で、各々通し番号（連番）の後ろに遺構の種類をつけて表示している。　例：5溝・158井戸
7．貨物専用道路部分の遺構全体図が 200 分の 1、遺構平・断面図が 20 分の 1、通信ケーブル防護管発信立坑部分・下水管確認調査部分の遺構全体図が 40 分の 1、遺構平・断面図が 20 分の 1 を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8．遺物実測図の縮尺は 4 分の 1 を基本とするが、木製品を 8 分の 1、金属製品・石製品 2 分の 1 で掲載するなど、一部はこの限りではない。写真図版の遺物はスケールを統一していない。
9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10．本書を作成するにあたり、以下のものを引用および参照した。

古代の土器研究会編　1992『古代の土器 1　都城の土器集成』
古代の土器研究会編　1993『古代の土器 2　都城の土器集成Ⅱ』
古代の土器研究会編　1994『古代の土器 3　都城の土器集成Ⅲ』
（財）古代学協会・古代学研究所編　1994「第二章　土器と陶磁器」『平安京提要』角川書店
小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀～ 19 世紀－』真陽社
中世土器研究会編　1998『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
鋤柄俊夫　1995「第 1 章　大阪府南部の瓦質土器生産（1）」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財センター
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会編　2005『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集・資料集
九州近世陶磁学会編　2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言
凡　　例

第１章　調査に至る経過と方法……1
　第１節　調査に至る経緯と経過……1
　第２節　調査・整理の方法……2
第２章　遺跡の位置と環境……4
　第１節　地理的・歴史的環境……4
　第２節　吹田操車場遺跡の既往の調査……11
第３章　調査成果……13
　第１節　基本層序と遺構面……13
　第２節　１・２区の調査……18
　（１）第１面　（２）第２面　（３）第３面
　（４）第４面　（５）第５面　（６）第６面　（７）第７面
　第３節　３－２区の調査……28
　（１）第１面　（２）第２面　（３）第３・４面
　（４）第５面　（５）第６面
　第４節　３－１区の調査……34
　（１）第２面　（２）第３面　（３）第４面
　（４）第５面　（５）第６面　（６）第７面
　第５節　４区の調査……42
　（１）第１面　（２）第３面　（３）第５面　（４）第６面
　第６節　５－１区の調査……47
　（１）第１面　（２）第３面　（３）第４面
　（４）第６面　（５）第７面
　第７節　５－４区の調査……51
　（１）第０面　（２）第１面　（３）第２面　（４）第３面
　（５）第４面　（６）第５面　（７）第６面　（８）第７面
　第８節　５－３区の調査……64
　（１）第１面　（２）第２面　（３）第３面
　（４）第４面　（５）第５面　（６）第６面　（７）第７面
　第９節　５－２区の調査……76
　（１）第１面　（２）第２面　（３）第３面

（4）第4面　（5）第5面　（6）第6面　（7）第7面
第10節　通信ケーブル防護管発信立坑（立坑）の調査 …… 93
（1）第1面　（2）第2面　（3）第3面
第11節　下水管確認の調査 …… 95
下水管1区 …… 96
（1）第1面　（2）第2面　（3）第3面　（4）第4面
下水管2区 …… 99
（1）第1面　（2）第2面　（3）第3面　（4）第5面
第12節　遺構及び包含層出土遺物 …… 103
1．1・2区遺構出土遺物 …… 103
2．3－2区遺構出土遺物 …… 105
3．3－1・4区遺構出土遺物 …… 109
4．5－1・5－4・5－3区遺構出土遺物 …… 109
5．5－2区遺構出土遺物 …… 111
6．1・2区包含層出土遺物 …… 113
7．3－2区包含層出土遺物 …… 116
8．3－1区包含層出土遺物 …… 118
9．4区包含層出土遺物 …… 119
10．5－1区包含層出土遺物 …… 120
11．5－4・5－3区包含層出土遺物 …… 122
12．5－2区包含層出土遺物 …… 124
第4章　自然科学分析 …… 125
第1節　放射性炭素年代測定 …… 125
第2節　花粉・珪藻分析 …… 128
第5章　総括 …… 141

挿図目次

図1　調査区位置図…… 1
図2　地区割図…… 3
図3　遺跡分布図…… 6
図4　調査区と既往の調査位置図…… 11
図5　1区東壁断面図…… 13
図6　2－1区東壁・2－2区　西壁断面図…… 14
図7　3－1区・4区　南壁断面図…… 15
図8　5－3区　南壁断面図…… 16
図9　5－2区　西壁断面図…… 17
図10　1・2区　第1面　平面図 …… 19
図11　1・2区　第2面・第3面　平面図 …… 20
図12　1区　第2面　62溝断面図…… 21
図13　1・2区　第4面・第5面　平面図 …… 22
図14　1区　第5面　155落込み断面図 …… 24
図15　1・2区　第6面　平面図 …… 25
図16　1区　第6面　152・154・160土坑断面図・159遺物集中部平・断面図 …… 26
図17　1区　第6面　158井戸平・断面図 …… 27
図18　3－2区　第1面　平面図 …… 29
図19　3－2区　第2面　平面図 …… 30
図20　3－2区　第2面　192池断面図 …… 31
図21　3－2区　第5面　平面図・第5面201溝断面図…… 32
図22　3－2区　第6面　平面図 …… 33
図23　3－2区　第6面　204落込み断面図 …… 34
図24　3－1区　第2面　平面図 …… 35
図25　3－1区　第2面　165池断面図 …… 36
図26　3－1区　第3面　平面図・第3面　180・181溝断面図 …… 37
図27　3－1区　第4面　平面図・第4面　183土坑断面図 …… 38
図28　3－1区　第5面　平面図 …… 39
図29　3－1区　第6面　平面図 …… 40
図30　3－1区　第7面　平面図 …… 41
図31　4区　第1面・第3面　平面図 …… 43
図32　4区　第5面・第6面　平面図 …… 44
図33　4区　第5面　498・499落込み断面図 …… 45
図34　4区　第6面　503～505落込み断面図…… 46
図35　5－1区　第1面　平面図 …… 47
図36　5－1区　第3面　平面図 …… 48
図37　5－1区　第6面　平面図・第6面　266落込み断面図 …… 49
図38　5－4区　第0面　平面図 …… 51
図39　5－4区　510大畦畔他断面図 …… 52
図40　5－4区　第1面　平面図 …… 54
図41　5－4区　第2面　平面図 …… 55
図42　5－4区　第2面　516・517土坑断面図 …… 56
図43　5－4区　第3面　平面図・第3面　525～527溝・528畦畔断面図 … 57
図44　5－4区　第4面　平面図 …… 58
図45　5－4区　第4面　530溝断面図 …… 59
図46　5－4区　第5面　平面図 …… 60
図47　5－4区　第5面　538溝断面図 …… 61
図48　5－4区　第6面　平面図 …… 62
図49　5－4区　第6面　539・540土坑平・断面図 …… 63
図50　5－4区　第7面　平面図 …… 64
図51　5－4区　第7面　542谷北壁断面図 …… 65
図52　5－3区　第1面　平面図 …… 66
図53　5－3区　第2面　平面図 …… 67
図54　5－3区　第3面　平面図 …… 68
図55　5－3区　第4面　平面図 …… 69
図56　5－3区　第5面　平面図 …… 70
図57　5－3区　第6面　平面図 …… 71
図58　5－3区　第6面　遺構断面図 …… 72
図59　5－3区　第7面　平面図 …… 73
図60　5－2区　第1面　平面図 …… 74
図61　5－2区　第1面　293土坑・295井戸断面図 …… 75
図62　5－2区　第2面　平面図・第2面溝断面図 … 76
図63　5－2区　第3面　平面図・第3面338・352溝・348土坑断面図 …… 78

図 64　5－2区　第4面　平面図・第4面 355・356・
359 溝・363 土坑断面図 …… 80
図 65　5－2区　第5面　平面図 …… 81
図 66　5－2区　第5面　遺構平・断面図 …… 82
図 67　5－2区　第5面　395 木棺墓平・断面図 …… 84
図 68　5－2区　第6面　平面図 …… 86
図 69　5－2区　第6面　遺構平・断面図 …… 87
図 70　5－2区　第6面　435 土坑平・断面図 …… 88
図 71　5－2区　第7面　平面図 …… 89
図 72　5－2区　第7面　437・439 溝・436 土坑
断面図 …… 90
図 73　5－2区　第7面　427・445 土坑
平・断面図 …… 91
図 74　立坑　西壁断面図 …… 93
図 75　立坑　第1面・第2面　平面図 …… 94
図 76　立坑　第3面　平面図 …… 95
図 77　下水管1区　第2面　平面図・4溝断面図 …… 96
図 78　下水管1区　第3面平面図・5溝断面図 …… 97
図 79　下水管1区　第4面平面図・6溝断面図 …… 98
図 80　下水管2区　第1面　平面図 …… 99
図 81　下水管2区　第2面　平面図・8溝断面図 … 100
図 82　下水管2区　第3面　平面図・9溝断面図 … 101
図 83　下水管2区　第5面　平面図・中央断面図 … 102
図 84　1・2区　第4・5面　出土遺物 …… 103
図 85　1・2区　第6面　出土遺物（1）…… 104
図 86　1・2区　第6面　出土遺物（2）…… 105
図 87　3－2区　第2・5面　出土遺物 …… 106
図 88　3－2区　第6面　出土遺物 …… 107
図 89　3－1・4区　遺構　出土遺物 …… 108
図 90　5－1・5－4・5－3区　遺構　出土遺物　110
図 91　5－2区　遺構　出土遺物 …… 112
図 92　1・2区　第1～3層　出土遺物 …… 114
図 93　1・2区　第4層　出土遺物 …… 115
図 94　3－2区　包含層　出土遺物 …… 117
図 95　3－1区　包含層　出土遺物 …… 118
図 96　4区　包含層　出土遺物 …… 120
図 97　5－1区　包含層　出土遺物 …… 121
図 98　5－4・5－3区　包含層　出土遺物 …… 122
図 99　5－2区　包含層　出土遺物 …… 123
図 100　暦年較正結果 …… 127
図 101　主要珪藻化石群集の層位分布 …… 130
図 102　花粉化石群集の層位分布 …… 134

表目次

表1　測定試料及び処理…… 126
表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果…… 126
表3　珪藻分析結果（1）…… 131
表4　珪藻分析結果（2）…… 132
表5　花粉分析結果…… 135

写真目次

写真1　旧東海道線関連資料（1）…… 9
写真2　旧東海道線関連資料（2）…… 10
写真3　珪藻化石…… 139
写真4　花粉化石…… 140

巻頭図版目次

1．吹田操車場（西端付近）『産業と風光の大阪』
昭和７（1932）年より転載

2．現在の吹田操車場（西端付近）片山彰一氏撮影
平成 21（2009）年７月 14 日（西から）

写真図版目次

図版1　1・2区　1．1区　第1－1面　西端（北から）
2．1区　第1－2面　西半（西から）
3．2－2区　第1－2面　全景（西から）
図版2　1・2区　1．1区　第2面　西半（西から）
2．1区　第2面　62溝　断面（南から）
3．2－2区　第2面　全景（西から）
図版3　1・2区　1．1区　第3面　東半（南西から）
2．2－1区　第3面　全景（西から）
3．2－1区　第3層　遺物出土状況（西から）
図版4　1・2区　1．1区　第4面　東半（南西から）
2．1区　第5面　東半（南西から）
3．2－1区　第5面　全景（西から）
図版5　1区　1．1区　第6面　西半（南から）
2．1区　第6面　133谷西半　断面（北東から）
3．1区　第6面　159遺物集中部　墨書土器出土状況（南東から）
図版6　1区　1．1区　第6面　158井戸検出状況（北から）
2．1区　第6面　158井戸　断面（西から）
3．1区　第6面　158井戸　完掘状況（北から）
図版7　2－1区　1．2－1区　第6面　全景（北から）
2．2－1区　第6面　151・152土坑　検出状況（東から）
3．2－1区　第6面　154土坑　断面（東から）
図版8　3－2区　1．3－2区　第2面　東半（南東から）
2．3－2区　第2面　192池　東端断面（北から）
3．3－2区　第2面　192池　遺物出土状況
図版9　3－2区　1．3－2区　第5面　西半（南東から）
2．3－2区　第6面　東半（南西から）
3．3－2区　第6面　204落込み　遺物出土状況（西から）
図版10　3－1区　1．3－1区　第2面　西半（西から）
2．3－1区　第2面　165池　断面（西から）
3．3－1区　第3面　東半（東から）
図版11　3－1・4区　1．3－1区　第6面　全景（東から）
2．3－1区　第7面　全景（東から）
3．4区　第1面　東半（北西から）
図版12　4区　1．4区　第3面　東半（南西から）
2．4区　第5面　西半（南東から）
3．4区　第6面　東半（北から）
図版13　4区　1．4区　第6面　503落込み　断面（東から）
2．4区　第7面　全景（北から）
3．4区　第7面　504落込み　断面（北東から）
図版14　5－1・5－4区　1．5－1区　第3面　全景（東から）
2．5－1区　第6面　全景（西から）
3．5－4区　第0面　510大畦畔（北から）
図版15　5－4区　1．5－4区　第1面　東半（北西から）
2．5－4区　第2面　西半（西から）
3．5－4区　第2面　516・517土坑（東から）
図版16　5－4区　1．5－4区　第2面　516土坑　断面（西から）

図版17　5－4区　1．5－4区　第4面　530溝
（南から）
2．5－4区　第4面　530溝　断面
（南から）
3．5－4区　第5面　東半
（北東から）
図版18　5－4区　1．5－4区　第5面　538溝　断面
（南から）
2．5－4区　第6面　中央（北西から）
3．5－4区　第6面　540土坑　断面
（東から）
図版19　5－4区　1．5－4区　第6面　539土坑
検出状況（南から）
2．5－4区　第6面　539土坑
完掘状況（南から）
3．5－4区　第6面　539土坑　断面
（南から）
図版20　5－4区　1．5－4区　第7面　542谷（南から）
2．5－4区　第7面　542谷　西同付近
断面（南東から）
3．5－4区　第7面　542谷　中央断面
（南から）
図版21　5－3区　1．5－3区　第2面　西半（北西から）
2．5－3区　第4面　東半（北西から）
3．5－3区　第6面　東半（西から）
図版22　5－3区　1．5－3区　第6面　484土坑　断面
（南から）
2．5－3区　第6面　486溝　断面
（南から）
3．5－3区　第7面　全景（北から）
図版23　5－2区　1．5－2区　第1面　293土坑　断面
（東から）
2．5－2区　第3面　全景（北西から）
3．5－2区　第3面　352溝　断面
（南から）
図版24　5－2区　1．5－2区　第4面　全景（北西から）
2．5－2区　第5面　全景（東から）
3．5－2区　第5面　393溝（南から）
図版25　5－2区　1．5－2区　第5面　395木棺墓
完掘状況（南から）
2．木棺検出状況（南から）
3．遺物検出状況（南から）
4．395木棺墓　断面（北西から）
5．395木棺墓　断面（南東から）
図版26　5－2区　1．5－2区　第5面　396溝　断面
（南西から）
2．5－2区　第5面　394土坑
検出状況（南から）
3．5－2区　第5面　394土坑
完掘状況（南から）
図版27　5－2区　1．5－2区　第6面　全景（南東から）
2．5－2区　第6面　435土坑
完掘状況（南東から）
3．5－2区　第6面　409溝（南西から）
図版28　5－2区　1．5－2区　第6面　408土坑
完掘状況（北西から）
2．5－2区　第7面　427土坑
完掘状況（東から）
3．5－2区　第7面　427土坑　断面
（北東から）
図版29　5－2区　1．5－2区　第7面　全景（南から）
2．5－2区　第7面　436土坑　断面
（北東から）
3．5－2区　第7面　445土坑
完掘状況（西から）
図版30　2～5区　1．2－2区　西壁（東から）
2．3－2区　南壁（北から）
3．3－1区　南壁（北から）
4．4区　南壁（北から）
5．5－4区　南壁（北から）
6．5－1区　北壁（南から）
7．5－3区　西壁（東から）
8．5－2区　西壁（東から）

第１章　調査に至る経過と方法

第１節　調査に至る経緯と経過

吹田操車場遺跡は、吹田市片山町・芝田町と岸部中町地内に所在する。かつて「東洋一の操車場」と称され大正 12（1923）年に操業を開始し、昭和 59（1984）年にその役割を終えた旧国鉄吹田操車場（現：JR 貨物吹田信号場駅）を中心に広がる遺跡で、千里丘陵の南縁部から沖積平野に位置している。当遺跡は、昭和 42（1967）年に吹田市教育委員会が行なった操車場内の道路・水路整備に伴う事前調査により、中世の遺物の出土が確認され、認知されるようになった。

時を経て平成 10（1998）年、当時の日本国有鉄道清算事業団近畿支社により、JR 梅田貨物駅の機能の一部を吹田操車場跡地へ移管する計画が持ち上がった。同社は、大阪府教育委員会との協議の後、移転用地内全域を対象として確認調査を行なうこととなった。同年度から、調査が（財）大阪府文化財調査研究センター（現：（財）大阪府文化財センター）に委託され、遺跡の範囲・遺構の有無・遺構面の

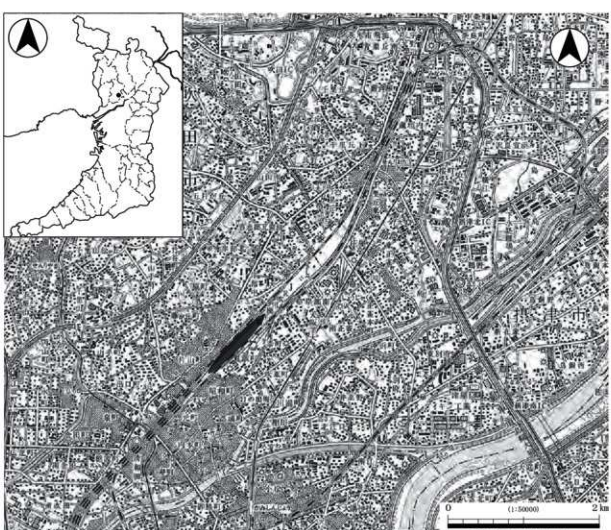


図１　調査位置図

面数等を確認するため、61 箇所の確認調査を実施した。この結果、操車場造成時に分厚い盛り土が施されていたことにより、ほぼ全域で現地表面下に多様な遺構が残っていることを明らかにした。そして出土遺物や検出した遺構の検討から、旧石器時代から近世に至る広範な複合遺跡であることが判明した。

その後、平成 12（2000）年に日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社は、吹田信号場基盤整備工事による貨物駅含及び倉庫建設計画に際して、上記の調査結果をふまえ、大阪府教育委員会と協議を行ない、開発予定地の発掘調査を同センターが実施することとなった。

また同年、吹田操車場の南側に位置する貨車区の改良工事を行なうこととなり、確認調査を大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。この結果、新たな遺跡の発見となり、吹田操車場遺跡 B 地点として発掘調査を同センターが実施した。

平成 18（2006）年から平成 20（2008）年にかけて、（財）大阪府文化財センターは吹田信号場基盤整備工事に伴い、調整池 10 箇所やそれを結ぶ導水管部分、防火水槽 4 箇所の調査を実施した。

平成 21（2009）年から平成 22（2010）年にかけては、吹田信号場基盤整備工事に伴う調査に関して JR 第二・三職員通路部の付け替え・南北自由通路部分・連絡地下道改築・保線検修庫部分・モーターカー検修庫部分・通信ケーブル防護管発信立坑部分・導水路到達立坑部分・岸辺駐車場部分を行なった。更に、併行して吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う発掘調査も実施した。

また、貨物専用道路の西側延伸部分に関しても、新たに吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路新設）に伴う確認調査として、吹田城跡隣接地で 9 箇所、片山荒池遺跡隣接地で 4 箇所実施した。その結果、西の庄東遺跡を新たに発見した。この他に、吹田操車場跡地内では独立行政法人　都市再生機構西日本支社が実施する北部大阪都市計画事業吹田操車場跡地土地区画整理事業に伴う発掘調査を行ない、150 基を超える密集土坑群や古代の溝、中世の耕作地等を検出している。

なお、本書は吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う発掘調査に関わるものであるが、急遽追加されて行なった吹田信号場基盤整備工事に伴う調査の通信ケーブル防護管発信立坑部分、吹田信号場基盤整備工事（貨物専用道路新設）に伴う調査の下水管確認調査も含めて報告する。

第 2 節　調査・整理の方法

調査区割　遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき国土座標（第Ⅵ座標系）を基準とした区画を使用した。これに則り、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小 4 段階の区画を設定した。第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 X＝－ 192000 m・Y＝－ 88000 m を基準とし、南北方向に 6 ㎞・東西方向に 8 ㎞で区画する。表示は、南西端を基点に北へ A ～ O、東へ 0 ～ 8 とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に 1.5 ㎞、東西方向に 2.0 ㎞でそれぞれ 4 分割し、計 16 区画を設定する。表示は南西端を 1 とし、東へ 4 まで、あとは西端を 5 、9 、13、北西端を 16 と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100 m 単位で、南北 15、東西 20 に区画する。表示は北東端を基点に、南へ A ～ O、西へ 1 ～ 20 とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を 10 m 単位で南北方向、東西方向共に 10 に区画する。表示は北東端を基点に南へ a ～ j、西へ 1 ～ 10 とする。なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査区の呼称　調査時は事業者との調整を円滑に行なうため、工事名称を優先してそれを調査区の名称として採用した。但し、調査区に枝番号を付与する際には調査の着手順に付与した。なお、調査は本

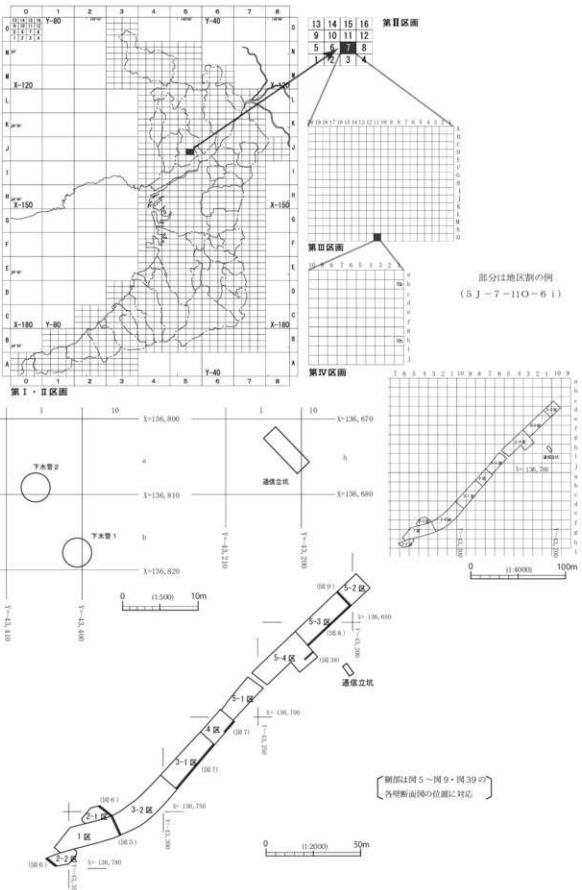

第Ⅰ・Ⅱ区画
第Ⅱ区画
第Ⅲ区画
第Ⅳ区画
部分は地区割の例
（５Ｊ－７－11Ｏ－６ｉ）
下水管２
下水管１
通信立坑
5-2 区
5-3 区
5-4 区
5-1 区
4 区
3-1 区
3-2 区
2-1 区
1 区
2-2 区
(図 9)
(図 8)
(図 39)
(図 7)
(図 6)
(図 5)
(図 6)
(1:500)
(1:4000)
(1:2000)
10m
100m
50m
網部は図５～図９・図39の
各壁断面図の位置に対応

図２　地区割図

体工事や周辺での工事に支障が出ない様に調整しながら行なったため、手掛けた調査区は、１・２区→３－１区→３－２区→５－１区→５－２区→５－３区→４区→５－４区の順となった。

整理作業においては、新たに調査区の名称を振りなおすことなく調査時のものを踏襲した。但し、本報告書における調査成果の記述に際しては、調査順の調査区の並びではなく、調査地西端に位置する１・２区から順に東側の調査区へと進めている。また、追加調査となった通信ケーブル防護管発信立坑部分は立坑と称し、下水管確認調査部分２箇所に関しては、調査順に下水管１・下水管２とした。

遺構名　貨物専用道路部分は調査区をまたがり検出順に１からの通し番号を付与した。立坑・下水管調査区では調査区毎（下水管調査区では１・２通して）に１からの通し番号を付与した。

掘削方法　現代のバラスト層及び操車場造成時の盛土、操車場造成直前の耕作土層を機械掘削し、それ以下を堆積層毎に人力にて掘削を行ない、遺構面・遺構の確認及び遺物の回収に努めた。

遺構面と層　機械掘削で除去した盛土や旧耕作土層を第０層として、上から順に第１層・第２層・・・とした。各遺構面の名称はそのベースとなっている層名と同じ数字としている。

遺構図　最終遺構面に関しては 25 ｔラフタークレーンを用いた空中写真測量により、1/50・1/100 の平面図を、それ以外の検出した遺構面に関しては手作業によって 1/100 の平面図を作成した。また、必要に応じて個別遺構の平面図・断面図・立面図を 1/10・1/20 で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては 1/20 の断面図を作成した。

写真撮影　現場での写真撮影は６×７カメラ、35 ㎜カメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行なった。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行なった。なお、最終遺構面の撮影に関しては高所作業車を用いて行なった。

試料分析　１区第６面検出の 158 井戸埋土及び３－２区第５層について珪藻・花粉分析を行ない、古環境復元の助けとした。また、５－４区第７面検出の 542 谷出土の流木に関して加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。これらの成果については第４章に記した。

整理作業　主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の浄書は adobe 社製 IllustratorCS2 を用いてデジタルトレースを行なった。出土遺物は、洗浄・注記・接合を行なった後、実測作業を行なった。また、瓦等の一部の遺物に関しては拓本を採った。実測図は個別にデジタルトレースを行なった後、遺構または出土層位毎に編集し、遺物挿図を作成した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的・歴史的環境

吹田操車場遺跡は大阪府の北部、吹田市片山町・芝田町と岸部中町に所在する遺跡である。

遺跡の所在する吹田市は淀川・安威川・神崎川の右岸に位置し、南は大阪市、東は摂津市、西は豊中市、北は茨木市・箕面市に接する。市域の大半は大阪層群の隆起によって形成された千里丘陵で占められており、市内南部は淀川や安威川によって運ばれた土砂の堆積による沖積地が広がる。市内には山田川や正雀川などの千里丘陵に源を発し、安威川や神崎川に注ぐ複数の河川が存在するが、いずれも短流で水量が豊富でなかったこともあり、古くから水を確保するための溜池が地形に即して築かれている。これまでの吹田操車場遺跡の調査においても、溜池状遺構を確認しておりこれを首肯させる。

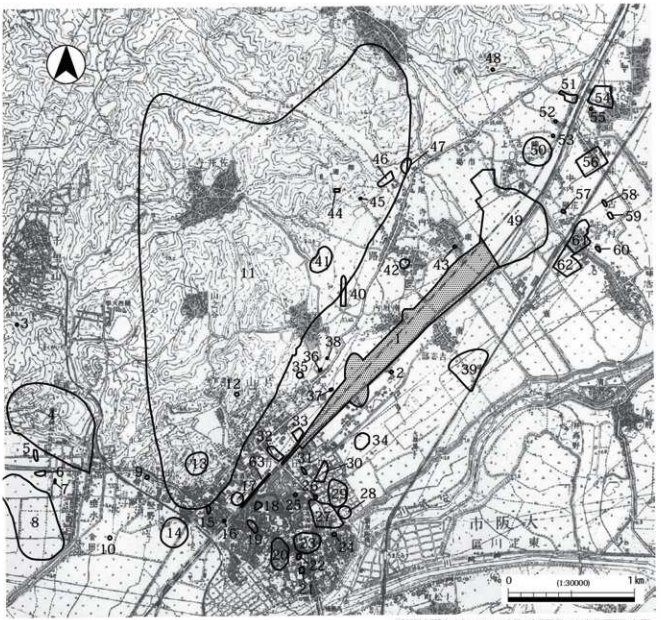
吹田市内では旧石器時代以降、各時代の遺跡が営まれている。吹田市の立地する場所は水運が利用し易く交通が利便であること等から、どの時代をみても重要な遺跡が形成されている。以下に吹田操車場遺跡周辺の主要遺跡を時代順に概観しておく。

吹田市域では、千里丘陵末端で低位段丘上に位置する吉志部遺跡や吉志部瓦窯下層遺跡で旧石器時代の石器製作址や礫群が確認されている。出土遺物にはサヌカイト製のナイフ形石器・掻器・削器・彫器、チャート製ナイフ形石器等がみられる。石材としてサヌカイトが一般的に用いられる近畿地方において、チャート製石器の存在は珍しく、箕面市所在の粟生間谷遺跡の旧石器資料と共に、サヌカイト原産地から遠く離れた遺跡の様相として注目される。また、生活痕跡は確認されていないが、沖積地に位置する目俵遺跡や高城遺跡でもナイフ形石器が出土している。

縄紋時代に関しては、中ノ坪遺跡で草創期の所産とみられるチャート製有舌尖頭器が、吉志部遺跡ではサヌカイト製有舌尖頭器が、高浜遺跡で中期前半の船元式土器が、七尾瓦窯下層遺跡で晩期後半の船橋式土器が、目俵遺跡では長原式土器が確認されている。総体的に縄紋時代の遺構・遺物の発見例は他の時代に比して少ない。今後の調査に期待したい部分である。なお、先述した吉志部遺跡では有舌尖頭器を含めて８点の尖頭器が集中的に出土しており、全国的にも稀有な例といえる。

弥生時代に入ると大幅に遺構・遺物の検出は増加する。五反島遺跡では前期の土器（甕・壷・鉢・高杯等）が出土している。丘陵上に位置する垂水遺跡では中期～後期の集落跡が確認されている。特に後期に栄えたようで、竪穴建物や掘立柱建物が検出された。出土遺物には、近江や東海、四国、山陰といった外来の土器も多くみられ、他地域との交流が盛んであったことが窺える。また、垂水遺跡直下の低地に位置する垂水南遺跡でも弥生時代の土器が多量に出土していることから、両者の関係が注目される。七尾東遺跡では中期の竪穴建物や掘立柱建物が検出されている。竪穴建物内からは土器のほか、石包丁や石鎌等も出土している。これら以外にも近年、目俵遺跡・中の坪遺跡・榎坂遺跡でも後期を中心とした資料が出土しており、次第に様相が明らかになるものと思われる。

古墳時代には、垂水南遺跡の微高地上で竪穴建物や掘立柱建物が検出され、その集落周辺では水田や灌漑用水路が確認されている。出土遺物も多岐にわたり、多量の須恵器や土師器のほかに韓式系土器や製塩土器、木製農具、木鏃、勾玉や管玉などがみられる。出土土器の中には、瀬戸内西部から南関東地域のものがあり、広範な地域との交流を窺わせている。さらに、鍛冶関連遺物（羽口・鉄滓・砥石）や



（地理調査所「吹田」S=1/25000 大正12年測量図 1929年修正測図に加筆）

1. 吹田操車場遺跡
2. 吹田操車場遺跡B地点
3. 垂水西原遺跡
4. 垂水遺跡
5. 垂水中遺跡B地点
6. 垂水中遺跡
7. 垂水中遺跡C地点
8. 垂水南遺跡
9. 北泉遺跡
10. 金田遺跡
11. 吹田第恵器窯跡群
12. 吹田32号窯跡
13. 片山公園遺跡
14. 豊嶋郡条里遺跡
15. 西の庄遺跡
16. 西の庄遺跡B地点
17. 吹田城遺跡
18. 本町遺跡
19. 浜の堂遺跡
20. 都呂須遺跡
21. 宮之前遺跡B地点
22. 宮之前遺跡
23. 高浜遺跡
24. 神間町遺跡
25. 朝日町遺跡
26. 昭和町遺跡
27. 高城B遺跡
28. 吹田城城推定地
29. 高城遺跡
30. 高畑遺跡
31. 昭和町遺跡B地点
32. 片山遺跡
33. 片山荒池遺跡
34. 目俵遺跡
35. 円塚古墳
36. 片山芝田遺跡
37. 天道遺跡
38. 片山芝田遺跡B地点
39. 中ノ坪遺跡
40. 原東遺跡
41. 吉志部遺跡
42. 岸部中遺跡
43. 岸部東遺跡
44. 吉志部瓦窯跡
45. 吉志部古墳
46. 七尾瓦窯跡
47. 七尾東遺跡
48. 仏陀寺山遺跡
49. 明和池遺跡
50. 峰前寺跡
51. 千里丘遺跡
52. 千里丘2丁目所在遺跡
53. 千里丘3丁目所在遺跡
54. 千里丘東2丁目遺跡
55. 千里丘東3丁目所在遺跡
56. 千里丘東4丁目遺跡
57. 庄屋1丁目所在遺跡
58. 庄屋2丁目所在遺跡
59. 東正雀第1地点
60. 東正雀第2地点
61. 東正雀遺跡
62. 正雀1丁目遺跡
63. 西の庄東遺跡

図3　遺跡分布図

遺構も確認されており鉄器生産を行なっていたことが判明している。初期須恵器や韓式系土器は垂水遺跡や五反島遺跡でも出土しており、渡来系の人々の存在が注目される。また垂水遺跡では、溶解途中の仿製鏡（方格規矩鏡）が出土しており、鋳造関連の施設があったと想定される。この資料は古墳時代の鋳造技術復元に重要な示唆を与えてくれるものである。

吹田市域で知られる古墳は10基ほどで、周辺地域と比べると少ない。これは、各地で古墳が多数築造される時期に、市内にある千里丘陵が大規模な須恵器生産地として利用されていたため、古墳を築造し難い環境にあったことが一因とみられる。また、高度成長期における千里丘陵一帯の大規模開発による破壊も見過ごせない要因であろう。

吉志部神社境内の吉志部1号墳は7世紀初めに築造されたもので、市内唯一の現存する石室である。石室内から、須恵器の蓋杯・長頸壷・ガラス玉・刀子・鏃などが出土している。新芦屋古墳は宅地造成中に発見されたため古墳の外形は既に失していたが、組合式石棺を納めた木室墳であることが明らかになっている。木室内からは須恵器の高杯・杯・器台・土師器・鉄地金銅張りの馬具一式が、石棺内からは人骨と共に玉・耳環・直刀が出土している。なお、本古墳は石棺を納めた木室墳としては全国唯一の存在である。また、片山公園遺跡では大量の埴輪片が見つかっており、操車場を造成する際に削られた丘陵の尾根上に古墳群が形成されていた可能性がある。片山荒池遺跡でも古墳時代中期中葉の円筒埴輪が出土しており、吹田操車場遺跡直近にも古墳が築造されていたと推定される。

千里丘陵一帯では、須恵器窯跡が数多く発見されている。その中で最古のものは吹田32号窯跡（ST32）である。窯内部から鋸歯文や斜格子文などの文様が施された須恵器が出土しており、5世紀前半の初期段階の須恵器窯であることが明らかとなった。その後、須恵器窯は6世紀中頃に最盛期を迎え、8世紀前半には完全に生産を停止している。なお、片山荒池遺跡では6世紀～7世紀代に掘削された粘土採掘用の密集土坑群がみられ、千里窯跡群との関係が示唆されている。

8世紀初頃には七尾瓦窯跡が操業され、後期難波宮で葺かれた瓦が焼かれている。また、8世紀末操業の吉志部瓦窯では平安京へ供給する瓦の生産が行なわれたが、短期間のうちに操業を終え、操業の場は西賀茂瓦窯跡・角社瓦窯跡へと移されている。

文献によると平安時代には、春日領や東寺領の荘園が営まれている。垂水南遺跡では、東寺領垂水庄との関係が指摘される「垂庄」や「中庄」と書かれた墨書土器が出土している。また、蔵人遺跡は垂水庄蔵人村との関連が指摘されており、掘立柱建物や鍛冶工房、水田や畑などが見つかっている。

近世以降の報告例は少ないが、垂水遺跡で明石焼陶製土鍋、明石焼或いは堺焼擂鉢、土人形などの出土が報告されており、片山荒池遺跡では溜池が検出されている。

明治に入ると明治7（1874）年大阪・神戸間に鉄道が敷設され、明治22（1889）年までに大阪・敦賀間が官営鉄道として順次開通した。その後、関西圏の鉄道網が整備され、貨物輸送も発展していく。その中で、貨物輸送の向上と円滑化を図るため、「東洋一の操車場」と謳われた吹田操車場の造成が大正12（1923）年から開始された。

吹田操車場跡地の地下にはその痕跡が今もなお残されている。今次の調査でもその姿を一部垣間見ることが出来たので簡単に紹介しておきたい。調査範囲内では、旧東海道線の軌道敷や関連施設・操車場造成時の土砂運搬用トロッコの軌道がみられた。旧東海道線の軌道敷は幅約8m・高さ約0.4～0.5mを測り、N－43°－Eを主軸にもってほぼ北東－南西方向に敷設されていた。軌道敷は、締まりの良い赤褐色砂礫を用いて断面台形の土手状に構築されている。軌道敷上面では、平行してはしる2列の枕

木痕がみられた。枕木痕単体は幅約0.5m・長さ約2mで、枕木は心々距離約0.7～0.8m間隔で設置される。

軌道敷南側裾部には、φ2～10㎝の礫とシルトを版築状に非常に硬く締め固めた道路状の整地部分がみられた。これは約3mの幅をもち、軌道と平行して構築されている。調査地内を斜めに貫通しており、総延長距離で約200mあった。

また、この道路状整地部の下には、枕木を組んで構築した暗渠が軌道敷に直交するように約10m間隔で敷設されていた。暗渠は軌道側が高く、約4°の傾斜をもって構築されていることから、軌道敷からの排水施設であろう。暗渠は南側で軌道敷に平行してはしる1条の溝に繋がる。この溝は最大幅約2m・深さ約0.4～0.5mを測る。調査地を斜めに貫通し、総延長距離で約215mあった。

一方、軌道敷北側の裾部には、軌道敷と並行する溝1条が設けられている。溝は幅約1.5m・深さ約0.25～0.3mである。なお、この溝北側で旧東海道線とは異なる枕木痕1列を確認した。枕木痕単体は幅約0.3～0.5m・長さ約2.2mを測り、枕木は心々距離約0.5～0.7m間隔で設置されている。枕木列の下位には排水用と考えられる幅約0.9m・深さ約0.6mの溝が掘削されていた。この溝は旧東海道線に関わる溝を再掘削して造られた可能性が高い。なお、溝上部で確認した枕木痕は、軟弱な土壌の上に敷設されていること、旧東海道線枕木痕に比してバラつきのある間隔で設置されていることを勘案すると、吹田操車場を造成する際に土砂を運んだトロッコ用の軌道であると想定される。なお、立坑の調査において、操車場盛土を機械掘削している際に、上端幅2.5㎝、下端幅5㎝、高さ6㎝の小型のレール（6㎏レールか）が1本みられた。これがトロッコ用のレールである可能性が高い。

旧東海道線関連の南北2条の溝からは、信楽焼産の駅名入り汽車土瓶（蓋や猪口も含む）や牛乳瓶、ビール瓶などが数多く採取された。汽車土瓶は最大径が10㎝・高さ7.5㎝前後を測る手回しロクロ挽きの製品である。土瓶胴部外面には片側が漢字、もう片側がひらがな表記の駅名（共に右から左に表記）が書かれるものが大半である。また、駅名の代わりに山水文や円文が描かれた破片、竹林をレリーフ状にあしらったもの等もみられる。汽車土瓶にみられる駅名は、関西圏の大阪・神戸・姫路が多くあるほか、東は豊橋・静岡・沼津、西は糸崎・下関が確認出来た。また、「沼津　桃㊊軒」のように駅名と共に販売店名が書き込まれている例も存在した（写真1・2）。これらの汽車土瓶は、明治30（1897）～大正10（1922）年頃に販売されていたものであろう。

牛乳瓶は、淡い水色の気泡が多く入る高さ15.5㎝前後のガラス瓶で、外面には縦書きで「大阪驛水了軒　全乳　金拾二銭」（駅名・販売店と金額は別個に瓶の表裏に位置する）或いは「金拾三銭」と陽刻されている。また、破片ではあるが「㊊㊎㊍　渡月軒」と陽刻されたものもみられる。ビール瓶は高さ29㎝前後の茶色のガラス瓶で、瓶外面下端に「大日本麦酒株式会社醸造（右から左に表記）」或いは、「DAINIPPON BREWERRY Co.LTD」と陽刻されたものがみられる。これら以外にも、濃緑色のガラス瓶外面下端に「有馬鑛泉（右から左に表記）　ARIMA MINERALWATER」、透明のガラス瓶に「R COOPER & Co' PORTOBELLO」や「堀越」と陽刻されたもの、濃緑色のガラス瓶底部外面に三つ矢マークが陽刻されたもの、磁器製洋食皿内面に「JOHNSON BRO ENGLAND」と書かれたもの、動輪マークが描かれた磁器製の重箱型（三段重）駅弁容器等が採取されている（写真1）。

写真１　旧東海道線関連資料（１）

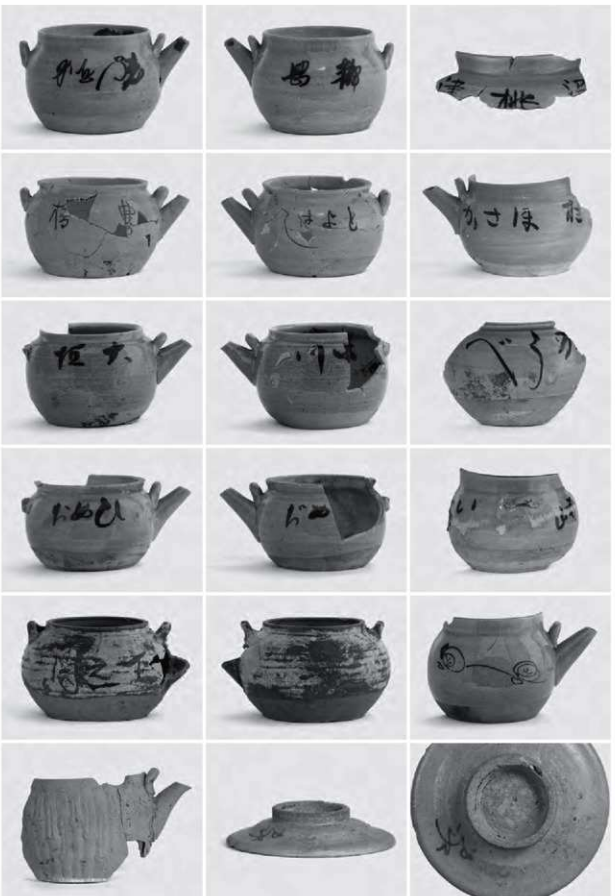


写真２　旧東海道線関連資料（２）

第２節　吹田操車場遺跡の既往の調査

吹田操車場遺跡は、昭和 42（1967）年の操車場改良工事に伴う事前調査で中世の遺物が出土したことから周知されるようになった。

平成 10（1998）年度に JR 梅田貨物駅の機能の半分を吹田操車場跡地へと移管させるために、確認トレンチを 61 箇所設定し、（財）大阪府文化財センター〔当時は（財）大阪府文化財調査研究センター〕が発掘調査を実施した。その結果、操車場造成の盛土の下位に古墳時代から近代に至る遺構面を検出し、旧石器時代以降の遺物が出土した。

平成 12（2000）年には貨物駅含と倉庫建設及び貨車区の改良工事に際して、Ａ・Ｂ・Ｃ地区の調査を当センターが行なった。Ａ地区では古墳時代前期の大溝、平安時代後期の掘立柱建物や条里制を施工した水田を検出した。Ｂ地区は古代末から中世にかけて複数の遺構面を検出し、畦畔等を確認していることから耕作地であったことを明らかにしている。Ｃ地区では谷地形を検出し、埋土最下層から鬼界アカホヤ火山灰が検出された。このことから、谷地形は 7300 年前以前に形成されていたことが判明している。

平成 13（2001）年には吹田市教育委員会によって、吹田市営岸部中住宅建替工事に伴う事前調査が実施され、８箇所を試掘調査している。平成 14（2002）年には拡大調査が行なわれ、流路や谷が検出された。主な出土遺物には中世遺物と弥生土器があり、特に東海系の弥生土器が比較的多く出土していることは注目される。

平成 18 ～ 19（2006 ～ 2007）年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成箇所（C1・C2 地区、C3・C4 地区、C5・C6 地区）の調査を当センターが実施した。C1・C2 地区では古墳時代後期から飛鳥・奈良時代にかけての密集土坑、飛鳥・奈良時代及び平安時代の掘立柱建物を検出している。主な出土遺物に円面硯や墨書土器、緑釉・灰釉陶器などがある。C3・C4 地区、C5・C6 地区では古墳時代の流路や中世～近世の耕作地を検出した。また、近世には溜池状の施設が造られている。なお、古墳時代の流路から山陰系の土師器がまとまって出土しており、交流を考える上で重要な資料として注目される。

平成 19（2007）年には吹田市教育委員会によって、操車場跡地内の街づくり用地の確認調査が実施され、59 箇所を試掘調査している。その結果、谷状地形や古墳時代の大型土坑、飛鳥時代の建物跡、平安時代のピットなどが確認されている。

平成 19 ～ 20（2007 ～ 2008）年には信号場基盤整備工事に伴い、調整池造成箇所４箇所（C7 ～

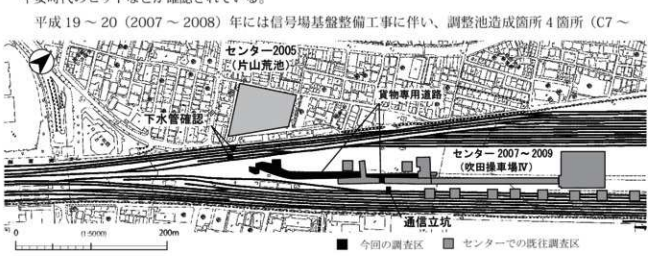


図４　調査区と既往の調査位置図

10）・防火水槽４箇所（B3 ～ 7）・導水路部分を、平成 21（2009）年５月～７月にかけて JR 第二・第三職員通路部付け替えに伴う調査を当センターが実施した。平成 19 ～ 20（2007 ～ 2008）年の調査では弥生時代の土坑、古墳時代の溝や井戸、平安時代の集落を確認し、掘立柱建物や溝、井戸などを検出した。また、中世に入ると広範に耕地が広がることが明らかになった。主な出土遺物には七尾瓦窯・吉志部瓦窯産の軒丸瓦、陶棺、越州窯青磁碗、緑釉・灰釉陶器などがある。特に越州窯青磁は、大阪府下でも出土遺跡数・出土点数共に極めて少ない注目すべき資料である。平成 21（2009）年の調査では多量の中世遺物と共に中世の掘立柱建物や土坑群を検出した。

参考・引用文献

賀納章雄　1998『吹田の石器時代』吹田市教育委員会

賀納章雄　1999『目俵遺跡』吹田市教育委員会

（財）大阪府文化財調査研究センター　1999 年『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 42 集　吹田操車場』

（財）大阪府文化財調査研究センター　2001 年『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 66 集　吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡Ｂ地点』

（財）大阪府文化財センター　2006『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 145 集　片山荒池遺跡』

（財）大阪府文化財センター　2008『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 180 集　吹田操車場遺跡Ⅲ』

（財）大阪府文化財センター　2010『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第 201 集　吹田操車場遺跡Ⅳ』

吹田市史編さん委員会　1981『吹田市史』第１巻　吹田市役所

吹田市史編さん委員会　1990『吹田市史』第８巻　吹田市役所

吹田市立博物館　2007『吹田市文化財ニュース』No.27

吹田市立博物館　2009『わかりやすい吹田の歴史　本文編』

吹田市都市整備部・吹田市教育委員会　2004『吹田操車場遺跡－市営岸部中住宅建替工事に伴う発掘調査報告書－』

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構　吹田市教育委員会　2008『吹田操車場遺跡確認調査報告書－吹田操車場跡地地区（仮称）の整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査－』

畑中英二編　2007『信楽汽車土瓶』別冊淡海文庫 16　サンライズ出版

福田敏一　2008「鉄道の考古学－汽車土瓶研究覚え書き－」『考古学という可能性－足場としての近現代－』秀巧堂

第３章　調査成果

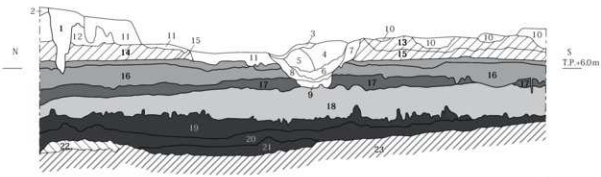
第１節　基本層序と遺構面

吹田操車場遺跡は、大正期から昭和初期にかけて建設された操車場の地下に存在するため、操業時のバラスト層や操車場造成時の盛土を除去しなければ調査対象となる遺構面には到達しない。こうした操車場関連の土砂を除去すると明治期の旧耕作土が現れ、これより以下に最大６枚の遺物包含層を確認した。

今回の調査区は、吹田操車場の西端付近に東西に長く設定されていることから、広範な堆積状況や地形を確認することが出来た。現在は操車場を造成したことによって、広大で平坦な地形が開けて見えるものの、調査の結果、以前は起伏に富んだ地形であることが明らかとなった。

東西に細長い調査地であったが、各調査区共に層序はほぼ共通しており大別８層に分層出来た。本書では、操車場関連の盛土や各時代の遺物包含層を大別した第０層～第７層という共通の層序を用いて報告する。部分的に分層が可能な場合は新たな層番号を付与せず、枝番を設定して対応した。また、それぞれの遺物包含層を除去した遺構面を第１面～第７面とした。

第０層は明治期の耕作土（灰黒色シルト混細砂）・旧東海道線の軌道盛土（赤褐色砂礫）・吹田操車場造成用盛土（明黄褐色シルト～極細砂・粘土等）・近現代のバラスト層で構成され、近代～現代の所産である。これらのうち旧東海道線の軌道盛土以外は調査区のほぼ全域で認められるものである。



1. 灰　7.5Y6/1　細砂
　オリーブ黄　7.5Y6/3　細砂ブロック・
　Φ5cm 前後の礫を多く含む
2. 黄　2.5Y8/8 ～ 7/8　細砂混シルト
3. 灰　5Y4/1 ～オリーブ黒　5Y3/2　細砂
4. 灰白　2.5Y8/1　シルト
　黄　2.5Y8/1 ～ 7/8　細～中砂ブロック・灰　5Y5/1 細砂ブロック・
　黒褐　2.5Y3/1　シルトブロック含む
5. 灰　5Y4/1 ～オリーブ黒　5Y3/1　細砂
6. 緑黒　5G2/1　シルト　オリーブ褐　2.5Y4/6　細砂ブロック含む
7. 灰　7.5Y6/1 ～ 5/1　細砂及び灰オリーブ　7.5Y6/2 ～ 5/2　細砂
8. 灰　7.5Y6/1 ～ 5/1　細砂　Φ3 ～ 5cm 大の礫含む
9. 灰　10Y6/1 ～ 5/1　細砂混シルト
　［3 ～ 9：旧東海道線関連暗渠埋土　汽車土瓶や牛乳瓶・ビール瓶等出土］
10. 灰白　2.5Y8/1　シルト
　黄　2.5Y8/8 ～ 7/8　細～中砂ブロック・灰　5Y5/1　細砂ブロック・
　黒褐　2.5Y3/1　シルトブロック含む
11. 灰　7.5Y5/1 ～ 4/1　細砂
　灰白　7.5Y8/1 ～ 7/1　シルトブロック・
　Φ5cm 前後の礫多く含み非常に固く締まる
　［11：旧東海道線軌道の基礎か］
12. 灰 7.5Y6/1 ～ 5/1　細砂
　緑灰　10GY6/1　シルト～粘土ブロック含む
13. 灰　7.5Y6/1 ～ 5/1　細砂
　灰オリーブ　7.5Y6/2 ～ 5/2　シルトブロック含む
14. 灰　5Y6/1 ～ 5/1 シルト
　灰オリーブ　5Y6/2 ～ 5/2　細砂ブロック含む
15. 青灰　10BG5/1　極細～細砂
　灰オリーブ　5Y5/2 ～ 5/3
　シルトブロックブロック含む
16. 灰　10Y6/1 ～ 5/1　細～中砂
　灰白 10Y7/1　シルトブロック含む
17. 灰　5Y5/1　細砂混シルトブロック
　暗青灰　0BG4/1　シルトブロック含む
18. 黄灰　2.5Y6/1 ～ 5/1　シルト質粘土
19. 黒褐　10YR3/1 ～黒 10YR3/1　シルト
　褐灰　10YR4/1　極細砂ブロック・Φ1cm 前後の礫を多く含む
20. 黒褐　2.5Y3/1 ～黒 2.5Y2/1　極細～細砂混シルト
21. 20 にΦ5cm 前後の礫を多く含む
22. 黄灰　2.5Y5/1 ～ 4/1　シルト混　極細～細砂
　灰白　10Y8/1 ～ 7/1　細砂ブロック含む
23. 灰白　7.5Y8/1 ～ 7/1　シルト～中砂混礫層
　灰オリーブ　7.5Y6/2　シルトブロック含　礫はΦ5 ～ 10cm が主体

1m
(1:40)
2m
(1:80)
0

図５　１区東壁断面図

断面観察において、畠の畝や畝溝・耕地境等の残存も非常に良好で、操車場造成直前の耕作地がそのままの状態で埋め立てられたことが明らかになった。

第０層を構成する各層の層厚は概ね旧耕作土が 0.2m、旧東海道本線軌道盛土が 0.4 ～ 0.5m、吹田操車場盛土が 0.4 ～ 1.1 m、バラスト層が 0.8 ～ 1.2m であった。この結果、第０層の層厚は調査区によりバラつきがみられ、現地表から 1.3 ～ 2.2m の厚さとなった。第０層を除去し終えた面（第１層上面）を**第１面**として調査を行なった。第１面では鋤溝や井戸、水溜状施設等を検出したことから耕作面であったと推察される。

第１層は淡灰黒色シルト混細砂で、耕作土である。ほぼ調査地全域に広がる層であるが、３区のように操車場造成の際に著しく改変を受け、遺存状態が不良である箇所も認められた。層厚は 0.1 ～ 0.2m を測る。第１層を掘削し終えた面（第２層上面）を**第２面**として調査を行なった。第２面も第１面同様、鋤溝や溝、溜池状施設を検出したことから耕作面であったと推察される。

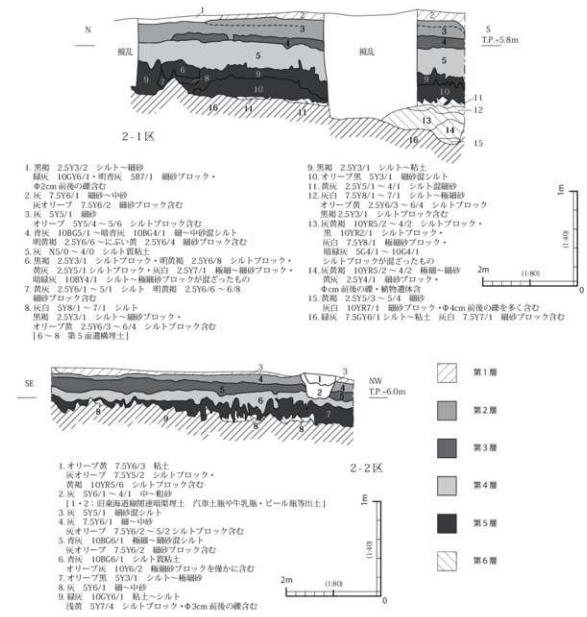
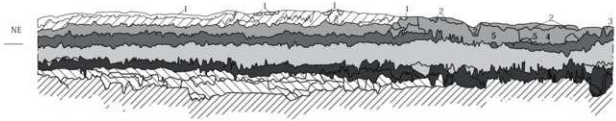


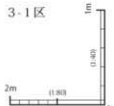
図６　２－１区東壁・２－２区　西壁断面図

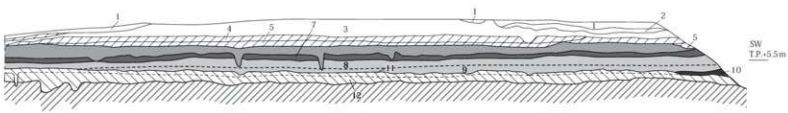


1. 灰オリーブ　5Y6/1 ～ 5/1　シルト混細砂
　 僅かに混含む
2. 灰オリーブ色　5Y6/2 ～ 5/2　粘土
　 僅かに混含む
3. 灰オリーブ　5Y6/2　シルト
　 黄褐　2.5Y5/6・灰白　7.5Y7/1　細砂ブロック・炭含む
4. 灰オリーブ　5Y6/2 ～ 5/2　シルト～粘土
　 明黄褐　2.5Y6/6 ～黄褐　2.5Y5/6　細砂ブロック含む
5. 青灰　5B6/1 ～ 5/1　細砂混シルト
　 [２～５：第２面　165 池理土]

第１層　灰オリーブ　5Y6/2 ～ 5/2　シルト
　 オリーブ　5Y6/6 ～ 6/8・青灰　5B6/1 ～ 5/1
　 極細～細砂含む　炭を多く含む
第２層　青灰　5B6/1 ～ 5/1　シルト
　 明黄褐　2.5Y7/6・オリーブ灰色　10YR5/2
　 細砂ブロックを多く含む
第３層　青灰　10BG6/1 ～ 5/1　細砂混シルト
　 オリーブ灰　10Y5/2　極細砂ブロック含む
第４層　青灰　10BG6/1 ～ 5/1　シルト～粘土
第５層　黒　2.5Y2/1　シルト～粘土
　 黄灰　2.5Y6/1 ～ 5/1　シルトブロック
　 黄褐　2.5Y5/4 ～ 5/6　シルトブロック含む
第６層　明黄褐　10Y8/6 ～ 6/8　極細～細砂混シルト・
　 灰白　5Y8/1　シルト～細砂・黒　5Y2/1　粘土
　 緑灰　5G6/1 ～ 5/1　シルトが混ざったもの
　 [第７面　180 落ち込み埋土]
地山　緑灰　10GY6/1 ～ 5/1　シルト～粘土
　 明黄褐　2.5Y6/6 ～ 6/8　シルト～極細砂ブロック含む

3-1区





1. 灰白　2.5Y8/1 ～ 8/2　細砂混粘土
　 明黄褐　2.5Y7/6 ～ 6/6・黄灰　2.5Y6/1　中～粗砂ブロック含む
2. 灰　N5/0 ～灰白　5Y7/1　細砂　黒褐　2.5Y3/1　粘土ブロック含む
3. オリーブ黄　5Y6/3 ～ 6/4　シルト混細砂
　 青灰　5B6/1　粘土ブロック含む
4. 灰　5Y5/1　細砂混シルト　青灰5B6/1　粘土ブロック　炭含む
5. 灰　5Y6/1 ～ 5/1　シルト混細砂　炭を僅かに含む
6. 灰オリーブ　5Y6/2 ～ 5/2　細砂～中砂
　 灰Y6/1　シルトブロック　明黄褐　10YR6/6 ～ 6/8　粘土ブロック含む
7. 青灰　5B6/1　細砂混粘土　浅黄　2.5Y7/3 ～ 7/4・
　 明黄褐 10YR6/6 ～ 6/8　シルト～細砂ブロック含む

8. 青灰　5B6/1　粘土　灰黄　2.5Y6/2　細砂ブロックが僅かにみられる
9. 灰　5Y6/1 ～ 5/1　粘土
10. 褐灰　10YR　5/1 ～ 4/1　細砂混シルト質粘土
　 灰白　2.5Y7/1　極細～細砂ブロック含む
11. 暗灰黄　2.5Y5/2 ～ 4/2　細砂混シルト
　 黄灰　2.5Y6/1　細砂ブロック含む
12. 灰白 10Y8/1 ～ 7/1　極細～細砂
　 灰　7.5Y5/1・黄　2.5Y8/8 ～ 7/8　シルトブロック含む
地山　明緑灰　5G7/1 ～緑灰　5G6/1　極細～細砂混粘土
　 明黄褐　10YR7/6 ～ 6/6・灰　5Y5/1　シルト～細砂ブロック含む

4区東半

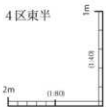


図7　3－1区・4区　南壁断面図

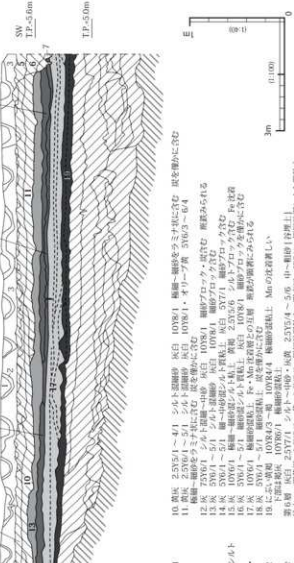


図8　5－3区　南壁断面図

第２層は淡灰黒色シルト～灰・灰オリーブ色シルト混細～中砂である。ほぼ調査地全域に広がる層であるが、３区では溜池等の貯水施設の造成に際して著しく改変を受け、当層が認められなかった。層厚は 0.05 ～ 0.2m を測る。同層は遺物の包含が少なく、均質に撹拌されており植物根による斑鉄が発達することから、長らく耕土として利用されていたと推定される。出土遺物から 16 ～ 18 世紀代の所産と思われる。第２層を掘削し終えた面（第３層上面）を**第３面**として調査を行なった。第３面で検出した遺構の大半は鋤溝が占め、上位面と同様に耕作面であったと思われる。

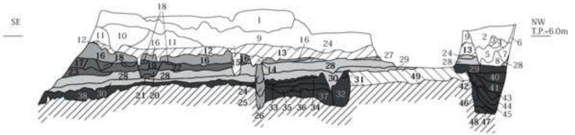
第３層は上位の第２層と下位の第４層が撹拌され混在した土質を呈した黄灰色細～中砂混シルトである。出土遺物から 14 世紀後半～ 15 世紀頃の所産と思われ、中世後半の耕作土である。ほぼ調査地全域に広がる層であるが、３区では第２面で検出した溜池等の貯水施設の造成に際して著しく改変を受け、当層がほとんど認められなかった。層厚は 0.05 ～ 0.2m である。第３層を掘削し終えた面（第４層上面）を**第４面**として調査を行なった。調査地西側に広がる低位部の第４面では、検出出来る明瞭な遺構は少なく、牛足跡や鋤先痕跡が中心となるが、耕作を行なっていたものと考えられる。一方、調査地東側の比較的高位に位置する部分では、上位面よりも減少するものの鋤溝や溝が検出出来ることから耕作面であったと推察される。

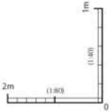
第４層は灰色シルト質粘土である。土壌化がやや弱く、斑鉄の形成も少ない。出土遺物から 12 ～ 14 世紀中頃の所産である。一部で近世の溜池造成によって

失する箇所があったものの、調査地全域で確認出来る層である。層厚は 0.1 ～ 0.3m である。第４層を掘削し終えた面（第５層上面）を**第５面**として調査を行なった。第５面では調査地東端で溝や土坑、焼土坑などを検出したが、調査地西側に広がる低位部では不定形な落込みや踏込みが中心である。

第５層は主に西側に広がる谷状地形を埋める形で堆積する土壌化の進んだ黒色粘土～シルトである。調査地東側にみられる微高地上のやや低くなる部分にも存在するが､堆積自体は薄いものとなっている。調査地東側の高位に存在するものは、鉄分やマンガンの沈着が著しく西側に広がるものよりも硬く砂質分が強い傾向にある。調査地西側に広がる低位部に堆積する第５層は、断面でみると、地震による揺れの影響か、上層の第４層及び下層の第７層を巻き込む形で炎が立ち上がるように細かく波打っており、第５層上面（第５面）はマーブル模様状を呈する状況にあった。古墳時代～古代の湿地状堆積物と思われる。層厚は 0.1 ～ 0.5m である。第５層を掘削し終えた面（第６層または第７層上面）を**第６面**として調査を行なった。調査地西側に広がる低位部の第６面では谷状地形が広がり、その底面で井戸や落込みを検出した。一方、調査地東側の比較的高位に位置する部分では、溝や土坑、落込みを検出した。

第６層は下位の地山面（第７層上面）の低まった部分にのみ存在する灰白～灰黒色・黄灰色シルト～





1. 浅黄　2.5Y7/4 ～明黄褐　2.5Y7/6　細～粗砂
　灰白　7.5Y8/1　シルト質粘土ブロック・橙　7.5Y6/6
　シルト質粘土ブロック含む［第０層　操車場盛土］
2. 青灰　5B5/1 ～暗青灰　5B4/1　シルト混細砂
　灰　5Y5/1　7/3 ～ 7/4　細～中砂ブロック・炭含む
3. 暗青灰　5B4/1　シルト混細砂
　灰オリーブ　5Y5/2 ～ 5/3　細砂ブロック含む
4. 青灰　5B5/1　細砂　浅黄　5Y7/3 ～ 7/4　細砂ブロック・
　明青灰　5B7/1　粘土ブロック・炭含む
5. 灰　N5/0 から 4/0　細砂混粘土
　灰白　2.5Y8/1・灰オリーブ　5Y5/2 ～ 5/3　細～中砂ブロック・炭含む
6. 青灰　5B6/1 ～ 5/1　細砂混粘土　黄褐　2.5Y5/4 ～ 5/6　細砂ブロック・炭・
　Φ1cm 前後の礫含む
7. 青灰　5B5/1　シルト混細砂
8. 青灰　5B6/1 ～ 5/1・浅黄　5Y7/3 ～ 7/4　細砂
　暗灰　N3/0　粘土ブロック含む
　［2 ～ 8：旧東海道線関連暗渠　汽車土瓶や牛乳瓶・ビール瓶等出土］
9. 黄灰　2.5Y4/1　シルト混細砂
　灰白　2.5Y7/1　極細砂ブロック・Φ1cm 前後の礫含む［第０層　旧耕作土］
10. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混極細～細砂
　灰白　7.5Y7/1　シルト質粘土ブロック・灰白　2.5Y8/2　細砂
　ブロック・炭・Φ1cm 前後の礫含む
11. 黄灰　2.5Y6/1　シルト混細～中砂
　灰黄　2.5Y7/2　極細砂ブロック・炭含む　斑鉄が僅かにみられる
12. 灰黄　2.5Y6/2　中～粗砂　Φ1cm 前後の礫を多く含む
13. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混細砂　灰黄　2.5Y7/2　シルト質粘土ブロック・炭含む
　また浅黄　2.5Y7/3　細～中砂をラミナ状に含む
14. 黄灰　2.5Y6/1　シルト混中砂　灰　N6/0　粘土ブロック・Φ1cm 前後の礫含む
15. 黄灰　2.5Y6/1　シルト混中～粗砂　灰　N6/0　シルトブロック
　Φ1cm 前後の礫含む
16. 黄灰　2.5Y6/1　シルト混極細砂　炭・浅黄　2.5Y7/3　細砂・
　灰白　2.5Y8/1　シルトをラミナ状に含む
17. 黄灰　2.5Y6/1　極細～細砂混シルト
　灰白　2.5Y8/1　シルト～極細砂を下部にラミナ状に含む　斑鉄が顕著にみられる
18. 灰白　5Y7/1　シルト～極細砂
　浅黄　2.5Y7/3　細砂ブロック含む［第３面　畝溝埋土］
19. 灰黄　2.5Y6/2　シルト　炭含む
20. 暗灰黄　2.5Y5/2　極細砂混シルトブロック炭含む
21. 黄灰　2.5Y6/1　中砂混シルト［19 ～ 21：第３面　遺構埋土］
22. 暗灰黄　2.5Y5/2　極細砂混シルト
23. 灰黄　2.5Y6/2　シルト　灰白　2.5Y8/2　極細砂ブロック・炭含む
24. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混極細砂　浅黄　2.5Y7/4・灰　N6/0　粘土ブロック・
　灰黄　2.5Y7/2　細砂ブロック含む
25. 黄灰　2.5Y4/1　シルト混　細砂　灰黄　2.5Y7/2　細砂ブロック・
　黒褐 2.5Y3/2　シルト質粘土ブロック含む
26. 暗灰黄　2.5Y5/2　シルト混　細～中砂
　［24 ～ 26：第３面　遺構埋土］
27. 灰黄　2.5Y6/2　極細砂混
　シルト質粘土　斑鉄が顕著ににられる
28. 黄灰　2.5Y5/1　粒細砂混シルト質粘土
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・炭含む
　北側には斑鉄が顕著にまられる
29. 暗オリーブ灰　2.5GY4/1
　極細砂混シルト質粘土
30. 灰　10Y5/1　シルト質粘土
　灰白　2.5Y8/1　シルト～極細砂ブロック・
　褐灰　10YR4/1　シルト質粘土ブロック・炭含む
31. 灰白　5Y7/1　シルト混細砂～中砂
32. 褐灰　10YR4/1　シルト　灰白　10YR7/1　シルトブロック・
　明オリーブ灰　5GY7/1 粘土ブロック含む［31・32　第６面　409 溝埋土］
33. 灰　5Y4/1　シルト質粘土　灰白　5Y7/1　シルトブロック含む
34. 褐灰　7.5YR4/1　極細～細砂混シルト
　灰白　10YR8/2　シルトブロック含む
35. 褐灰　10YR5/1　シルト混粗砂　固くしまる
36. 褐灰　10YR4/1　粗砂混シルト質粘土
37. 明黄褐　2.5Y6/6　粘土ブロック含む［33 ～ 37：第６面　遺構埋土］
38. 紫灰　5P6/1　シルト質粘土　明青灰　5B7/1　粘土ブロック・
　灰白　10Y8/1　シルトブロック・
　浅黄　5Y7/4　粘土ブロック含む
39. 暗オリーブ灰　2.5GY4/1　極細～細砂混粘土
　明青灰　5B7/1　シルトブロック含む
40. 灰白　N7/0 ～灰 N6/0　極細砂混シルト　灰白　7.5Y8/1・
　黄　5Y7/6 ～ 7/8　シルトブロック含む
41. 灰白　N7/0 ～灰白色 N6/0　細砂混シルト　灰白　7.5Y8/1
　シルトブロック含む
42. 灰　5Y6/1　細砂混粘土　灰白　7.5Y8/1　細砂ブロック含む
43. 灰　5Y5/1　極細砂混粘土　灰白 5Y8/1　シルトブロックブロック含む
44. 灰　5Y5/1　極細砂混粘土　灰白　N7/0　シルトブロック含む
45. 灰　N4/0 ～灰　N6/0　粘土～中砂の互層
46. 灰白　10Y8/1　シルト混細砂　黄灰　2.5Y6/1　シルトブロック含む
47. 黄灰　2.5Y6/1　極細砂混粘土　灰白　7.5Y8/1・
　明オリーブ灰　2.5Y7/1　粘土ブロック含む
48. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混粘土　灰白　10Y8/1　シルト～極細砂ブロック含む
　［40 ～ 48：第６面　435 土坑埋土］
49. 灰オリーブ　5Y6/2　シルト～極細砂
　灰黄　2.5Y7/2　シルトブロック・Φ0.5cm 前後の小礫含む
地山　明黄褐　2.5Y6/6・明青灰　5B7/1 粘土

図9　5－2区　西壁断面図

粗砂である。概して地山が浅く落ち窪んだ部分に灰白～灰黒色の極細～細砂が、谷状地形を呈する部分には黄灰～淡黄褐色系シルト～粗砂が堆積する。古墳時代以前の氾濫性堆積物であろう。部分的に堆積した第６層を除去した面（第７層上面）を**第７面**として調査を行なった。第７面では調査地東端の５－２区で弥生時代の土坑を、調査地中央からやや東側で谷状地形を、調査地中央から西側では落込みを検出した。

第７層はいわゆる地山である。基本的には黄色系シルト～粘土を主体とするが、場所によっては緑灰色細砂混シルトや粘土・礫層となる部分（主に調査地の西側）がある。なお、調査地西端でみられる緑灰色細砂混シルトや粘土の下位には、厚さ３m以上の砂礫層が広がっており、かなり古い段階に形成された谷・流路が存在しているものと推察される。

第２節　１・２区の調査

１・２区は、吹田操車場遺跡 09－１調査区のうち最西端に位置する。１区は鋼矢板に囲まれた調査区である。２区は１区を挟んで南北に展開する小さな調査区であり、北側のものを２－１区・南側を２－２区とする。調査面積は１・２区併せて約 440 ㎡である。

（１）第１面（図 10・図版１）

１・２区では、先述したように旧東海道線の軌道敷が調査区を斜めに横断するように構築されていたため、軌道敷盛土を除去した面を第１－１面とした。しかし、２区では１区に比して旧東海道線の軌道盛土の遺存状況が良くなかったこともあり、第１－１面が明瞭ではなく、遺構の検出まで至らなかった。第１－２面は第１－１面の基盤層である灰色細砂を除去した青灰色極細～細砂を基盤とする面である。

第１－１面は標高 6.4 ～ 6.5m を測り、概ね平坦な地形である。検出遺構には土坑及び畝間溝がある。

畝間溝

幅約 0.4 ～ 0.8 m、深さは約 0.1m 前後を測り、溝底は南側に向かって緩やかに傾斜している。N－40°－W を指向するものが主体であったが、一部 Y＝－ 43,350 ～－ 43,340 間で、前者の溝に直交する向きの溝が確認された。

畝間溝からは近世陶磁器（肥前染付碗・擂麦猪口、関西系陶器椀）やチャート製火打ち石がみられた。出土遺物は細片のため時期を決め難いが、明治７（1874）年に大阪・神戸間で営業を開始した旧東海道線の盛土の下位に位置することから考えると、19 世紀後半頃の所産であろう。

土坑

不定形なものが多く、上位面の旧東海道線に関連する盛土の取り残しである可能性が高い。

第１－２面は標高 6.3m 前後でほぼ平坦な地形である。従前の調査でも確認されている鋤溝群・水溜状施設（32 池）を検出した。

鋤溝群

１区西半部及び２－２区で集中して検出した。鋤溝は幅約 0.1m 前後のものが主体であるが、中には幅 0.2 ～ 0.3m を測るものもみられた。この幅広の鋤溝は、重複した鋤溝を掘り分けることが出来なかった結果によるものである。鋤溝群は N－25 ～ 30°－W を指向する。鋤溝群からは細片となった近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器皿、備前擂鉢）、煙管などが出土している。

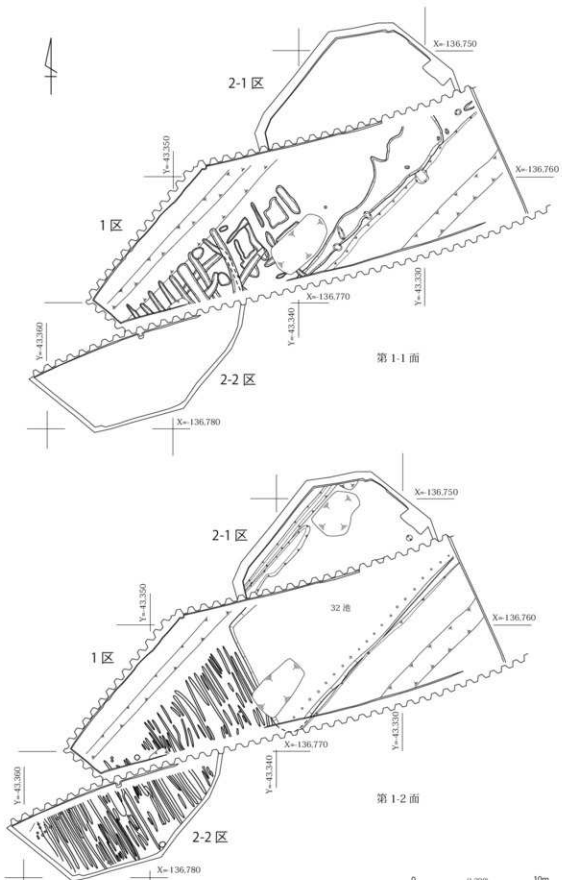


図10　1・2区　第1面　平面図

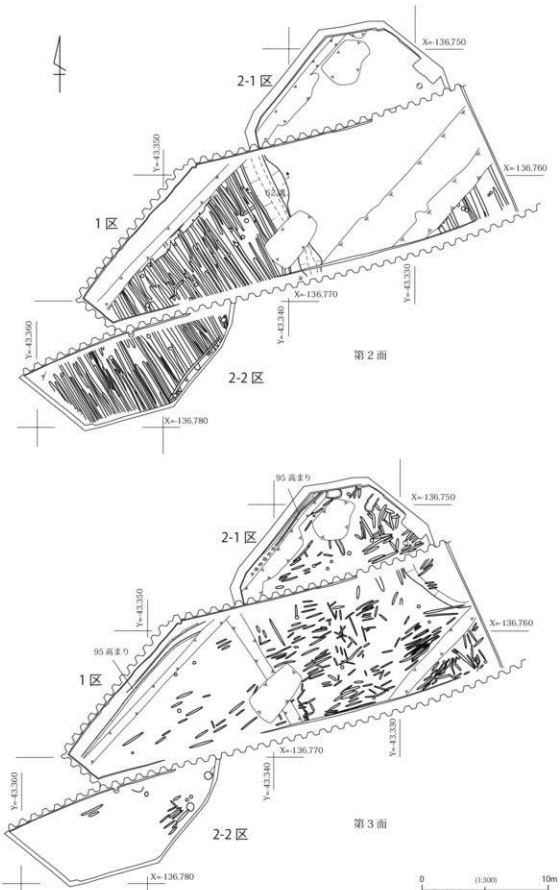


図11　1・2区　第2面・第3面　平面図

32 池

1区東半部及び2－1区全体を占め、平面長方形を呈する。南北9.5m、東西18m以上、深さ約0.3mの規模である。池の西側肩は1区のほぼ中央にあり、N－25°－Wを軸にもつ。南西コーナーは南側側溝によって切られ不明瞭であるが、北西コーナーはX＝－136,760・Y＝－43,344付近で北東に向いて屈曲し、2－1区へと繋がって行く。2－1区では池の北辺が検出出来るはずであったが、旧東海道線関連の溝によって切られ、同様に池南辺も旧東海道線関連施設によって切られているため、ごく一部しか確認し得なかった。なお、池東側肩は3－2区との境に当たったため、当区では明確にすることが出来なかった。しかし、隣接する3－2区西端で土手状の高まりを検出したので、これが池の東側肩になる可能性が高い。池の埋土は滞水堆積と考えられるグライ化したもので4枚に分かれる。上層から炭や青灰色粘土ブロックを含んだ灰色極細砂混シルト、にぶい黄橙色シルト混中砂、暗青灰色粘土、炭を含んだ青灰色細砂混シルトとなっている。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗・皿・鉢、肥前陶器皿、関西系陶器鍋、丹波壷・甕、堺擂鉢等）、土師質土器、瓦質土器、須恵器、ドブ貝などがある。出土遺物から19世紀前半代の所産と考えられる。

（2）第2面（図11・図版2）

第1－2層である青灰色極細～細砂を除去した灰色細～中砂の上面を第2面とした。第2面は標高6.2m前後でほぼ平坦な地形である。上面検出の池によって1区東半部及び2－1区の当面は削平されており、遺構の検出は調査範囲の西側部分及び1区南東隅に止まった。検出遺構には鋤溝群・溝がある。

鋤溝群

1区西半部及び南東隅、2－2区で検出した。鋤溝は幅約0.1m前後のものが主体であるが、中には幅0.2～0.3mを測るものもみられた。この幅広の鋤溝は、重複した鋤溝を掘り分けることが出来なかった結果によるものである。鋤溝群はN－25～30°－Wを指向し、第1－2面と共通する。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗、肥前白磁碗、肥前陶器椀等）、土師質皿、瓦質土器、須恵器などがある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね17～18世紀代の所産と考えられる。

62 溝（図12・図版2）

1区のほぼ中央部を流れ、幅2～2.5m、深さ0.2mを測る。溝の軸はN－29°－Wを示し、鋤溝群と同様の方位を指向している。溝の西側肩は緩やかであるが、東側は二段落ちとなり急激に落ち込んでいる。埋土は大きく3枚に分かれ、上層は黄灰色シルト～細砂、中層は灰色系のシルト～粗砂がみられ、急な水の流れがあったことを窺わせる。下層は西側肩に沿うように灰白～灰色細砂が堆積する。溝の西

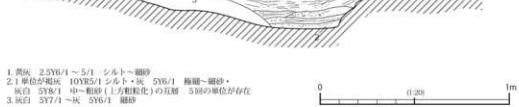


図12　1区　第2面　62溝断面図

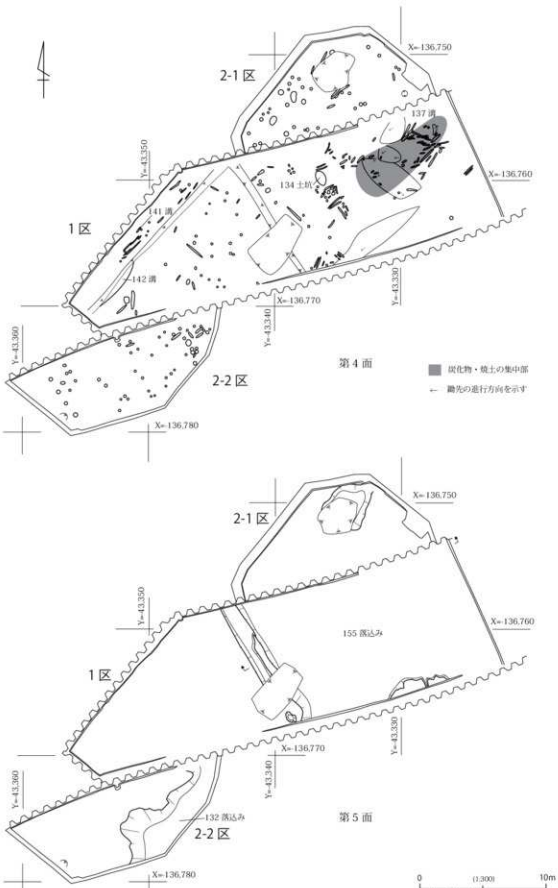


図 13　1・2 区　第 4 面・第 5 面　平面図

側で確認出来た耕作地に水を供給する水路としての機能が想定される。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗・鉢、肥前陶器皿、焼締陶器甕等）、土師質土器、瓦質土器、須恵器、平瓦等がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 17 ～ 18 世紀代の所産と考えられる。

（3）第3面（図 11・図版3）

第2層である灰色細～中砂を除去した灰色細砂混シルトの上面を第3面とした。第3面は標高 5.9 ～ 6.1m で2－2区が位置する南西側がやや高くなっている。検出した遺構には土坑・鋤溝・畦畔状の高まり・落込みがある。

鋤溝群

鋤溝は幅 0.1m 前後のものが主体となっている。主軸方位は N－50 ～ 60°－E を示し、上位面と直交する向きに変わる。出土遺物には瓦質土器、土師質土器、須恵器等がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 15 ～ 16 世紀代の所産と考えられる。

95 高まり

1区北辺及び2－1区北辺で連続する畦畔状の高まりを1条検出した。主軸方位は N－40°－E である。この高まりは、1区中央を流れる第2面で検出した 62 溝へ取り付くかのように、X＝－ 136,760・Y＝－ 43,347 付近で緩やかに東に向けて屈曲する。本来、当面にも 62 溝の前身となる溝が存在していた可能性が高い。

高まりは上面幅 0.15 ～ 0.5m、下面幅 0.5 ～ 0.7m、高さ約 0.05 m である。1区での検出部分の方が2－1区検出のものに比べて遺存状況は良好であった。高まり周辺では牛足跡が多数確認され、高まり頂部も踏み荒らされている状況にあった。なお、これに繋がる他の高まりが確認出来ず、明瞭な水田を捉えることが出来なかった。

（4）第4面（図 13・図版4）

第3層である灰色細砂混シルトを除去した黄灰色シルト質粘土の上面を第4面とした。第4面は標高 5.8 ～ 6.0m で2－2区が位置する南西側がやや高くなっている。検出遺構には土坑・小穴・鋤溝・鋤或いは鍬先痕、牛足跡等がみられたが、相対的に密度は低い。また、1区東側の X＝－ 136,760・Y＝－ 43,330 付近で焼土塊や炭化物の集中部を確認したが、掘り方や被熱痕跡を伴っておらず明確な遺構としては捉えられなかった。

1区西半部や2区で土坑や小穴を多数検出した。これらは、いずれも掘り込みが浅く、明瞭な並びを示さないことから建物を構成する柱穴ではなく、踏込みなどが集中して形成されたものと思われる。

鋤溝は N－40 ～ 50°－E を指向するものが主体となっているが、上位面よりも検出数は格段に少ない。代わって、1区東半部を中心に鋤・鍬先痕の検出が顕著であった。鋤・鍬先痕は N－55°－E に軸をもつものが多く、鋤溝と同様な展開を示している。

各遺構から、瓦器椀・瓦質羽釜・土師質土器（皿・甕・羽釜）・東播系捏鉢・備前（甕・壺）などが出土している（図 84－1 ～ 5）。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 14 ～ 15 世紀代の所産と考えられる。

（5）第5面（図13・図版4）

第4層である黄灰色シルト質粘土を除去した黒色系シルト～粘土の上面を第5面とした。但し、1区X＝－136,765～－136,767・Y＝－43,330～－43,338付近、2－1区X＝－136,750・Y＝－43,335～－43,340付近、2－2区X＝－136,780・Y＝－43,352～－43,357付近では、第5面の基盤層となる黒色系シルト～粘土ではなく、第7層（地山）である緑灰色系シルト～粘土または砂礫層が広がる。このことから考えれば、第5面の基盤となる黒色系シルト～粘土は北東－南西方向にはしる低まった地形を埋めるように堆積したものであることがわかる。

第5面の標高は、北東側5.7m前後、南東側5.6m前後、北西側5.8m前後、南西側6.0m前後で、2－2区が位置する南西側がやや高くなっている。

第5面は地震による揺れのためか、第4層（黄灰色シルト質粘土）の沈下と第5層（黒色系シルト～粘土）の巻上げによって、検出面がマーブル模様状を呈する面となっており、明確な遺構が確認出来なかった。1区では調査区中央部から東に向かって落ちる155落込みを、2－2区では南東に向かって落ちる132落込みを検出したのみである。

155落込み（図14・図版4）

1区中央部から東へ、2－1区から南へ向かって落ちる大型の落込みで、東西18m以上、南北15mを測る。落込み西肩はN－30°－Wを軸にとり、直線的にはしる。北及び南側は調査区外に広がっている。西肩は、X＝－136,760以北が二段落ちとなり、同以南はテラス部分に高まりが残るため、一見すると溝と落込みが連続するかのようにみえる。また試掘坑を挟んで南側は、緩やかな一段落ちとなっている。西側肩と落込み最深部での比高差は約0.3mを測る。北・南肩は判然とせず、緩やかに下がるのみである。東側は落込みの肩になる立ち上がりが確認出来ず、緩やかに3－2区へと下がっていく地形となっている。落込みの埋土は灰色極細～細砂混シルト質粘土である。

出土遺物には瓦器椀・瓦質土器（甕・鉢）・土師質甕・東播系捏鉢・須恵器（杯身・杯蓋・甕・壺）等がある（図84－6～10）。一部に混入とみられる瓦質土器や下層遺物の巻上げである須恵器が存在するものの、瓦器椀の年代観から概ね12世紀中頃～13世紀の所産と考えられる。

132落込み

2－2区東端に位置し、南東に向かって下がる落込みである。落込み東側は調査区外へと広がるため、規模等は判然としない。西側肩と落込み最深部との比高差は約0.15mである。埋土は灰色極細～細砂混シルト質粘土で、φ2～5㎝の礫を含んでいる。出土遺物には須恵器甕や高杯がみられるが、埋土の

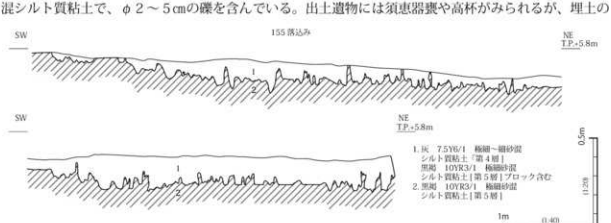


図14　1区　第5面　155落込み断面図

土質から考えると、155 落込みと同時期の所産であろう。

（6）第6面（図 15・図版 5～7）

第 5 層である黒色系シルト～粘土を除去した灰～灰白色系シルト混細砂（第 6 層）或いは緑灰色系シ

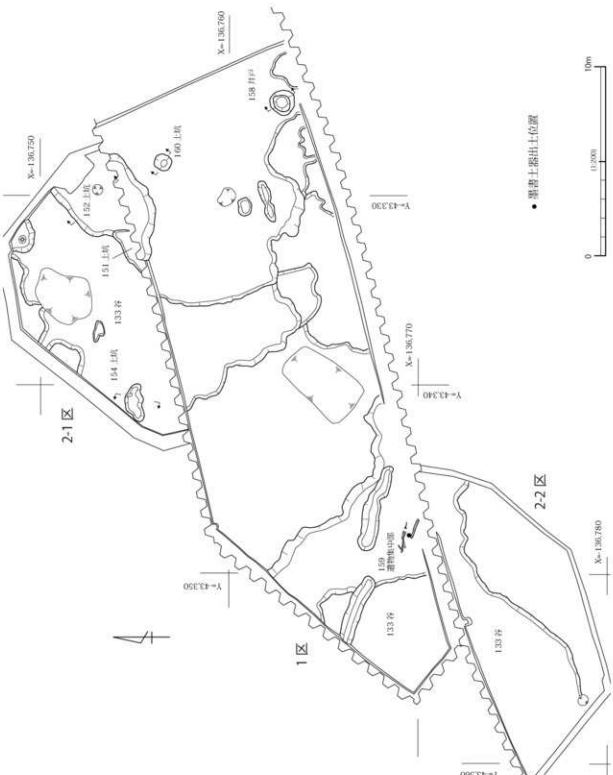


図 15　1・2 区　第 6 面　平面図

ルト～粘土または砂礫層（第７層：地山）の上面を第６面とした。

第６面の標高は、南西隅で 6.0m、北端 5.6m、南端 5.6m、東端で 5.15m を測り、南北両側から中央に向け、また西から東へと傾斜する谷状の地形となる。

検出した遺構は、２－１区において南に向けて落ちる地形とその斜面上に形成された土坑を、２－２区では北に向けて落ちる地形を確認した。また、１区では調査区西側で溝や落込みを、調査区東側で井戸や土坑を検出した。

133 谷（図 15・図版５・７）

第５層である黒色系シルト～粘土を除去すると、調査区の南北両辺側が高く、中央に向かい低くなる北東－南西に延びる谷状地形が確認出来た。谷幅は南北約 15m を測る。この谷底部分東側では 158 井戸や 160 土坑を、西側では溝状遺構や 159 遺物集中部等を、２－１区でみられた北側斜面上で 151・152・154 土坑等を検出した。

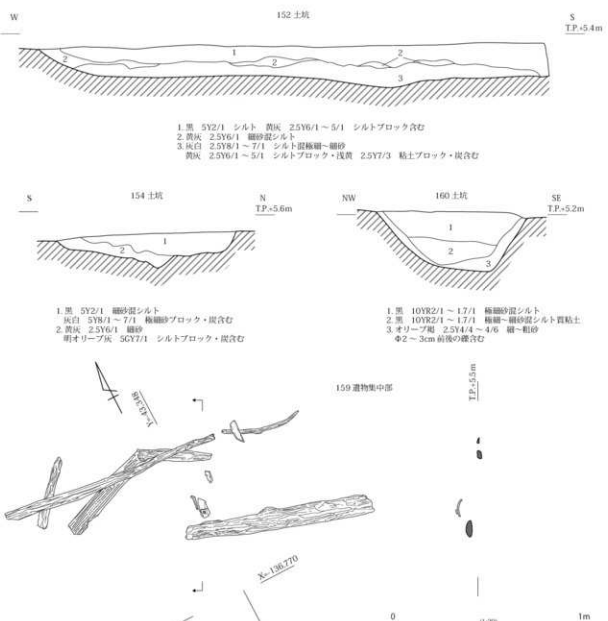


図 16　１・２区　第６面　152・154・160 土坑断面図・159 遺物集中部平・断面図

谷を埋めた第５層からは１・２－１区で弥生土器、５～６世紀代の須恵器（杯身・杯蓋・甕・壷）や８～10世紀前半の土師器・須恵器椀が、２－２区では10世紀前半の須恵器椀や黒色土器（内黒）が出土（図86－14～33・図版33）しており、谷状地形は平安時代には完全に埋没していたと想定される。なお、古墳時代遺物はＹ＝－43,330以東から集中して出土し、古代遺物はＹ＝－43,340以西から出土する傾向がある。

151・152土坑（図16・図版７）

矢板を挟んで１区北東隅～２－１区南東隅で検出した不定形土坑である。東側は調査区外へと広がる。

規模は南北約４m、東西6.5m以上、深さ約0.2mを測る。検出当初は、二つの土坑が切り合ったものと考えたが、埋土に大きな違いが認められないことから、一連の土坑として捉えられる。

埋土は３枚に分かれ、上層が黒色シルト、中層が黄灰色細砂混シルト、下層が炭などを含んだ灰白色シルト混極細～細砂である。埋土上層から６世紀代の須恵器杯蓋（図85－11）が出土した。

154土坑（図16・図版７）

２－１区北西隅で検出した不定形土坑

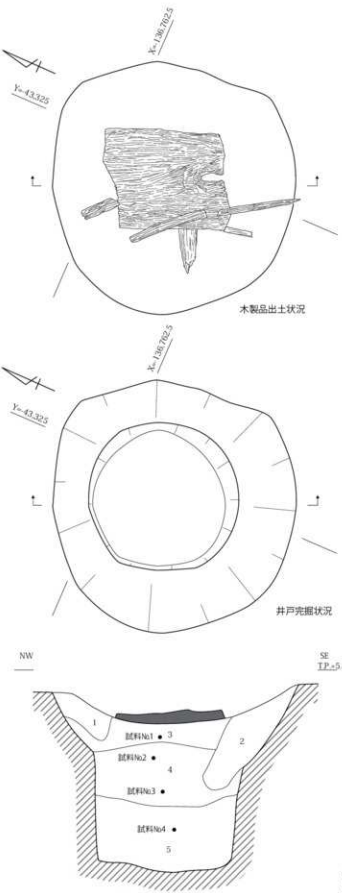


図17　１区　第６面　158井戸平・断面図

である。東西約２m、南北約 0.95m、深さ約 0.2m を測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は２枚に分かれ、上層が黒色細砂混シルト、下層が炭などを含んだ黄灰色細砂である。遺物の出土はみられなかったが、埋土の状況から 151・152 土坑と同様な時期のものと思われる。

160 土坑（図 16）

１区北東隅で検出した平面隅丸方形を呈する土坑である。長軸約 0.9m、短軸約 0.8m、深さ約 0.3m を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は３枚に分かれ、上層が黒色極細砂混シルト、中層が黒色極細～細砂混シルト質粘土、下層がオリーブ褐色細～粗砂である。遺物の出土はみられなかったが、埋土の状況から推察して、古墳時代の所産と思われる。

158 井戸（図 17・図版６）

１区南東隅で検出した平面不整円形を呈する井戸である。直径約 1.2m、深さ 0.95m を測る。断面形は漏斗状を呈する。一定程度埋没した後に、0.5 × 0.6m のスギ板材（図 85 － 13・図版 42）や棒を置き、最終的な閉塞の助けとしているようである。埋土は大きく４枚に分かれる。最上層には南北両側から流れ込んだような黒褐色シルトや細砂があり、板材より下位は黒～黒褐色極細～細砂混シルトが３枚堆積している。これらを対象にして花粉・珪藻分析を実施した。詳細は第４章に記載する。

井戸内からの出土遺物は極めて少なく、僅か須恵器壺が１点出土（図 85 － 12）しているのみである。

出土遺物がほとんどみられないため、時期決定を行なうには心許ないが、TK10 ～ TK43 型式の須恵器壺が出土していることや井戸を覆う第５層から５～６世紀代の須恵器が出土していることから、古墳時代中頃には利用されていたものと推察される。

159 遺物集中部（図 16・図版５）

１区西端部の谷底で検出した北西～南東にはしる流路状の落込みの中層から、自然木や焼け焦げのあるヒノキ板材と共に８世紀前半代の須恵器杯 A が１点出土（図 86 － 17・図版 33）した。杯には墨書で記号が記されている。

（７）第７面

第６面で検出した谷状地形内の１区中央部及び２－１区谷斜面部分には、第６層の灰白～灰黒色の極細～細砂が堆積しており、これを除去した面を第７（最終）面として調査を行なった。遺構・遺物はみられなかったが、第６層は地山面の低まった部分に堆積する氾濫性堆積物であることが明らかとなった。

なお、１区西端で確認した地山である緑灰色細砂混シルトや粘土の下位には、厚さ３m 以上の砂礫層が広がっており、かなり古い段階に形成された谷・流路が存在しているものと推察される。

第３節　３－２区の調査

３－２区は１区の東側に位置し鋼矢板に囲まれた調査区である。調査面積は約 411 ㎡である。

（１）第１面（図 18）

第０層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第１面とした。当区は操車場建設の盛土を敷設する際、かなりの土地改変を行なったようで、第１面は調査区西側部分でしか確認出来なかった。

第１面は標高 6.2m 前後を測り、やや東側に向けて低くなる地形となる。検出遺構には土手状高まりと鋤溝がある。

土手状高まりと鋤溝群

3－2区西端部で上端幅約0.3m、下端幅約0.7mの土手状高まりが、N－25°－Wを軸に南北に構築されている。その東側裾部には幅約0.3mの溝が平行してはしる。鋤溝は幅約0.1m前後のものが主体である。鋤溝群は土手状高まりと同様にN－25°－Wを指向する。

鋤溝からは細片となった近世陶磁器が若干出土している。所属時期を明確にし難いが、概ね19世紀代と思われる。

（2）第2面（図19・図版8）

第1層である灰色極細～細砂を除去した面を第2面とした。当面のほぼ全域が溜池となっていた。

192溜池（図20・写真図版8）

192溜池は調査区のほぼ全域を占め、規模は東西35.1m以上、南北10.0m以上、深さは最大で0.8mであった。溜池の東側は隣接する3－1区検出の165溜池に繋がり、南側は調査区外へと広がる。また、溜池の西及び北辺には上端幅0.5m、下端幅0.8m以上の土手が敷設されている。

溜池の南北断面形は、柄杓状になっており北側から緩やかに下降し、南側で急激に一段深く落ち込む構造となっている。急激に落込む部分は、調査区の南辺側が長さ約28mにわたって弧を描く形になっている。この部分の最下層には、滞水堆積の粘土がみられ、中層から上層にかけては氾濫性堆積

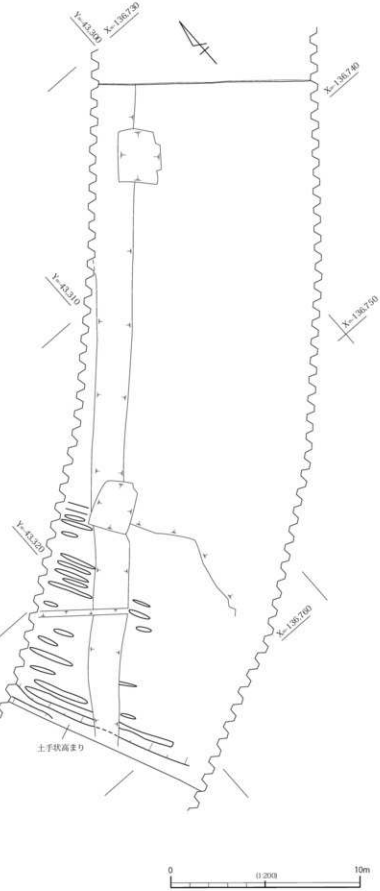


図18　3－2区　第1面　平面図

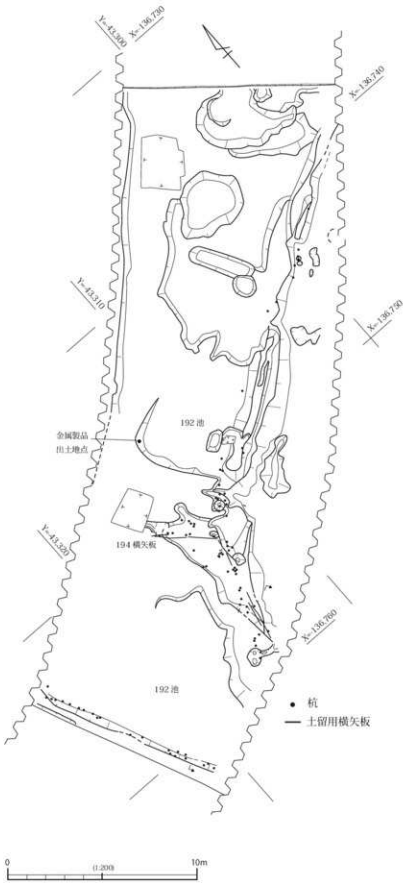


図19　3－2区　第2面　平面図

物とみられるシルト～粗砂や砂礫が厚く堆積する。また、北側の浅い部分はシルト～中砂の堆積となっている。

なお、溜池の深くなる部分は意図して掘削されたものではなく、後述する第5面の落込みを伴った地形を利用したものである。

192池は第2～3層（一部第4層も）を掘削して構築されている。また、深くなる部分の肩には杭列が確認されるため、護岸施設が築かれていた可能性が高い。池の西辺となる土手の東側裾部にも土手に平行して護岸用杭列がみられる。また、調査区東側の池底には落込みがあり、凹凸が著しい状況であった。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗・鉢、肥前陶器椀、関西系陶器鍋、備前擂鉢・壷・甕、常滑甕、堺擂鉢）や軟質施釉陶器（柿釉）、土師質焙烙、東播系捏鉢、瓦器椀、瓦質土器、須恵器等がみられる。池の初現は17世紀代に遡る可能性が窺えるが、最上層から瑠璃釉が施釉された肥前磁器花活（図87－34・図版34）や柿釉が施された軟質施釉陶器、堺擂鉢が出土することから、最終的に19世紀代に入って完全に埋め立てられ、耕地へと転換したと考えられる。その際、池西辺となる土手際が幅約0.9m・深さ約0.2mを測る北西－南東にはしる溝として残されている。溝埋土は流水堆積であることから、耕地が拡大した際に水路として利用されたもの

と考えられる。なお、この耕地としての整地時に調査区中央やや西側でみられる 194 横矢板のように杭（クリ材）と板材を用いて土留を行なっている。

（3）第3・4面

第3面及び第4面は上位で掘削された 192 溜池の影響を大幅に受けており、調査区の大半で検出することが叶わなかった。辛うじて 192 池西側の土手部分に第2～4層が遺存していたため、目的とする第3～4面を検出することが可能であった。

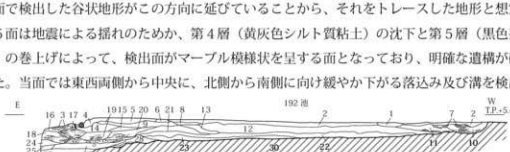
第3面は標高 5.9 m前後で、鋤溝・溝・土坑を確認した。鋤溝群は幅 0.1 m前後で、N－26°－Wを指向する。西側の1区と指向方位が異なるため、1区と当区との境に耕地境があった可能性が高い。検出した遺構からの出土遺物は細片となった瓦質甕や土師質皿しかなく時期を決定し難いが、概ね 15～16 世紀代の所産と考えられる。

第4面は標高 5.8 m前後で、不定形な土坑を1基検出した。土坑は最大長 4 m、最大幅 1 m、深さ約 0.05 mを測り、北西－南東に細長いものである。埋土は灰オリーブ色細砂多混粘土である。遺物は出土しなかった。西接する1区の状況からすると、14～15 世紀代の所産と思われる。

（4）第5面（図 21・図版 9）

第4層である黄灰色シルト質粘土を除去した黒色系シルト～粘土の上面を第5面とした。第5面の標高は南西側が 5.5m 前後、北東側が 5.3m 前後で緩やかに南西から北東へと傾斜している。これは1区第6面で検出した谷状地形がこの方向に延びていることから、それをトレースした地形と想定される。

第5面は地震による揺れのためか、第4層（黄灰色シルト質粘土）の沈下と第5層（黒色系シルト～粘土）の巻上げによって、検出面がマーブル模様状を呈する面となっており、明確な遺構が確認出来なかった。当面では東西両側から中央に、北側から南側に向け緩やか下がる落込み及び溝を検出した。



1 灰 7.5Y6/1 細砂 灰白 7.5Y8/1 極細砂ブロック・炭含む
2 灰オリーブ 5Y6/2 細砂・
灰白 7.5Y8/1 極細砂ブロック・炭含む
3 灰白 5Y8/2 シルト 明黄褐 2.5Y6/6～6/8 細砂ブロック含む
4 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂・ 暗オリーブ 5Y4/3～4/4 シルト・
灰 5Y4/1 シルトが混ざったもの［構築板 掘込め土］
5 灰白 5Y8/1～7/1 細砂 オリーブ 5Y6/6～5/6 極細～細砂ブロック・
Φ1～2cm の礫含む
6 灰白 5Y8/2～7/2 細砂 炭含む
7 灰白 5Y8/2～7/2・オリーブ黄 5Y6/3～6/4［土方粗粒化］
8 灰 7.5Y6/1 細砂・灰白 10Y8/1 中砂・浅黄 5Y8/3～8/4
粗砂［土方粗粒化］
9 灰 7.5Y6/1・灰白 10Y8/1・灰オリーブ 5Y5/3 細～中砂
10 灰 5Y6/1～5/1 灰白 10Y8/1・浅黄 5Y5/3 細～中砂
灰 5Y6/1～5/1 シルト～極細砂［土方粗粒化］
11 灰 5Y5/1 シルト～極細砂 灰 5Y6/1 細～中砂・
灰白 10Y8/1 粗砂［土方粗粒化］
12 灰 7.5Y6/1～5/1 シルト・灰白 10Y8/1 細砂
オリーブ黄 5Y6/3～6/4 中砂［土方粗粒化］
13 灰 5Y6/1～5/1～灰白 10Y8/1 細砂
黄灰 2.5Y6/1 シルトブロック・炭含む
14 灰 5Y5/1～4/1・灰白 7.5Y8/1・オリーブ黄 5Y7/2～7/3
細～中砂 炭を僅かに含む
15 灰 5Y5/1～4/1・灰白 7.5Y8/1・オリーブ黄 5Y7/2～7/3
細～中砂 炭を僅かに含む
16 灰 5Y5/1～4/1 細砂 灰白 5Y7/1～7/2 シルト～極細砂ブロック含む
17 灰白 7.5Y8/1 中～粗砂
18 灰白 5Y7/1～灰 5Y6/1 細砂・灰白 7.5Y8/1・
浅黄 5Y7/3～7/4［土方細粒化］
19 青灰 2.5Y6/1～5/1・浅黄 5YR5/3～8/4
灰白 10Y8/1 細砂～中砂［土方細粒化］
20 灰 5Y6/1～5/1 細砂・浅黄 5YR5/3～8/4 中～粗砂［土方細粒化］
21 灰 5Y6/1～5/1 シルト 灰 5Y6/1～5/1 シルト
灰オリーブ 5Y5/2～5/3 細砂ブロック含む
22 青灰 5B6/1～5/1 粘土 灰 7.5Y6/1～5/1 細砂ブロック・炭含む
23 青灰 5B5/1 細砂混粘土 炭含む
24 灰 5Y6/1～5/1 シルト 灰白 5Y8/1 細砂ブロック含む
25 灰 5Y5/1～4/1 中～粗砂混粘土 Φ2cm 前後の礫含む
26 灰白 5Y8/1～7/1・暗オリーブ灰 5G3/1 粘土
27 青灰 10BG5/1・灰 N5/0 細砂混粘土 Φ3cm 前の礫含む
28 青灰 10BG5/1 シルト 灰白 10Y8/1・灰 7.5Y6/1 細砂含む
炭を僅かに含む
29 青灰 10BG5/1・灰 N5/0 細砂混粘土 Φ3～5cm 礫を含む
30 灰 N5/0 粘土［第4層・27 の下位付近は灰 5Y5/1～4/1 粘土
黒 2.5Y2/1 シルトブロック含む］第5層ブロック］

木製品

図 20　3－2区　第2面　192 池断面図

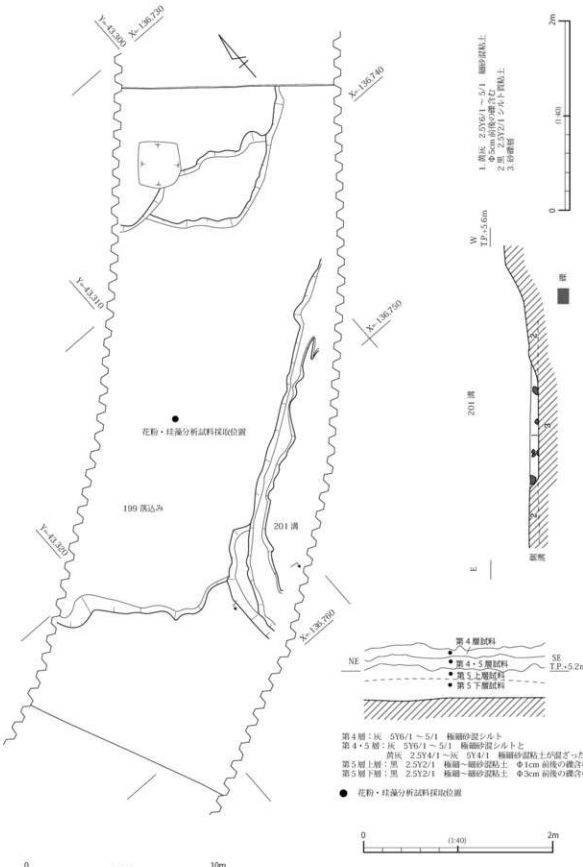


図 21　3－2区　第 5 面　平面図・第 5 面 201 溝断面図

199 落込み（図版９）

落込みは調査区中央部に位置し、南西・北東両側から中央に向けて落込んで、北西側から南東側に向けては緩やか下がるものである。東側肩は二段になっている。落込み北側は調査区外に広がり、南側には 201 溝がはしる。

落込みの規模は東西 24.5 m、南北９m以上、深さ約 0.3 mを測る。埋土は２枚に分かれ、上層が灰色極細～細砂混シルト質粘土、下層が黄灰色極細～細砂混粘土と黒色シルト質粘土が混ざったものである。

出土遺物には、瓦器椀、黒色土器椀（内黒）、土師質土器（皿・甕）、須恵器杯、丸瓦等がある（図 87 － 42 ～ 45・図版 35）。出土遺物から 12 ～ 13 世紀の所産と考えられる。

201 溝（図 21）

199 落込みの南辺を沿うように、N－55°－Eを軸にして北東－南西にはしり、X＝－136,757・Y＝－ 43,312 付近で南に向けて緩やかに屈曲する。溝の東西両側は調査区外へと延びる。

検出長は約 20 m、最大幅約 1.5 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は逆台形で、埋土は黄灰色細砂混粘土である。遺物は出土しなかったが、埋土が 199 落込みと同質であるため、同時期の所産と思われる。

（５）第６面（図 22・図版９）

第５層である黒色系シルト～粘

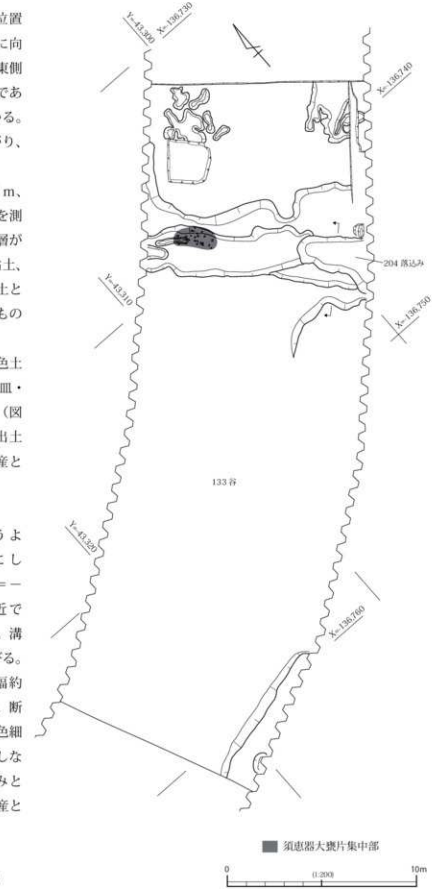


図 22　３－２区　第６面　平面図

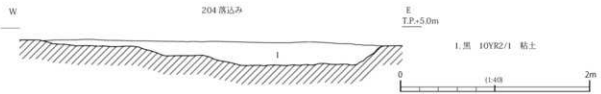


図 23　3－2区　第6面　204 落込み断面図

土を除去した緑灰色系シルト～粘土または砂礫層（第7層：地山）の上面を第6面とした。基盤層はY＝－43,305 以西が砂礫層となっており、以東はシルト～粘土に漸次変化する。

第6面の標高は、南西隅が 5.4m、北西隅が 5.1m、南東隅が 5.1m、北東隅が 5.3m、調査区中央部で 4.9 mを測り、北西～南東に向けてが低くなる地形となっている。

検出遺構には、調査区南西隅の土坑、調査区東端の不定形な落込み等がある。

133 谷（図版9）

調査区東端付近では、北東から南西に下がる落込みを検出した。これは1区第6面で検出した 133 谷から連続するものとして捉えて調査を行なった。当調査区では、調査区南西隅で僅かに谷南斜面の傾斜変換点とみられる落ちを確認したのみで、2区で検出した 133 谷の南北両肩部の続きを確認することが出来なかった。

1・2区から連続する 133 谷の堆積層である第5層からの出土遺物は、当区と1・2－1区との間で差がみられた。当区では6～8世紀代の須恵器や土師器が出土するものの、1区や2－1区で出土した5世紀代の須恵器はみられなかった。谷周辺部に展開する集落の時期別の占地状況を示すのであろうか。

204 落込み（図 23・図版9）

先述した調査区東端の落込み直下には、N－40°－Wを指向する溝状の 204 落込みがみられる。204 落込みは南北両側が調査区外に延び、検出長約 12 m、最大幅約2 mを測る。

204 落込みは、北端から X＝－136,743・Y＝－43,301 付近まで深さ 0.05 m前後の断面浅い皿状呈するものであるが、南側はそれよりも一段深く落ち込んでいる。

落込み北端付近では底から浮いた状態で須恵器大甕破片がまとまって出土（図 88－50～52・図版9・35）した。古墳時代後半代の所産である。

第4節　3－1区の調査

3－1区は3－2区の東側に位置し鋼矢板に囲まれた調査区である。当区は鋼矢板に囲まれた調査区のうち最東端にあたる。調査面積は約 260 ㎡である。

（1）第2面（図 24・図版 10）

第0層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第2面とした。当区は3－2区同様、操車場建設の盛土を敷設する際にかなり改変を受けているようで、第1面のベースとなる第1層の遺存状況が不良であり、第1面は確認出来なかった。

第2面は標高 5.7m 前後でほぼ平坦な地形となっている。検出した遺構には土手状高まり・溝・鋤溝・池、不定形な土坑がある。

溝・鋤溝群

溝・鋤溝群は調査区中央付近で僅かに認められ、N－25～40°－Wを主軸とする。溝は後に述べる

165 溜池（水溜状施設）の東肩と平行して流れ、幅約 0.35m・深さ 0.05 mである。耕作地に水を供給する水路としての機能が想定される。鋤溝は幅約 0.1 mのものが主体となっている。出土遺物には近世陶磁器や土師質皿、須恵器などがある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 17 ～ 18 世紀代の所産と考えられる。

165 溜池（図 25・図版 10）

溜池は調査区のほぼ西半分を占め、東西 13m 以上（３－２区を含めると約 48 m）、南北 8m 以上を測り、深さは最大で 0.45m であった。南側は調査区外へと広がり、西側は先述した３－２区で検出した 192 溜池に繋がる。東側肩は N－26°－W を軸として直線的に延び、北東隅は撹乱によって切られているが、X＝－ 136,723・Y＝－ 43,290 付近で南西に屈曲し、北辺に繋がると思われる。池底は凹

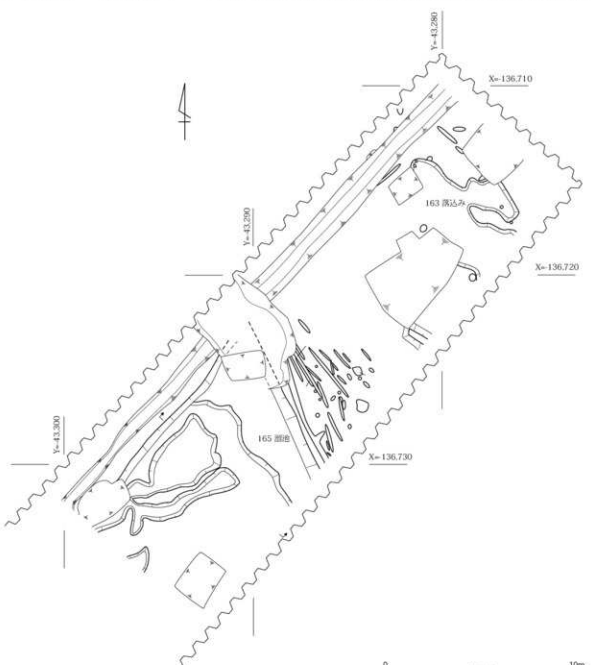


図 24　３－１区　第２面　平面図

凸が著しく、不定形な落込みが広がる。また、牛の足跡痕が多数みられた。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗・皿、肥前白磁壷、肥前陶器椀、関西系陶器鍋、京焼系椀、備前擂鉢・甕・壷、堺擂鉢）、軟質施釉陶器（飴釉）、東播系捏鉢、瓦器椀、瓦質土器、白磁皿、須恵器、寛永通宝等がある。３－２区の192溜池同様、池の初現は17世紀代に遡る可能性が窺えるが、最上層から飴釉が施された軟質施釉陶器、堺擂鉢が出土することから、最終的に19世紀代に入って完全に埋め立てられ、耕地へと転換したと考えられる。

163 落込み

調査区東端部、Y＝－43,280付近に広がる不定形な落込みである。埋土は黄灰色細砂混シルトであった。出土遺物には近世陶磁器（肥前染付碗、肥前外青磁染付火入れ、関西系陶器鍋蓋、堺擂鉢等）、土師質土器、須恵器等がある。18世紀以降の所産であろうか。

（２）第３面（図26・図版10）

第３面は先述した溜池造成によって改変を受けており、調査区の東半部にしか遺存していない。青灰色細砂混シルトを除去した灰色細砂混シルト質粘土の上面を第３面とした。

第３面は標高5.6m前後でほぼ平坦な地形となっている。検出した遺構には鋤溝・溝・土坑がある。

180・181 溝（図26）

調査区のほぼ中央に位置し、N－30°－Wを軸として北西－南東にはしる溝である。180溝は幅0.5～0.6m、深さ約0.1mを、181溝は幅0.2～0.3m、深さ0.05mを測る。共に南側は調査区外に延びる。

いずれも断面形は浅い皿状を呈し、埋土は共に灰色細～中砂で流水堆積層である。水路としての機能が想定される。溝底には牛の足跡痕が多数みられた。遺物は出土していない。

鋤溝群

鋤溝群は調査区中央から東側において検出した。主軸は一部にN－90°－Wを示すものがみられるものの、主体はN－30～40°－Wを示し、上位面と指向する方位はほぼ一致する。鋤溝群は幅0.1m前後のものが主体である。出土遺物には瓦器椀、瓦質土器、土師質土器（皿・甕）、白磁碗、須恵器、煙管等がある（図89－57・58）。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね15～16世紀代の所産と考えられる。

（３）第４面（図27）

第４面は先述した溜池造成によって削平を受けて遺存状況は不良であり、調査区西半北側及び調査区東半部で確認した。灰色細砂混シルト質粘

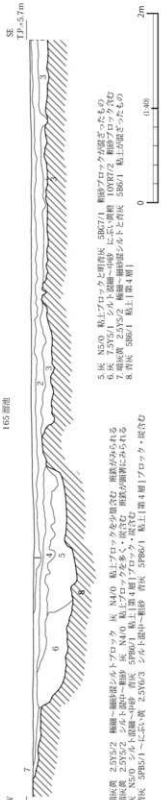


図25　３－１区　第２面
165 池断面図

土を除去した灰色粘土の上面を第４面とした。

第４面は標高 5.4 ～ 5.5m で西から東に向けてやや下がる地形となっている。検出した遺構には土坑・鋤溝・鋤或いは鍬先痕・牛足跡等があるが、相対的に密度は低い。

鋤溝は N－55°－W を指向するものが主体となっているが、上位面よりも検出数は格段に少ない。

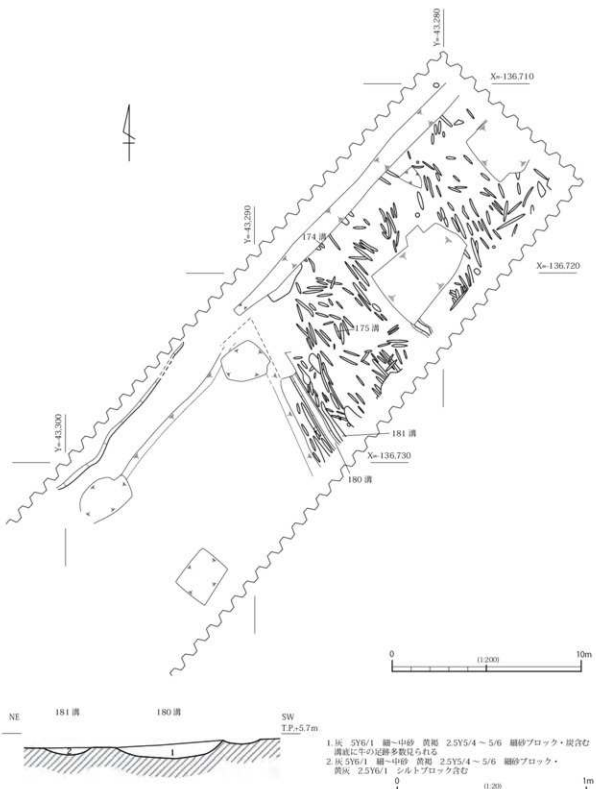
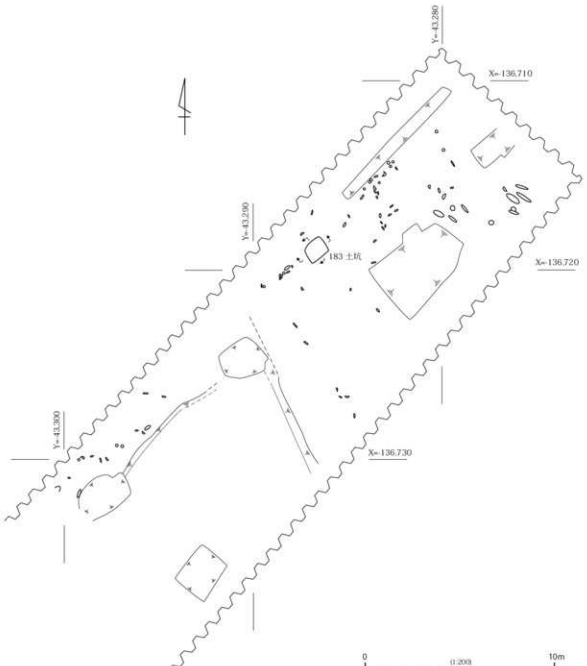


図 26　３－１区　第３面　平面図・第３面　180・181 溝断面図



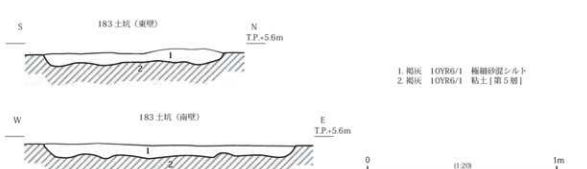


図27　３－１区　第４面　平面図・第４面　183 土坑断面図

代わって、調査区東半部を中心に鋤或いは鍬先痕が顕著であった。なお、鋤溝からは細片となった瓦器椀や土師質皿が僅かに出土したのみで、時期を明確にし難い。14 ～ 15 世紀の所産であろうか。

183 土坑（図 27）

調査区中央部の北側で検出した平面長方形を呈する土坑である。N－35°－W を軸にし、東西約 1.25 m、南北約 0.95m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色極細砂混シルトである。遺物の出土はみられなかった。性格は不明である。

（4）第5面（図 28）

第 4 層である灰色粘土を除去した黒色系シルト～粘土（第 5 層）及び黄灰色極細～細砂（第 6 層）・

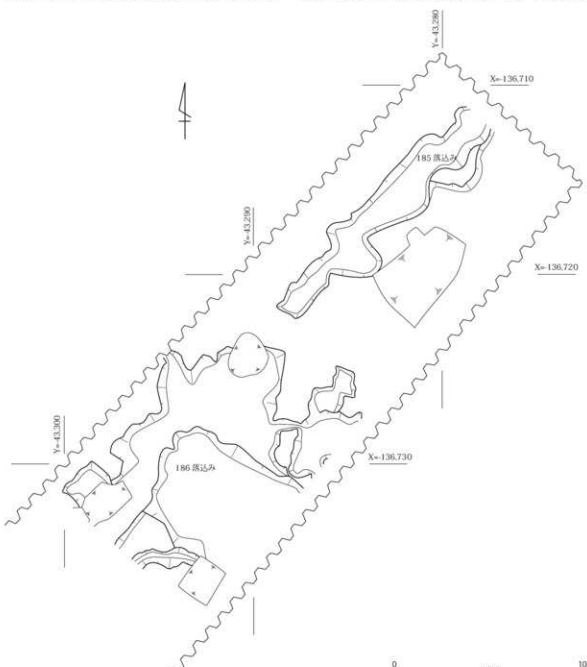


図 28　3－1区　第5面　平面図

緑灰色粘土～シルト（第７層：地山）の上面を第５面とした。第５面の標高は 5.3 ～ 5.4m 前後で緩やかに北東から南西へと傾斜している。

第５面は地震による揺れのためか、第４層（黄灰色シルト質粘土）の沈下と第５層（黒色系シルト～粘土）の巻上げによって、検出面がマーブル模様状を呈する面となっており、明確な遺構が確認出来なかった。当面では調査区中央から東側で溝状の落込みを、調査区西側で北から南・東から西に向け緩やかに下がる落込み及び溝を検出した。

185 落込み

調査区中央から東側に位置し、N－43°－Eを軸に、北東－南西にはしる不定形な溝状の落込みである。東側は隣接する４区へと延びる。検出長約 14.5 m、幅 1.5 ～ 2.5 m、深さ約 0.15 mを測る。

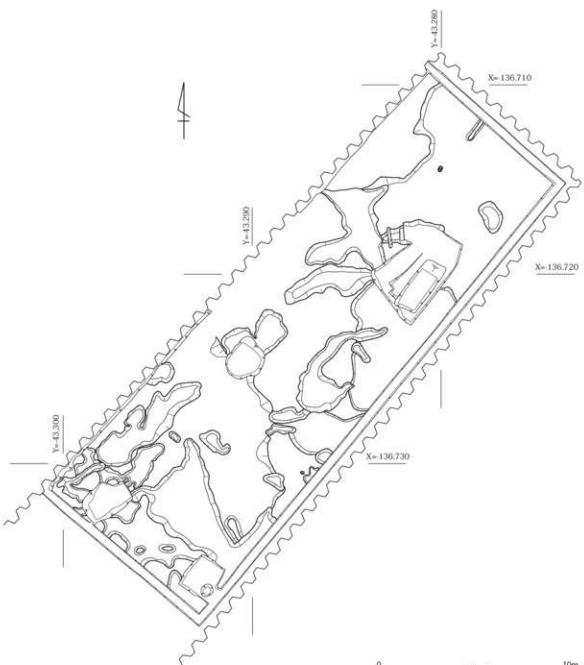


図 29　３－１区　第６面　平面図

落込み底面は西から東へと緩やかに傾斜している。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色粘土である。

出土遺物には、瓦器椀、土師質土器（皿・甕）、須恵器（杯・甕）、東播系捏鉢がある。大半の遺物が細片となっているため時期を決し難いが、概ね 12 世紀中頃～ 14 世紀の所産と考えられる。

186 落込み

調査区西半部で検出した北から南・東から西に向け緩やかに下がる落込みである。３－２区第５面で確認した 199 落込みに繋がるものである。平面形は不定形で、南側は調査区外へと延びる。検出規模は南北約 10 m、幅約 15 m、深さ約 0.1 ～ 0.15 mである。埋土は黄灰色粘土である。

出土遺物は極めて少なく、瓦器椀片がみられたのみである。細片のため時期を決し難いが、遺構埋土が同質であることから 185 落込みと同様な時期の所産と思われる。

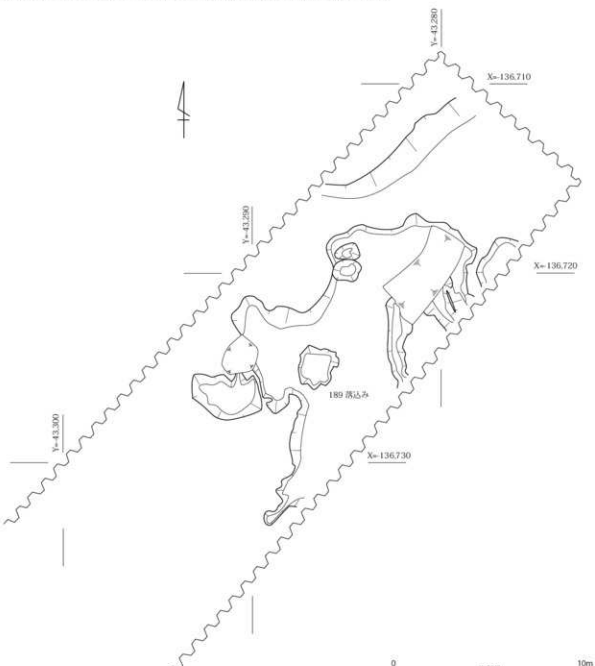


図 30　３－１区　第７面　平面図

（5）第6面（図29・図版11）

第5層である黒色系シルト～粘土を除去した灰白～灰黒色・黄灰色極細～細砂（第6層）または緑灰色系シルト～粘土（第7層：地山）の上面を第6面とした。基盤層はY＝－43,290以西が緑灰色系シルト～粘土となっており、以東が黄灰色極細～細砂である。

第6面の標高は、調査区北辺側が5.3m、調査区南辺側で5.0～5.2mを測り、北東から南西に向けて緩やかに低くなる地形となっている。検出した遺構には不定形な落込み・溝がある。

第6面検出時に掘削した第5層は、1・2区及び3－2区から連続するもので、133谷を埋めるものと考えられるが、出土遺物に差がみられ1区で出土している5世紀代の須恵器は出土していない。相対的に遺物出土量が少なく、時期決定が現状では困難である。

（6）第7面（図30・図版11）

第6面では第6層の灰白～灰黒色・黄灰色極細～細砂及び黒色粘土の堆積がY＝－43,290以東で確認されたため、これを除去した面を第7（最終）面として調査を行なった。

第7面では調査区北東隅で南に下がる落ちがみられ、調査区中央部で不定形な189落込みを確認した。189落込みは南北約9m、東西約16～17m、深さ約0.2mを測る。落込み南側は調査区外へと広がる。落込み底面は凹凸が著しく、大小様々な大きさの窪みがみられた。落込みの埋土は先述した第6層の灰白～灰黒色・黄灰色極細～細砂である。但し、落込み底面南東隅に位置し、撹乱に切られ平面馬蹄形を呈する溝状の窪みには黒色粘土の堆積がみられた。第6層は地山面の低まった部分に堆積する氾濫性堆積物であることが明らかとなった。

なお、第6層の灰白～灰黒色極細～細砂から庄内甕1点（図95－200）が出土していることから、古墳時代初頭頃には堆積したものと推定される。

第5節　4区の調査

4区は3－2区の東側に位置し、09－1調査区のほぼ中央に位置する。調査面積は約120㎡である。当区よりも東側の調査は鋼矢板内ではなく、素掘りの調査となっている。当区はY＝－43,270ラインを中心にして、N－40°－Wを軸にとる幅2mのコンクリート製排水溝と幅4mを測る排水溝掘り方によって東西に分断されている。また、調査区西半部の中央付近にあるφ1.6mのコンクリート製鉄柱基礎を残したままの調査となった。なお、調査区東半部南側は幅約2m隔てて平成19・20（2007・2008）年度調査の第9地区西端となっている。

（1）第1面（図31・図版11）

第0層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第1面とした。当区西半部は3区同様、操車場建設の盛土を敷設する際や旧東海道線関連施設による撹乱を受けており、第1面の遺存状況は不良であった。

第1面は標高5.7m前後でほぼ平坦な地形となる。検出した遺構には鋤溝群・落込みがある。

鋤溝群

鋤溝群は調査区東半部において検出した。N－45～50°－Eを指向し、幅0.1m前後のものが主体となっている。調査区西半部は遺存状況が悪く判然としなかったが、N－38°－Wを指向する鋤溝が

僅かにみられた。東側鋤溝群と主軸方位が直交することを考えると、コンクリート製排水溝付近に耕作地の境があった可能性が高い。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付・関西系陶器鍋等）、瓦器椀、土師質皿がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね18世紀後半～19世紀代の所産と考えられる。

なお、第1層の灰色細砂混シルトを除去した面を第2面として調査するはずであったが、東側に位置する5－1区や西側に位置する3－1区東半部の第2面の遺存状況が概して不良であったことを考慮し、当区では断面確認を行なうに留めた。

（2）第3面

（図31・図版12）

第2層の灰オリーブ色細～中砂を除去した青灰色細砂混粘土の上面を第3面とした。第3面の標高は5.5～5.6mで緩やかに西から東へと下がる地形となっている。検出した遺構には、鋤溝・溝・土坑・落込みがある。

鋤溝群

鋤溝群は調査区全域で検出した。幅約0.1mのものが主体となっている。調査区東半部ではN－15～20°－Wを、西半部ではN－20～30°－

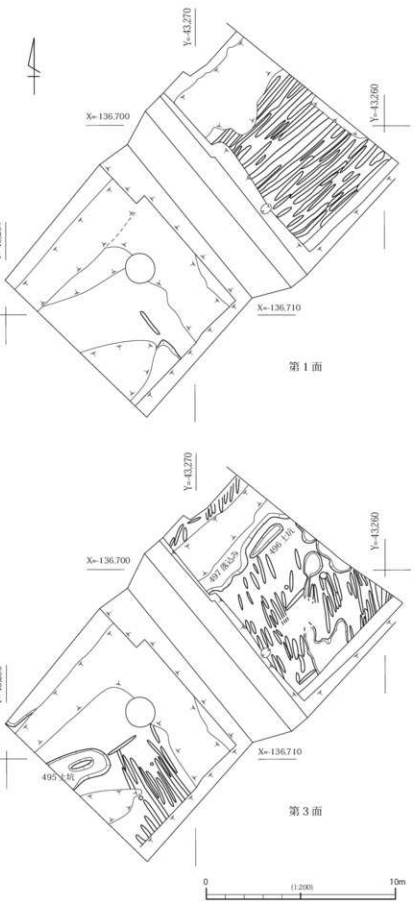


図31　4区　第1面・第3面　平面図

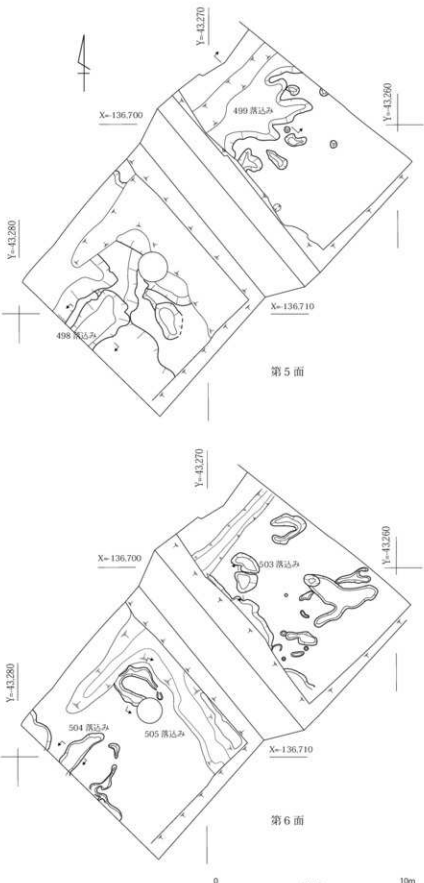


図32　4区　第5面・第6面　平面図

W を指向している。特に、調査区東半部で検出した一群は上位面で検出したものと指向する方位が異なっている。

出土遺物には瓦器椀、瓦質甕、土師質土器（皿・甕）、瓦等がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 15 ～ 16 世紀代の所産と考えられる。

497 落込み

N－40°－E を軸にもち、調査区東半部北側の X＝－136,697 ～ 136,701 に広がる落込みである。落込み北側肩は旧東海道線関連の溝に、西側はコンクリート製排水溝によって切られて判然としない。また、東側は 5－1 区へと広がるものの、5－1 区では検出出来なかったため、当区との境に入れた側溝内で収束すると考えられる。検出長は約 6 m、幅約 1.3 m、深さ約 0.05 mを測る。埋土は暗灰黄色中～粗砂である。

出土遺物には肥前系陶器鉢、瓦器椀、瓦質土器（甕・羽釜）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、東播系捏鉢、備前（甕・擂鉢）、須恵器等がみられる。主体的な遺物は鋤溝と同様の 15 ～ 16 世紀代のものであるが、肥前系陶器鉢や備前（甕・擂鉢）などのように 17 世紀代の遺物も少なからず認められることから、本来であれば第 2 面で検出すべき遺

構であった可能性が高い。

なお、第３層の青灰色細砂混粘土を除去した面を第４面として調査するはずであったが、東側に位置する５－１区や西側に位置する３－１区東半部の第４面の遺存状況が概して不良であったことを考慮し、当区では断面確認を行なうに留めた。

（３）第５面（図 32・図版 12）

第４層の青灰～灰色粘土を除去した褐色細砂混シルト質粘土（第５層）、または暗灰黄色細砂混シルト（第６層）、或るいは明青灰色シルト質粘土（第７層：地山）の上面を第５面とした。第５面の基盤層となる第５層は調査区西半部と東半部の南西隅にしかみられず、東半部の大半は第６・７層上面が検出された。

第５面の標高は 5.35 ～ 5.4m でほぼ平坦な地形となっている。第５面は地震による揺れのためか、第４層（灰色粘土）の沈下と第５層（褐色細砂混シルト質粘土）の巻上げによってマーブル模様状の面となっており、明確な遺構が確認出来なかった。僅かに不定形な落込みを検出したのみである。

498 落込み（図 33）

調査区西半部の西端で検出した平面隅丸長方形状を呈する落込みである。落込み西肩は３－１区に延びるが、３－１区では確認出来なかったことから、該区東側溝内で収束するものと考えられる。検出長は約３m、幅約 2.2 m、深さ 0.05 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰色極細砂混粘土である。

出土遺物には瓦器椀、土師質土器（皿・甕）、須恵器杯等がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 12 ～ 13 世紀代の所産と考えられる。

499 落込み（図 33）

調査区東半部北側の X＝－ 136,701 以北に広がる落込みである。落込み北側肩は調査区外に広がり、西側はコンクリート製排水溝によって切られて判然としない。また、東側は５－１区へと延びるものの、５－１区では検出出来なかったため、当区との境に入れた側溝内で収束すると考えられる。検出長は約６m、幅約５m、深さ約 0.1 mを測る。埋土は黄灰色極細～細砂混粘土である。

出土遺物には瓦器椀、瓦質甕、黒色土器椀（両黒）、土師質土器（皿・椀・甕）、東播系捏鉢等がみら

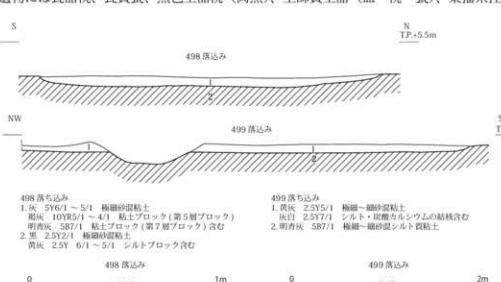


図 33　４区　第５面　498・499 落込み断面図

れる（図 89 － 62 ～ 68）。遺物にはやや時期幅がみられるが概ね 12 世紀末～ 13 世紀後半の所産であろう。

（4）第 6 面（図 32・図版 12・13）

第 6 面は、調査区西半部で第 5 層の褐色細砂混シルト質粘土を掘削し終えた緑灰色系シルト～粘土（第 7 層：地山）の上面であったが、調査区東半部では第 5 層がみられず、第 6 層である暗灰黄色細砂混シルトや灰白～黄灰色極細砂～細砂（上部は土壌化し、灰黒色～褐色を呈する）を除去した緑灰色系シルト～粘土（第 7 層：地山）上面となった。

第 6 面の標高は 5.2 ～ 5.3m で緩やかに北東から南西に向けて下がる地形となっている。検出した遺構には平面形が馬蹄形を呈する不定形な落込みがある。

落込み（図 34）

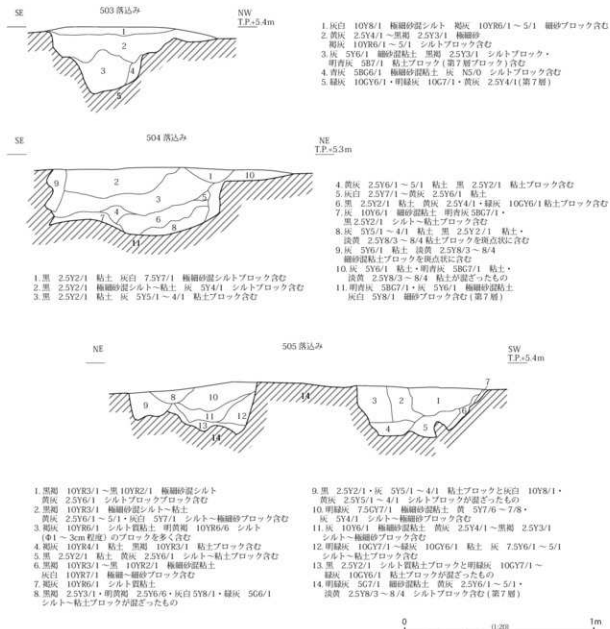


図 34　4 区　第 6 面　503 ～ 505 落込み断面図

検出した落込みは、大半のものが平面不定形な馬蹄形を呈する。落込みの肩は非常に不明瞭であり、落込みの側面や底面も不規則に凹凸がみられることから、人為的な掘削によるものではないと判断される。埋土は黒色粘土、黄灰色粘土、灰色シルトなどがブロック状になって入り交ざったように堆積している。地震などによる自然営為のものであろうか。遺物は出土していない。

第6節　5－1区の調査

5－1区は4区の東側に位置する。調査面積は約162㎡である。調査区南及び東側は平成19・20（2007・2008）年度調査の第9地区となっている。

（1）第1面（図35）

第0層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第1面とした。当区は3区同様、操車場建設の盛土を敷設する際や旧東海道線関連施設による撹乱を受けており、第1面は調査区の北東部分で僅かに確認出来たのみであり、遺存状況は極めて不良であった。

第1面は標高5.7m前後でほぼ平坦な地形となる。検出遺構には鋤溝がある。

なお、第1層の灰色細砂混シルトを除去した面を第2面として調査するはずであったが、第2面の遺存状況が不良であったことを考慮し、当区では断面確認を行なうに留めた。

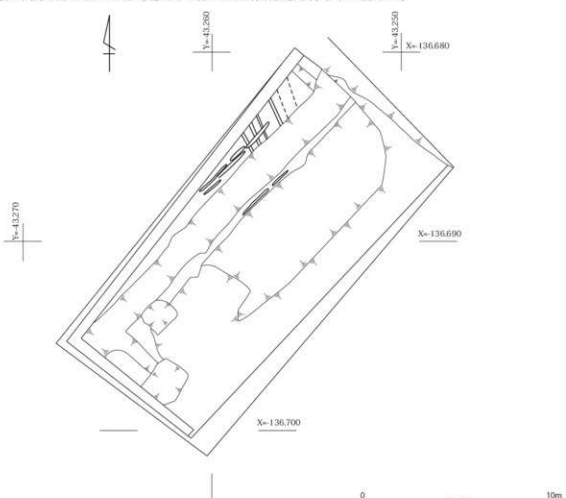


図35　5－1区　第1面　平面図

鋤溝

鋤溝は調査区北東部において検出した。幅 0.1 m前後のものが主体である。N－44°－Eを指向する一群とN－30°－Wを指向する一群がみられた。前者の方が新しい段階の耕作痕である。なお、撹乱の底では明瞭な鋤溝を検出出来なかったものの、N－30°－Wを示す線上の耕作痕が散見された。

また、検出した鋤溝の東側（図 35 点線部分）でN－30°－Wを指向するラミナ構造をもつ灰白色細～粗砂の溜りがみられた。明確な掘り方を検出出来なかったが、水路状の溝が存在していた可能性が考えられる。

当面の遺構からは、遺物の出土がみられなかったため時期を決し難いが、隣接する調査区の状況から 18 世紀後半以降の所産と考えられる。

（2）第3面（図 36・図版 11）

第2層の暗灰黄色細～中砂を除去した黄灰色細～中砂混粘土の上面を第3面とした。第3面の標高は 5.4 ～ 5.5m で緩やかに西から東へと下がる地形となっている。検出した遺構には鋤溝・溝・土坑・落込みがある。

鋤溝群

鋤溝群は調査区全域で検出した。幅約 0.1 mのものが主体となっている。

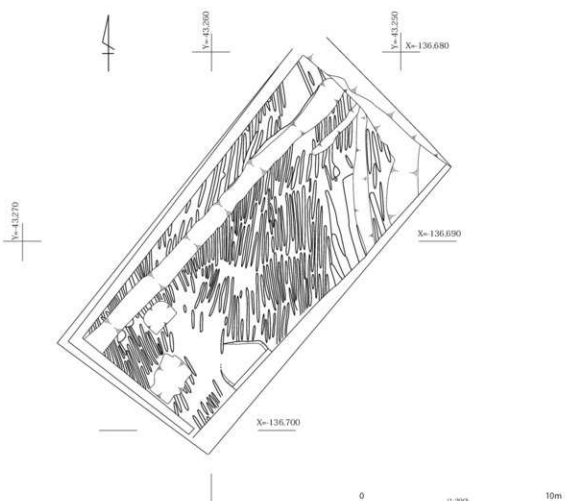


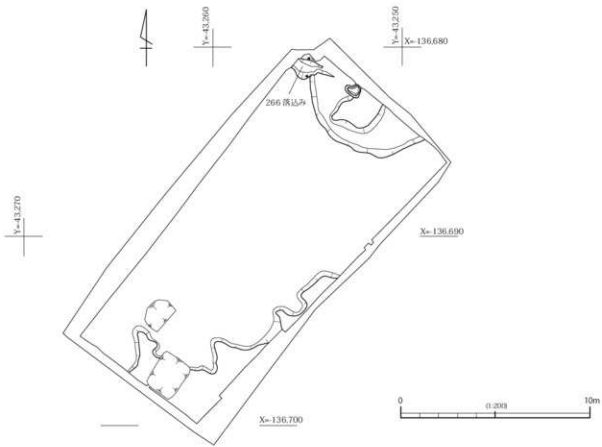
図 36　5－1区　第3面　平面図

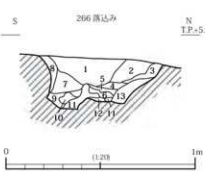
調査区南西部のＹ＝－ 43,250 ライン東側で検出した落込みから北西方向に向かうラインで、鋤溝の主軸方位が異なっていた。落込みよりも西側では鋤溝はＮ－ 20 ～ 25°－Ｗを、落込みよりも東側ではＮ－ 0 ～ 15°－Ｅを指向している。鋤溝群は上位面で検出したものと指向する方位が異なっている。

出土遺物には瓦器椀・皿、瓦質土器（甕・羽釜）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、黒色土器椀（両黒・内黒）、東播系捏鉢、白磁碗、須恵器等がある。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 15 ～ 16 世紀代の所産と考えられる。

溝群

調査区南東部のＸ＝－ 136,687 以南で、幅約 0.5 m・深さ 0.05 mを測り、断面形が浅い皿状を呈





1. 黒灰　10YR5/1 ～ 4/1　極細～細砂混粘土
黒褐　10YR3/1 ～ 3/2・灰白　5Y8/1 ～ 7/1　細砂ブロック・
灰　7.5Y6/1 ～ 5/1　粘土ブロック含む
2. 灰白　10Y8/1　細砂　明緑灰　5G7/1・オリーブ黄　5Y6/3 ～ 6/4
灰黄褐　2.5Y6/2 ～ 6/3　シルト～極細砂ブロック含む
3. 灰白　2.5Y8/1 ～ 8/2　極細砂混粘土　黄灰　2.5Y6/1・明緑灰　5G7/1
シルト～極細砂ブロック含む
4. 灰　5Y6/1 ～ 5/1　粘土　黒褐　10YR3/1 ～黒　10YR2/1・灰白　7.5Y8/1・
緑灰　10GY6/1　粘土～シルトブロック・灰白　10Y8/1　極細～細砂ブロック含む
5. 黒褐　10YR3/1 ～黒　10YR2/1　締まりの強い極細砂混粘土
褐灰　10YR6/1・緑灰　5G6/1　粘土ブロック含む
6. 灰白　10Y8/1　粘土　明緑灰　5G7/1・黒褐　2.5Y3/1　シルト～極細砂ブロック含む
7. 灰白　10Y8/1　シルト混極細砂　明緑灰　5G7/1・浅黄　2.5Y7/3 ～ 7/4　粘土ブロック・
褐灰　10YR6/1 ～ 5/1　粘土からシルトブロック含む
8. 緑灰　5G6/1 ～ 5/1　粘土　明黄褐　2.5Y7/6 ～ 6/6・黒褐　10YR3/1
シルト～粘土ブロック含む
9. 黒　2.5Y2/1　締まりの強い極細砂混シルト　緑灰　5G6/1 ～ 5/1　粘土ブロック含む
10. 灰白　10Y8/1・浅黄　5Y7/3 ～ 7/4　細砂　明緑灰　5G7/1　粘土ブロック含む
11. 緑灰　5G6/1 ～ 5/1　極細砂混粘土　オリーブ黄５Y6/4　シルト～極細砂ブロック含む
12. 黒褐　10YR3/1 ～黒　10YR2/1　粘土
13. 明緑灰　5G7/1 ～緑灰　5G6/1・黄灰　2.5Y6/1　粘土
灰白　7.5YR8/1・浅黄　7.5Y8/1　極細～細砂ブロック含む
地山．緑灰　5G6/1 ～ 5/1　極細～細砂混粘土〔第７層〕

図37　５－１区　第６面　平面図・第６面　266 落込み断面図

する溝を３条検出した。これらの溝には灰白色～灰色系のシルト～細砂が堆積し、ラミナ構造が確認出来る。南側は調査区外に延び、平成 19・20（2007・2008）年度第９地区第４面検出の２～４溝に繋がるものと考えられる。

出土遺物には瓦器椀・土師質土器（皿・甕）等がある。細片のため時期を決定し難いが、鋤溝群同様、概ね 15 ～ 16 世紀代の所産であろう。

（３）第４面

第３層の黄灰色細～中砂混粘土を除去した黄灰色粘土の上面を第４面とした。第４面の標高は 5.4 m 前後で、ほぼ平坦な地形となっている。

第４面では顕著な遺構は確認できず、鋤・鍬先痕、牛足跡がみられたのみである。なお、牛は N－20 ～ 25° －Ｗを軸にし、北西から南東に向けて歩行しているようである。

（４）第６面（図 37・図版 14）

当区では第５層の褐色細砂混シルト質粘土が存在しなかったため、第４層の黄灰色粘土を除去した灰白～黄灰色細砂（第６層）または明緑灰～緑灰色極細～細砂混粘土（第７層：地山）上面を第６面とした。第６層は調査区西半部にのみ存在し、調査区東半部は地山となっている。

第６面の標高は、南西隅が 5.45 m、他の三隅が 5.2 mを測り、南西から北東に向けて緩やかに下がる地形となっている。

当面は地震による揺れのためか、第４層（黄灰色粘土）の沈下と第７層（緑灰色粘土）の巻上げによってマーブル模様状の面となっており、明確な遺構が確認出来なかったが、調査区北東部分で南東にはしる落込みや弧を描くようにはしる落込みを検出した。

266 落込み（図 37）

266 落込みは調査区北東隅にある溝状の落込みである。N－73° －Ｗを軸にもち、北西－南東にはしる。落込み北側は調査区外に広がり、南側は平成 19・20 年度調査によって切られている。検出長は約２m、最大幅は１m、深さ約 0.3m を測る。落込みの肩は非常に不明瞭であり、落込みの側面や底面も不規則に凹凸がみられることから、人為的な掘削によるものではないと判断される。埋土は褐色粘土や灰白色細砂、緑灰色粘土などがブロック状になって入り交ざったように堆積している。地震などによる自然営為のものであろうか。遺物は出土していない。

266 落込みの堆積状況や遺構の形状は、４区第６面でみられた平面馬蹄形を呈する落込みに酷似していることから、その類の一部分を検出したものである可能性が高い。

（５）第７面

調査区西半部にのみ第６層である灰白～黄灰色極細砂～細砂が堆積し、南西隅では一部小規模な高まりを形成していた。この第６層を掘削した明緑灰～緑灰色極細～細砂混粘土（第７層：地山）の上面を第７面とした。既に述べたように、調査区東半部では第６面段階で第７面となる明緑灰～緑灰色極細～細砂混粘土を検出している。

第７面の標高は 5.2 ～ 5.25 mで、緩やかに北西から南東に下がる地形となっている。遺構は検出されなかった。

第７節　５－４区の調査

５－４区は、平成 19・20（2007・2008）年度調査の第９地区凸部を挟んで５－１区の東側に位置する。地下埋設物（通信ケーブル）の関係で、前回調査を実施出来なかった部分が今回の調査範囲に加わったため、平面Ｌ字状を呈する調査区となっている。調査面積は約 289 ㎡である。

（１）第０面（図 38・図版 14）

操車場盛土を機械掘削している段階で、旧耕作土（第０層：暗灰色細～中砂混シルト）上面のＹ＝－ 43,230 以東に位置する調査区東半部において、他の調査区ではみられなかった大畦畔を検出したため、第０面として調査を行なった。

第０面の標高は 5.9 ～ 6.0 mで、西から東へ向かって緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には旧東海道線関連施設、畝間溝、大畦畔がある。

旧東海道線関連施設

（507・508 溝）

調査区北辺沿いに、Ｎ－ 43°－Ｅを軸にして南西－北東にはしる２条の溝である。507 溝が北側に、508 溝が南側に位置する。

507 溝は最大幅約 2.6 m、深さ 0.45 mを測る大型の溝である。507 溝は、調査区中央から東側では調査区外に延びて行くため、検出長は約 22 mであった。

溝の断面形は扁平な逆凸字状を呈している。埋土には灰黄色粘土ブロックや灰色粘土、灰黄色シルト～中砂や礫等が堆積している。相対的に汚れた堆積層である。汽車土瓶、ガラス瓶、近代磁器、瓦、レンガ、碍子、犬釘等多岐にわたる資料が採取された。

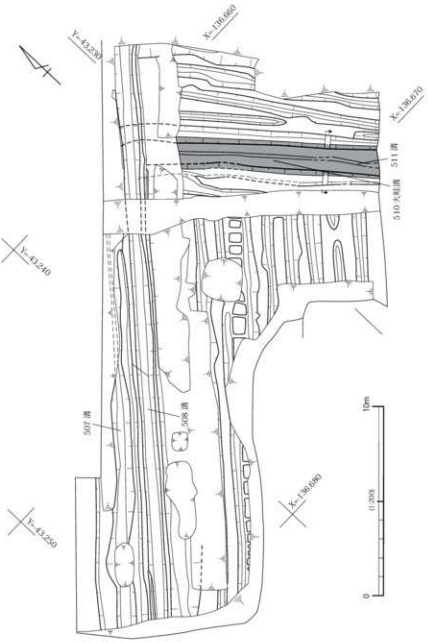
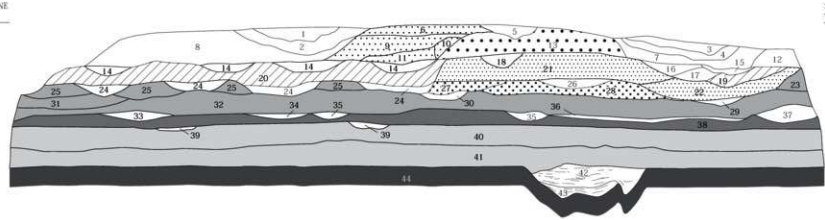


図38　５－４区　第０面　平面図



1. 明黄褐　10YR7/6　粘土［第0層　撹乱埋土］
2. 黄灰　2.5Y6/1　中砂と灰白　7.5Y7/1　粘土ブロックが混ざったもの　中砂が主体
3. 灰白　5Y7/1　極細～細砂　明黄褐　2.5Y6/6　粗砂ブロック含む
4. 灰白　7.5Y7/1　シルト～細砂　ラミナみられる［2～4：第0層　510 大蛙畔側溝埋土］
5. 灰　5Y5/1　細砂混シルト　炭化灯灰　7.5Y7/1　極細砂がラミナ上に堆積
　底面に薄く植物質がみられる［第0面　511 溝埋土］
6. 灰　7.5Y4/1　極細～細砂混シルト　φ1～3cm［第0面　510 大蛙畔盛土］
7. 灰　5Y5/1　細砂混シルト　オリーブ黄　5Y6/3　中砂ブロック
　混含む［第0層　旧耕作土］
8. 灰　N4/0　シルト質粘土ブロックと灰　5Y6/1　中～粗砂が混ざったもの
　［第0層　旧耕作土］
9. 青灰　10BG6/1　シルト質粘土ブロックと灰　5Y6/1　中～粗砂が混ざったもの
　比較的固くしまる
10. 灰　5Y4/1　シルト混細～中砂　灰オリーブ　5Y6/2　細砂ブロック含む
11. 灰　7.5Y4/1　シルト混細砂　灰黄　2.5Y7/2　極細砂・オリーブ黒　5Y3/1
　シルト質粘土ブロックを帯かに含む［9～11：第0面　510 大蛙畔盛土］
12. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混極細～細砂　灰黄　2.5Y7/2　中砂ブロック・
　灰　7.5Y5/1　シルト質粘土ブロックを含む［第0層　旧耕作土か］
13. 灰　7.5Y6/1　シルト混細砂　灰白 5Y8/1　極細～細砂ブロック・炭・
　φ1cm 前後の小礫含む［第1面　新段階　510 大蛙畔盛土］
14. 灰　5Y5/1～灰オリーブ　5Y4/2　シルト混細～中砂
　灰白　7.5Y8/1　シルト～極細砂または灰　5Y4/1　シルト質ブロック含む
　［第1面　踏溝埋土］
15. 灰 5Y5/1　シルト混細砂・灰白 5Y8/1　シルト～極細砂・炭がラミナ状に堆積
16. 灰　7.5Y5/1　細砂混シルト　灰白　7.5Y8/1　極細砂ブロック・炭をラミナ状に含む
17. 灰　10Y5/1　極細～細砂混シルト　灰白　10YR8/2　極細砂・炭をラミナ状に含む
18. 黄灰　2.5Y6/1　シルト質粘土・灰白　2.5Y8/1　細～中砂・灰　5Y6/1　細～極細砂が
　ラミナ状に堆積［第1面　古段階　510 大蛙畔下の溝埋土］
19. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混中砂　灰白　10YR8/1　極細～細砂ブロック含む［第1層］
20. 灰　5Y5/1　シルト質粘土とオリーブ黄　5Y6/3　細～中砂・
　灰白　2.5Y8/1　極細砂が混ざったもの［第1層］
21. 灰　5Y5/1　中砂混シルト質粘土　灰白　10YR8/1　極細～細砂ブロック・
　炭多く含む［第1面　古段階　510 大蛙畔盛土］
22. 灰　5Y6/1　シルト混細～中砂　灰白　5Y8/2　極細～細砂ブロック・炭含む
　［第1面　古段階　510 大蛙畔　盛土］
23. 灰　7.5Y6/1　シルト～細砂　灰白　5Y8/1　極細砂ブロック・
　灰　5Y6/1　シルト質粘土ブロック含む
24. 灰オリーブ　5Y5/2　極細～細砂混シルト
　灰白　2.5Y7/1　極細砂ブロック・炭含む［第2面　踏溝埋土］
25. 灰　5Y6/1　シルト混　細～中砂　灰白　5Y8/1　シルトブロック含む［第2層］
26. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混シルト質粘土　灰白　2.5Y8/2　シルト～極細砂ラミナに含む
　［第2面　521 溝埋土］
27. 灰　7.5Y6/1　シルト混細～中砂　灰白 5Y8/1　極細砂ブロック含む
28. 灰　7.5Y6/1　シルト混細～中　灰白 5Y8/1　極細砂ブロック・
　浅黄　5Y8/3　中砂ブロック　混含む［27・28：第2面　518 畦畔盛土］
29. 灰白　5Y7/1　極細～細砂混シルト　やや粘性あり［第2面　520 溝埋土］
30. 黄灰　2.5Y5/1　中砂混シルト質粘土［第2面　519 溝埋土］
31. 灰　7.5Y7/1　細～中砂混シルト　灰白　5Y8/1　極細砂ブロック・炭含む［第2層］
32. 灰　10Y6/1　シルト混細～中砂　灰白　5Y8/1　シルト～極細砂ブロック・炭含む
　西側部分に黒炭が斑状にみられる［第2層］
33. 灰　7.5Y5/1　細砂混シルト　灰白　7.5Y7/1　極細砂ブロック含む
34. 灰　7.5Y6/1　細砂混シルト　灰白　7.5Y7/1　極細砂ブロック含む
35. 黄灰　2.5Y6/1　極細砂混シルト　灰白　7.5Y7/1　極細砂ブロック含む
　［33～35：第3面　溝埋土］
36. 灰　7.5Y6/1　極細砂混シルト質粘土［第3面　527 溝埋土］
37. 灰　5Y6/1　細砂混シルト　灰白　2.5Y8/1　シルト～極細砂をラミナ状に含む
　下部はシルト質粘土化している［第3面　528 溝埋土］
38. 灰黄　2.5Y7/2　細～中砂混シルト質粘土　炭含む
　斑状が顕著にみられる［第3層］
39. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混シルト質粘土［第4面　溝埋土］
40. 灰　N6/0　シルト質粘土　僅かに極細～細砂含む
　斑状が顕著にみられる［第4層］
41. 褐灰　10YR5/1　シルト質粘土　にぶい黄橙　10YR7/2　粘土ブロック・
　炭を僅かに含む［第4層］
42. 明黄褐　10YR7/6　中～粗砂　褐灰　10YR6/1
　シルト～極細砂・灰白　10YR8/1　細砂（上方細粒化）
43. 褐灰　10YR5/1　シルト質粘土と灰白　10YR7/1　シルト～極細砂のラミナ状堆積
　［42・43：第5面　528 溝埋土］
44. 黒　2.5Y2/1　シルト～粘土　黄灰　2.5Y6/1～5/1　シルトブロック・
　黄褐　2.5Y5/4～5/6　シルトブロック含む［第5層］

図39　5－4区　510 大蛙畔他断面図

508 溝は 507 溝の南側 0.3m に位置し、平行してはしる。幅約 1 m、深さ約 0.4m を測る。溝の北側肩は調査区東側で撹乱に切られるものの、検出長は約 30 mである。

溝の断面形は逆台形を呈している。埋土にはオリーブ黄色中～粗砂や青灰色シルト、灰色シルト～粘土等が堆積している。炭や植物質を多く含み、507 溝同様やや汚れた堆積層である。汽車土瓶やガラス瓶、近代磁器等多岐にわたる資料を採取した。

両溝は、当区よりも西側に位置する調査区でも確認した旧東海道線関連の施設である。507 溝は、当区において溝として掘削したが、1 区でみられた礫とシルトを版築状に非常に硬く締め固めた道路状整地部として認識した構造物の下層にあたる可能性が高い。508 溝は、西側に位置する調査区で確認した旧東海道線軌道の南側溝にあたるものである。西側の調査区では幅約 1.5 ～ 2 mの溝として検出した。

なお、508 溝の南側 0.3m の位置でも幅約 1.3 m、深さ約 0.5 mを測る溝を確認している。この溝は操車場盛土敷設時の大幅な改変を受けており、調査区西端部で僅かに 6 mほどしか検出出来なかった。溝の断面形は逆台形で、埋土は明オリーブ色粘土や灰色シルト～粘土などである。溝内には多くのガラス瓶、近代磁器等がみられた。

510 大畦畔・511 溝（図 39・図版 14）

調査区東半部の Y＝－ 43,230 ライン東側で、N－42°－W に軸をもち、上端幅約 1.2m・下端幅約 1.7 m、高さ約 0.2 mを測る 510 大畦畔を検出した。大畦畔北側は 508 溝に切られるが、調査区外にも延びて行くものと思われる。南側も同様に調査区へと延びる。検出長は約 10.5 mであった。大畦畔は東西両側に幅 0.6 ～ 0.9 m・深さ約 0.1 mの側溝をもち、畦畔上面中央には幅 0.2 m・深さ約 0.15 mの 511 溝がはしる。

大畦畔盛土は灰色極細～細砂混シルトやシルト混細砂で、非常に硬く締まっている。なお、当面で検出した大畦畔は、第 1 面に築かれたものを利用して盛土を重ね、東側に拡張するように構築されている。

この地域には N－33°－W を軸とする嶋下郡南部条里が施行されていたと推定されている。大畦畔はやや西に振るものの、概ねその条里方向に則っている。古代以降、この条里が近代まで踏襲されていたものと推定される。

大畦畔盛土からは近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器椀、関西系陶器鍋、備前壷、堺擂鉢）、土師質土器、平瓦等が、東西両側溝からは近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器皿、丹波瓶）、土師質鍋等が出土している。

畝間溝・畝

操車場盛土や地下埋設物によって改変を受けているものの、調査区全域で畝間溝・畝を検出した。

畝間溝は幅 0.6 ～ 0.9 m・深さ約 0.15 ～ 0.2 mを測り、畝は幅 0.3 ～ 0.5 m・高さ約 0.3m である。溝や畝は操車場の盛土である黄色系シルト～粘土に覆われているために検出は容易であった。

畝間溝・畝は、先述した 510 大畦畔よりも西側では畦畔に直交するように N－43°－E を軸に展開し、東側では畦畔に平行するように N－34°－W を軸に展開している。この状況は東側に位置する 5－3 区でも同様であった。

大畦畔・畝間溝・畝は大正期～昭和初期に造成された操車場の盛土に覆われ、かつ、明治 7（1874）年に大阪・神戸間で営業を開始した旧東海道線に関連する溝に切られるものがあることから、近世末から明治期に営まれた耕作地であると推察される。

（2）第1面（図40・図版15）

第0層の旧耕作土である灰色中～粗砂やシルト混極細～細砂を除去した面を第1面とした。第1面は、旧東海道線関連施設によって調査区北側で撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第1面は標高5.7m前後でほぼ平坦な地形となる。検出した遺構には大畦畔・鋤溝群・土坑がある。

510大畦畔（図39・図版15）

調査区東半部のY＝－43,230ライン東側で、N－42°－Wに軸をもち、上端幅約0.7m・下端幅約1.3 m、高さ約0.2～0.3 mを測る510大畦畔を検出した。大畦畔北側は508溝に切られるが調査区外にも延びて行くものと思われる。南側も調査区へと延びる。検出長は約10.5 mである。当面の大畦畔は、改築が行なわれており、第0面の大畦畔を築く直前に0.15 mほど盛土を施し、高さを増している。

図40　5－4区　第1面　平面図

大畦畔の東西両側には、幅0.3～0.5 m・深さ0.05～0.1 mの側溝（513・514溝）をもつ。

大畦畔盛土からは近世陶磁器（肥前染付碗・皿、肥前陶器椀・皿、丹波甕）、土師質土器、瓦器椀、瓦質土器、須恵器、土人形等が、東西両側溝からは近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器椀、瀬戸・美濃鉢）、土師質土器等が出土している。

鋤溝群

第1面では調査区ほぼ全域で鋤溝群を検出した。鋤溝は幅約0.1 mのものが主体となっている。

鋤溝の大半は、大畦畔とほぼ平行するようにN－33～35°－Wを主軸としていた。大畦畔よりも西側では、N－

33～35°－Wを指向する鋤溝群を切るように、N－43～45°－Eを指向する一群がみられた。これらは、第0面でこの方位を指向する畝を検出していることから、これに伴う第0面下面遺構と想定される。

出土遺物には、近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器椀、備前甕）、土師質土器、瓦器椀、東播系捏鉢等がみられる。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね17世紀後半～19世紀代の所産と考えられる。

512土坑

調査区の東端中央部で検出したN－37°－Wに軸をとる平面瓢型を呈する土坑である。土坑東側は5－3区に延びており、5－3区第1面南西隅で検出した446土坑に繋がるものである。

当区における検出長は南北1.6m、東西幅約1m、深さは約1.55mを測る。土坑は二段掘りになっており、北側部分が一段深くなる構造である。埋土は灰色シルト混細砂、灰白細砂、緑灰色粘土（第7層）ブロック等が堆積していた。水溜状施設であろう。

出土遺物は極めて少なく、瓦器椀、備前甕が出土したのみである。遺物だけをみれば中世段階の所産とみえるが、遺構の性格を考慮すると周囲に展開する鋤溝群の時期と大差ない時期に使用されたものと想定される。

（3）第2面

（図41・図版15）

第1層のオリーブ黄色細～中砂を除去した灰色シルト混細～中砂上面を第2面とした。第2面は、旧東海道線関連施設によって調査区北側で撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第2面は標高5.6m前後で

図41　5－4区　第2面　平面図

ほぼ平坦な地形となる。検出した遺構には土坑群・溝群・鋤溝群がある。

土坑群（図 42・図版 15・16）

調査区北東部の X＝－ 136,660・Y＝－ 43,230 付近において、検出時に平面隅丸長方形或いは小判型を呈し、集中して掘削されている土坑を 5 基（516・517A・517B・523・524 土坑）検出した。いずれの土坑も上部を旧東海道線関連施設に削平されており、本来の形状は判然としない。土坑群の南西側には、上位面で大畦畔が構築されていた場所に幅広の溝群が広がっている。

土坑の規模は概ね長軸 1.3 ～ 1.5 m、短軸 0.9 ～ 1.1 m、深さ 0.2 ～ 0.3（本来は 0.5 以上か）m を測る。断面形は椀状を呈している。埋土は灰色粘土ブロックと灰または褐色系細～中砂が混ざったもので、一気に埋め戻されたようである。多くのものが重複して掘削されていた。出土遺物には細片となった瓦器椀、土師質皿、備前甕がごく僅かにみられたのみで、時期を決し難い。

このような土坑群は、約 40 m東に位置する平成 19・20 年（2007・2008）度調査の第 8 地区第 3 面でも検出している。第 8 地区第 3 面の土坑群は大畦畔の側に集中して、また幾つかは重複して掘削されており、断面形状・埋土の状況・掘削状況が酷似している。当面では明瞭な畦畔はみられないものの、幅広の溝が近傍に存在することから、同様な意図をもって掘削されたものと考えられる。

溝群

調査区東半部において、上位面で大畦畔が築かれていた位置に、N－35°－W を軸に北西－南東にはしる幅広の溝（519 ～ 521 溝）3 条がある。溝群の北側は旧東海道線関連施設に切られているものの、調査区外に延びるものと推定され、南側も調査区外へと延びている。

溝の幅は概ね 0.4 ～ 0.5 mで検出長は約 12 mである。溝は非常に浅く、深さは 0.05 m前後である。

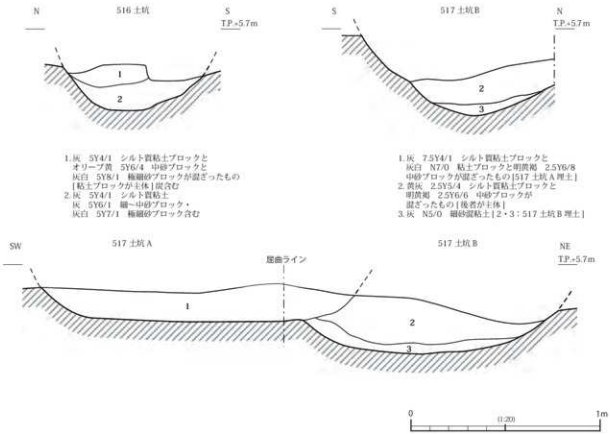


図 42　5－4 区　第 2 面　516・517 土坑断面図

いずれも断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は黄灰色細砂混シルト質粘土であった。

521 溝は上端幅約 0.6m、下端幅約 1 m、高さ 0.15 m前後の畦畔状の高まりの中央部を流れ、519・520 溝はその高まりの両側をはしる。519 溝は高まりを拡張したためか、520 溝よりも早くに埋まっていたようである。先にも述べたように、上位面で大畦畔が構築されている場所に掘削されているこれらの溝は、条里に関連する遺構と推察される。

出土遺物には瓦器椀、土師質皿、土師質甕、丹波甕、青磁碗等がある。いずれも細片となっており、時期を決し難い。

図43　5－4区　第3面　平面図・第3面　525～527 溝・528 畦畔断面図

鋤溝群

第２面では調査区ほぼ全域で鋤溝群を検出した。鋤溝は幅約 0.1 mのものが主体となっている。

鋤溝の大半は、溝群とほぼ平行するように N－33～35°－Wを主軸としていた。一部、調査区東半部で、N－55～60°－Eを主軸にとる一群がみられた。溝群よりも西側は比較的整然とした鋤溝を検出したが、東側では複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。

出土遺物には、瓦器椀、瓦質土器、土師質皿・甕、備前擂鉢・甕、青磁碗、白磁碗、須恵器、砥石等がある。細片になったものが多く、時期を決し難いが 16～17 世紀の所産であろうか。

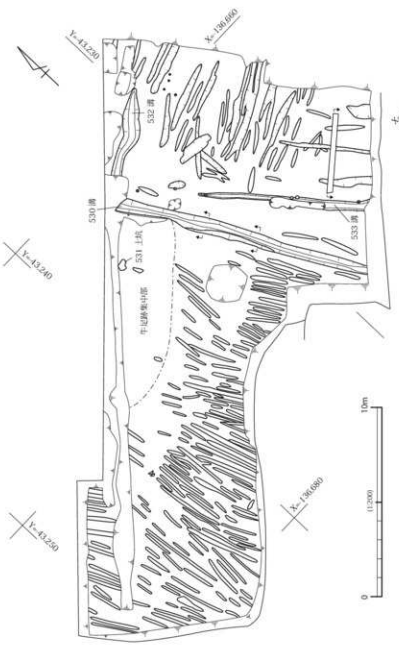


図 44　５－４区　第４面　平面図

（４）第３面

（図 43・図版 16）

第２層の灰色シルト混細～中砂を除去した灰黄色細～中砂混シルト質粘土の上面を第３面とした。第３面の標高は 5.4～5.5m で東から西に向けて緩やかに下がる地形である。検出した遺構には鋤溝群・溝群がある。当面でも上位面と同様な遺構配置となっているが、各遺構の主軸方位に僅かに差異が認められる。

溝群

第２面で３条の溝に姿を変えた条里関連遺構は当面においても、上位面とほぼ同位置に、N－40°－Wを軸に北西－南東にはしる幅広の溝（525～527 溝）３条が展開していた。溝群の北側は旧東海道線関連施設に切られているものの、調査区外に延びるものと推定され、南側も調査区外へと延びている。

525 溝は幅 0.5～0.9 m、526 溝は幅約 0.3 m、527 溝は幅 0.8～1.3 mを測る。いずれも検出長は約 12 mであ

る。溝は非常に浅く、深さは0.05 m前後である。いずれも断面形は浅い皿状を呈しており、埋土は炭を含んだ灰色極細～細砂混シルトであり、ラミナ構造が確認出来た。水路的な性格を想定出来る。

出土遺物には、瓦器椀、瓦質土器、土師質土器（皿・甕）、備前擂鉢・甕、東播系捏鉢、須恵器等がある。いずれも細片になっているため、時期を決し難いが、概ね14～15世紀代の所産であろうか。

鋤溝群

第3面では調査区ほぼ全域で鋤溝群を検出した。鋤溝は条里関連遺構（溝群）よりも西側では主軸方位をN－37～40°－Wに、条里関連遺構東側ではN－70°－Eを軸にもつ一群となっている。

ただし、調査区西半部のX＝－136,666～670・Y＝－43,230～240付近では、東側に展開する一群と同様な方位を、調査区東半部のX＝－136,665～669・Y＝－43,221～225付近では西側に展開する一群と同方位を指向しており、一部に乱れがみられる。

調査区西半部の鋤溝は幅約0.1 mのものを主体として検出したが、東側では複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。

出土遺物には、瓦器椀、瓦質土器（羽釜・鍋・甕）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、青白磁香合蓋、須恵器等がある。細片になったものが多く、時期を決し難いが14～15世紀の所産であろうか。

（5）第4面（図44・図版16・17）

第3層の灰黄色細～中砂混シルト質粘土を除去した灰色シルト質粘土の上面を第4面とした。第4面の標高は5.3～5.4mで東から西に向けて緩やかに下がる地形である。検出した遺構には鋤溝群・溝がある。

530溝（図45・図版17）

調査区の中央やや東寄りの位置で検出した幅0.6～0.8m、深さ0.2～0.25 mを測る溝である。N－25°－Wに軸をもち、北西－南東に向けてはしる。

溝北側は旧東海道線関連施設に切られ判然としないが、調査区外へと延びる可能性が高い。溝南側は調査区外へと延びる。検出長は約14 mである。溝埋土は、流水堆積である灰～褐色系シルト～粗砂がみられた。両側に広がる耕地に水を供給する水路的な機能が想定される。

出土した遺物には、瓦器椀、土師質土器（皿・甕）、須恵器、鉄製品（鋳造品なので鍋か）がある。

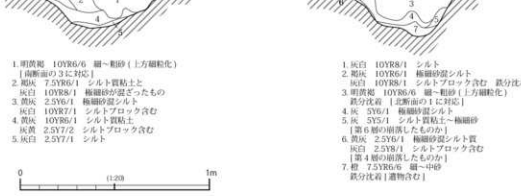


図45　5－4区　第4面　530溝断面図

土師質皿は、溝埋土最下層からの出土で 12 世紀中頃～後半の所産である（図 90 － 76 ～ 78）。

533 溝

上位面の溝群が掘削されたほぼ同位置に築かれた溝である。N－39°－W を軸にもち、北西－南東に向けてはしる。幅約 0.5 m、深さ約 0.05 m を測る。溝北端は調査区内に収まり、南側は調査区外へと延びる。検出長は約 9 m である。溝断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰白～黄灰色シルト～極細砂である。

出土遺物には瓦器椀、土師質皿、黒色ガラス質滓がある。細片のため時期を決し難い。

両溝を挟んで東西両側で鋤溝の指向方位が変わることから類推すれば、これら溝が上位面で確認した条里関連遺構に類する性格を帯びたものと思われる。

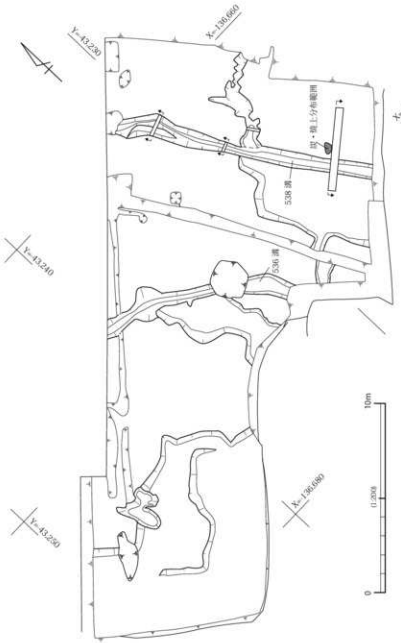


図 46　5－4 区　第 5 面　平面図

鋤溝群

鋤溝は上位面に比して不明瞭になり検出数は減じるものの、調査区ほぼ全域で確認された。

530 溝以西は N－20 ～ 35°－W を軸にする一群が、溝以東では N－55 ～ 60°－E を軸にする一群が展開している。なお、調査区中央北側の X＝－ 136,663 ～ 670・Y＝－ 43,233 ～ 240 付近では鋤溝は判然としなかったが、牛足跡や鋤先痕が集中してみられた。

出土遺物には、瓦器椀、瓦質羽釜、土師質土器（皿・甕・羽釜）、須恵器がある。細片のため時期を決し難いが 13 ～ 14 世紀の所産であろうか。

（6）第 5 面

（図 46・図版 17・18）

第 4 層の灰色シルト質粘土を除去した面を第 5 面とした。第 5 面は、調査区中央部・北東部で黒色シルト～粘土（第 5 層）が、調査区南東部で黄灰色シルト～極細砂（第 6 層）が、調査区西端部で緑灰色粘土（第 7 層：地山）が広がる。

第５面の標高は 5.2 ～ 5.3m で東から西に向けて緩やかに下がる地形である。

第５面は地震による揺れのためか、第４層（灰色シルト質粘土）の沈下と第５層（黒色シルト～粘土）または第７層（緑灰色粘土）の巻上げによってマーブル模様状の面となっており、明確な遺構を確認し辛かった。検出した遺構には、溝と不定形な落込みがある。

536 溝

調査区中央で検出した幅 0.7 ～ 1.7 m、深さ約 0.1 mを測る溝である。この溝は上位面の溝や次に述べる 538 溝とは異なり直線的に走る溝ではなく、緩やかに弧を描いて北西から南東にはしる。溝埋土も流水堆積を示した溝とは異なり、褐色シルト質粘土である。これは後に第７面で述べる谷状地形の最終埋没の地形をトレースした自然の溝であろう。出土遺物は僅かに土師質皿がみられたのみである。

538 溝（図 47・図版 18）

調査区東端で検出した、N－33°－Wを軸に北西－南東に向けてはしる溝である。幅 0.5 ～ 1.2 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mを測る。溝の南北両側は、いずれも調査区外へと延び、検出長は約 13.5 mである。

溝埋土は、流水堆積である灰～褐色系シルト～粗砂がみられた。水路的な機能が想定され、条里関連遺構の初源的なものである可能性が高い。なお、溝東側の X＝－ 136,668・Y＝－ 43,225 付近では、平面長楕円形（長軸で 0.6m）を呈する炭と焼土の溜りを検出した。明瞭な掘り込みや被熱痕跡は認められなかった。

出土遺物には土師質甕、須恵器がみられたが、細片のため時期を決し難い。

（７）第６面（図 48・図版 18・19）

第５層の黒色シルト～粘土を除去した面を第６面とした。第６面は、Y＝－ 43,245 ライン以西の調査区西端部で緑灰色粘土（第７層：地山）が広がるほかは、Y＝－ 43,245 ライン以東で黒灰・黄灰・灰褐色シルト～極粗砂（第６層）が展開している。第６面の標高は 5.1 ～ 5.3m で、X＝－ 136,672 ～ 675・Y＝－ 43,238 ～ 249 付近及び、X＝－ 136,6685 ～ 669・Y＝－ 43,2385 ～ 242 付近に高まりがみられ、その高まりから東西両側に向けて緩やかに下がる地形である。中でも調査区中央南側が一番低くなっており、下位に存在する谷状地形をトレースしたものと想定される。検出した遺構には溝、土坑、落込みがある。

図 47　５－４区　第５面　538 溝断面図

539 土坑（図 49・図版 19）

X＝－ 136,675・Y＝－ 43,2395 から X＝－ 136,6715・Y＝－ 43,247 に向けて弧を描くように延びる高まり上に位置する、平面隅丸長方形を呈する土坑である。N－63°－W を軸にもち、長軸約 1.2 m、短軸約 0.6m、深さ約 0.25 m を測る。土坑の西肩は緩やかに二段に掘り込まれているが、他の肩は比較的急な角度で掘削されている。埋土は 2 枚に分かれ、下層に薄く黄灰色シルト質粘土が堆積し、上層は黒～黒褐色シルト（第 5 層）ブロック・黄橙色中砂（第 6 層）ブロック・黄褐色粘土（第 7 層）ブロックが混ざって堆積していた。ブロック土で充填されていることを勘案すれば、掘削された後一気に埋め戻された可能性が高い。土坑の検出当初、規模や形態、埋土の状況から土坑墓の可能性を考えたが、木棺痕跡や副葬品等を確認することが出来なかったので、性格は不明と言わざるを得ない。

なお、539 土坑は第 6 面で検出したが、埋土に第 5 層ブロックが認められることから、本来は第 5 層が堆積した後の第 5 面段階で掘削されたものであり、上位面に帰属すべき遺構であろう。

540 土坑（図 49・図版 18）

調査区東半部に位置する平面不整方形を呈する土坑である。N－32°－E を軸にもち、長軸約 0.8m、短軸約 0.7m、深さ約 0.15 m を測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐色シルト質粘土である。性格は不明である。

541 土坑

調査区北西隅に位置する土坑である。北側は側溝に切られており、検出段階では溝状の落込みを 2 条確認した。検出長は約 1 m、最大幅約 0.4m、深さ約 0.05 m を測る。落込みの肩は非常に不明瞭であり、落込みの側面や底面も不規則に凹凸がみられることから、人為的な掘削によるも

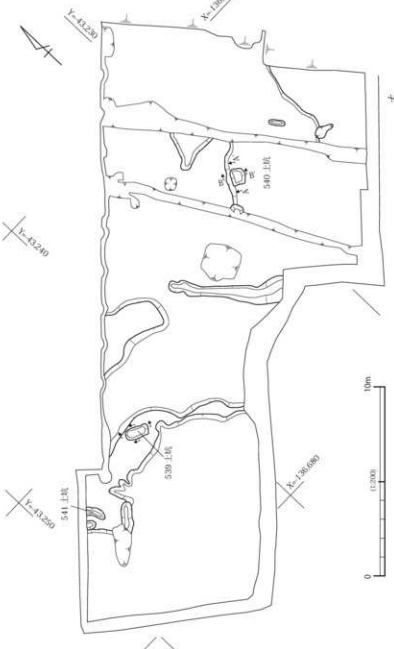


図 48　5－4 区　第 6 面　平面図

のではないと判断される。埋土は褐色粘土や灰白色細砂、緑灰色粘土などがブロック状になって入り交ざったように堆積している。地震などによる自然営為のものであろうか。遺物は出土していない。

541 土坑の堆積状況や遺構の形状は、4区第6面でみられた平面馬蹄形を呈する落込みに酷似していることから、その類の一部分を検出したものである可能性が高い。

（8）第7面（図 50 ～ 51・図版 20）

第6面の調査終了後、調査区中央～東側にみられた第6層の黒灰・灰白～淡黄褐色系シルト～粗砂を掘削し、第7（最終）面として谷状地形（542 谷）を確認した。542 谷は調査区西半部では西から東に向かって緩やかに下降し、調査区中央 Y ＝－ 43,235 ライン付近で急激に落ち込んでいる。また、調査区東半部では東から西に向かって緩やかに下降し、Y ＝－ 43,227 ライン付近で急激に落ち込む。

542 谷は、次節で述べる 5 － 3 区第7面で検出した谷状地形（489 谷）に繋がるもので、その部分を含めた規模は、東西幅約 35 mである。西側肩と最深部との比高差は約 1.6 mを測る。谷は北西－南東に向けて蛇行しながらはしる。幾度にもわたる強い水流があったようで、谷底や肩部はかなり抉られ、凹凸が著しいものであった。なお、当区西側で行なわれた平成 19・20（2007・2008）年度調査の第9地区第5面において、北－南にはしる 16 流路を検出したが、これに繋がる可能性がある。

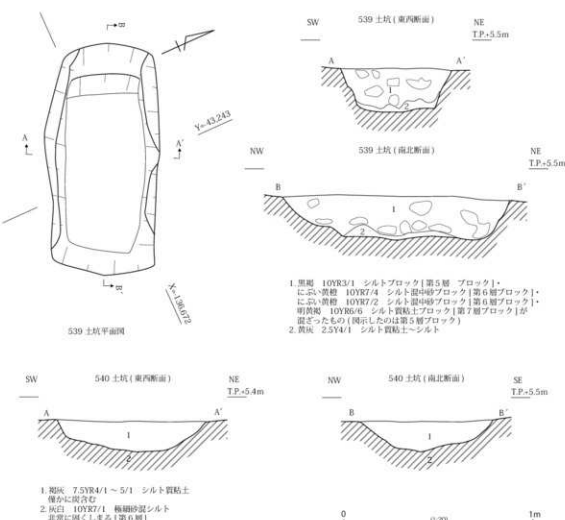


図 49　5 － 4 区　第 6 面　539・540 土坑平・断面図

谷は東西両側から徐々に黒灰・灰白～淡黄褐色系シルト～粗砂の氾濫性堆積物によって埋没し、最終的に調査区中央を流れる自然流路へと姿を変える。この流路も一時の形成ではなく、数次にわたって同位置を流れているようである。

この谷を埋める氾濫性堆積物から土器や石器等の遺物が出土しなかったため、最終段階で形成された自然流路内から出土した流木（コナラ亜属）２点を対象にしてAMS法による放射性炭素年代測定を実施した。詳細は第４章に譲るが、流路最下層（図51－37）から出土したものは約11000年前の縄紋時代早期前葉～中葉、流路中層（図51－17）から出土したものは約4900年前の縄紋時代中期末～後期初頭を示すデータを得た。

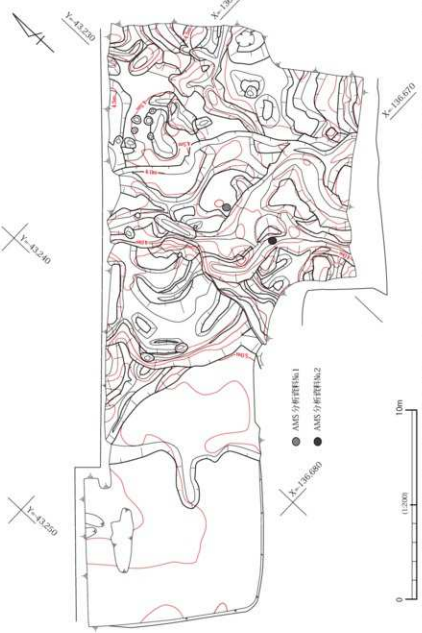


図50　５－４区　第７面　平面図

第８節
５－３区の調査

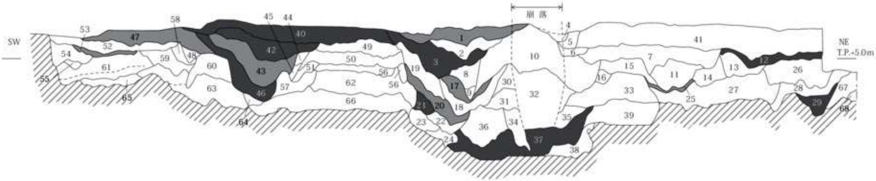
５－３区は５－４区の東側に位置する。調査面積は約228㎡である。調査区南側は平成19・20年度調査の第８地区西半部となっている。

（１）第１面（図52）

第０層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第１面とした。第１面は調査区北側で旧東海道線関連施設により撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で、ほぼ調査区全域で確認出来た。第１面の標高は5.7～5.8mで北東から南西に向けて緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には鋤溝群・井戸・土坑・落込みがある。

鋤溝群

調査区ほぼ全域で鋤溝を検出した。幅約0.1～0.2ｍのものが主体となっている。鋤溝は、撹乱を挟んで調査区南側に位置するものがＮ－30°－Ｗを、北側に位置するもの



1. 黄灰　2.5Y5/1　シルト質粘土(弱い土壌層)
2. 黄褐　10YR5/6　シルト(Fe 沈着)
3. 黄灰　2.5Y5/1　シルトと灰白 2.5Y7/1　極細砂が混ざったもの　主体はシルト(土壌層)
4. 浅黄　2.5Y7/3　細～中砂(上方細粒化)
5. 黄灰　2.5Y5/1 シルト～灰白　10Y7/1　極細砂(上方細粒化)
6. 灰黄　2.5Y7/2　極細～細砂
7. 灰白　2.5Y8/2　極細砂と明黄褐　10YR6/6　シルト質粘土ブロックが混ざったもの
8. 黄灰　2.5Y5/1　シルト(土壌層)～灰黄　2.5Y6/2　粗砂(上方細粒化)
9. 黄灰　2.5Y5/1　シルト(土壌層)～褐灰　10YR5/1　粗砂(上方粗粒化)
10. 黄灰　2.5Y6/1　シルトと明オリーブ灰　2.5YGY　シルト～極細砂が混ざったもの
11. にぶい黄橙　10YR7/2・明褐　7.5Y5/6　細～中砂(Fe 沈着)
12. 黄灰　2.5Y5/1　シルト～極細砂(土壌層・上方細粒化)
13. 灰黄　2.5Y7/2　細～中砂　灰白　2.5Y7/1　極細砂　明黄褐　10YR6/6　粗砂(上方細粒化)
14. 灰黄　2.5Y7/2　極細～細砂
15. 明黄褐　10YR6/6　シルト質粘土(Fe 沈着)
16. 灰黄　2.5Y7/2　シルト～極細砂
17. 黄灰　2.5Y6/1　細～中砂(弱い土壌層)
＊AMS 分析用資料No.1　出土層位
18. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～灰白　2.5Y7/1　粗砂(上方細粒化)
19. 灰黄　2.5Y6/2　細～中砂(上方細粒化)
20. 黄灰　2.5Y6/1　シルト～褐灰　10YR6/1　粗砂(弱い土壌層・上方細粒化)
21. 褐灰　10YR4/1　シルトと黄灰　2.5Y6/1　極細砂の互層　植物質含む(土壌層)
22. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～灰黄　2.5Y6/2　粗砂　植物質含む(上方粗粒化)
23. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～灰黄　2.5Y6/2　粗砂(左側方細粒化)
24. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～黄灰　2.5Y6/1　粗砂(上方粗粒化)
25. 褐灰　10YR5/1　シルト～極細砂(弱い土壌層)
26. 明褐　7.5YR5/8　粗砂(Fe 沈着)～灰黄　2.5Y7/2　極細砂(上方細粒化)
27. 褐灰　10YR6/1　極粗砂～灰白　10YR7/1　極細砂(上方細粒化)
28. にぶい黄　2.5Y6/3　極粗砂～灰白　10YR7/1　極細砂(上方細粒化)
29. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～黄灰　2.5Y6/1(土壌層・上方細粒化)
30. 灰　10YR6/1　細～中砂
31. 明オリーブ灰　2.5GY7/1　極細～細砂～灰黄　2.5Y6/2　粗砂(上方細粒化)
32. 灰白　2.5Y7/1　極細～粗砂(上方細粒化)
33. 灰白　5Y6/1　シルト～中砂(右側細粒化)
34. 灰黄褐　10YR6/2　細～粗砂・灰　5Y7/1～灰黄　2.5Y7/2　極細砂・灰　5Y4/1　シルト(上方粗粒化)
35. 浅黄　2.5Y7/4　粗砂～灰白　5Y7/1　極細砂(上方細粒化)
36. 灰　5Y6/1　シルト・灰　N6/0　極細～中砂・灰オリーブ　5Y6/2　中～粗砂(上方細粒化)
37. 褐灰　10YR4/1　シルト～中　植物質含む(土壌層・上方細粒化)
＊AMS 分析用資料No.2　出土層位か
38. 灰　5Y6/1～5/1　シルト～粗砂　炭化物含む(上方細粒化)
39. 灰　5Y6/1　粗～極細砂　下部はグライ化し、緑灰　5G6/1 を呈する(上方細粒化)
40. オリーブ黒　5Y3/1　シルト～灰　5/1 シルト　灰白　5Y8/1　極細砂ブロックを斑点状に含む　斑鉄が顕著にみられる(土壌層)
41. 灰白　2.5Y7/1～灰黄　2.5Y7/2　シルト～極細砂　下部は Fe ぬ影響で明黄褐　10YR6/6 を呈する
42. 褐灰　10YR4/1　シルト　灰白　5Y8/1　極細砂ブロックを斑点状に含む　斑鉄が顕著にみられる　非常に固くしまる(土壌層)
43. 灰　5Y4/1　シルト質粘土　灰白　7.5Y7/1　極細砂ブロッを斑鉄状に含み、明緑灰　7.5GY7/1　シルト質ブロック(第 7 層のブロック)を僅かに含む(弱い土壌層)
44. にぶい黄褐　10YR5/4　シルト質粘土
45. 灰白　10YR7/1　シルト混細砂～中砂(上方細粒化)
46. 黄灰　2.5Y4/1　シルト～中砂　固くしまる。(土壌層・上方細粒化)
47. 褐灰　10YR6/1　シルト　灰白　10YR7/1　極細砂ブロックを斑点状に含む　斑鉄が顕著にみられる　固くしまる(弱い土壌層)
48. 灰白　5Y7/1　極細砂
49. 灰白　2.5Y7/1　極細砂と黄灰　2.5Y6/1　シルト～極細砂が混ざったもの
50. 灰白　2.5Y8/1　極細～細砂と黄褐　10YR5/6　シルト質粘土ブロック(Fe 沈着)が混ざったもの
51. オリーブ黄　5Y6/3　シルト～極細砂　灰白　5Y8/1　極細砂ブロック含む(上方細粒化)
52. にぶい黄　2.5Y6/4　極細～細砂混シルト　黄灰　2.5Y5/1　シルトブロック含む　斑鉄がみられる　比較的しまりがよい
53. 黄灰　2.5Y6/1　極細砂～灰白　7.5Y7/2　シルト(弱い土壌層・左側方細粒化)
54. 灰　7.5Y5/1・灰　10Y6/1　シルト～にぶい黄　2.5Y6/3　中砂　にぶい黄橙　10YR6/4　シルト質粘土ブロック含む(左側方細粒化)
55. 灰　N7/0　粘土～中砂(上方細粒化)
56. 浅黄　2.5Y7/3　シルト～極細砂
57. にぶい黄褐　10YR5/3　細～粗砂(上方粗粒化)
58. 灰白　5Y7/2　極細砂～オリーブ灰　5GY6/1　細砂(上方細粒化)
59. 浅黄　2.5Y7/3　粗砂～灰白　2.5Y8/2　極細粒砂(上方細粒化)
60. 灰　10Y6/1　シルト混極細～細砂　緑灰　7.5GY6/1　極細砂～シルトブロック含む
61. 灰　7.5Y6/1　極細～粗砂　点線以下は Fe 沈着(上方細粒化)
62. 灰黄　2.5Y7/2　シルト～極細砂
63. 緑灰　5G5/1・橙　7.5YR6/8・緑灰　10G6/1　粗砂～極細砂　点線より上は Fe 沈着(上方細粒化)
64. 灰　5Y6/1　細～粗砂・黄灰　2.5Y5/1 シルト・明オリーブ灰　2.5GY7/1　シルト～極細砂が混ざったもの
65. 灰　5Y6/1　細～粗砂(上方細粒化)
66. 緑灰　7.5GY5/1　シルト～粗砂(上方細粒化)
67. オリーブ灰　10Y5/1　粗砂～灰　7.5Y6/1　シルト(上方細粒化)
68. 明緑灰　7.5GY7/1　粘土ブロック(第 7 層のブロック)と灰　5Y6/1　中～粗砂が混ざったもの
地山　明緑灰　10GY7/1　しまった極細砂～明緑灰　5G7/1　粘土または緑灰　10G6/1　シルト質粘土

弱い土壌層

土壌層

3m　(1:100)　0
1m　(1:40)

図51　5－4区　第7面　542 谷北壁断面図

がN－60°－Eを指向していた。

出土遺物には、近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器皿、関西系陶器鍋、備前擂）、土師質土器、瓦器椀、瓦質土器、東播系捏鉢等がみられる。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね17世紀後半以降の所産と考えられる。

453井戸

調査区南東隅で検出した井戸である。井戸は直径2.25mの掘り方をもち、掘り方中心よりもやや西側に直径0.75mの井戸枠を据えている。井戸枠は幅0.12～0.13m、長さ約1mの板材を桶状に組んでおり、上下2箇所で箍により固定されている。検出面から2mは人力で掘削したが、それ以下は危険と判断されたため、調査完了後に重機を用いて断ち割りを行なった。最終的に検出面から－5mで湧水層に達し、井戸枠は5段（最下段は上段のものより小型であった）を確認した。掘り方は緑灰・黄褐色粘土（第7層ブロック）で埋め戻され、枠内は黄色～黄褐色粘土ブロックやシルト～粗砂で埋められていた。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付、関西系陶器鍋、備前擂鉢）、土師質皿、須恵器、平瓦等がある。

446土坑

調査区南西隅で検出した土坑である。これは5－4区第1面で検出した512土坑に繋がるものである。

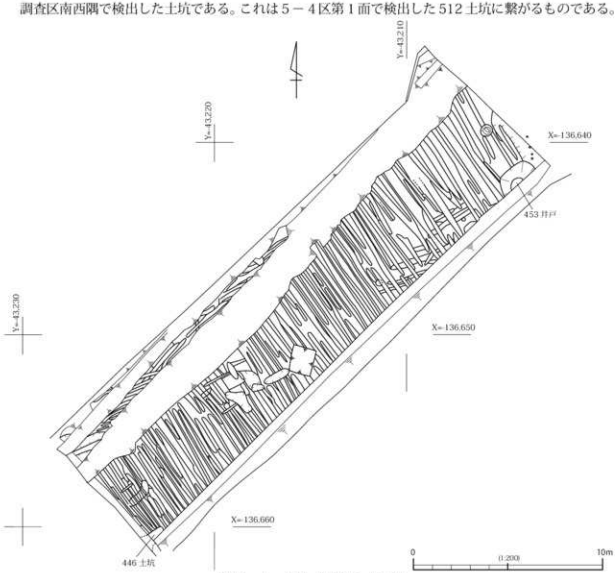


図52　5－3区　第1面　平面図

当区では平面長方形を呈する土坑として検出し、東西長約 1.2 m、南北幅約 1 m、深さ約 0.7m を確認した。５－４区検出部分を含めて考えると、土坑の平面形は「L」字状を呈するものとなる。埋土には灰色シルト混細砂、灰白細砂、緑灰色粘土（第７層）ブロック等が堆積していた。水溜状施設であろう。

出土遺物には土師質土器（皿・甕・羽釜）、瓦質羽釜、東播系捏鉢、須恵器がある。遺物だけをみれば中世段階の所産とみえるが、遺構の性格を考慮すると周囲に展開する鋤溝群の時期と大差ない時期に使用されたものと想定される。

（２）第２面（図 53・図版 21）

第１層である黄灰色シルト混細砂を除去した灰色シルト混細～中砂の上面を第２面とした。第２面は、旧東海道線関連施設によって調査区北側で撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第２面は標高 5.6 ～ 5.7m で北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。検出遺構には鋤溝群・溝・土坑がある。

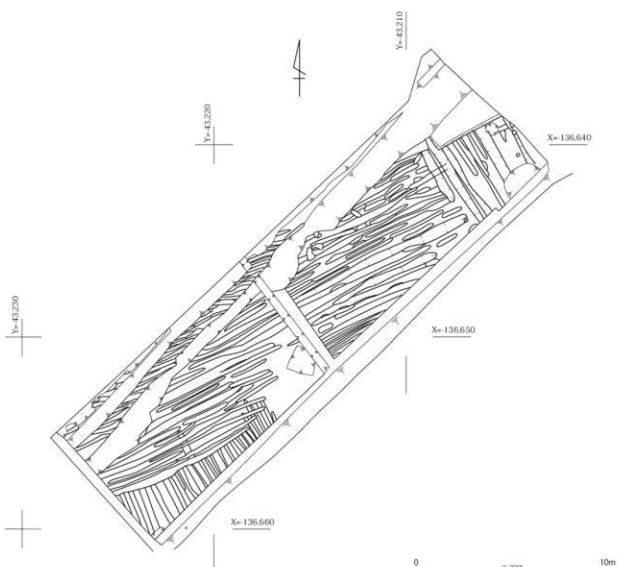


図 53　５－３区　第２面　平面図

鋤溝群

調査区ほぼ全域で鋤溝を検出した。幅約 0.1 ～ 0.2 mのものが主体となっている。鋤溝は指向方位から 2 群に分かれる。調査区南西隅の一群はN－30°－Wを、それ以外はN－55 ～ 60°－Eを指向している。切り合い関係からみれば、N－55 ～ 60°－Eを主軸にとる一群がやや新しくみえるが、本来的には耕作地の単位の違いによるものであろう。

出土遺物には瓦器椀・皿、土師質土器（皿・甕・羽釜）、備前甕、東播系捏鉢、青磁碗等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね 16 ～ 17 世紀の所産であろうか。

溝群

調査区の東端部で検出した。N－30°－Wを主軸とし、幅 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mを測り、断面形が浅い皿状を呈するものである。埋土は灰白・黄灰色細～中砂である。この溝群周辺には上面から細～粗砂の堆積がみられたことから、水路的な性格を帯びていた箇所である可能性が高い。

（3）第 3 面（図 54・図版 21）

第 2 層である灰色シルト混細～中砂を除去した灰色細～中砂混シルト質粘土の上面を第 3 面とした。

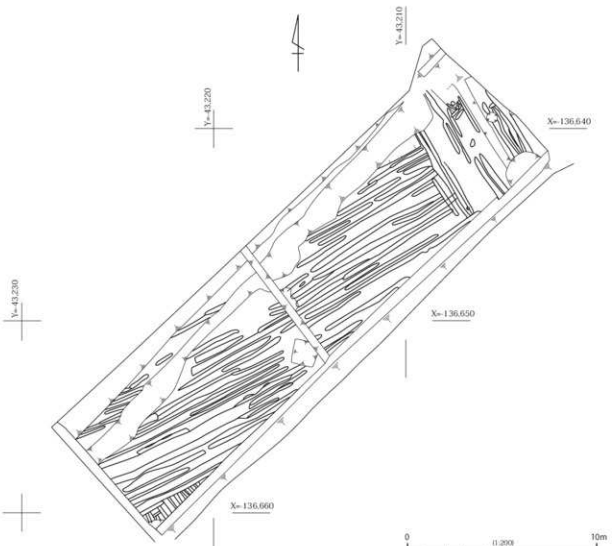


図 54　5－3区　第 3 面　平面図

第３面は、旧東海道線関連施設によって調査区北側で撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第３面は標高 5.5 ～ 5.6m で北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。検出遺構には鋤溝群・溝・土坑があり、上位面と同様な遺構配置となっている。

鋤溝群

調査区ほぼ全域で鋤溝を検出した。幅約 0.1 ～ 0.3 mのものが主体となっている。鋤溝は指向方位から３群に分かれる。調査区南西隅の一群は N－40 ～ 45°－Wを、それ以外は N－55 ～ 60°－Eを指向している。切り合い関係からみれば、N－55 ～ 60°－Eを主軸にとる一群がやや新しくみえるが、本来的には耕作地の単位の違いによるものであろう。調査区東端部で検出した一群は N－32°－Wを主軸としている。当面の特徴として、上位面に比して南西隅に位置する一群の分布範囲が狭くなることがある。

出土遺物には瓦器椀・皿、瓦質甕、黒色土器椀（内黒）、土師質土器（皿・甕）、備前甕、東播系捏鉢、須恵器等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね 14 ～ 15 世紀の所産であろうか。

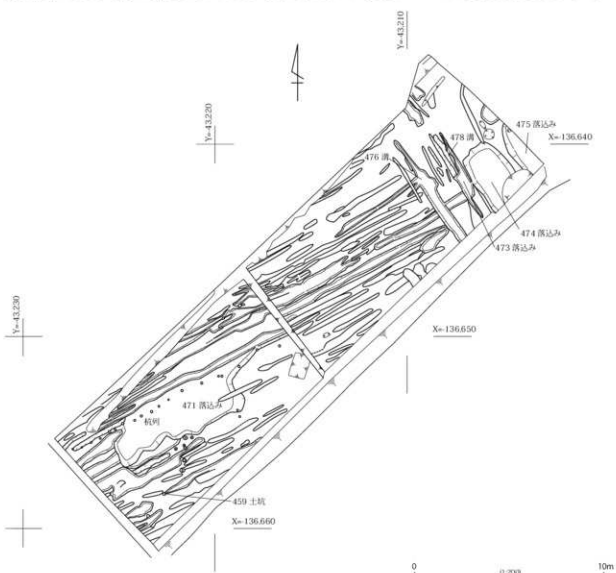


図 55　５－３区　第４面　平面図

（4）第4面（図55）

第3層である灰色細～中砂混シルト質粘土を除去した灰色極細砂混粘土の上面を第4面とした。第4面は、旧東海道線関連施設によって調査区北側で撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第4面は標高5.4～5.6mで北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。検出遺構には鋤溝群・溝・土坑・落込みがある。

鋤溝群

調査区東端部を除くほぼ全域で鋤溝を検出した。幅約0.1～0.4 mのものが主体となっている。調査区西半部でみられる鋤溝は複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。主軸方位はN－55～60°－Eを指向している。上位面の調査区南西部でみられたN－30°－Wを指向する鋤溝群が姿を消す。

出土遺物には瓦器椀、黒色土器椀（両黒）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、白磁皿、青磁碗、須恵器等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね13～14世紀の所産であろうか。

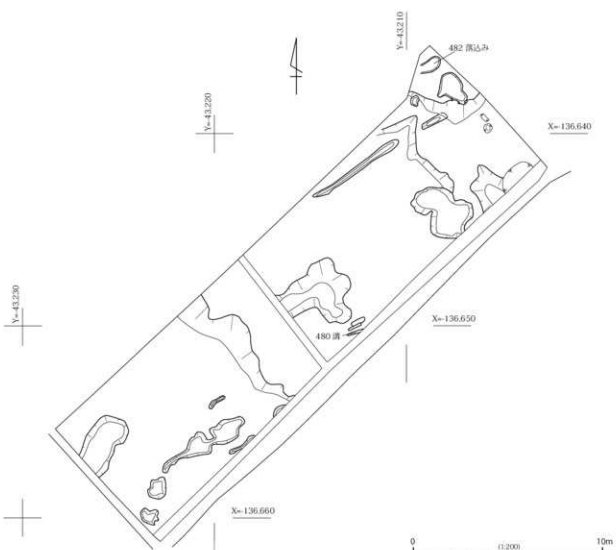


図56　5－3区　第5面　平面図

溝群

調査区の東端部で検出した。N－40°－Wを主軸とし、幅0.2～0.6 m、深さ約0.1 mを測り、断面形が浅い皿状を呈するものである。埋土は灰白・黄灰色細～中砂である。水路的な性格を帯びていた箇所である可能性が高い。

出土遺物には瓦器椀、土師質土器（皿・甕・羽釜）がみられる。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね13～14世紀の所産であろうか。

471・473 落込み

471落込みは調査区西半部で検出した不定形な落込みである。浅い皿状の落込みで、東西約8 m、南北約3 m、深さ約0.05 mを測る。埋土は灰色細砂混シルト質粘土でマンガン粒の沈着が目立つ。出土遺物には、瓦器椀・皿、瓦質羽釜、土師質土器（皿・甕）、白磁碗、須恵器等がある。概ね12～14世紀の所産である。

473落込みは調査区東端部で検出した不整方形を呈する落込みである。長軸約1.5 m、短軸約0.6m、深さ約0.1 mを測る。埋土は灰色シルトである。出土遺物には瓦器椀、黒色土器椀（両黒・内黒）、土師質土器（皿・甕）等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね13～14世紀の所産であろうか。

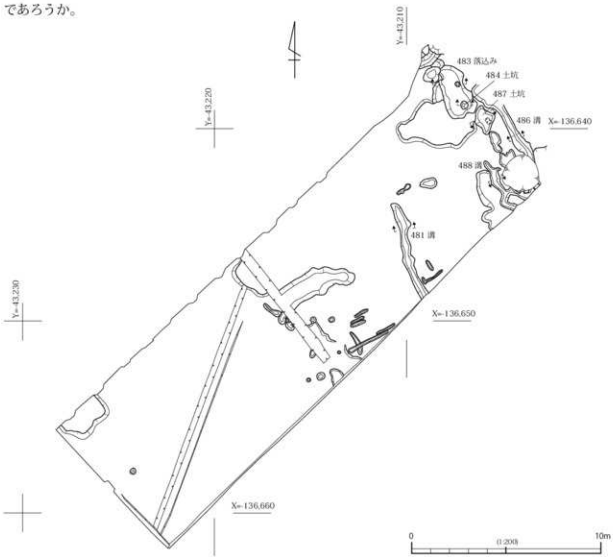


図57　5－3区　第6面　平面図

（5）第５面（図 56・図版 21）

第４層の灰色極細砂混粘土を除去した面を第５面とした。第５面は、調査区西半部及び北東隅で黒色シルト～粘土（第５層）が、調査区東半部で明黄褐色粘土（第７層：地山）が広がる。第５面の標高は 5.2 ～ 5.5m で北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。

第５面は地震による揺れのためか、第４層（灰色粘土）の沈下と第５層（黒色シルト～粘土）または第７層（明黄褐色粘土）の巻上げによってマーブル模様状の面となっており、明確な遺構を確認し辛かった。検出した遺構には不定形な落込みと溝がある。また、調査区中央部を中心に踏み込みの痕跡が多くみられた。

（6）第６面（図 57・図版 21・22）

第５層の黒色シルト～粘土を除去した面を第６面とした。第６面は、Y＝－ 43,215 ライン以西の調査区西半部で黒灰・黄灰・灰褐色シルト～極粗砂（第６層）が広がるほかは、調査区東半部では明黄

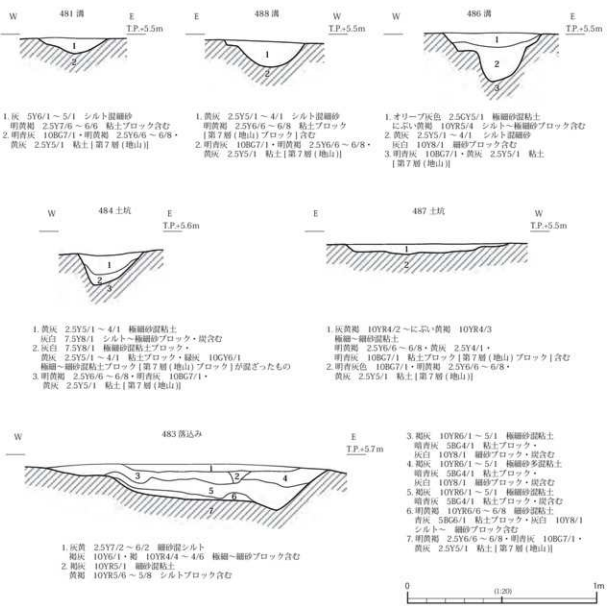


図 58　５－３区　第６面　遺構断面図

褐色・明青灰色粘土（第７層：地山）が展開している。第６面の標高は 5.1 ～ 5.5m で、北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。検出した遺構には溝・土坑・落込みがある。

481 溝（図 58）

調査区東半部の Y ＝－ 43,210 ラインに沿う位置に N－17°－W を軸としてやや蛇行しながらはしる溝である。溝は検出長約 4 m、幅約 0.4m、深さ約 0.1 mを測る。溝の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰色シルト混細砂である。溝南側は調査区外に延び、平成 19・20（2007・2008）年度調査の第９地区第５面で検出した 51 溝に繋がるものである。

486 溝（図 58・図版 22）

調査区東端部に位置し、N－30°－W を軸としてやや蛇行してはしる溝である。溝は検出長約 5 m、幅 0.4 ～ 0.8m、深さ約 0.2 ～ 0.3m を測る。溝の断面形は逆凸字状を呈する。埋土は２枚に分かれ、上層はオリーブ灰色極細砂混粘土、下層は黄灰色シルト混細砂である。溝北側は隣接する５－２区第６面で検出した 409 溝に繋がる。溝南側は、第１面で検出した 453 井戸に切られ判然としないが、井戸南側に僅かに溝状の痕跡が認められるため、もう少し延びて 488 溝に繋がる可能性を想定出来る。

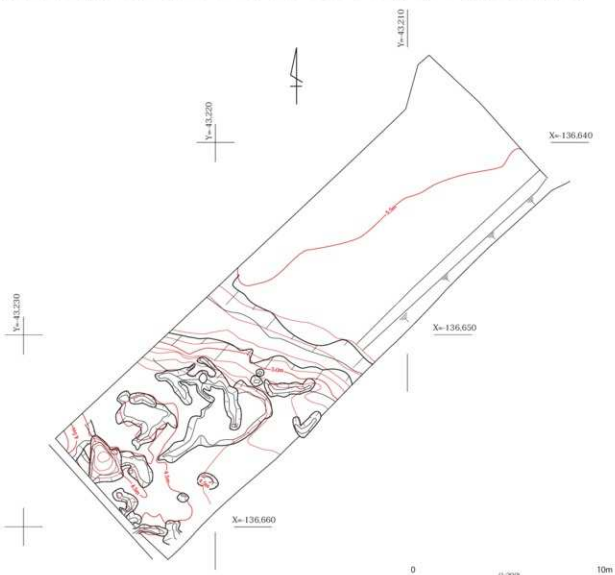


図 59　５－３区　第７面　平面図

488 溝（図 58）

486 溝の西側約 1.5 mに位置し、N－35°－Wを軸としてやや蛇行してはしる溝である。溝は検出長約 3 m、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ約 0.15 mを測る。溝の断面形は「U」字形を呈する。埋土は黄灰色シルト混細砂である。溝南側で 2 股に分かれて調査区外へと延び、平成 19・20（2007・2008）年度調査の第 9 地区第 5 面で検出した 52 溝に繋がるものである。

484 土坑（図 58）

調査区北東隅に位置する 483 落込み底面で検出した平面不整円形を呈する土坑である。南北約 0.4m、東西約 0.35 m、深さ 0.15 mを測る。断面形は不整逆台形を呈し、埋土は 2 枚に分かれる。上層が黄灰色極細砂混粘土で、下層が灰白色・黄灰色・緑灰色粘土の各ブロックが混ざったものである。

487 土坑（図 58）

486 溝の西側約 0.2 mに位置する平面不整隅丸菱形を呈する土坑である。長軸約 1.6 m、短軸約 1.1 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は 1 枚で灰褐色系粘土である。出土遺物には土師質甕があった。

483 落込み（図 58）

調査区北東隅に位置する不定形な落込みである。長軸約 2.8 m、短軸約 1.3 m、深さ約 0.25 mを測る。底面には 484 土坑を含め 2 基の土坑がみられた。埋土は細かく 6 枚に分かれ、褐色系シルト～粘土が堆積している。出土遺物には黒色土器椀（内黒）・土師質甕がある。

（7）第 7 面（図 59・図版 22）

第 6 面の調査終了後、調査区西半部 Y＝－ 43,215 ライン以西にみられた第 6 層の黒灰・黄灰・灰褐色シルト～極粗砂を掘削し、第 7（最終）面として谷状地形（489 谷）を確認した。最終地形は北東から南西に向かって緩やかに下降し、X＝－ 136,6515・Y＝－ 43,2115 とX＝－ 136,647・Y＝－ 43,219 を結ぶ N－61°－Wを軸とするラインに 489 谷の東肩が乗る。肩から西に約 4 mで谷底に至る。谷底最深部と肩部との比高差は約 1.2 mである。谷底は一時の強い水流により抉られており、凹凸が著しいもの

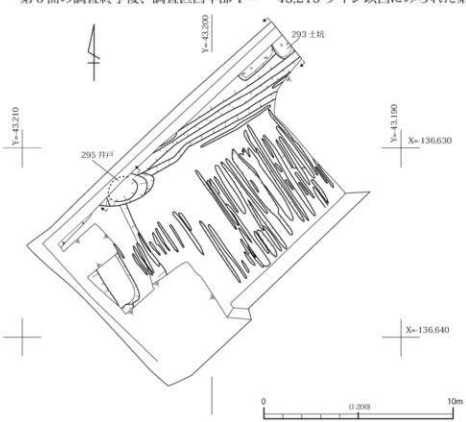
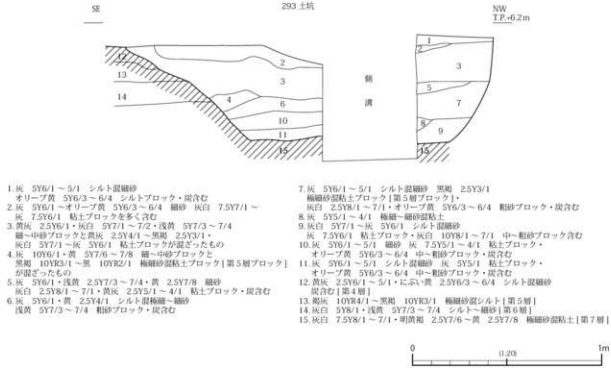


図 60　5－2 区　第 1 面　平面図



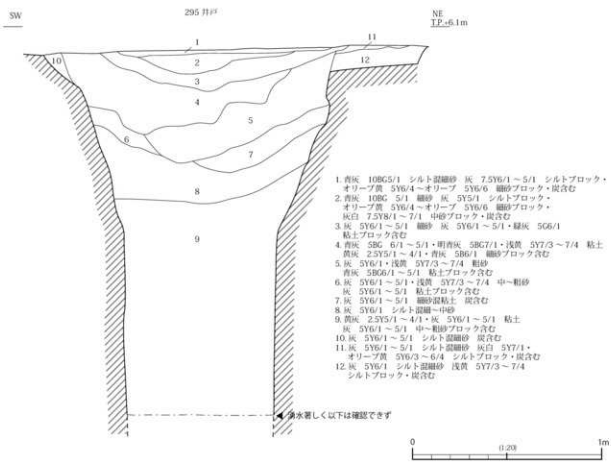


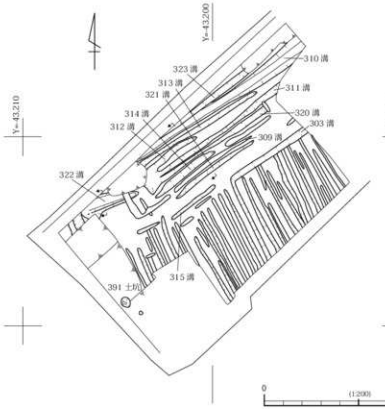
図61　5－2区　第1面　293土坑・295井戸断面図

であった。なお、この谷状地形は５－４区第７面で確認した542谷と一連のものである。

谷は東西両側から徐々に黒灰・灰白～淡黄褐色系シルト～粗砂の氾濫性堆積物によって埋没し、最終的に５－４区中央を流れる自然流路へと姿を変える。この谷を埋める氾濫性堆積物から土器や石器等の遺物は出土しなかった。

第９節　５－２区の調査

５－２区は５－３区の東側に位置し、今次の調査区で最東端にあたる。調査面積は約120㎡である。調査区の東・南側は平成19・20（2007・2008）年度調査の第８地区西半部となっている。



（１）第１面（図60）

第０層である操車場盛土及び旧東海道線関連施設整地層、旧耕作土を除去した面を第１面とした。第１面は、調査区南西隅で鉄柱のコンクリート製基礎、北西隅で操車場造成時に撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で、ほぼ調査区全域で確認出来た。第１面の標高は5.9～6.0mで北東から南西に向けて緩やかに下がる地形となっている。

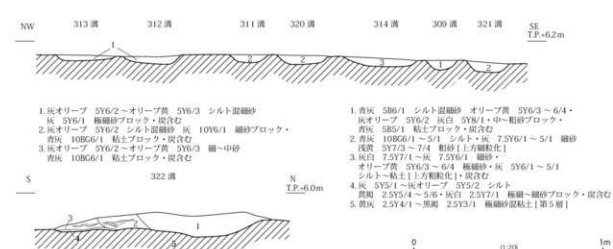


図62　５－２区　第２面　平面図・第２面溝断面図

検出した遺構には、調査区南側３分の２で鋤溝群、北側で井戸・土坑・溝がみられる。なお、X＝－136,630 以南では第１面のベースとなる第１層の黄灰色シルト混細砂がみられたが、以北には存在せず、第４層相当のにぶい黄・黄灰色シルトが広がっている。

鋤溝群

調査区の南側約３分の２、X＝－ 136,630 以南で鋤溝を検出した。幅約 0.1 ～ 0.2 mのものが主体となっているが、鋤溝は複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。鋤溝は N－30 ～ 35°－W を指向しており、後述する北側に展開する溝群に直交するように営まれている。

出土遺物には、近世陶磁器（肥前染付碗、肥前陶器椀、備前壷）、土師質皿等がみられる。ほとんどが細片のため時期を決定し難いが、概ね 17 世紀後半～ 18 世紀代の所産と考えられる。

溝群

調査区の北側 X＝－ 136,630 以北で検出したものである。N－60°－E を指向する幅約 0.3m、深さ約 0.05 mの溝が２条はしる。溝の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰白・黄灰色シルト～細砂である。溝の東側は調査区外へと延び、西側は 295 井戸に切られている。溝群は地形的に高くなった部分から耕作地に至る緩斜面に位置し、鋤溝群に直交するように掘削されているため、上方からの水を耕作地に流し込まないようにするための側溝や水路的な性格と想定される。遺物は出土していない。

293 土坑（図 61・図版 23）

調査区北東隅に位置する土坑である。土坑の北・東側は調査区外に広がる。検出出来た規模は、南北約２m、東西約 0.9 m、深さ約 0.55 mである。北側肩が確認出来ないが、断面形は逆台形を呈するものと思われる。埋土は細かく９枚に分かれるが、大きくみて上層が灰色系シルト、中層が黄灰色・灰白色・黒褐色系粘土のブロックが混ざったもの、下層が灰～灰白系シルト～細砂となっている。なお、293 土坑の西側にも平面長方形状を呈する土坑の南肩が一部みられるが、主な部分は調査区外に広がるため詳細は不明である。

出土遺物には近世陶磁器（肥前染付、肥前白磁紅皿、関西系陶器鍋、備前甕・擂鉢、堺擂鉢）、瓦器椀、土師質土器、須恵器等がみられた。遺物には一部 18 世紀後半～ 19 世紀代のものがみられるが、これは他の調査区でも影響を及ぼしていた旧東海道線関連施設が北側側溝に引っ掛かっていたため、そこからの紛れ込みの可能性が考えられる。詳細な時期は不明と言わざるを得ない。

293 土坑は、平成 19・20（2007・2008）年度調査第８地区第３面で検出した N－50°－E を軸にして X＝－ 136,610 ～ 630 に展開する土坑群に形態や埋土、土坑が連続して掘削されていること等で酷似している。この一連の土坑群は今回の調査範囲外となった Y＝－ 43,200 以西にも広がる可能性が高い。なお、第８地区第３面の土坑群は出土遺物から２大別され、13 または 16 世紀頃の所産とされる。

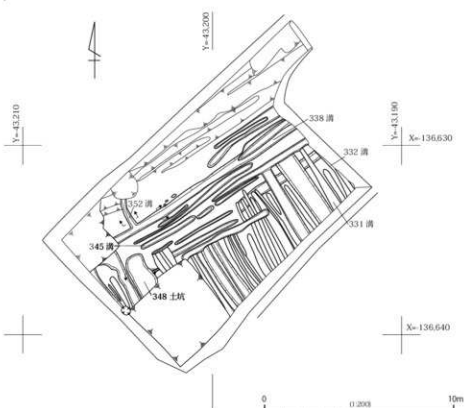
295 井戸（図 61）

調査区北側やや西寄りに位置する。井戸北側は調査区外へと延び、現状で東西に長い平面長楕円形を呈する掘り方を検出した。長軸約３m、短軸約 1.5 mを測る。井戸は素掘りで、断面形は緩やかに開く漏斗状を呈している。井筒相当部分の直径は約 0.8m である。井戸上部はグライ化した青灰～灰色系シルト～中砂・粘土ブロックで埋まり、下層は灰色系粘土が堆積している。検出面から約１m は人力で掘削したが、それ以下は危険と判断されたため、調査完了後に重機を用いて断ち割りを行なった。検出面から－２mで湧水層に達したが、崩落と湧水が著しく底を確認するには至らなかった。

出土遺物には瓦器椀、土師質皿、青白磁香合蓋、須恵器、平瓦がある。いずれも細片のため時期を決定し難い。

（2）第2面（図62）

第1層である黄灰色シルト混細砂を除去した黄灰・灰白色シルト～細砂の上面を第2面とした。第2面は調査区南西隅で鉄柱のコンクリート製基礎、北西隅で操車場造成時に撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で、ほぼ調査区全域で確認出来た。第2面の標高は5.9m前後で北東から南西に向けて僅かに下がる地形となっている。検出した遺構には、調査区南半部で鋤溝群・土坑、北側で溝がみられる。なお、X＝－136,630以南では第2面のベースとなる第2層の黄灰・灰白色シルト～細砂がみられたが、以北には存在せず、第4層相当のにぶい黄・黄灰色シルトが広がっ



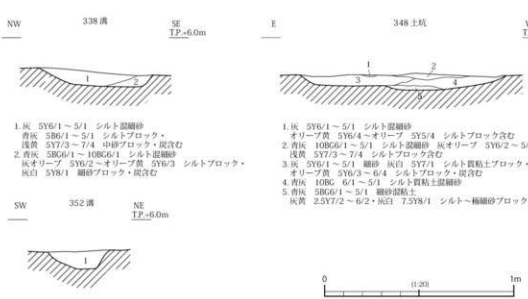


図63　5－2区　第3面　平面図・第3面338・352溝・348土坑断面図

ている。

鋤溝群

調査区の南半部X＝－136,630以南で鋤溝を検出した。幅約0.1～0.2 mのものが主体である。鋤溝はN－26°－Wを指向しており、後述する北側に展開する溝群に直交するように営まれている。

出土遺物には、瓦器椀、瓦質羽釜、土師質土器（皿・甕）、須恵器がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね16～17世紀の所産であろうか。

溝群（図62）

調査区北半部で検出したものである。N－55°－Eを指向する幅約0.3～0.7m、深さ約0.05 mの溝が9条以上はしる。溝の断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰オリーブ色細～中砂である。溝の東側は調査区外へと延びる。溝群は地形的に高くなった部分から耕作地に至る緩斜面に位置し、鋤溝群に直交するように掘削されているため、上方からの水を耕作地に流し込まないようにするための側溝や水路的な性格と想定される。出土遺物には、瓦器椀、土師質土器（皿・甕）、須恵器がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね16～17世紀の所産であろうか。

322溝（図62）

調査区北西隅で検出した溝である。溝西側は調査区外に延び、検出長約3m、幅約1.1 m、深さ約0.1 mを測る。溝断面形は浅い皿状を呈する。埋土は3枚に分かれ、流水堆積と思われる青灰～灰色シルト～細砂で埋まる。322溝は軸をN－74°－Eにもち、先述した溝群とは指向する方位が異なっている。遺物は出土していない。

なお、第2面のベースとなる第2層中には灰白色シルト～極細砂の薄い堆積が複数存在している。少なくとも3段階ぐらいの耕作面が存在している可能性が高い。

（3）第3面（図63・図版23）

第2層である黄灰・灰白色シルト～細砂を除去した黄灰色細～中砂混シルト質粘土の上面を第3面とした。第3面は調査区南西隅で鉄柱のコンクリート製基礎、北西隅で操車場造成時に撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で、ほぼ調査区全域で確認出来た。

第3面の標高は5.8m前後で北東から南西に向けて僅かに下がる地形となっている。検出した遺構には、調査区南半部で鋤溝群・土坑、北側で溝がみられる。遺構の配置状況は上位面と同様であるが、溝群の展開する位置がやや南に寄っている。

なお、X＝－136,632以南では第3面のベースとなる第3層の黄灰色細～中砂混シルト質粘土がみられたが、以北には存在せず、第4層相当のにぶい黄・黄灰色シルトが広がっている。

鋤溝群

調査区の南半部X＝－136,630以南で鋤溝を検出した。幅約0.1～0.2 mのものが主体であるが、鋤溝は複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。鋤溝の南側に位置する一群はN－25～30°－Wを、北側に位置する一群はN－58°－Eを指向しており、直交する耕作単位があったようである。

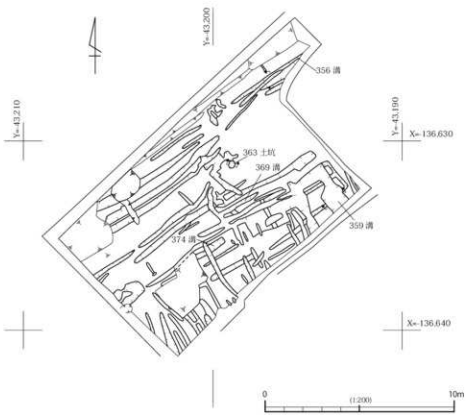
出土遺物には、瓦器椀、瓦質羽釜、土師質土器（皿・甕）、緑釉陶器、須恵器等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね14～15世紀の所産であろうか。

338 溝（図 63）

調査区中央やや北寄りに位置し、N－55°－E を軸に北東－南西にはしる溝である。溝東西両側は調査区外に延びる。溝西端付近で直交する 352 溝と繋がっている。

338 溝は検出長約 11 m、幅約 0.5 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰色系シルト混細砂である。上位面でみられた溝群と同じように水路的な機能をもったものであろうか。

出土遺物には瓦器椀、土師質土器（皿・羽釜）、備前甕、須恵器椀がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね 14 ～ 15 世紀の所産であろうか。



352 溝

（図 63・図版 23）

調査区北西隅に位置し、N－25°－W を軸に北西－南東にはしる溝である。溝北側は第 1 面 295 井戸に切られ、南側は 338 溝に繋がる。352 溝は検出長約 1.5 m、幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰色シルト混細～中砂である。

348 土坑（図 63）

調査区西端部に位置し、N－26°－W を軸

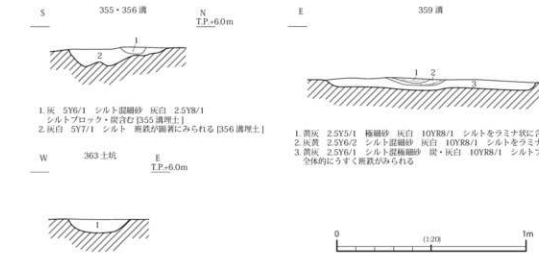


図 64　5－2 区　第 4 面　平面図・第 4 面　355・356・359 溝・363 土坑断面図

にもつ土坑である。土坑南側は撹乱によって切られ、現状で平面不整隅丸長方形を呈している。検出長は約2m、幅1～1.2m、深さ約0.1mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰色系粘土～細砂である。出土遺物には、瓦器椀、備前擂鉢がある。14世紀の所産であろう。

なお、348土坑西側約0.1mには、N－26°－Wを軸にする小段がはしる。上位面でもこの位置に同様な段がみられたことを勘案すれば、耕作地境がこの辺りに存在していたと想定される。

（4）第4面（図64・図版24）

第3層である黄灰色細～中砂混シルト質粘土を除去した灰色シルト質粘土（第4層）・褐色～黒褐色シルト（第5層）の上面を第4面とした。第5層は調査区北東・北西隅及び北東－南西にはしる調査区中軸ライン付近に広がっている。第4面は一部で鉄柱のコンクリート製基礎、北西隅で操車場造成時に撹乱を受けているものの、遺存状況は比較的良好で調査区ほぼ全域で検出することが出来た。

第4面の標高は5.6～5.8mで、北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。検出した遺構には鋤溝群・溝・土坑がある。

鋤溝・溝群（図64）

調査区の南半部X＝－136,630以南でN－25°－Wを軸とする鋤溝群とN－60°－Eを軸とする鋤溝・溝を検出した。鋤溝は幅約0.1～0.2mのものが主体であるが、鋤溝は複数のものが重なったような状況になっており、掘り分けることが出来ず、結果として幅広の溝状の状態で検出した。遺構の切り合い関係からみれば、南北方位の鋤溝が新しく、東西方位の鋤溝・溝が古いものと考えられる。

出土遺物には瓦器椀、黒色土器椀（両黒）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、灰釉陶器、白磁碗、須恵器椀、鉄滓等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね12～14世紀の所産であろうか。

溝群（図64）

調査区の北側に位置するものである。概ねN－60°－Eを軸にしながら、地形に制約されながらやや弧を描くようにはしる溝である。幅約0.1mの鋤溝状のものがみられる他、幅0.4～0.5mを測る溝もある。いずれの溝も断面形は浅い皿状を呈し、灰～灰白色シルト～細砂が堆積している。

出土遺物には瓦器椀、土師質土器（皿・甕・羽釜）、須恵器椀等がある。大半が細片となっ

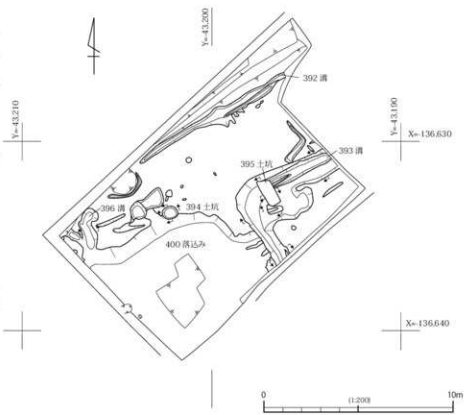


図65　5－2区　第5面　平面図

ており時期が決し難いが、概ね 12 ～ 14 世紀の所産であろうか。

363 土坑（図 64）

調査区中央やや北東寄りの X ＝－ 136,631・Y ＝－ 43,199 付近に位置する土坑である。平面円形を呈し、直径約 0.3m、深さ約 0.05 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、第 5 層ブロックを含んだ灰色シルトで埋まる。瓦器椀、土師質皿が出土しているが、細片となっており時期を決し難い。

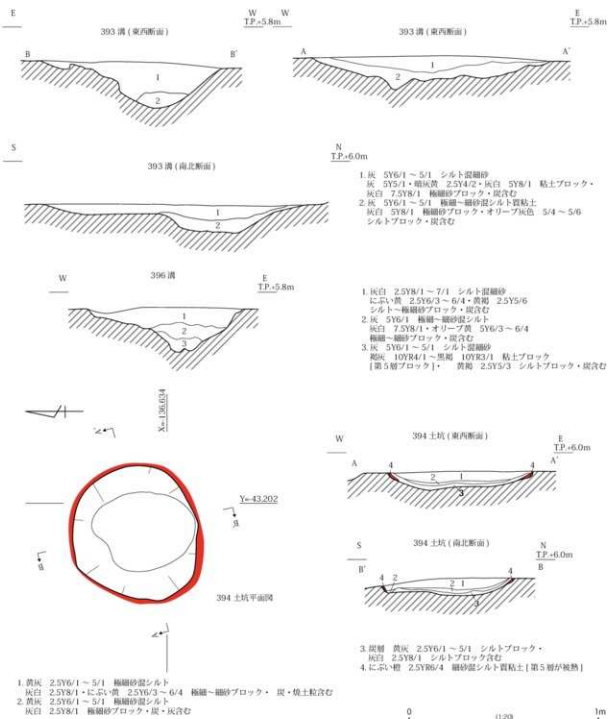


図 66　5－2 区　第 5 面　遺構平・断面図

（5）第5面（図65・図版24～26）

第4層の灰色シルト質粘土を除去した褐色～黒褐色シルトの上面を第5面とした。第5面の標高は5.5～5.8mで北東から南西に向けて緩やかに下がる地形である。遺構は調査区の北西隅と南東隅に集中しており、北西側では溝や土坑を、南東側では溝や木棺墓を検出した。

392 溝

調査区北側に位置し、N－60°－Eを軸にし、直線的にはしる溝である。溝東側は調査区外に延びる。溝の検出長は約9mで、溝の中央で大きく膨らむが、概ね溝幅は0.3m、深さは約0.1 mである。また、溝中央よりも東側の南肩部は、幅0.2～0.3 mの溝によって切られていた。

392 溝の断面形は浅い皿状を呈し、褐色細砂混粘土・黄灰色シルト・灰白色極細砂～細砂が堆積している。水路的な性格であろうか。

出土遺物には、瓦器椀・皿、黒色土器椀（両黒・内黒）、土師質土器（皿・甕）、灰釉陶器、須恵器等がある。大半が細片となっており時期が決し難いが、概ね11～12世紀の所産であろうか。

393 溝（図66・図版24）

調査区の南東隅で検出した平面逆「L」字状を呈する溝である。溝の東・南側は調査区外に延びる。溝はN－63°－Eを軸に北東から南西にはしり、X＝－136,6335・Y＝－43,197付近でほぼ直角に屈折し、N－29°－Wを軸に南東へと向きを変える。

溝の幅は1～1.5 m、深さ0.15～0.25 mを測り、東西部分の方が幅広になっている。溝東西部分は緩やかに二段に落込んで、断面形は柄杓状を呈し、南北部分の断面形は浅い皿状もしくは逆三角形状を呈している。埋土は2枚に分かれ、上層が灰色シルト混細砂、下層が灰色シルト質粘土である。

393 溝は第6面の同位置にみられる426 溝が埋まりきらずに窪んだ部分が溝となったものである。

なお、溝屈曲部の南側肩は、大きく南に張り出して不自然に乱れている。これは、393 溝が埋没した後に、溝屈曲部に掘削された395 木棺墓の影響によるものであろうか。

出土遺物には瓦器椀、黒色土器椀（内黒）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、須恵器、灰釉陶器、平瓦等がある。大半が細片となっており時期を決し難いが、概ね11～13世紀の所産であろう。

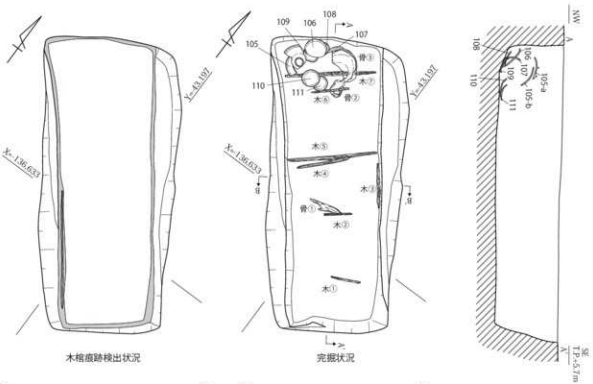
396 溝（図66・図版26）

調査区北西隅に位置し、N－7°－Wを軸に北－南にはしる溝である。溝南側は400 落込みに繋がる。検出長約2m、幅約0.8 m、深さ約0.25 mを測る。埋土は3枚に分かれ、上層が灰白色シルト混細砂、中層が灰色シルト、下層が灰色シルト混細砂となっている。

出土遺物には黒色土器椀（両黒）、土師質土器（皿・甕・羽釜）、須恵器（杯・甕）等がある。大半が細片となっており時期を決し難いが、概ね11～12世紀の所産であろう。

394 土坑（図66・図版26）

調査区中央やや西側、X＝－136,634・Y＝－43,202付近に位置する。平面楕円形を呈する焼土坑である。土坑南肩は400 落込みに切られているが、遺存状況は良好であった。長軸約0.75 m、短軸約0.7m、深さ約0.1 mを測る。土坑の断面形は浅い皿状を呈し、肩から0.05 mほどの深さまでは被熱痕跡が認められる。土坑底面には厚さ約0.02 mの炭層がみられるが、炭層を除去しても底面に被熱痕跡は認められなかった。出土遺物には黒色土器椀（内黒）、土師質皿があるが、細片となっており時期を決し難い。土坑の性格を特定し辛いが、伏せ焼式の炭窯である可能性を想定しておきたい。



1. 黄灰　2.5Y6/1　極細砂混シルトブロック［第4層ブロック］・
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・明黄褐　2.5Y7/6　粗砂混粘土
　ブロック［第7層（地山）ブロック］が混ざったもの　炭含む
2. 灰　5Y5/1　極細砂混シルトブロック
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・炭含む
3. 灰　5Y5/1　極細砂混シルトブロック［第4層ブロック］・
　灰白　5Y8/2　シルト質粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］・
　明黄褐　2.5Y7/6　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］が混ざったもの
4. 灰　5Y6/1　シルト　明黄褐　2.5Y7/6　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］
　を僅かに含む
5. 灰　7.5Y5/1　細砂混シルト
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・褐灰　10YR5/1　細砂混シルトブロック
　［第5層ブロック］含む
6. 灰　5Y5/1　極細砂混シルトブロック
　明黄褐　2.5Y7/6　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］
　褐灰　10YR5/1　細砂混シルトブロック［第5層ブロック］・
　炭を僅かに含む
7. 灰　5Y6/1　シルト　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック含む
8. 黄灰　2.5Y5/1　極細砂混シルト
　灰白　10YR7/1　シルトブロックを多量に・明黄褐　2.5Y7/6
　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］を僅かに含む
9. 褐灰　10YR5/1　極細砂混シルト
　灰白　10YR8/1　シルトブロックを多量に・明黄褐　2.5Y7/6　粘土ブロック
　［第7層（地山）ブロック］を僅かに含む
10. 黄灰　2.5Y4/1　極細砂混シルト（やや粘性あり）
11. 黄灰　2.5Y5/1　細砂混シルト［第4層由来］
　明黄褐　2.5YR6/6　シルト質粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］・
　灰白　2.5Y7/1　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］・
　褐灰　10YR5/1　細砂混シルトブロック［第5層ブロック］を多量に含む
12. 黄灰　2.5Y5/1　シルト質粘土
13. 黄灰　2.5Y6/1　シルトブロック［第4層ブロック］・
　明黄褐　2.5YR6/6　シルト質粘土［第7層（地山）ブロック］が混ざったもの
14. 明黄褐　10YR6/6　礫～砂混粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］・
　灰白　2.5Y7/1　粘土ブロック［第7層（地山）ブロック］・
　少量の黄灰　2.5Y5/1　シルトブロック［第4層ブロック］が
　混ざったもの［主体は第7層（地山）ブロック］
15. 黄灰　2.5Y5/1　シルト　灰白　10YR7/1　シルトブロック含む
16. 褐灰　10YR5/1　極細～細砂混シルト質粘土
　灰白　2.5Y7/1　シルトブロックを僅かに含む
　［木棺または遺体が腐朽したもの］
17. 褐灰　10YR4/1　シルト質粘土
　［木棺の側板及び底板が腐朽したもの］
18. 灰　7.5Y5/1　細砂混シルト
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック含む［木棺　裏込め土］

■ 残木

0　(1:20)　1m

図67　5－2区　第5面　395 木棺墓平・断面図

395 木棺墓（図 67・図版 25）

X＝－ 136,6325・Y＝－ 43,197 付近に位置し、先述した 393 溝を切って掘削された木棺墓である。

木棺墓は N－37°－W を主軸にもち、長軸 1.56 m・短軸 0.7m（各中軸で）を測る。検出面からの深さは 0.35 mである。墓壙は北側が 0.1 mほど幅広になっており、南側が狭まる平面逆台形を呈している。

断面観察や掘削途中の平面観察の結果、木棺の規模は長軸 1.47 m・短軸 0.51 mと推定される。一部に側板や底面横桟が遺存していたが、木棺はほぼ腐朽し褐灰色シルト質粘土化していた。鉄釘が全く出土しなかったことから、木棺は組み合わせ木棺と想定される。なお、遺存していた木棺材の樹種鑑定を行なったところ、木棺側板はヒノキ、桟木はスギを使用していることが明らかになった。

埋葬された遺骸も大半が既に腐朽しており、かろうじて大腿骨の一部、歯 1 点、頭蓋骨痕跡を確認した。

副葬品は瓦器椀 1 点（半身のみ）・土師質大皿 1 点・土師質小皿 5 点（図 91 － 105 ～ 111・図版 37）が北西隅にまとめて納められていた。土師質皿は、木棺腐朽粘土に埋まるか接した状況で確認されたため、棺内副葬と推定されるが、瓦器椀は床面から浮いた状況で検出されたため、棺上副葬の可能性が高い。また、意図したものか明らかにし得ないが、107 は頭頂部に被せるような形で出土している。瓦器椀が半身しか出土していないのは、一般的に副葬する磁器類に打ち欠きを施す所作に通じるもので、葬送儀礼の一種かも知れない。いずれも 12 世紀中～後半頃の所産である。

墓壙は、第 4 層を埋土とした 393 溝を切り込んで構築し、墓底が第 7 層（地山）に至るまで掘削している。そして、木棺の安置後、掘削に際し出た排土を埋め戻しに利用したため、棺内流入土には第 4 層（灰色シルト質粘土）・第 5 層（褐～黒褐色シルト）・第 7 層（明黄褐色粘土）ブロックが多量にみられる。このことを勘案すれば木棺墓が構築された段階は第 4 層が堆積した後となり、本来は第 4 面に帰属すべき遺構であったと思われる。

400 落込み

調査区南西部の X＝－ 136,634 以南に広がり、北から南に向け緩やかに下がる落込みである。落込み東側は 393 溝に接し、西側は 5－3 区に、南側は調査区外へと広がっている。埋土は灰色極細～細砂混シルト質粘土である。出土遺物は多く、瓦器椀、黒色土器椀（内黒）、瓦質羽釜、土師質土器（皿・甕・羽釜）、灰釉陶器、須恵器等（図 91 － 112 ～ 117）がある。10 世紀代のものもみられるが、概ね 12 ～ 13 世紀の所産であろう。

（6）第 6 面（図 68・図版 27・28）

第 5 層の褐～黒褐色シルトを除去した面を第 6 面とした。第 6 面は、X＝－ 136,6385・Y＝－ 43,196、X＝－ 136,630・Y＝－ 43,197 を結ぶライン以東の調査区東半部で黒灰・黄灰・灰褐色シルト～極粗砂（第 6 層）が広がるほかは、調査区西半部では明黄褐色・明青灰色粘土（第 7 層：地山）が展開している。第 6 面の標高は 5.4 ～ 5.8m で、北東から南西に向けて下がる地形である。検出した遺構には溝・土坑・落込みがある。なお、調査区西側では不定形な落込みや小溝などがあるのみで、当区よりも西側に広がる谷状地形に向けて緩やかに下降し始める位置にあたるものと推察される。

409 溝（図 69・図版 27）

調査区北西隅に位置し、N－6°－E を軸に北－南にはしる溝である。溝は、検出長約 5.5m、最大幅 1.5 m、深さ約 0.3m を測る。溝北側は調査区外に延び、平成 19・20（2007・2008）年度調査の

第８地区第５面 40 溝に繋がる可能性が高い。南側は５－３区に延び、該区第６面検出の 486 溝に繋がる。埋土は細かく８枚に分かれるが、大きくみて上層が灰色系粘土、下層が灰色系細砂となっている。

出土遺物には土師質土器（皿・椀・甕）、須恵器（甕）等がある。大半が細片となっており時期を決し難いが、概ね 11 ～ 12 世紀の所産であろうか。

418 溝（図 69）

調査区中央部を N - 25° - W を軸にやや蛇行しながら北から南にはしる溝である。溝は、検出長約 2.5 m、幅約 1.5 m、深さ約 0.05 mを測る。X＝－ 136,632・Y＝－ 43,199 付近で 426 溝に繋がる。

溝断面形は浅い皿状を呈し、埋土は褐灰色粘土である。遺物の出土はみられなかった。

426 溝

調査区の南東隅で検出した平面逆「L」字状を呈する溝である。溝の東・南は調査区外に延び、東側

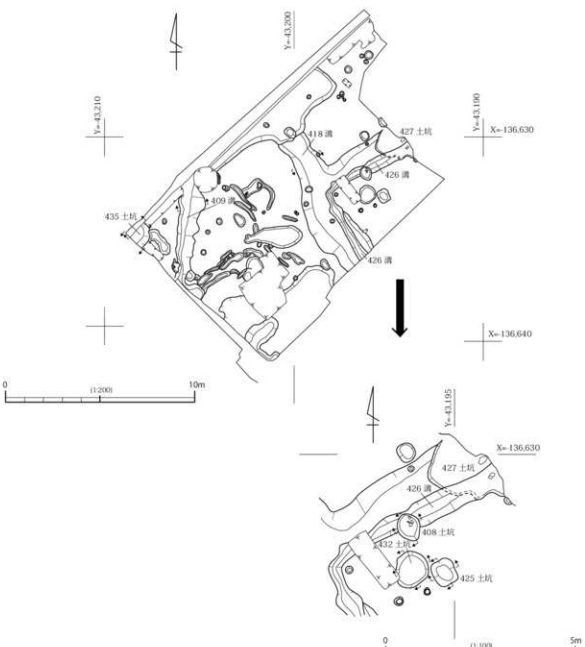


図 68　５－２区　第６面　平面図

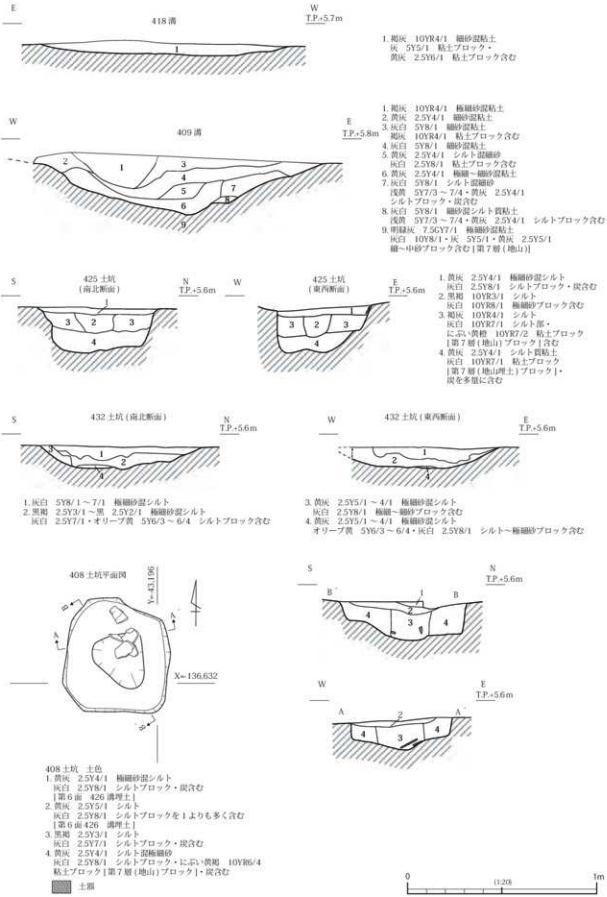
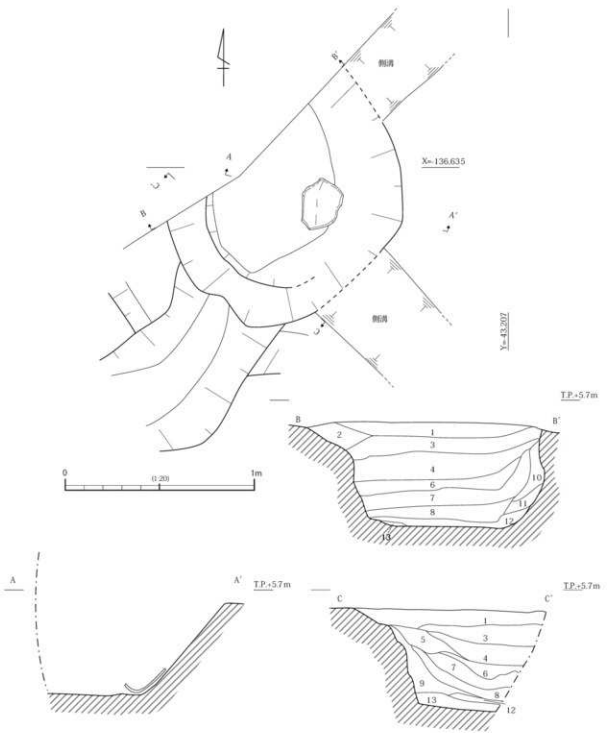


図 69　5－2区　第6面　遺構平・断面図



1. 暗オリーブ灰　2.5GY4/1　極細砂混シルト質粘土［第5層］
2. 灰　10Y4/1　極細砂混粘土
　暗青灰　10BG 4/1・シルトブロック・明黄褐　10YR7/6～6/6
　極細砂ブロック含む
3. 灰白　N7/0～N6/0　極細砂混シルト
　灰白　7.5YR8/1・黄　5Y7/6～7/8　シルトブロック含む
4. 灰白　N7/0～N6/0　細砂混シルト
　灰白　7.5YR8/1　シルトブロック含む
5. 灰　5Y6/1　細砂混シルト混粘土
　灰白　7.5YR8/1　細砂ブロック含む
6. 灰　5Y5/1　極細砂混粘土
　灰白　5YR8/1　シルトブロック含む
7. 灰　5Y5/1　極細砂混粘土
　灰白　N7/0　シルトブロック含む
8. 灰　N4/0～N6/0　粘土～中砂の互層［上方細粒化］
9. 灰白　10Y8/1　シルト混細砂
　黄灰　2.5Y6/1　シルトブロック含む
10. 黄灰　2.5Y5/1～4/1　細～中砂混粘土
　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック含む
11. 黄灰　2.5Y5/1～4/1　細砂混粘土
12. 黄灰　2.5Y6/1　極細砂混粘土
　灰白　7.5YR8/1・明オリーブ灰　2.5Y7/1　粘土ブロック含む
13. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混粘土　灰白 10Y8/1　シルト～
　極細砂ブロック含む

図70　5－2区　第6面　435土坑平・断面図

は平成 19・20（2007・2008）年度調査の第８地区第５面 69 溝に、南側は同 53 溝に繋がる。なお、平面図（図 68）では 426 溝が 427 土坑に切られたようになっているが、427 土坑は本来第７面帰属の遺構であるため、切り合い関係は逆になる。

溝は N－57°－E を軸に北東から南西にはしり、X＝－ 136.632・Y＝－ 43.199 付近でほぼ直角に屈曲し、N－29°－W を軸に南東へと向きを変える。また、この屈曲部で 418 溝と繋がる。

溝の幅は１～２m、深さ約 0.1 mを測り、南北部分の方が幅広になっている。溝は、最終的に南肩から東肩部分において幅 0.3 ～ 0.6 mの細い溝に姿をかえる。溝東西部分は断面形が逆台形を呈し、南北部分の断面形は浅い皿状を呈している。また、最終段階の溝は浅い皿状の断面となる。

遺物の出土はみられなかった。

408 土坑（図 69・図版 28）

調査区南東部、X＝－ 136.632・Y＝－ 43.194 に位置する土坑である。平面図（図 68）では 426 溝が 408 土坑に切られたようになっているが、408 土坑は本来第７面帰属の土坑であるため、切り合い関係は逆になる。

408 土坑は、一辺 0.55 ～ 0.6 mの平面不整隅丸方形を呈する土坑である。深さは約 0.2 mである。底面中央には浅い皿状の窪みがあり、断面形は逆凸字状を呈する。埋土は褐色系のシルトがみられ、炭を多く含むのが特徴である。また、底面にある窪み周辺からは著しく摩滅した弥生土器片が出土した。埋土からは土師質皿（図 91 － 118）が出土しており、平安時代の所産と思われる。

425 土坑（図 69）

408 土坑から南東約１m のところに位置する、平面隅丸長方形を呈する土坑である。長軸約 0.6m、短軸約 0.5 m、深さ約 0.25 mを測る。断面形は逆台形を呈し、褐色系のシルト質粘土～シルトである。出土遺物には瓦器椀・土師質皿（図 91 － 119）がある。

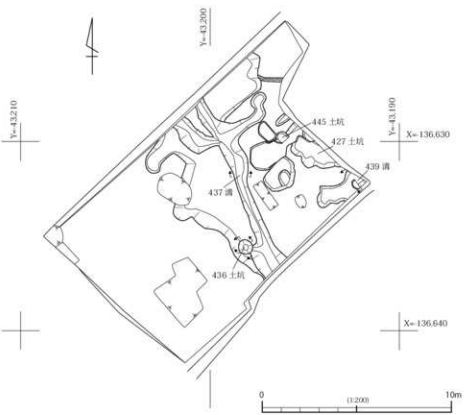


図 71　５－２区　第７面　平面図

432 土坑（図 69）

408 土坑から南約 0.5m のところに位置する、平面不整円形を呈する土坑である。西側肩の一部を第５面 395 木棺墓によって切られる。長軸約 0.85 m、短軸約 0.8 m、深さ約 0.1 mを測る。断面形は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色極細砂混シルトや褐色系極細砂混シルトである。

出土遺物には土師質

土器（皿・甕）がある。

435 土坑（図 70・図版 27）

調査区の北西隅に位置する平面不整円形を呈する土坑である。土坑北側は調査区外へと広がる。また土坑西側は５－３区において検出した。長軸約 1.3 m、短軸約 0.8 m以上、深さ約 0.55 mを測る。土坑西側には幅約 0.6m の溝が取り付いている。断面形は逆台形を呈し、埋土は灰～灰白色系の粘土～細砂である。埋土の状況から、水溜状施設と考えられる。土坑底面に張り付くように須恵器提瓶（図 91－120）が出土した。古墳時代の所産であろう。

（7）第７面（図 71・図版 28・29）

第６面の調査終了後、X＝－ 136,6385・Y＝－ 43,196、X＝－ 136,630・Y＝－ 43,197 を結ぶライン以東でみられた黒灰・黄灰・灰褐色シルト～極粗砂（第６層）を掘削し、第７（最終）面として調査を行なった。第７面で検出した遺構には、溝・土坑・落込みがある。

437 溝（図 72）

調査区中央やや東寄りに位置する溝である。北東から南西に向けて、N－29°－Wを軸にやや蛇行

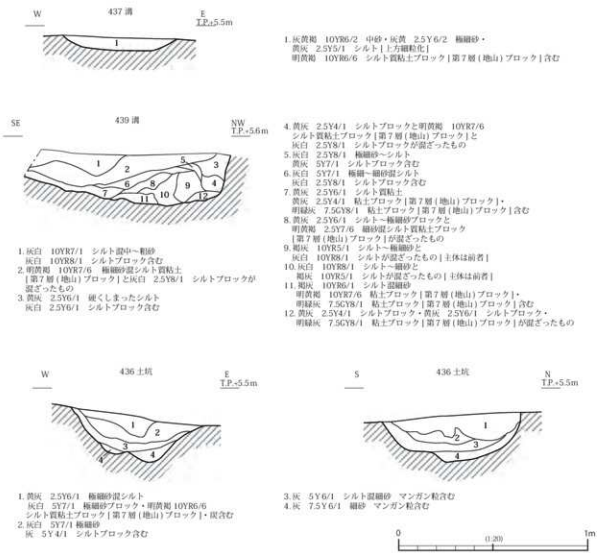
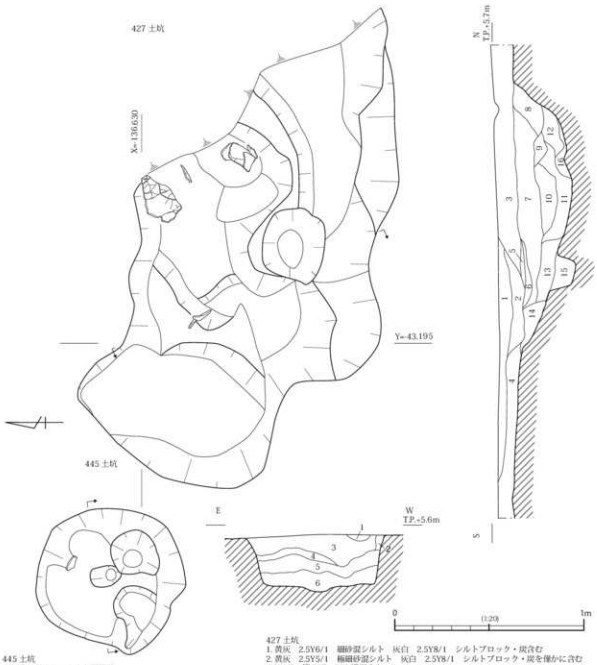


図 72　５－２区　第７面　437・439 溝・436 土坑断面図



445 土坑
1. 灰白　5Y8/1　シルト混細砂
　オリーブ　5Y6/6 ～ 6/8　極細砂ブロック含む
2. 灰白　5Y8/1　細砂混シルト
　浅黄　5Y7/3 ～ 7/4・灰　5Y6/1　極細～細砂ブロック含む
3. 灰白　5Y8/1　シルト混細砂
　灰　5Y6/1 ～ 5/1・オリーブ　5Y6/6 ～ 6/8　シルトブロック含む
4. 灰　5Y4/1 ～オリーブ黒　5Y3/1　極細砂混粘土
　灰白　5Y8/1・黄　2.5Y7/8　シルト～極細砂ブロック含む
5. 灰白　5Y8/1　細砂混粘土
　黄灰　2.5Y5/1　極細砂ブロック・黒褐　2.5Y3/1　シルトブロック
　明黄褐　2.5Y7/6 ～ 6/6　極細砂混粘土ブロック
　[第 7 層 (地山) ブロック] 含む
6. 灰白　5Y8/1　細砂混粘土　黒褐　2.5Y3/1　シルトブロック・
　明黄褐　2.5Y7/6 ～ 6/6
　細砂混粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] を含む

427 土坑
1. 黄灰　2.5Y6/1　細砂混シルト　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・炭含む
2. 黄灰　2.5Y5/1　極細砂混シルト　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック・炭を僅かに含む
　[1・2：第 5 面　393 溝埋土]
3. 黒褐　7.5YR3/1　極細砂混シルト (やや粘性あり)
　灰白　2.5Y7/1　シルトブロックを多く含む
4. 褐灰　7.5YR4/1　極細砂混シルト (やや粘性あり)　[3・4：第 5 層]
5. 褐灰　10YR4/1　シルト　灰白　2.5Y7/1　シルトブロックを僅かに含む
6. 褐灰　10YR5/1　極細砂混シルト　灰白　2.5Y7/1　シルトブロック僅かに含む
7. 褐灰　7.5YR4/1　シルト
　黒褐　10YR3/1　シルトブロック・灰白 2.5Y8/1　シルトブロック含む
　[5 ～ 7：第 6 面　426 溝埋土]
8. 灰黄褐　10YR5/2　シルト混細～中砂　灰白　2.5Y8/2　シルトブロック含む
9. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混極細砂　灰白　2.5Y8/1　シルトブロック含む
10. 黄灰　2.5Y4/1　シルト混極細砂　明黄褐　2.5Y6/6　粘土ブロック
　[第 7 層 (地山) ブロック]・
　灰白　2.5Y8/1　粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] を多量に含む (弥生土器出土)
11. 黄灰　2.5Y4/1　極細砂混シルト　黒褐　2.5Y3/1　シルトブロック・灰白　2.5Y8/1
　シルトブロック含む
12. 黄灰　2.5Y5/1　シルト質粘土　灰白　2.5Y8/1　粗砂混粘土ブロック
　[第 7 層 (地山) ブロック] 含む
13. 褐灰　10YR5/1　シルト混極細砂
　灰白　2.5Y8/1　粗砂混粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] を含む
14. 浅黄　2.5Y7/4 ～明黄褐　2.5YR7/6　シルト質粘土
　灰白　2.5Y8/1　極細砂混粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] 含む
15. 黄灰　2.5Y5/1　極細砂混シルト　灰白　2.5Y7/1　シルトブロックを多量に含む
16. 明黄褐　10YR6/6 ～明黄褐　2.5Y7/6　粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] と
　灰白　2.5Y7/1　粘土ブロック [第 7 層 (地山) ブロック] が混ざったもの (主体は前者)

図 73　5 － 2 区　第 7 面　427・445 土坑平・断面図

しながらはしる。溝は北側で３条に分岐し、うち２条は調査区外へと延びている。溝南側も調査区外へと延びる。検出長は約 9.5 m、最大幅約 1 m、深さ約 0.1 mを測る。溝断面形は浅い皿状を呈し、褐色系シルト～中砂が堆積している。遺物の出土はみられなかった。

439 溝（図 72）

調査区南東隅に位置する溝である。南西から北東に向けて、N－60°－E を軸にやや蛇行しながらはしる。溝東側は調査区外に延びる。検出長約３m、最大幅約 1 m、深さ約 0.25 mを測る。溝は西から緩やかに東へ向けて深くなる。埋土には第７層のブロックが多量に含まれる。溝として報告したが、不定形な土坑である可能性が高い。

427 土坑（図 73・図版 28）

調査区の西端に位置する不定形な土坑である。この土坑は第６面段階で一部その存在を検出しており、誤って掘削していたが、第６層を掘削して改めて検出しなおしたものである。土坑東側は調査区外に広がる。長軸約 2.3 m、最大幅約 1.4 m、深さ約 0.25 mを測る。土坑底面は凹凸が著しい。埋土は、褐色系シルト～中砂に第７層ブロックを含むものである。底面から浮いた状態で著しく摩滅した弥生土器が出土した。

436 土坑（図 72・図版 29）

437 溝の西側、X＝－ 136,6355・Y＝－ 43,198 付近に位置する平面円形の土坑である。直径約 0.8 m、深さ約 0.25 mを測る。底面は凹凸がみられ、埋土は灰色系シルト～細砂である。遺物の出土はみられなかった。

445 土坑（図 73・図版 29）

427 土坑の西側約 0.4m に位置する平面不整円形を呈する土坑である。直径約 0.75 m、深さ約 0.3m を測る。底面は凹凸が著しい。断面形は逆台形で、埋土は第７層ブロックを含む灰色系シルト～細砂である。底面からやや浮いた状態で、著しく摩滅した弥生土器片が出土した。

上述した土坑以外も、検出した土坑の平面形は不定形で、底面は凹凸が著しい。壁面はなだらかに掘削されているものがある一方で、オーバーハングするものも存在した。大半の遺構からは遺物の出土がみられなかったが、427・445 土坑のように弥生土器がみられるものがある。いずれも底面からやや浮いた状態での出土である。土坑埋土には 436 土坑のように第６層が堆積するものと、第６層と第７層由来の粘土ブロックが混ざったものとがみられ、後者に弥生土器が入る傾向が窺えた。

これらの土坑は、形態・埋土・弥生土器が出土すると言った点において、隣接する平成 19・20（2007・2008）年度調査の第８地区第５面検出の 54・116 土坑と酷似している。今回検出した土坑出土の弥生土器は、摩滅が著しく時期を決し難いが、前回調査の出土資料から類推すれば、弥生時代中期後半の所産と思われる。

第10節　通信ケーブル防護管発信立坑（立坑）の調査

立坑は、貨物専用道路部分の5－3区から南へ約12ｍ離れた場所に位置する調査区である。当区の調査面積は約16㎡である。当調査区では層序は大別4層に分層することが出来る（図74）。

第0層は吹田操車場建設以前の旧耕作土、吹田操車場建設に伴う盛土～現代のバラスト層で構成され、近代～現代の所産である。この第0層を除去し終えた面（第1層上面）を**第1面**として調査を行なった。第1面では鋤溝と溝を確認した。

第1層は青灰色中～粗砂である。層厚は0.1～0.15ｍを測る。第1層を掘削し終えた面（第2層上面）を**第2面**として調査を行なった。第2面では鋤溝を確認した。

第2層は黄灰色細砂で斑鉄の生成が顕著である。また、第3層（地山）を撹拌して巻き上げたような緑灰色シルト～粘土のブロックを含んでいる。瓦器椀や瓦質土器が出土していることから、中世の耕作土と考えられる。層厚は約0.15ｍを測る。第2層を掘削し終えた面（第3層：地山上面）を**第3面**として調査を行なった。第3面では鋤溝を確認した。

（1）第1面（図75）

第1面は第0層を除去し終えた青灰色中～粗砂である。但し、調査区北側約3分の1は第2層（黄灰色細砂）が広がっている。第1面の標高は5.5～5.7ｍで、北から南へと緩やかに下がる地形となる。

検出した遺構には鋤溝群・溝がある。但し、北側の第2層が広がる部分は操車場造成の際に改変を受けており、鋤溝を確認するには至らなかった。

鋤溝群

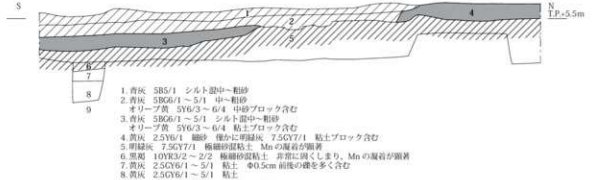
鋤溝群は、N－73°－Eを指向する幅0.2～0.3m、深さ約0.05ｍを測るものが主体となっている。埋土は青灰色粗砂である。一部の鋤溝からは肥前染付碗が出土した。

1溝

鋤溝群の南端を切るように、北東から南西にはしる溝である。幅0.5～0.8ｍ、深さ約0.05ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は青灰色粗砂である。出土遺物には関西系陶器片がある。

（2）第2面（図75・図版31）

第2面は第1層を除去し終えた黄灰色細砂上面である。但し、調査区中央部は第3層（明緑灰色粘



1. 青灰　5B5/1　シルト混中～粗砂
2. 青灰　5BG6/1～5/1　中～粗砂
　オリーブ黄　5Y6/3～6/4　中砂ブロック含む
3. 青灰　5BG6/1～5/1　シルト混中～粗砂
　オリーブ黄　5Y6/3～6/4　粘土ブロック含む
4. 黄灰　2.5Y6/1　細砂　僅かに明緑灰　7.5GY7/1　粘土ブロック含む
5. 明緑灰　7.5GY7/1　極細砂混粘土　Mnの凝着が顕著
6. 黒褐　10YR3/2～2/2　極細砂混粘土　非常に固くしまり、Mnの凝着が顕著
7. 黄灰　2.5GY6/1～5/1　粘土　Φ0.5cm前後の礫を多く含む
8. 黄灰　2.5GY6/1～5/1　粘土
9. 緑灰　10GY6/1　粘土　［5～9：地山］

図74　立坑　西壁断面図

土：地山）が広がっている。第２面の標高は 5.35 ～ 5.7 mで、北から南へと緩やかに下がる地形となる。

検出した遺構には鋤溝群・段がある。但し、調査区北側３分の１は操車場造成の際に改変を受けており、鋤溝を確認するには至らなかった。

鋤溝群

鋤溝群は、N－69°－Eを指向する幅 0.15 ～ 0.3m、深さ約 0.05 mを測るものが主体となっている。埋土は青灰色粗砂である。

段

調査区北側で、N－65°－Eを指向して鋤溝と平行するようにはしる段がみられた。段は約 0.2 mの

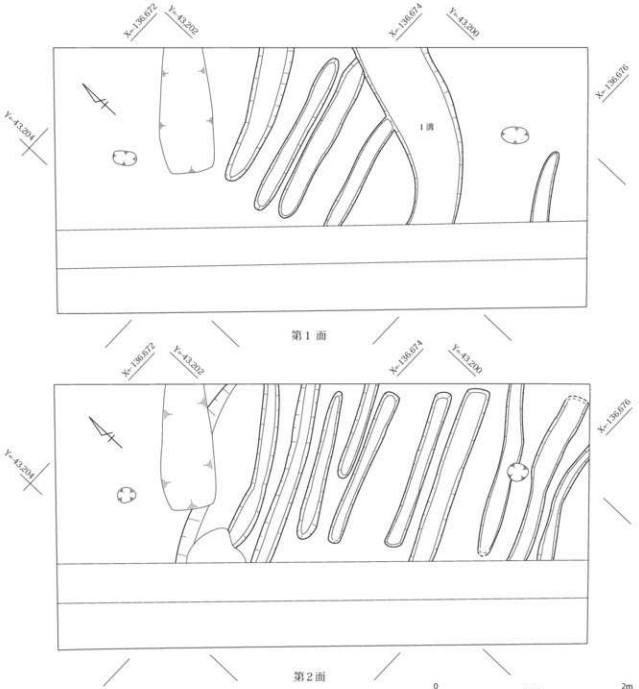


図 75　立坑　第１面・第２面　平面図

比高差をもつ。調査面積が狭小なこともあり、性格は不明であるが耕地境の段と想定される。

（3）第3面（図76・図版31）

第3面は第2層を除去し終えた明緑灰色粘土（地山）上面である。第3面の標高は5.1～5.5 mで、北から南へと緩やかに下がる地形となっている。検出した遺構には溝・段がある。

7・8溝

調査区の中央をN－60°－Eを軸に、やや蛇行しながらはしる溝である。溝の東・西両側は調査区外へと延びる。検出長は約2.9 m、幅0.15～0.3 m、深さ約0.1 mを測る。溝断面形は浅い皿状を呈し、黄灰色細砂が堆積している。出土遺物には土師質皿があるが、細片のため時期を決し難い。

段

調査区北及び中央やや南側で、N-55～60°-Eを指向して溝と平行するようにはしる段がみられた。段は約0.1 mの比高差をもつ。調査面積が狭小なこともあり、性格は不明であるが耕地境の段と想定される。

第11節　下水管確認の調査

貨物専用道路の西側延伸部分において、鋼矢板打設に際して既設の下水管を損なわない為に、位置確認を行なう必要が生じた。そこで、鋼矢板打設ライン上で下水管が存在すると想定される位置に直径3.5mの調査区を南北2箇所設定し、調査を行なった。調査着手順に南側に位置する調査区を下水管1区、北側に位置するものを下水管2区と称した。なお、これらの調査区は貨物専用道路部分の1区から南西へ約40 m離れた場所に位置する。

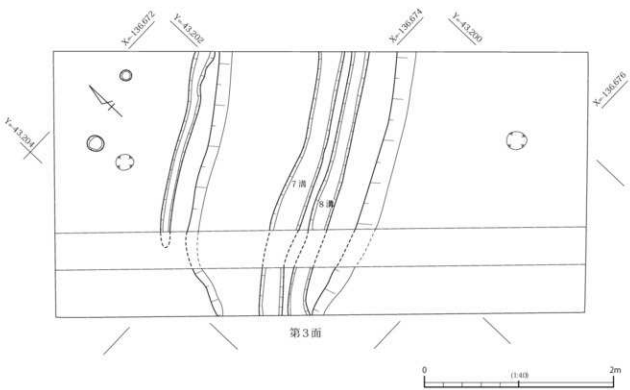


図76　立坑　第3面　平面図

下水管１区

現地盤から－0.9mの堆積が第０層である。第０層は上から順にバラスト層（現代軌道用）・灰褐色砂礫層（軌道盛土？）・黄色または緑灰色粘土～シルト（操車場盛土）であり、貨物専用道路調査区側と同じ構成となっている。相対的に、各構成層の厚みが貨物専用道路調査区部分と比べて薄くなっている。また、第０層以下の層位に関しては、堆積状況を確認出来た箇所の大半が溝等の遺構埋土であり、当区において純粋な堆積層を明確にし得なかった。従って、貨物専用道路調査区との対比は後に述べる下水管２区で記載する。

（1）第１面

第０層を掘削した直後の面を第１面として調査を行なった。第１面の標高は6.5m前後である。調査区北西側約３分の１は、コンクリート製構造物及びその掘り方、調査区中央は構造物から流出する溝によって改変を受けており、遺構面の遺存状態は不良であった。

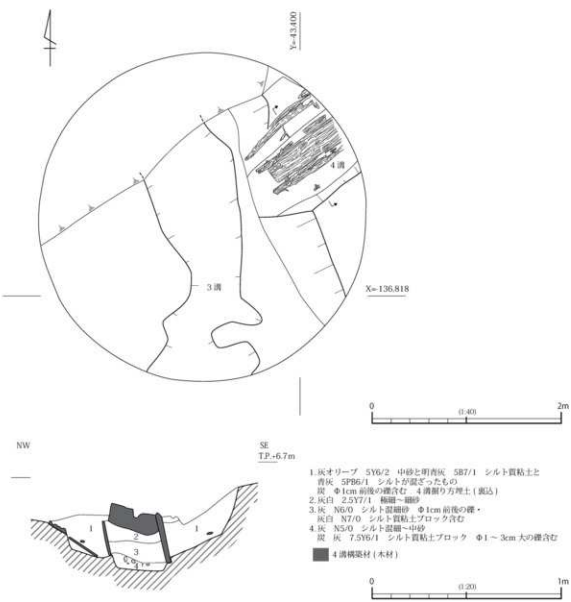


図77　下水管１区　第２面　平面図・４溝断面図

遺構面が確認出来た調査区南側で、N－26°－Eを軸にやや蛇行しながら北東から南西にはしる溝を検出した。検出長約3.3m、最大幅約2m、深さ約0.15mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は暗灰色細～中砂混シルトである。これには緑灰色粘土や礫が含まれている。出土遺物には19世紀代の関西系陶器蓋がみられた。

（2）第2面（図77・図版31）

当区では、明瞭な第1層がみられないことから、第2面は第1面検出の溝を掘り上げた底面とした。調査区北西側約3分の1は、コンクリート製構造物及びその掘り方によって改変を受けている。検出した遺構には溝がある。

3溝

3溝は調査区東端で東肩を確認し得たが、西側は調査区外へと広がっている。N－27°－Wを軸に、北西から南東にはしる。溝の東肩で直交する4溝と繋がる。

埋土は最下層ににぶい褐色砂礫が堆積しており、それよりも上位層は灰褐色シルト・灰白細砂が互層状に堆積する。出土遺物として近世陶磁器（肥前染付碗・皿・鉢、肥前陶器鉢、関西系陶器、萩焼ビラ掛け椀等）、平瓦等がある。19世紀代の所産であろう。

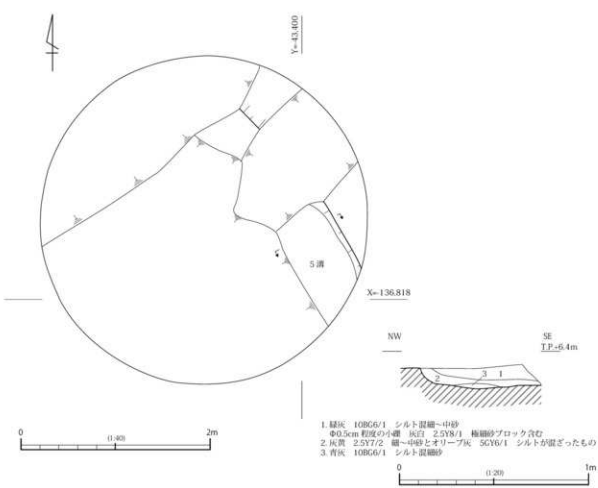


図78　下水管1区　第3面平面図・5溝断面図

4溝（図77）

3溝の東肩部で直交する暗渠である。溝はN－53°－Eを軸に北東から南西にはしる。検出長約1.1m、幅約1m、深さ約0.45mを測る。溝の大半は調査区外にあるが、確認出来た部分には、厚さ0.03m、高さ0.2～0.25mの板材を用いて横矢板を敷設し、厚さ約0.1m、幅0.25mの板材で蓋を設けていた。

（3）第3面（図78・図版31）

第3面の西側約3分の2は、第2面で検出した3溝によって地山まで削平されており、当面は調査区南東隅でしか確認出来なかった。調査区南東隅にみられた青灰色シルト混細～中砂を除去した面である。標高は6.3mである。検出した遺構には溝がある。

5溝（図78）

調査区南東端に位置する。溝北側は第2面4溝に、溝西側は3溝に切られ、全容は判然としない。溝はN－31°－Wを軸に北西から南東にはしる。検出長は約1m、幅0.65m以上、深さ約0.1mである。埋土は3枚に分かれ、緑灰色シルトや灰黄色細～中砂がみられた。出土した遺物は白磁碗Ⅳ類のみである。中世段階の所産であろうか。

（4）第4面（図79・図版31）

第4面の西側約3分の2は、第2面で検出した3溝によって地山まで削平されており、当面は調査区南東隅でしか確認出来なかった。調査区南東隅にみられた灰白色細砂混シルト質粘土を除去した面（地

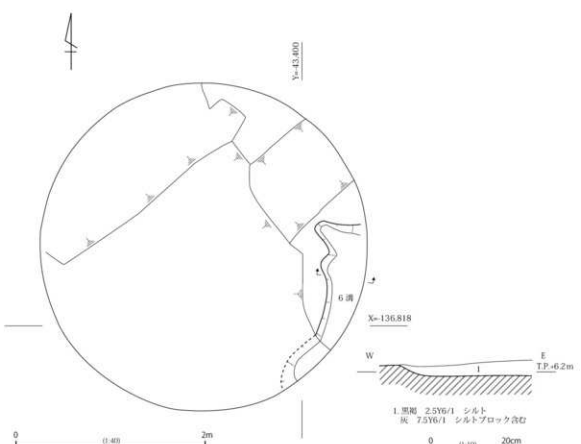


図79　下水管1区　第4面平面図・6溝断面図

山上面）である。標高は 6.2m である。検出した遺構には溝がある。

6溝（図 79）

調査区南東端に位置する不定形な溝（落込みか）である。溝の東側部分は調査区外へと広がっている。検出長は約 2 m、幅 0.5 m以上、深さ約 0.05 mを測る。埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土はみられなかったため、時期は決め難い。ただ、埋土の質感は貨物専用道路調査区で確認した第 5 層に近いものである。

下水管 2 区

現地盤から－ 0.9m の堆積が**第 0 層**である。第 0 層の構成は下水管 1 区と同様である。第 0 層を掘削し終えた面（第 1 層上面）を**第 1 面**として調査を行なった。

第 1 層は黄灰色シルト混細～中砂である。貨物専用道路調査区の第 1 層に対比される。第 1 層を掘削し終えた面（第 2 層上面）を**第 2 面**として調査を行なった。

第 2 層は灰色シルト混細～中砂である。貨物専用道路調査区の第 2 層に対比される。第 2 層を掘削し終えた面（第 3 層上面）を**第 3 面**として調査を行なった。

第 3 層は灰色細砂混シルト質粘土である。中世の耕作土と思われる。貨物専用道路調査区の第 4 層に対比される。なお、貨物専用道路調査区ではこの層の上位に本層と第 2 層とが混ざったような質感の土層（第 3 層）が存在したが、ここでは認められなかった。

第 4 層は褐色シルト質粘土である。土層断面で認識出来たのであるが、面的な調査時においては上位の第 3 層と区別して掘り分けることが出来なかった。本来はこの第 4 層上面を第 4 面として調査を行なうべきである。貨物専用道路調査区の第 5 層に対比される。

第 3・4 層を掘削し終えた面（地山面）を**第 5 面**として調査を行なった。

（1）第 1 面（図 80）

第 1 面は、調査区西側約 4 分の 3 が近世～近代の水路により改変を受けており、遺構面は調査区北東端でのみ確認することが出来た。第 1 面の標高は 6.5m である。

検出した遺構には溝（落

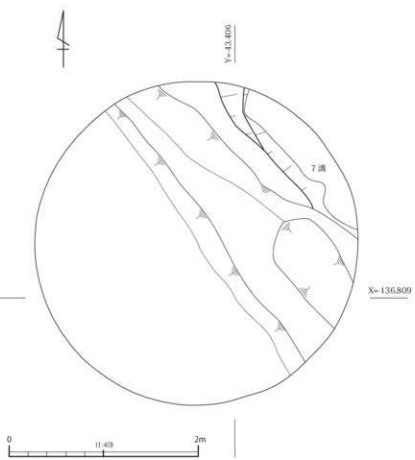


図 80　下水管 2 区　第 1 面　平面図

込みか）がある。

7溝

溝は水路に一部切られるものの、西肩を調査区東端で確認した。東側は調査区外へと広がっている。N－43°－Wを軸に北西から南東にはしる。検出長は約2.2 m、幅0.5 m以上、深さ約0.15 mを測る。埋土は暗灰色細～中砂混シルトである。

（2）第2面（図81）

第2面は、調査区西側約4分の3が近世～近代の水路により改変を受けており、遺構面は調査区北東端でのみ確認することが出来た。第2面の標高は6.4mである。検出した遺構には溝・鋤溝がある。

8溝（図81）

N－43°－Wを軸に北西から南東にはしる溝である。溝北側は調査区外に延びる。検出長は約1 m、幅約0.3m、深さ約0.1 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は暗灰黄色シルト混中砂である。

（3）第3面（図82・図版32）

第3面は、調査区西側半分が近世～近代の水路により改変を受けており、遺構面は調査区東半分でのみ確認することが出来た。第3面の標高は6.2mである。検出した遺構には溝・連結土坑群がある。

溝

N－36°－Wを軸に北西から南東にはしる溝2条を検出した。一部電柱基礎に切られているが、い

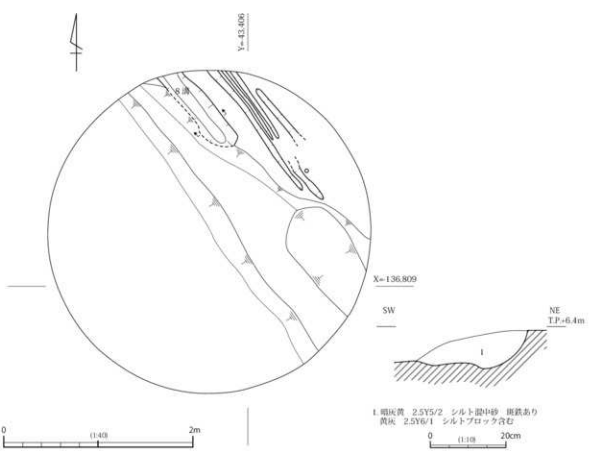


図81　下水管2区　第2面　平面図・8溝断面図

ずれの溝も検出長は２m前後で、幅 0.25 ～ 0.3 m、深さ約 0.05 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰～灰黄色極細～細砂である。遺物の出土はみられなかった。

連結土坑群（９溝）（図 82）

先述した溝の西側に位置する。土坑群の西肩は近世～近代の水路により改変を受けている。

連結土坑群はＮ－37°－Ｗを指向し、平面皆状の土坑が溝状に連続して掘削されたものである。土坑単体は長軸 0.65 ～ 0.7m、短軸 0.4 ～ 0.45m を測り、横断面形をみると「W」字状を呈するように掘削されている。埋土は灰黄色極細～細砂である。調査区内では６基の土坑の繋がりが確認出来たが、南北両側は調査区外にも延びると想定される。性格は不明である。遺物の出土はみられなかった。

（４）第５面（図 83・図版 32）

第５面は浅黄色・灰黄色の礫混シルト～粘土（地山）の上面である。標高は６mである。調査区北東端で直径 0.5m、深さ約 0.1 mの土坑を１基検出した。土坑の東半分は調査区外に広がる。埋土は黒褐色粘土である。遺物がみられなかったため時期は決め難い。ただ、埋土の質感は貨物専用道路調査区で確認した第５層に近いものである。

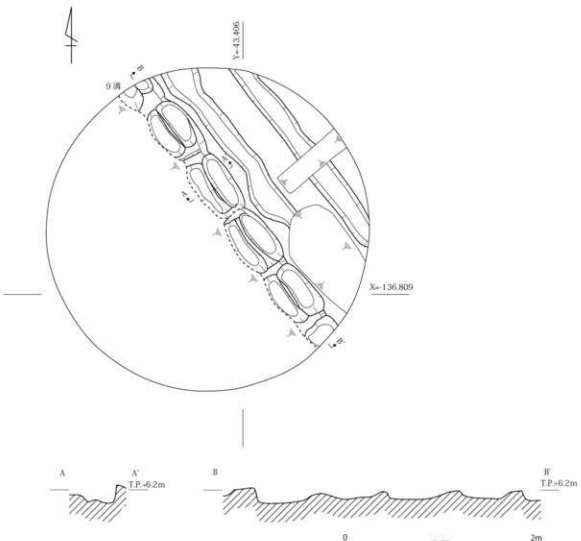
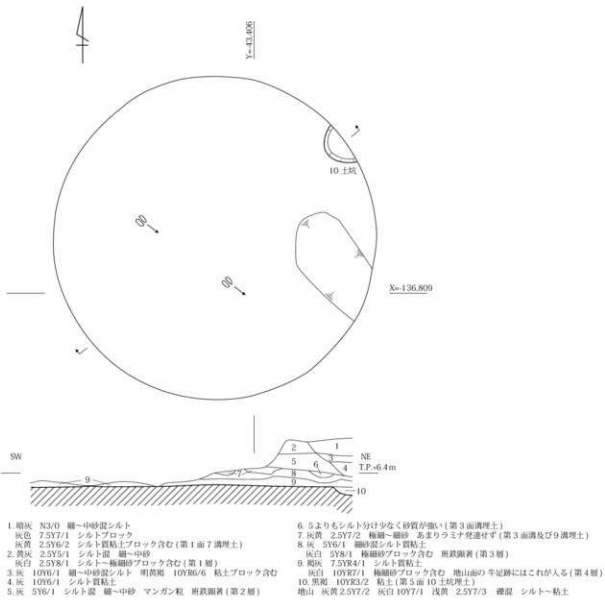


図 82　下水管２区　第３面　平面図・９溝断面図

また、調査区西側では、N－55°－Wを軸に北西から南東に向けて歩行する牛足跡を多数検出した。牛足跡には第４層が入っているため本来は第４面段階で歩行していたものと考えられる。



1. 暗灰　N3/0　細～中砂混シルト
　灰色　7.5Y7/1　シルトブロック
　灰黄　2.5Y6/2　シルト質粘土ブロック含む（第１面７溝埋土）
2. 黄灰　2.5Y5/1　シルト混　細～中砂
　灰白　2.5Y8/1　シルト～極細砂ブロック含む（第１層）
3. 灰　10Y6/1　細～中砂混シルト　明黄褐　10YR6/6　粘土ブロック含む
4. 灰　10Y6/1　シルト質粘土
5. 灰　5Y6/1　シルト混　細～中砂　マンガン粒　鉄酸銅著（第２層）
6. 5よりもシルト分け少なく砂質が強い（第３面溝埋土）
7. 灰黄　2.5Y7/2　極細～細砂　あまりラミナ発達せず（第３面溝及び９溝埋土）
8. 灰　5Y6/1　細砂混シルト質粘土
　灰白　5Y8/1　極細砂ブロック含む　鉄酸銅著（第３層）
9. 褐灰　7.5YR4/1　シルト質粘土
　灰白　10YR7/1　極細砂ブロック含む　地山面の牛足跡にはこれが入る（第４層）
10. 黒褐　10YR3/2　粘土（第５面 10 土坑埋土）
地山　灰黄 2.5Y7/2　灰白 10Y7/1　浅黄　2.5Y7/3　礫混　シルト～粘土

0　1:40　2m

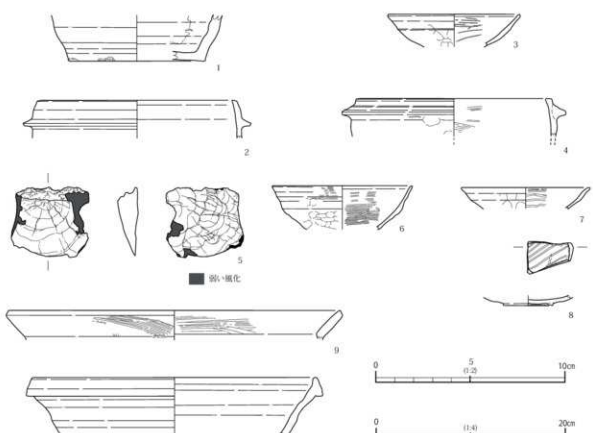
図 83　下水管２区　第５面　平面図・中央断面図

第12節　遺構及び包含層出土遺物

1．1・2区遺構出土遺物（図84～86・図版33・42）

図84－1～5は第4面遺構出土遺物である。1は137溝出土の備前焼壺底部。内外面共に回転ナデを施す。内面には自然釉がみられる。中世段階の所産である。2は141溝出土の瓦質羽釜。口縁部は短く内彎しながら立ち上がり、鍔は短く延びる。14世紀頃に比定されようか。3・4は142溝出土。3は瓦器椀である。体部外面には指オサエの痕跡が明瞭に残り、内面には粗いヘラミガキが認められる。和泉型Ⅲ－3期の所産であろう。4は瓦質羽釜。口縁部は短く内彎しながら立ち上がり、鍔は短く延びる。内面は粗いハケメのあと回転ナデを施す。14世紀頃に比定されようか。5は134土坑出土のサヌカイト製剥片である。上面に自然面を残す。自然面の側辺中央に打点があり、1枚剥片が剥がされている。表裏面共に新欠を含めた二重風化が確認できる。重量は16.3ｇである。

図84－6～10は第5面155落込み出土遺物である。6～8は瓦器椀。6は体部外面下半に指オサエの痕跡が明瞭に残り、口縁外面にはヘラミガキが施される。内面には細かいヘラミガキが認められる。和泉型Ⅱ－3期の所産である。7は体部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残り、内面には粗いヘラミガキが認められる。和泉型Ⅲ－3～Ⅳ－1期の所産であろう。8は内面見込みに平行の暗文が施され、退化した高台がつく。和泉型Ⅳ－1期の所産であろうか。9は土師質鍋。口縁部内外面には粗いハケメが施される。中世段階の所産であろうか。10は東播系捏鉢である。体部から口縁部にかけて緩やかに外反し、



1：137溝　2：141溝　3・4：142溝　5：134土坑［第4面］
6～10：155落込み［第5面］

図84　1・2区　第4・5面　出土遺物

口縁部は僅かに内彎しながら立ち上がる。また、口縁端部は上方に拡張している。森田編年Ⅲ期第１段階の所産とみられる。

図 85 － 11 ～ 13 は第６面遺構出土遺物である。11 は 151 土坑出土の須恵器杯蓋。口縁端部内面は段をなす。TK10（古）型式か。12・13 は 158 井戸出土。12 は須恵器壷である。頸部は緩やかに外反し、口縁部はやや外反しながら上方へ短く立ち上がる。口縁端部は平坦におさめる。TK10 ～ TK43 型式であろうか。13 は 158 井戸の閉塞に用いられていたスギ板材である。平面長方形を呈し、長軸約 0.68 m、短軸約 0.56 mを測る。復元径約 1.2 mの丸太材の内部を刳り貫いたものである。図下端は折れた痕跡が認められる。井戸枠に使用していたものであろうか。

図 86 － 14 ～ 33 は第６面 133 谷出土遺物である。14 は「て」の字状口縁の土師質皿。法量はやや縮小気味で、器壁は厚手の感がある。京都Ⅴ期新段階の所産であろう。15 は須恵器杯または椀である。体部から口縁部に向けて緩やかに外反する。口縁端部はやや尖り気味におさめる。京Ⅲ期古段階の所産か。16 は須恵器杯または椀である。細片で摩滅が著しいため詳細は不明である。９～ 10 世紀代のものであろう。17 は 133 谷西側にある 159 遺物集中部出土の須恵器杯Ａである。底部から口縁部に向けて緩やかに外反する。底部外面はヘラ切りで未調整である。体部外面には墨書で記号が書かれている。平城Ⅱ期の所産であろう。18 は須恵器皿。19 は須恵器壷である。肩部はナデ肩で、頸部はやや外反気

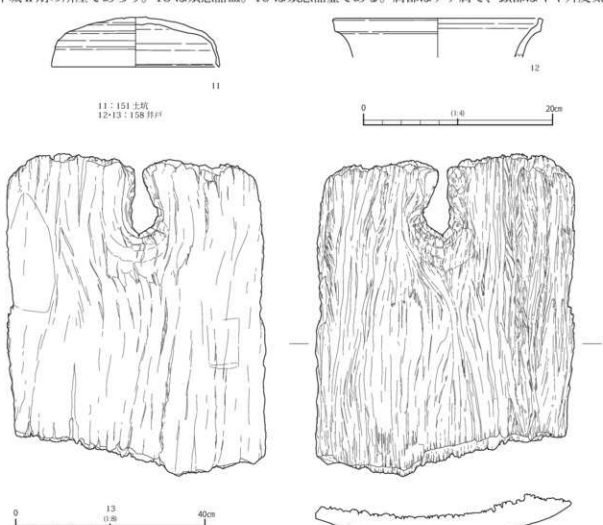


図 85　１・２区　第６面　出土遺物（１）

味に立ち上がる。奈良時代の所産であろう。20～25は須恵器杯蓋である。20～24は天井部がやや厚めで、稜が退化傾向にある。口縁端部内面にみられる段も退化気味である。25は前者に比べ、稜や段がやや鋭い。20～24はTK10～TK43型式、25はMT15型式か。26～29は須恵器杯身である。26～28は受け部が水平に延び、口縁部が内傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。27の口縁端部内面には弱い段がみられる。29は受け部が水平に延び、直立気味に口縁部が立ち上がる。口縁端部は内傾する平坦面をなす。前者はTK10型式、後者がMT15型式である。30～32は須恵器壺である。30は外面下半を回転ヘラ削りし、ヘラ削りの後中位以上にカキメを施す。31は頸部から口縁部に向けて緩やかに外反しながら立ち上がる。頸部には2条の沈線と3条の波状文が巡る。32の頸部は緩やかに外反し、口縁部はやや外反しながら上方へ短く立ち上がる。口縁端部は平坦におさめる。30・32はTK10～TK43型式、31はTK47～MT15型式であろうか。33は長原式土器底部か。摩滅が著しく詳細は不明であるが、胎土は生駒西麓産のものである。

なお、14～19は1・2区の中でもY＝－43,340以西から出土し、20～33はY＝－43,330以東から出土している。

2．3－2区遺構出土遺物（図87～88・図版34～35・42）

図87－34～41は第2面192池出土遺物である。34は肥前磁器花活け。鶴首瓶形を呈する。高台は削り出し高台である。高台は露胎であるが、外面には瑠璃釉が施されている。大橋編年Ⅴ期の所産で

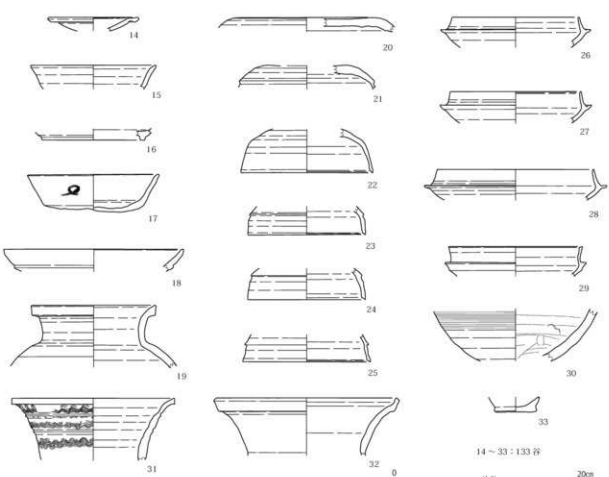


図86　1・2区　第6面　出土遺物（2）

あろう。35～37は備前焼である。35は椀。底部から口縁部に向けて直線的に斜め上方に立ち上がる。口縁端部はやや丸くおさめる。36は種壷或いは茶入か。口縁部から体部にかけて凹線が4条巡る。37は擂鉢である。口縁部外面には凹線が2条巡る。口縁部内面は、端部を摘み上げるように強く押さえながらナデており、端部からやや下がった位置に段をもつ。口縁端部上端及び口縁部下端顎に重焼きの痕跡が残る。乗岡編年近世1期b期である。38は常滑焼甕である。体部外面には平行タタキ状の押印文がみられる。39は平瓦である。凸面には離れ砂が付着した粗い縄タタキ目が、凹面には布目圧痕がみられる。平安時代終わり頃から鎌倉時代のものと思われる。40は砥石である。表面と左側面の2面を使用している。裏面は剥落する。手前の小口側は成形時の擦痕が残る。所謂青砥と呼ばれる中砥であろう。41は銅製の飾り金具である。底部と側壁は別作りで溶接されていたようである。3箇所に宝珠形突起を作り出した銅板を円形に曲げて側壁としている。底部中央には目釘穴が1孔穿たれている。石突のようなものであろうか。

図87－42～45は第5面199落込み出土遺物である。42は瓦器椀。体部外面中ほどには指オサエ

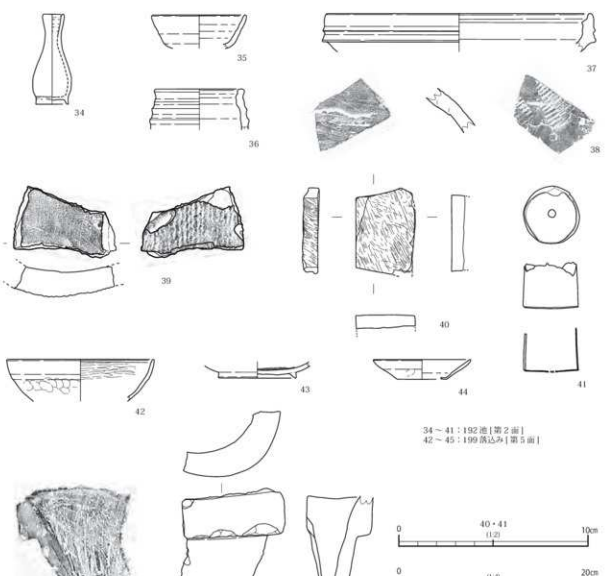


図87　3－2区　第2・5面　出土遺物

の痕跡が残り、口縁部内面にはヘラミガキが施されている。また、口縁端部内面には沈線が1条巡る。二次焼成を受けているようで、炭素分が消え部分的に赤橙色を呈する。和泉型Ⅲ－2期と思われる。43は黒色土器椀（内黒）である。内面見込みには一定方向のヘラミガキが施される。高台は断面三角形状の貼り付け高台である。京Ⅲ期中～Ⅳ期中段階の所産であろう。44は土師質皿である。底部は非常に薄く、口縁部はやや厚く作られる。所謂へそ皿になるものと思われる。京Ⅷ期新～Ⅸ期古段階の所産と思われる。45は玉縁付きの丸瓦である。凹面の布目圧痕は玉縁にまで及ぶ。

図88－46～54は第6面133谷及び204落込み出土遺物である。46は須恵器杯蓋。天井部がや

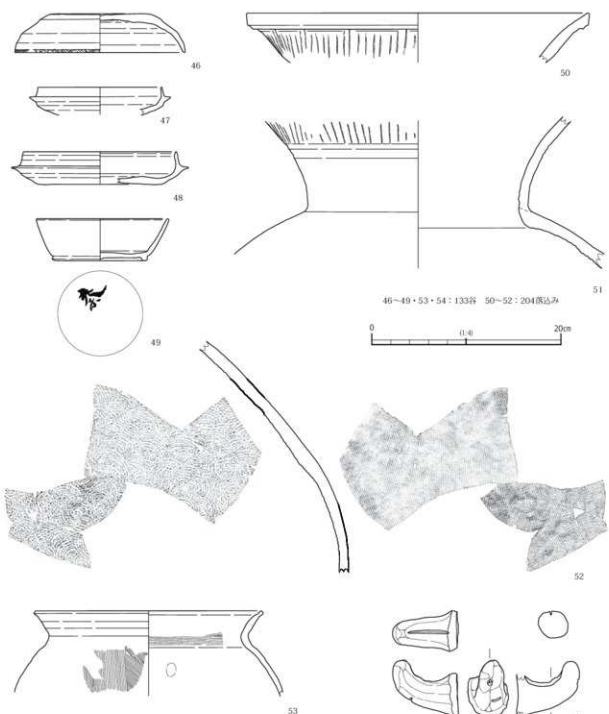


図88　3－2区　第6面　出土遺物

や厚めで、稜が退化傾向にある。口縁端部はやや尖り気味におさめてあり、端部外面には刻みを施している。TK43 型式であろう。47・48 は須恵器杯身である。受け部が水平に延び、口縁部が内傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。48 の口縁端部内面には弱い段がみられる。TK10 ～ TK43 型式であろう。49 は須恵器杯 B である。断面逆台形の貼り付け高台を巡らせる。底部から口縁部に向けて直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸くおさめる。底部外面には「秦」の墨書がみられる。平城Ⅲ～Ⅳ期の所産であろう。50 ～ 52 は須恵器甕である。接合はしなかったものの同一個体の可能性が高い。肩部から口縁部に向けて大きく開き、口縁部直下の頸部外面には刻みが施される。口縁部は下端を強くナデて、段をもつ。体部内面は同心円の当て具痕がみられ、外面は格子目タタキを施す。53 は土師器甕である。体部外面には細かなハケメ（13 本 / ㎝）を、頸部内面にはやや粗いハケメ（9 本 / ㎝）

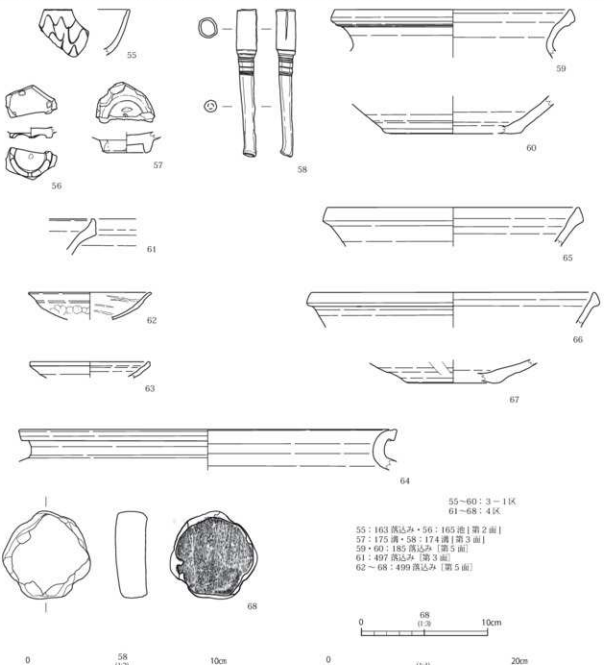


図 89　3－1・4区　遺構　出土遺物

を施す。6世紀後半頃の所産であろうか。54は土師器把手である。指オサエと強いナデによって面取り状になる。上面には幅0.4㎝、長さ4.3㎝、深さ0.4㎝の刻みが施されている。6世紀代の所産か。

3．3－1・4区遺構出土遺物（図89・図版36）

図89－55～60は3－1区、61～68は4区の出土遺物である。

55は第2面163落込み出土の肥前染付丸碗。一重網目文が施される。大橋編年Ⅲ期の所産。56は第2面165池出土の白磁碗である。胎土は陶製で、釉薬は乳白色を呈する。内面見込みに3箇所（本来は4箇所か）の胎土目がみられる。高台は抉り入り高台で、4箇所の抉りが入る。森田編年白磁D類であろうか。15世紀代の所産と考えられる。57は第3面175溝出土の白磁碗である。内面見込みは円形に釉を掻きとっている。高台は高い輪高台である。高台下端外面側を斜めに切るため、畳付け部分の幅は非常に狭くなっている。12世紀代の所産か。58は銅製の煙管である。吸い口から羅宇にかけてが遺存していた。羅宇には8条の刻みがみられる。59・60は第5面185落込み出土。59は須恵器甕。口縁部は断面三角形を呈する。口縁下端部を強くナデて、段をもつ。60は東播系捏鉢底部である。外面にはススが付着する。

61は第3面497落込み出土の東播系捏鉢である。口縁端面は平坦に仕上げられる。体部内面は使用により著しい摩滅がみられる。森田編年Ⅱ期第2段階～Ⅲ期第1段階の所産。62～68は第5面499落込み出土。62は瓦器椀である。体部外面に指オサエの痕跡が明瞭に残り、内面には粗いヘラミガキが認められる。和泉型Ⅳ－1期の所産。63は土師質皿である。口縁2段ナデを施す。口縁端部は強くナデて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。京Ⅵ期古段階の所産であろう。64は瓦質甕である。やや外反する短い頸部をもち、口縁部は三角形状を呈する。口縁上端は上方に摘み上げるように強くナデる。鍋柄編年Ⅰ－2型式か。65～67は東播系捏鉢。口縁部は三角形状を呈する。森田編年Ⅱ期第2段階の所産であろう。68は平瓦転用の土製円盤である。瓦凹面にみられる布目が残る。重量は119.2ｇである。

4．5－1・5－4・5－3区遺構出土遺物（図90・図版36・42～43）

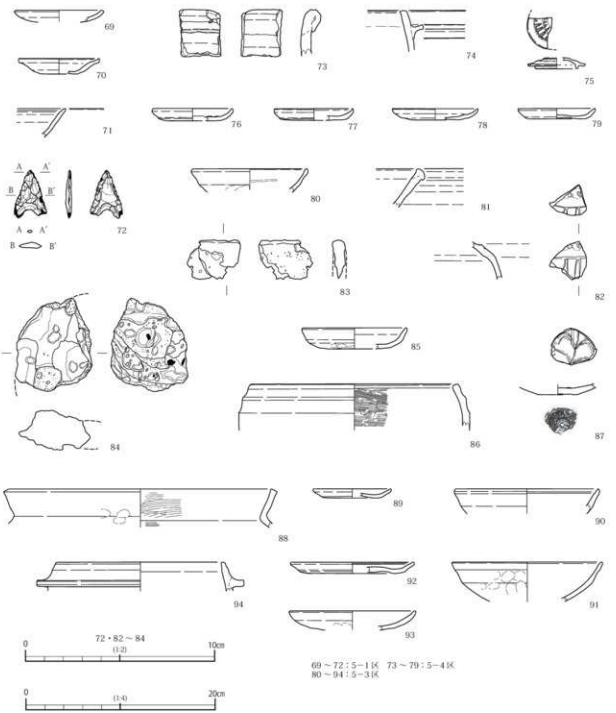
図90－69～72は5－1区、73～79は5－4区、80～94は5－3区の出土遺物である。

69は第3面227溝出土の土師質皿である。口縁1段ナデを施し、端面はやや丸みをもちつつも平坦に仕上げている。京Ⅶ期新～Ⅷ期古段階の所産であろう。70は第3面257溝出土の土師質皿である。口縁端部は摘み上げるようにナデて、上方に立ち上がり、断面三角形を呈する。所謂へそ皿になるものと思われる。京Ⅷ期中～新段階の所産か。71は第3面249溝出土の白磁碗である。口縁端部は丸くおさめられ、端部内面は口禿となっている。白磁碗Ⅸ類であろう。72は第3面237溝出土のサヌカイト製凹基式石鏃。脚端部は共に欠損している。裏面中央に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高い。重量は1ｇである。

73は第2面鋤溝群出土の備前焼甕。口縁部は玉縁状になっているが扁平で、外面は面取り状になっている。明瞭な凹線は認められない。頸部は直立気味である。乗岡編年中世5期であろう。74・75は第3面鋤溝群出土。74は瓦質羽釜である。口縁部は短く内彎しながら立ち上がり、鍔は短く延びる。14世紀頃に比定されようか。75は青白磁香合蓋である。内面は露胎となっている。外面には水滴状の模様が陽刻される。76～78は第4面530溝出土の土師質皿。いずれも口縁2段ナデを施す。76・77は口縁端部を強くナデて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。78は前者に比して端部の立ち上がりが弱

く、やや丸くおさめている。京Ⅵ期中～新段階の所産。79は第5面535落込み出土の土師質皿。口縁1段ナデを施す。口縁端部は強くナデられ、断面三角形状を呈する。京Ⅵ期新～Ⅶ期古段階であろうか。

80～84は第3面鋤溝群出土。80は瓦器椀である。器表のアレが著しく調整が不明瞭であるが、内面には粗いヘラミガキが、外面下半部には指オサエの痕跡が確認出来る。和泉型Ⅳ－3期の所産か。81は東播系捏鉢。口縁部に向けて直線的に開く体部である。口縁端部は僅かに上下に拡張する。森田編年Ⅱ期第2段階の所産であろうか。82は青白磁香合蓋である。内外共に施釉される。83は小ブロッ



69～72：5－1区　73～79：5－4区
80～94：5－3区

69：227溝・70：257溝・71：249溝・72：237溝［第3面］
73：鋤溝群［第2面］・74・75：鋤溝群［第3面］・76～78：530溝［第4面］
79：535落込み［第5面］・80～84：鋤溝群［第3面］・85～87：鋤溝群［第4面］
88：459土坑［第4面］・89：473落込み［第4面］・90～94：471落込み［第4面］

図90　5－1・5－4・5－3区　遺構　出土遺物

ク状に崩れ、内部に鬆が多くみられることから鋳造製の鉄鍋と思われる。84は椀形滓である。2側辺が破面となり、平面扇形を呈する。表裏共に凹凸が著しい。裏面には木炭の噛み込みがみられるが、炉床粘土は付着しない。直径1～3㎜前後の気孔が顕著。大きさの割りに重量感がある。メタル度は○・磁着度は4・重量は50.3gである。85～87は第4面鋤溝群出土。85は土師質皿である。体部下半には指オサエの痕跡が残る。底部から口縁部に向けて外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。京Ⅵ期新～Ⅶ期古段階の所産であろう。86は土師質羽釜。口縁部は内傾しながら立ち上がり、口縁外面には幅広の凹線が巡る。内面は指オサエの後、細かなハケメを施している。87は白磁皿である。底部外面は回転ヘラケズリを施す。白磁皿Ⅷ－1b類か。88は第4面459土坑出土の土師質羽釜か。「く」の字状になる口縁部をもつ。口縁部内面には粗いハケメを施す。平城Ⅱ期の所産であろうか。89は第4面473落込み出土の土師質皿である。口縁端部は強くナデられ、断面三角形状を呈する。内面には白色の化粧土が塗布されていたようである。京Ⅶ期中～新段階の所産であろうか。90～94は第4面471落込み出土。90・91は瓦器椀である。90は全体的に磨滅が著しく調整は不明。口縁端部はやや尖り気味におさめられ、内面に1条の沈線が巡る。樟葉型Ⅱ－1期の所産か。91は体部外面に指オサエの痕跡を残す。内面には鉄分が沈着し、調整は不明。口縁端部は丸くおさめる。和泉型Ⅱ－3期の所産であろう。92は土師質皿または杯。外反しながら短い口縁部が立ち上がる。口縁部内面には浅い段がみられる。京Ⅶ期中～新段階の所産であろうか。93は土師質皿。外面下半部には指オサエの痕跡が残る。口縁端部は丸くおさめる。京Ⅶ期中～新段階の所産。94は瓦質羽釜である。口縁部は短く内彎しながら立ち上がり、鍔は短く延びる。器表のアレが著しく調整は不明。

5．5－2区遺構出土遺物（図91・図版36～37）

図91－95～97は第3面、98～101は第4面、102～117は第5面、118～120は第6面出土である。

95は332溝出土の土師質皿。外面下半には指オサエの痕跡を残す。口縁端部は強くナデられ、断面三角形状を呈する。京Ⅶ期新段階であろうか。96は331溝出土のミニチュア瓦質羽釜である。復元口径は5.6㎝である。内傾する短い口縁部で、口縁端部は丸くおさめる。京Ⅷ期新～Ⅸ期古段階の所産であろうか。97は348土坑出土の備前焼擂鉢。外傾する口縁端面をもち、口縁部上下端が僅かに突出する。内面には擂り目が確認出来る。乗岡編年中世3期の所産と思われる。

98は374溝出土の土師質皿である。体部外面下半には指オサエの痕跡を残す。口縁部は大きく外反し、厚く作られる。所謂へそ皿になるものと思われる。京Ⅸ期古段階の所産と思われる。99は369溝出土の土師質皿または杯。全体的に磨滅・剥落が著しく調整は不明。京Ⅴ期か。100は356溝出土の土師質羽釜。口縁部は短く直立し、厚く短い鍔をもつ。全体的に磨滅が著しく調整は不明。摂津型羽釜である。101は363土坑出土の楔形鉄製品。身部中ほどで折れ曲がる。頭部側に突起がみられる。復元長は約7㎝。

102は392溝出土の灰釉系須恵器椀。高台は削り出し高台である。内面は非常に平滑に仕上げられる。103・104は393溝出土。103は土師質皿である。口縁部は外反しながら短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。京Ⅶ期新段階の所産であろうか。104は須恵器壷である。底部外面は回転糸切り痕を残す。全体的に磨滅が著しく調整は不明。

105～111は395木棺墓出土である。105は瓦器椀。半身のみの出土である。体部外面下半は指オサエの痕跡を明瞭に残し、上半には粗いヘラミガキを施す。内面は粗いヘラミガキを施している。高台

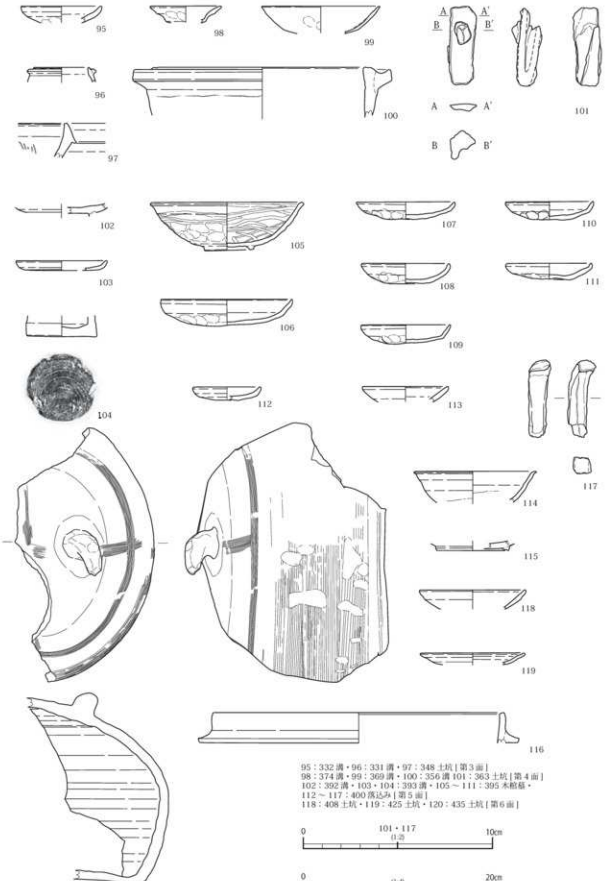


図91　5－2区　遺構　出土遺物

は断面逆台形のやや低いものである。和泉型Ⅱ－３～Ⅲ－１期の所産。106～111は完形の土師質皿。106は口径約14㎝を測る大皿である。口縁２段ナデを施す。口縁端部は強くナデられて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。体部下半には指オサエの痕跡が明瞭に残る。京Ⅵ期新段階の所産であろう。107～111は口径約９～10㎝の小皿。いずれも口縁２段ナデを施す。口縁端部は強くナデられて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈するものが多い。体部下半には指オサエの痕跡が明瞭に残る。底部外面には粘土接合痕を残している。京Ⅵ期新段階の所産。

112～117は400落込み出土。112・113は土師質皿である。112は小さく厚手である。口縁２段ナデを施し、端部は丸くおさめる。京Ⅶ期新段階の所産であろうか。113は厚手の皿である。口縁端部は強くナデられ、面取り状になって直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。口縁部内面には浅い段が形成されている。京Ⅶ期中～新段階の所産か。114・115は灰釉陶器。114は椀である。施釉は外面全体、内面の上半部３分の２にみられる。口縁端部は端反りになっている。平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古段階の所産か。115は椀もしくは皿。底部は回転ヘラケズリを施す。内面は丁寧なヘラミガキを施し、非常に平滑に仕上げられる。高台は貼り付け高台である。116は土師質羽釜である。口縁部は短く内彎しながら立ち上がり、鍔は短く延びる。口縁端部は平坦に仕上げられる。117は鉄釘。頭部は折り返して作られ、身部の断面形は正方形を呈する。先端は欠損。層状剥離が認められることから、鍛造品であろう。

118は408土坑出土の土師質皿。口縁２段ナデを施す。口縁端部はやや尖り気味に仕上げられ、内面に浅い段をもつ。全体的に磨滅が著しく調整は不明瞭。京Ⅴ期であろうか。119は425土坑出土の土師質皿。口縁部は大きく外反する所謂「て」の字状口縁皿である。口縁端部は僅かに上方に肥厚し、断面三角形状を呈する。京Ⅴ期中～新段階の所産であろう。

120は435土坑出土の須恵器提瓶。体部表面に把手が付く。体部外面はカキメを施す。把手よりも上方に自然釉がみられる。古墳時代後期のものであろう。

6．1・2区包含層出土遺物（図92～93・図版38～39・43）

図92－121・122は第１層、123～126は第２層、127～149は第３層、図93－150～164は第４層の出土遺物。

121は青磁碗。口縁端部付近で器壁がやや薄くなる。それにより口縁部内面に弱い段がみられる。青磁碗Ⅰ4a類か。122は青磁皿。内面見込みには櫛歯文が施される。底部外面はヘラケズリ。

123は肥前陶器皿。高台から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる丸皿である。体部外面下半は露胎となっている。現状で内面見込みには２箇所の胎土目がみられる。大橋編年Ⅰ－２期の所産。124は須恵器鉢である。緩やかに内彎しながら口縁部に向けて立ち上がる。125は砥石。小口側及び側面は欠損し、表裏２面が使用される。上図には粗い擦痕が、下図には細かな擦痕が認められる。所謂青砥と呼ばれる中砥であろう。126はサヌカイト製楔形石器である。表面右側に剪断面をもつ。上・下辺にはツブレがみられる。重量は11ｇ。

127は土師質皿。口縁部はやや厚く作られる。所謂へそ皿である。京Ⅸ期古段階の所産であろう。128は瓦器皿である。底部から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる。体部中ほどに弱い段がみられる。口縁端部はナデられ、やや尖り気味におさめる。129は白磁皿。底部から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁端部はナデられ、断面三角形を呈する。白磁皿Ⅷ類、12世紀中頃～13世紀前半の所産か。130は白磁皿である。胎土は陶製で、釉薬は乳白色を呈する。森田

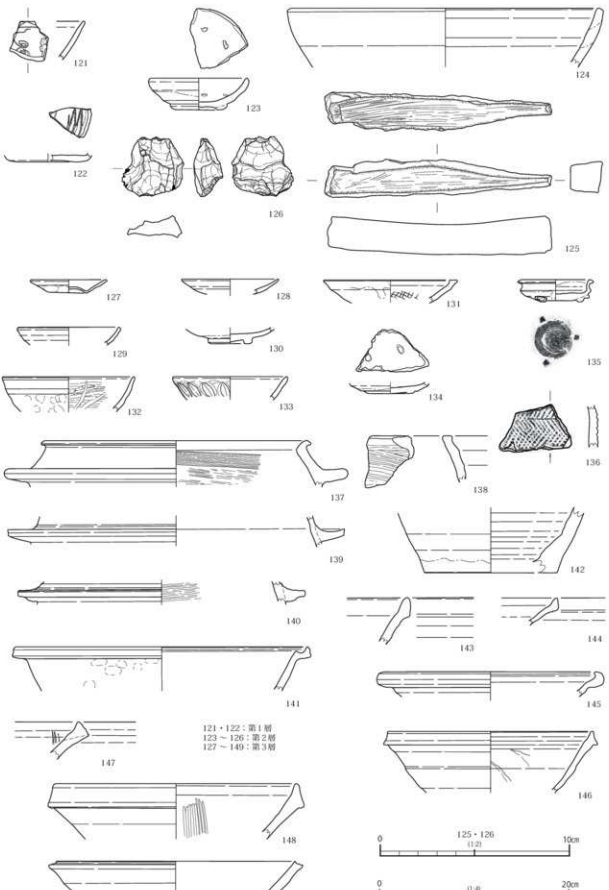


図92　1・2区　第1～3層　出土遺物

編年白磁Ｄ類であろうか。15 世紀代の所産と考えられる。131 は瀬戸・美濃焼卸皿である。底部から口縁部に向けて斜め上方に延び、口縁部直下で上方に立ち上がる。口縁端部は水平につくられ、やや内外に肥厚する。また、破片のため明瞭ではないが、口縁部は片口となっている。体部外面下半は露胎。藤沢編年古瀬戸後期Ⅳ期古段階の所産である。

132 は瓦器椀。体部外面下半は指オサエの痕跡を残す。内面は密なヘラミガキを施す。和泉型Ⅱ－３～Ⅲ－１期の所産であろう。133 は龍泉窯青磁碗である。体部外面には蓮弁文がみられる。青磁碗Ⅰ類。134 は緑釉陶器椀であろう。胎土は灰白色を呈する軟質。釉調は浅黄色である。高台は削り出しの輪高台となっている。内面見込みには現状で２箇所の目跡が確認出来る。山城系の緑釉陶器であろう。135 は瀬戸・美濃焼袴腰形香炉。口径は約７㎝、器高は約 2.3 ㎝を測り、扁平な器形である。口縁部内面から体部外上半には鉄釉が施釉される。底部外面は回転糸切り痕が残り、３方向に脚が付く。藤沢編年古瀬戸後期Ⅳ期新段階の所産であろう。136 は瓦質甕である。体部外面には綾杉状のタタキがみられる。137・138 は土師質羽釜。137 は内傾する口縁部をもち、端部は短く「く」の字状に折り返す。口縁部内面には粗いハケメを施す。13 世紀頃の所産であろうか。138 は口縁部外面に幅広の凹線が数条みられる。内面には粗いハケメが施される。139・140 は瓦質羽釜である。139 は長い鍔を、140 は短い鍔を巡らせる。141 は瓦質鍋。口縁部は折り返し、端部を上方に立ち上がらせる。口縁端面には凹線を巡らせる。口縁部内面には受け部が作られる。京Ⅸ期中段階ぐらいの資料か。142 は丹波焼壺。胎土は粗く、直径４㎜前後の小礫を多く含んでいる。体部から底部外面には自然釉がみられる。

143 ～ 146 は東播系捏鉢である。143 の口縁部は上方に強く拡張し、下方へは僅かに拡張させ、断面三角形状を呈する。森田編年Ⅱ期第２段階の所産であろう。144 は口縁部を上方に拡張させ、断面

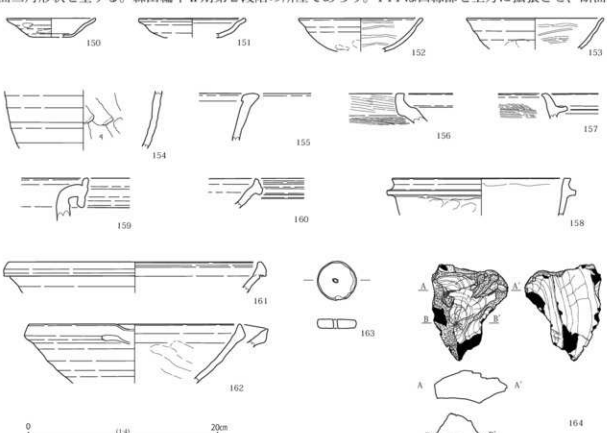


図 93　１・２区　第４層　出土遺物

三角形を呈する。口縁端部は重ね焼きの結果、溶着して剥がれている。森田編年Ⅱ期第1段階か。145は口縁部を体部に比して肥厚させ、口縁端部を内側に折り返す。森田編年Ⅲ期第3～4段階の所産か。146は口縁部を上下に拡張し、体部に比して肥厚させている。口縁端部は重ね焼きの結果、潰れて雑な仕上がりとなっている。効率良く使用するためか、体部内面には斜め方向の段が数箇所形成される。森田編年Ⅲ期第1段階の所産とみられる。147・148は備前焼擂鉢である。147は体部から連続的に続く口縁部をもち、端面は平坦に仕上げられる。内面には数条の擂目が確認出来る。乗岡編年中世2a期の所産であろう。148は口縁部を上下に拡張させ、端面をナデて凹線状に窪ませる。乗岡編年中世4期である。149は備前焼鉢。体部から口縁部に向けて直線的に開く。口縁端面は、内面側端部を摘み上げるように強くナデる。擂目が入らない段階の擂鉢かも知れない。乗岡編年中世2a期の所産であろう。

150・151は土師質皿である。150は体部中ほどから口縁部に向けて大きく外反する。体部外面には指オサエの痕跡を残す。京Ⅷ期新段階の所産。151は「て」の字状口縁の土師質皿。器壁は厚手の感がある。京Ⅴ期新～Ⅵ期古段階の所産であろう。152・153は瓦器椀。共に体部外面下半に指オサエの痕跡を残し、内面には粗いヘラミガキを施す。口縁端部は丸くおさめる。153に比して152は扁平気味の器形である。152は和泉型Ⅳ－1～2、153は和泉型Ⅲ－3期の所産であろう。154は灰釉陶器壷である。内面には幅2㎝程度のヘラケズリが斜め方向に施される。155は土師質鉢。156は土師質羽釜である。直立した口縁部をもつ。口縁部内面には粗いハケメを、肩部には細かいハケメを施す。157・158は瓦質羽釜。157は内傾する短い口縁部と短い鍔をもつ。口縁端面は平坦に作られ、端部は内側に肥厚させる。158は直立する短い口縁部と断面方形の短い鍔をもつ。口縁端面は平坦に作られる。共に14世紀代の所産か。159は常滑焼甕。口縁縁帯部が3㎝程に拡張され、断面「N」字状を呈する口縁となる。中野編年6b型式の所産。160～162は東播系捏鉢。160・161の口縁部は上下に拡張される。160は口縁端部を尖り気味に仕上げ、口縁端面には幅の狭い凹線が2条巡る。161は口縁端部を平坦に仕上げる。160は森田編年Ⅲ期第1～2段階、161は森田編年Ⅲ期第2段階の所産であろう。162は法量が縮小傾向にあり、上方に拡張した口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。森田編年Ⅱ期第2段階の所産。163は土製円盤。法量は直径4.2㎝、厚さ1㎝、重量20.2ｇ、孔径は0.4㎝である。164はサヌカイト製石核。表面には自然面が残る。左図左側にみられる稜線上を主として打点が複数確認出来る。裏面は1枚の大きな剥離面となっている。重量は270.7ｇである。

7．3－2区包含層出土遺物（図94・図版40）

図94－166～176・178～182が第4層、165・177・183が第4・5層出土である。

165～169は土師質皿。165は扁平で小型の土師質皿。口縁部は非常に短く、口縁端部は丸くおさめる。京Ⅲ期新段階の所産であろうか。166・167は口縁2段ナデを施す。口縁端部は強くナデられて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。166は京Ⅵ期中段階、167は京Ⅵ期新～Ⅶ期古段階の所産であろう。168はやや厚手の土師質皿。口縁端部は強くナデられ、断面三角形を呈する。磨滅が著しく調整不明。体部内面中ほどから底部にかけて、黒色顔料の付着がみられる。京Ⅶ古段階の所産か。169は底部から口縁部に向けて大きく外反する。口縁端部は強くナデられ、直立気味に立ち上がる。体部外面下半には指オサエの痕跡を残す。所謂へそ皿になるものであろう。京Ⅷ期新～Ⅸ期古段階の所産。

170～175は瓦器椀。170は口縁部外面にヘラミガキを、体部外面には指オサエを施す。内面は磨滅が著しく調整は不明。口縁端部内面に浅い沈線が1条巡る。楠葉型Ⅲ－2期の所産であろう。171

は体部外面下半に指オサエの痕跡を明瞭に残す。内面は縦方向の細かいヘラミガキの後に横方向のヘラミガキを施す。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。和泉型Ⅲ－１期の所産。172は口縁部外面にヘラミガキを、体部外面には指オサエを施す。内面は磨滅が著しく不明瞭であるが、ヘラミガキが確認出来る。口縁端部は丸くおさめる。和泉型Ⅲ－２期の所産か。173は断面三角形を呈する高台が付く。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、内面見込みにヘラミガキが確認出来る。174は断面台形状の扁平な高台が付く。内面見込みには粗い平行線状の暗文がみられる。175は断面台形状の高台が付く。体部外面下半には指オサエの痕跡が残る。内面見込みには粗い平行線状の暗文がみられる。和泉型Ⅲ－２～３期の所産であろうか。175は玉縁状の口縁部をもつ白磁碗Ⅳ類。177は須恵器杯か。底部外面は回転ヘラ切りである。

178・179は東播系捏鉢。178は口縁部を上方に拡張し、端部を尖り気味に仕上げる。内面は使用によるためか、剥落が著しい。森田編年Ⅱ期第２段階の所産。179は使用により、内面が平滑になっている。180は丹波焼壺。胎土は粗く、直径３㎜前後の小礫を多く含んでいる。体部から底部外面には自然釉がみられる。181は土師質羽釜。直立する短い口縁部をもつ。内面には細かなハケメが施される。182は瓦質羽釜である。口縁部は内傾し、外面には幅狭で浅い凹線が２条巡る。口縁端部は欠損。鍔は短い。鋤柄編年Ｂ群Ⅳ類であろうか。183は丸瓦。凹面側面には面取りが施される。凹面にはやや粗い布目

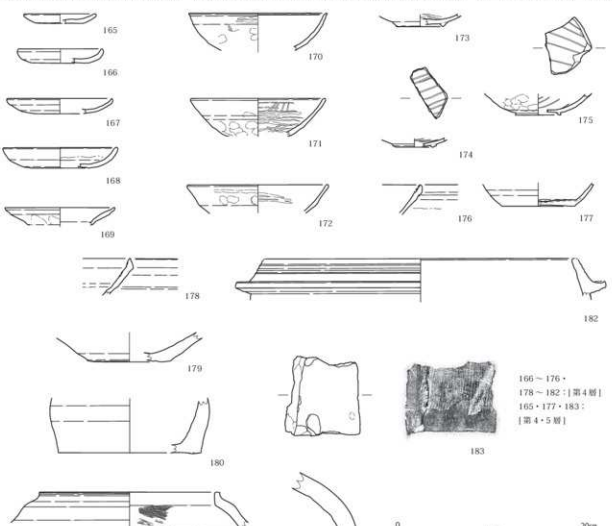


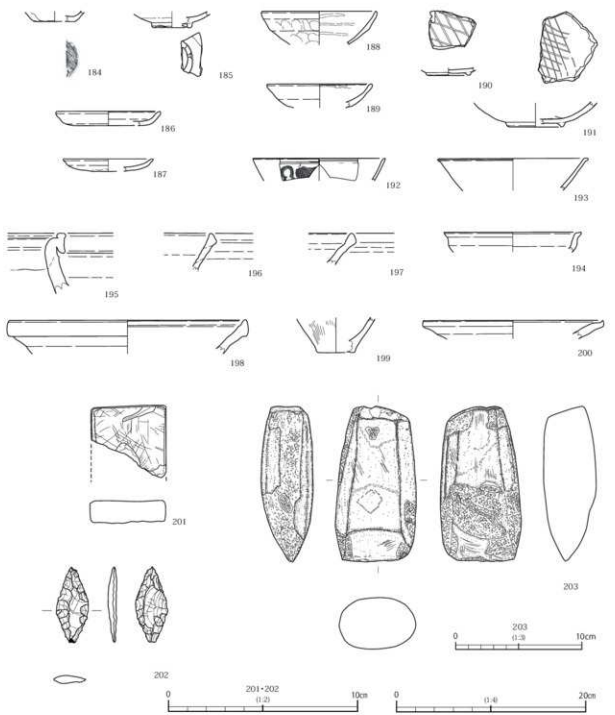
図94　３－２区　包含層　出土遺物

がみられる。

8．3－1区包含層出土遺物（図95・図版40・43）

図95－184・185が第3層、186～199・201～203が第4層、200が第6層出土である。

184は瀬戸・美濃焼茶入か。底部外面は回転糸切り底である。内外面には淡いオリーブ色の釉がみられる。185は白磁碗。胎土は陶製で、釉薬は乳白色を呈する。体部外面下半部は露胎である。高台は抉り入り高台で、2箇所の抉りが確認出来る。森田編年白磁D類であろうか。15世紀代の所産。



184・185：［第3層］　186～199・201～203：［第4層］　200：［第6層］

図95　3－1区　包含層　出土遺物

186・187は土師質皿。186は口縁2段ナデを施す。口縁端部を強くナデで直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。京Ⅴ期新段階の所産か。187は口縁部が外反し、端部は丸くおさめる。底部外面には指オサエの痕跡が残る。京Ⅶ期古段階の所産であろうか。188～191は瓦器椀である。188は体部外面下半に指オサエの痕跡を明瞭に残す。内面は粗いヘラミガキを施す。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。和泉型Ⅱ－3～Ⅲ－1期の所産。189は磨滅が著しく調整が不明瞭であるが、口縁部内面付近にヘラミガキが確認出来る。口縁端部は丸くおさめる。和泉型Ⅳ－4期の所産であろうか。190は断面台形状の高台が付く。内面見込みには格子状の暗文がみられる。和泉型Ⅱ期の所産であろうか。191は断面台形状の高台が付く。内面見込みには細かな平行線状の暗文がみられる。和泉型Ⅱ－2～3期の所産であろう。192は青花碗。体部外面には獅子または龍の文様がみられる。193は白磁碗Ⅷ類。底部から口縁部に向けて直線的に開き、口縁端部は端反となる。194は瓦質鉢か。底部から口縁部に向けて内彎しながら立ち上がる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は端反となる。口縁端面は平坦に作られる。195は常滑焼甕。口縁縁帯部が2㎝程に拡張され、断面「N」字状を呈する口縁となる。中野編年6a型式の所産。196～198は東播系捏鉢。196・197の口縁部は上方に拡張し、端部は丸くおさめる。断面は三角形状を呈する。森田編年Ⅱ期第2段階の所産であろう。198の口縁端部は僅かに上下に拡張し、断面三角形を呈する。口縁部内面には浅い段が巡る。森田編年Ⅱ期第2段階の所産であろう。199は弥生土器甕底部。磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、外面にはハケメがみられる。

200は庄内式甕である。口縁端部は上方に摘み上げるように、強くナデる。生駒西麓産の胎土である。

201は砥石。裏面は剥離しているため、使用痕跡は表面のみで確認出来る。3側面は成形時の調整痕が残る。緻密で精良な石質であることから仕上げ砥と思われる。202は平面菱形を呈するサヌカイト製凸基式石鏃。表面右側に残る剥離面が主要剥離面の剥片素材である可能性が高い。重量は2.8ｇである。203は太型蛤刃石斧。左側面や裏面刃部側は研磨が甘いため、成形時の敲打痕が顕著に残る。また頭部も研磨は施されていない。重量は528.3ｇ。

9．4区包含層出土遺物（図96）

図96－208・210は第1・2層、206・211～213は第3・4層、204・205・207・209は第4層出土である。

204は須恵器杯蓋。平城Ⅳ期の所産か。205・206は土師質皿。205は口縁部が外反し、端部はやや尖り気味におさめる。底部外面には指オサエの痕跡が僅かに残る。京Ⅶ新～Ⅷ期古段階の所産であろうか。206の底部は非常に薄く、口縁部はやや厚く作られる。外面には指オサエの痕跡が残る。所謂へそ皿になるものと思われる。京Ⅷ期新～Ⅸ期古段階の所産であろう。207は瓦器皿。体部下半外面には指オサエがみられ、内面にはヘラミガキが施される。208は緑釉陶器皿である。底部から口縁部に向けて内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端面は平坦に仕上げられる。胎土は硬質のもので、内面及び口縁部外面にオリーブ黄色の釉薬が施釉される。平安京Ⅲ期中段階の所産であろうか。

209は青磁碗。底部から口縁部に向けて内彎しながら立ち上がる丸碗である。口縁端部は丸くおさめる。210は白磁碗である。高台は削り出し高台で、高台端部外面は面取りを行なう。内面見込みには3箇所に目跡がみられる。211・212は東播系捏鉢。211は口縁部を上方に拡張させ、断面三角形を呈する。口縁端部は重ね焼きの結果、溶着して剥がれている。口縁端面には浅い凹線が1条巡る。森田編年Ⅱ期第2段階の所産であろう。213は備前焼擂鉢である。口縁部は上方に大きく拡張し、下方は

僅かに垂下する。口縁部内面には浅い段がみられる。口縁部外面には凹線は施されない段階である。擂り目は僅かに確認出来る。乗岡編年中世５a期の所産である。

なお、図化も写真撮影も行なっていないが、当区第４層より馬の歯が１点出土している。

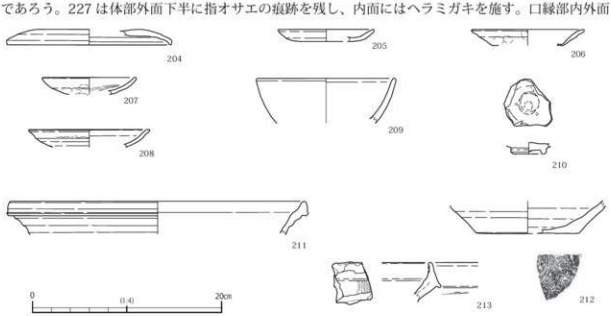
10. ５－１区包含層出土遺物（図97・図版41）

図97－214～219は第３層、220～236は第４層出土。

214は土師質皿。褐色系の胎土。短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。京Ⅷ期古～中段階の所産であろう。215は青磁碗。高台は削り出し高台で、高台端部外面は面取りを行ない、断面三角形を呈する。高台外面下半から高台内は露胎となっている。216は瓦質甕である。やや外反する短い頸部をもつ。口縁部の上端は上方に摘み上げるように強くナデ、下端は下方へ垂下する。口縁端面には浅い凹線が２条巡る。鋤柄編年Ⅰ－１型式か。217は瓦質羽釜。外面には幅狭で浅い凹線が２条巡る。口縁端部は欠損。鍔は短い。体部内面にはハケメが施される。鋤柄編年Ｂ群Ⅳ類であろうか。218・219は管状土錘である。共に長さ3.65㎝、最大径1.2㎝を測る。重量は218が４ｇ、219が4.7ｇである。

220～224は土師質皿である。220の口縁部はやや厚く作られる。所謂へそ皿である。京Ⅷ期新段階の所産であろう。221は短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。京Ⅷ期古段階に比定される。222の口縁端部は強くナデて直立気味に立ち上がり、断面三角形を呈する。京Ⅶ期中～新段階の所産か。223は口縁２段ナデを施す。口縁端部を強くナデており、断面三角形を呈する。口縁端部と底部外面にススの付着が観察出来る。灯明皿として使用されたのか。京Ⅵ期古段階の所産であろう。224は「て」の字状口縁の土師質皿。器壁は厚手の感がある。京Ⅴ期新～Ⅵ期古段階の所産であろう。

225～228は瓦器椀。225は口径が縮小し、器高も低くなる。体部外面下半に指オサエの痕跡を明瞭に残す。内面は摩滅が著しく、調整が不明瞭。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。和泉型Ⅲ－３～Ⅳ－１期の所産であろうか。226は体部外面下半に指オサエの痕跡を残し、口縁部外面には粗いヘラミガキを施す。内面は密なヘラミガキを施している。口縁端部は丸くおさめる。和泉型Ⅲ－２期の所産であろう。227は体部外面下半に指オサエの痕跡を残し、内面にはヘラミガキを施す。口縁部内外面



208・210：[第１・２層]　206・211～213：[第３・４層]　204・205・207・209：[第４層]

図96　４区　包含層　出土遺物

は磨滅が著しく調整不明。口縁端部は丸くおさめる。和泉型Ⅲ－１期の所産か。228は体部外面には指オサエを、内面にはヘラミガキを施す。口縁部内外面は磨滅が著しく調整は不明。口縁端部内面に浅い沈線が１条巡る。樟葉型Ⅲ－２期の所産であろうか。229・230は白磁碗。229の高台は削り出しの高い輪高台である。高台内は露胎となっている。230は白磁碗Ⅳ類の底部であろう。

231・232は常滑焼である。231は甕。外面には押印文が施され、灰褐色の釉がみられる。232は片口鉢である。底部から口縁部に向けて直線的に開く。口縁端部は四角くおさめる。中野編年５型式であろうか。233～236は東播系捏鉢。233は口縁部を上方に拡張し、端部を丸くおさめる。効率良く使用するためか、体部内面には斜め方向の段が数箇所形成される。234は口縁部を上方に拡張し、端部を尖り気味に仕上げ、断面三角形を呈する。235は口縁部を上方に拡張し、端部を尖り気味に仕上げ、断面三角形を呈する。口縁部端面には凹線が１条巡る。236は口縁部を上方に拡張し、端部を丸くおさめる。233・234・236は森田編年Ⅱ期第２段階、235は森田編年Ⅱ期第１～２段階の所産であろう。

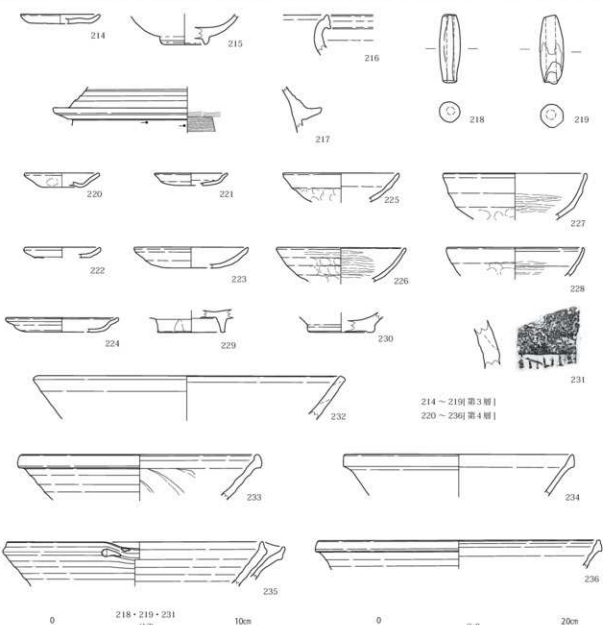


図97　５－１区　包含層　出土遺物

なお、図化も写真撮影も行なっていないが、当区第２層及び第４層より馬の歯が計３点出土している。

11．５－４・５－３区包含層出土遺物（図98・図版41・42）

図98－237・238は５－４区第４層、239は５－４区第３層、240・241は５－３区第２層、242～250は５－３区第３層、251～259は５－３区第４層、260は５－３区第４・５層出土。

237は白磁皿。高台は削り出し高台。体部下半から高台にかけては露胎となっている。238は緑釉陶器椀。胎土はやや黄色味がかった軟質の精良なものである。高台は貼り付け高台。底部外面は回転糸切り底である。239は石英製火打ち石。周縁部は発火打撃によるツブレが顕著で、磨滅が著しい。重量は11.6ｇである。

240は備前焼皿である。底部から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。16世紀後半頃の所産であろうか。241は瓦質羽釜。内傾する口縁部をもつ。口縁端面は

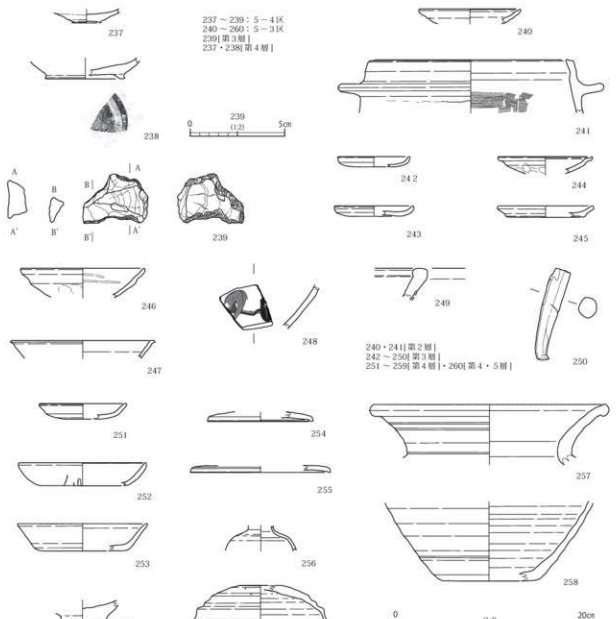


図98　５－４・５－３区　包含層　出土遺物

端部内面側をやや上方に摘み上げるようにナデて、平坦に仕上げる。体部内面には細かなハケメを施す。14 世紀代のものであろう。

242 ～ 244 は土師質皿。242 はやや外反する短い口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。底部外面には指オサエの痕跡が残る。京Ⅷ期古～中段階所産か。243 は直立気味に立ち上がる口縁部をもち、端部は強くナデて断面三角形を呈する。京Ⅶ期新段階の所産であろう。244 は「て」の字状口縁の土師質皿。器壁は厚手の感がある。底部外面には指オサエの痕跡を残す。京Ⅴ期中段階の所産。245 は瓦器皿。外反する短い口縁部をもち、端部は丸くおさめる。

246 は瓦器椀。口径が縮小し、器高も低くなる。体部外面下半に指オサエの痕跡を残す。内面は粗いヘラミガキを施す。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。和泉型Ⅳ－１～２期の所産であろうか。247 は白磁碗Ⅷ類。底部から口縁部に向けて直線的に開き、口縁端部は端反となる。12 世紀中頃～ 13 世紀前半代のものか。248 は白磁碗である。内面には雑描の模様が描かれる。249 は瓦質盤。底部から口縁部に向けて直線的に延びる。口縁部は方形を呈し、内面には浅い段が巡る。14 世紀前半代の所産であろう。250 は瓦質鍋三足の脚。脚部は面取り状になっており、断面多角形を呈する。

251 は土師質皿。短く外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。京Ⅷ期古～中段階の所産か。252 は土師質皿か杯。底部から口縁部に向けて緩やかに内彎しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。京Ⅵ期新～Ⅶ期古段階の所産であろうか。253 は須恵器椀。底部から口縁部に向けて外反しながら延びる。口縁端部は尖り気味におさめる。平安京Ⅱ期の所産であろうか。254・255 は須恵器杯蓋。256 は須恵器短頸壺。肩が張り、非常に薄手である。257 は須恵器甕。頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部は下端を肥厚させ、断面方形を呈する。口縁部外面には沈線が２条巡る。258 は東播系捏鉢か。内面は使用による磨滅が著しい。259 は弥生土器甕底部。磨滅が著しく調整は不明。

260 は須恵器杯蓋。天井部が厚めで、稜が退化傾向にある。口縁端部内面にみられる段も退化気味である。胎土には黒色粒がみられる。TK43 型式であろう。

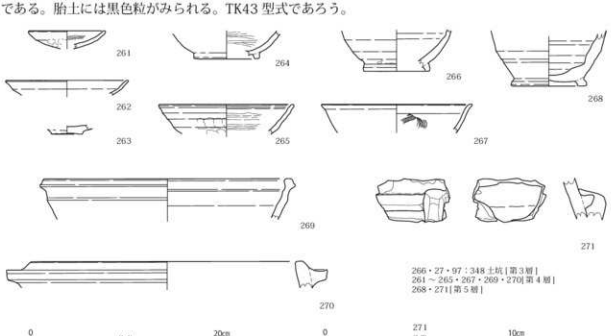


図 99　５－２区　包含層　出土遺物

12．５－２区包含層出土遺物（図 99・図版 41）

図 99 － 266・271 は第３層、261 ～ 265・267・269・270 は第４層、271 は第５層出土。

261 は瓦器皿。底部外面に指オサエの痕跡を残し、体部内面には細かなヘラミガキがみられる。262 は緑釉陶器皿である。胎土は硬質で精良なもの。釉薬はオリーブ灰色を呈する。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。平安京Ⅲ期頃の所産であろうか。263 は白磁皿。高台は削り出し高台。高台は露胎となっている。

264 は黒色土器（内黒）椀。体部外面は磨滅が著しく調整が不明。内面はヘラミガキを施す。高台は断面方形を呈する貼り付け高台。平安京Ⅲ期中頃の所産であろう。265 は瓦器椀。体部外面下半に指オサエの痕跡を残す。内面は粗いヘラミガキを施す。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面には沈線が１条巡る。楠葉型Ⅲ－３期の所産であろうか。266 は緑釉陶器椀である。胎土は硬質で精良なもの。釉薬は明オリーブ灰色を呈する。内面には釉が顕著にみられるが、外面は薄く不明瞭。高台は貼り付け高台で、露胎となっている。平安京Ⅱ期頃のものであろう。267 は白磁碗。底部から口縁部に向けて、やや内彎しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。口縁端部は尖り気味に仕上げる。内面には櫛描文がみられる。白磁碗Ⅴ類か。268 は須恵器壺。高台は、外方に踏ん張る形をなす貼り付け高台。８世紀代のものか。269 は篠窯産須恵器鉢。口縁部は丸みをもつが、端部を内外にやや尖り気味に肥厚させる。平安京Ⅱ期新段階頃の所産であろう。270 は土師質羽釜。口縁部は短く直立し、厚く短い鍔をもつ。全体的に磨滅が著しく調整は不明。摂津型羽釜である。平安京Ⅲ期中段階の所産であろう。271 は須恵器蹄脚硯か。小片のため全体像は不明。陸部は確認出来ない。突帯に接して断面方形、無装飾の脚が付く。

最後に、出土遺物からみた各層位の年代観を簡単に記述しておきたい。調査地は生産域が大半を占めていたこともあり、堆積層が大きく撹拌されるため遺物の上層・下層への拡散がみられた。そこで主体となる出土遺物の時期を代表させて、各層準の年代を比定しておく。

第７層は無遺物層であり、基盤となる地山である。第６層からは３－１区出土の庄内式土器１点があるのみである。第６層の範疇とした５－４・５－３区第７面谷は、最終埋没段階の自然流路から流木の出土があり、その放射性炭素年代測定結果は縄紋時代早期前葉及び中期末～後期初頭を示す。従って、谷の形成はそれ以前となるため、第６層は縄紋時代（或いは後期旧石器時代か）から古墳時代初頭に堆積したとみられる。

第５層は１区で５世紀末～６世紀代の須恵器や８世紀前半の須恵器、２区で黒色土器（内黒）や「て」の字状口縁の土師質皿、３区で６～８世紀代の須恵器などが出土している。時間幅がみられるが、５世紀から 11 世紀にかけて形成されたものと言える。

第４層はいずれの調査区でも、11 世紀～ 14・15 世紀の瓦器椀や土師質皿、常滑焼、東播系捏鉢、輸入陶磁器がみられる。中でも 12 世紀～ 13 世紀代の資料の出土点数が多くみられ、主体をなすことから、中世前半代の形成と捉えたい。

第３層はいずれの調査区でも、12 世紀～ 15 世紀の瓦器椀や土師質皿、瓦質土器、東播系捏鉢、備前焼擂鉢が出土する。主体となるのは 14 世紀～ 15 世紀段階の資料であることから、中世後半代と言える。

第２層からは、非常に幅広い時期の遺物が出土しているが、備前焼や丹波焼などの焼き締め陶器類や大橋編年Ⅰ期の肥前系陶器がみられることから 16 世紀～ 17 世紀前半の年代を与えておきたい。第１層は近世陶磁器を主体に出土することから 17 世紀後半～ 19 世紀としておきたい。

第４章　自然科学分析

今年度の調査においては、放射性炭素年代測定と花粉・珪藻分析を実施した。前者は、５－４区第７（最終）面で検出した542谷堆積物から人工遺物が出土しなかったため、谷の形成時期が特定出来なかったことによるものである。これに関しては株式会社パレオ・ラボに委託して行なった。後者は、今年度の調査区に広くみられる黒～黒褐色堆積物（第５層）及びその上層にみられる灰色堆積物（第４層）に関して古環境復元を目的として実施したものである。なお、今次の調査区よりも東に位置する平成19・20（2007・2008）年度調査においても、第２・８地区で検出した同層準とみられる黒褐色堆積物に関して同分析を実施している。広範にひろがる本遺跡での比較資料として古環境復元に際して重要なデータの蓄積となるものである。これに関してもパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。

第１節　放射性炭素年代測定

はじめに

今年度の調査において、各調査区で弥生～近世に至るまでの遺構面や出土遺物が確認されている。しかし、５－４区から５－３区にかけての最終面（第７面）で検出された谷状地形（542・489谷）では、堆積層から人工遺物が出土せず、時期決定が困難な状況にあった。谷状地形は、黄褐色～灰白のシルト～粗砂で徐々に埋まり、最終的に５－４区の中央部分を南北に流れる自然流路へと変わっていく。この最終埋没段階の流路より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行なった。

１．試料と方法

測定試料の情報、調製データは表１のとおりである。

試料№１（PLD-16588）は流路中層の土壌層から出土した流木（広葉樹）で、最外年輪を確認、採取している。試料№２（PLD-16589）は流路最下層の土壌層より、流路底に貼り付くように出土した流木で、最外年輪は確認されなかったものの、それに近いと考えられる部分を採取した。

なお、５－４区の北西で調査を行なった平成19・20（2007・2008）年度の第９地区凸部で、この自然流路の一部かと考えられる遺構（16流路）を確認しており、そこから出土した流木の放射性炭素年代測定を実施している。その結果、7028-6932calBC（15.9％）、6920-6878calBC（9.5％）、6848-6656calBC（69.9％）という年代値を得ている（PLD-11554、値は２σ暦年代範囲）。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

２．結果

表２に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行なって暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図100に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸め

表1　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16588	試料No. 1 調査区：5-4区 遺構面：第7面 遺構：542谷 層位：中層 遺物No. 1379	試料の種類：生材(広葉樹) 試料の性状：最外年輪(5年輪) 状態：wet その他：川が埋まっていく過程の最終的な細い流路, 人工遺物皆無	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1. 2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1. 2N)
PLD-16589	試料No. 2 調査区：5-4区 遺構面：第7面 遺構：542谷 層位：最下層 遺物No. 1382	試料の種類：生材 試料の性状：最外以外樹皮に近い部分を採取(5年輪) 状態：wet その他：川が埋まっていく過程の最終的な細い流路, 人工遺物皆無	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1. 2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1. 2N)

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-16588 試料No. 1 遺物No. 1379	−29. 14±0. 20	3984±23	3985±25	2563BC(38. 0%)2535BC 2493BC(30. 2%)2473BC	2571BC(56. 1%)2514BC 2502BC(39. 3%)2467BC
PLD-16589 試料No. 2 遺物No. 1382	−29. 41±0. 12	9098±30	9100±30	8306BC(68. 2%)8276BC	8343BC(95. 4%)8250BC

ていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ:Intcal09）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

3．考察

以下縄紋時代の土器編年との対応関係については、小林謙一（2008）、小林達雄編（2008）を参照した。

試料№１（PLD-16588）は、１σ暦年代範囲で 2563-2535 cal BC（38.0%）および 2493-2473 cal BC（30.2%）、２σ暦年代範囲で 2571-2514 cal BC（56.1%）および 2502-2467 cal BC（39.3%）となった。これは縄紋時代中期末から後期初頭にあたる。

試料№２（PLD-16589）は、１σ暦年代範囲で 8306-8276 cal BC（68.2%）、２σ暦年代範囲で 8343-8250 cal BC（95.4%）となった。これは縄紋時代早期前葉から中葉にあたる。

平成 19・20（2007・2008）年度調査で確認した自然流路については、流路中の流木の暦年代値（PLD-11554）が、今回の 542 谷最下層出土の試料№２よりやや新しく、同中層出土の試料№１より古いため、542 谷と同一遺構であっても矛盾はないといえる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学２　歴史のものさし―縄文時代研究の編年体系―」：257‐269, 同成社．

小林達雄編（2008）総覧縄文土器．1322p, アム・プロモーション．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}Ｃ年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}Ｃ年代」：3‐20, 日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughes, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009)) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111‐1150.

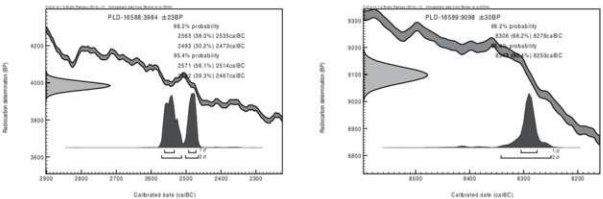


図 100　暦年較正結果

第２節　花粉・珪藻分析

はじめに

今回の分析調査では、吹田操車場跡１区における古墳時代の井戸内堆積物、および３－２区で採取した古代以前に形成された黒褐色堆積物を対象に、古環境に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析・花粉分析を実施する。

１．試料

分析試料は、６世紀代と推定される 158 井戸から４試料（図 17：試料番号１～４）、３－２区南北アゼ断面地点の堆積層から４試料（図 21：第４層、第４・５層、第５上層、第５下層）を採取した。これらの堆積物は発掘調査の成果から第４層が中世、第５層が古代以前に形成されたと推定されている。

２．分析方法

（１）珪藻分析

試料を湿重で７g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（４時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行ない、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は Round *et al.*（1990）に、壊れた珪藻殻の計数基準は柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms: 広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms; 広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。また、貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2.0% 以上の種類について主要珪藻化石群集の層位分布図を作成するほか、淡水生種の生態性についても 100 個体以上の試料について図示する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

（２）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理によ

る植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

3．結果

（1）珪藻分析

結果を表3・4、図 101 に示す。珪藻化石の産出頻度は3－2区の第4層が少なかった他は、堆積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は、158 井戸内堆積物が約 70%と化石の保存状態が良いが、3－2区の堆積層より採取された試料は 30%以下と悪い。産出分類群数は、合計で 35 属 123 分類群である。以下、地点ごとに述べる。

・158井戸

試料番号1～4試料は、産出種を塩分濃度に対するカテゴリーで類別すると淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻と言う）が全体の 85% 以上を占め優占する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種、好＋真アルカリ性種、流水不定性種と好＋真止水性種が優占あるいは多産する。珪藻化石群集も近似しており、流水不定性で付着性の *Ulnaria ulna*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema sphaerophorum*、*Eunotia bilunaris*、*Lemnicola hungarica*、それに、同じ生態性で沼沢湿地付着生種の *Eunotia minor*、好止水性で沼沢湿地付着生種の *Gomphonema acuminatum* がそれぞれ5～10% 産出する。

・3－2区南北アゼ断面

第5下層、第5上層は、珪藻化石群集が近似しており、淡水性種の生態性の特徴は貧塩不定性種、好＋真アルカリ性種、流水不定性種が優占する。主要種は、流水不定性で付着性の *Amphora copulata* が10～20% 産出し、流水不定性で沼沢湿地付着生種の *Cymbopleura naviculiformis*、流水不定性で付着性の *Caloneis silicula*、*Diploneis yatukaensis*、淡水～汽水生種の *Rhopalodia gibberula* 等を伴う。

第4・5層は、流水不定性で付着性の *Amphora copulata* が約 20% 産出し、同じ生態性の *Diploneis yatukaensis*、耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* 等を伴う。

第4層は化石が少なかったが、第4・5層試料で産出した種が散見される。

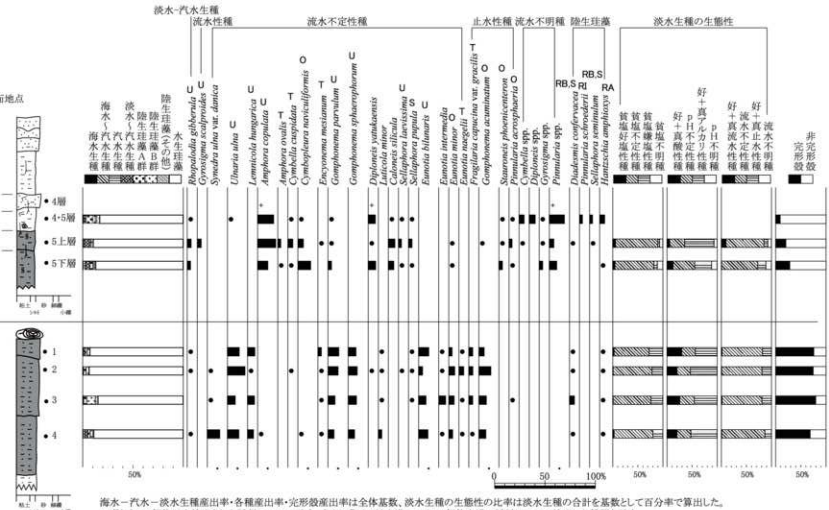
（2）花粉分析

結果を表5、図 102 に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料からも、古植生を検討する上で有意な量の花粉化石が産出する。以下、地点ごとに述べる。

・158 井戸

試料番号1～4のいずれも、保存状態はやや悪い。花粉群集組成はいずれの試料も類似しており、木本花粉ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属が多産し、モミ属、ツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属、シイ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。

草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く産出し、サナエタデ節－ウナギツカミ節、キ



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2 %未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
（環境指標種、O:沼沢湿地付着生種、S:好汚濁性種、U:広域適応性種、T:好清水性種、RA:陸生珪藻A群、RB:陸生珪藻B群、RI:未区分陸生珪藻）

図 101　主要珪藻化石群集の層位分布

表3 珪藻分析結果(1)

種類	生態性			環境指標種	調査地点・試料名							
					1号井戸				3-2区南花ブゼ			
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	4層	4-5層	5上層	5下層
Bacillariophyta (珪藻綱和門)												
Aulacoseira granulata (Ehr.)Simonsen	Oph-in	al-il	f-bi	M,U	–	–	–	–	–	1	–	–
Actinocyclus normanii (Greg.)Hustedt	Meh				–	–	–	–	–	1	–	1
Araphid Pennate Diatoms(無縫溝羽状珪藻類)												
Fragilaria capucina var. *gracilis* (Oestr.)Hustedt	Oph-in	ind	f-ph	T	8	8	8	1	–	–	–	–
Synedra ulna var. *danica* (Kuetz.)Grunow	Oph-in	ind	ind		–	2	4	25	–	–	–	–
Ulnaria ulna (Nitzsch)Compere	Oph-in	al-il	ind	U	24	35	16	23	–	1	–	–
Raphid Pennate Diatoms(有縫溝羽状珪藻類)												
Monoraphid Pennate Diatoms(単縫溝羽状珪藻類)												
Lemnicola hungarica (Grunow)Round & Basson	Oph-in	al-il	ind	U	15	6	14	12	–	–	–	–
Planothidium lanceolatum (Breb. ex Kuetz.)Lange-Bertalot	Oph-in	al-il	f-ph	K,T	1	–	–	–	–	–	–	–
Achnanthidium eutgyum (Grunow)Czarnecki	Oph-in	al-il	ind	S	1	–	1	1	–	–	–	–
Biraphid Pennate Diatoms(双縫溝羽状珪藻類)												
Amphora copulata (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald	Oph-in	al-il	ind	U	–	–	–	2	1	16	26	15
Amphora ovalis (Kuetz.)Kuetzing	Oph-in	ind	ind	T	–	–	–	–	–	–	6	1
Amphora pediculus (Kuetz.)Grunow	Oph-in	ind	al-bi	ind	T	–	–	–	1	–	–	–
Cymbella amphicephala Naegeli	Oph-in	ind	ind	T	–	–	–	1	–	–	–	–
Cymbella aspera (Ehr.)Cleve	Oph-in	al-il	ind	O	–	–	–	2	–	–	–	1
Cymbella cuspidata Kuetzing	Oph-in	ind	ind	T	–	1	–	–	–	1	10	2
Cymbella lanceolata (Ehr.)Kirchner	Oph-in	al-il	f-ph	T	–	–	–	1	–	–	–	–
Cymbella spp.	Oph-un	unk	unk		–	–	–	–	–	5	1	–
Cymbopleura naviculiformis (Auerswald)Krammer	Oph-in	ind	ind	O,U	–	–	–	1	–	2	11	19
Encyonema mesianum (Cholnoky)D.G.Mann	Oph-in	ind	ind	T	7	1	2	1	–	–	1	–
Encyonema silesiacum (Bleisch)D.G.Mann	Oph-in	ind	ind	T	–	1	1	–	–	–	2	–
Placoneis elginensis (Greg.)E.J.Cox	Oph-in	al-il	ind	O,U	2	–	–	–	–	–	–	–
Placoneis elginensis var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi	Oph-in	al-il	f-ph	U	–	1	1	–	–	–	4	–
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Oph-in	al-il	f-ph	O,U	11	24	15	14	–	–	2	–
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Oph-in	ind	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	1
Gomphonema gracile Ehrenberg	Oph-in	al-il	f-ph	O,U	3	–	3	2	–	–	1	2
Gomphonema lusignе Gregory	Oph-in	ind	unk		–	–	–	–	–	–	2	1
Gomphonema parvulum (Kuetz.)Kuetzing	Oph-in	ind	ind	U	22	20	14	12	–	1	3	5
Gomphonema pumilum (Grun.)Reichardt & Lange-Bertalot	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	2	–	–	–	–
Gomphonema pumilum var. *rigidum* E.Reichardt et Lange-B.	Oph-in	al-il	ind	U	–	2	1	1	–	–	–	–
Gomphonema sphaerophorum Ehrenberg	Oph-in	al-il	ind	U	16	18	17	13	–	–	–	–
Gomphonema subtile Ehrenberg	Oph-un	al-il	ind		1	–	–	–	–	–	–	–
Gomphonema spp.	Oph-un	unk	unk		–	–	–	–	–	1	–	–
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Oph-in	al-il	ind	T	2	3	–	1	–	2	5	4
Diploneis vutakaensis Horikawa et Okuno	Oph-in	ind	ind		–	1	–	–	1	8	4	12
Diploneis spp.	Oph-un	unk	unk		–	–	–	–	–	6	–	–
Eolimna tantula (Hust.)	Oph-in	ind	f-ph	RI,U	–	–	2	–	–	–	–	–
Navicula hasbergii Hustedt	Oph-in	ind	ind	RI	–	–	1	–	–	–	–	–
Navicula lapidosa Krasske	Oph-in	ind	ind	RI	–	–	1	–	–	–	–	–
Navicula placenta Ehrenberg	Oph-in	al-il	ind	RB,T	1	–	–	–	–	–	–	–
Navicula rostellata Kuetzing	Oph-in	al-il	f-ph	K,U	–	1	–	–	–	–	5	–
Navicula sepositа var. *lanceolata* Haraguishi	Oph-in	ind	f-ph		1	–	–	–	–	–	–	–
Navicula tokyonensis H.Kobayasi	Oph-in	ind	f-ph	RI	–	–	1	–	–	–	–	1
Gyrosigma procerum Hustedt	Oph-in	ind	ind	U	–	–	1	1	–	–	–	–
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Oph-in	al-il	f-ph	U	–	–	–	–	–	–	8	–
Gyrosigma spp.	Oph-un	unk	unk		–	–	–	–	–	1	3	5
Craticula ambigua (Ehr.)D.G.Mann	Oph-in	al-il	ind	S	–	1	–	1	–	–	1	–
Craticula cuspidata (Kuetz.)D.G.Mann	Oph-in	al-il	ind	S	–	–	–	1	–	2	1	1
Craticula halophila (Gran. ex V.Heurck)D.G.Mann	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	–	–	2	1	–
Craticula perretertii Grunow	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	–	–
Stauroneis anceps Ehrenberg	Oph-in	ind	ind	T	–	–	–	1	–	2	–	2
Stauroneis kriegeri Patrick	Oph-in	ind	ind	T	–	–	–	–	–	–	1	–
Stauroneis phoenicenteron (Nitz.)Ehrenberg	Oph-in	ind	f-ph	O,U	–	–	–	–	–	2	4	5
Stauroneis phoenicenteron fo. *luttorii* Tsumura	Oph-in	ind	ind	O	3	1	–	1	–	2	4	1
Stauroneis phoenicenteron var. *signata* Meister	Oph-in	ind	ind		–	–	–	–	–	1	–	3
Frustulia rhomboides var. *crassinervia* (Breb.)Ross	Oph-ha	ac-il	f-ph		3	1	1	–	–	–	–	–
Frustulia vulgaris (Thwait.)De Toni	Oph-in	al-il	ind	U	–	–	–	2	–	–	–	–
Brachysira brunnae (Podzorski & Hakan.)Lange-B. & Podzorski	Oph-in	ind	f-ph	U	–	–	2	–	–	–	–	–
Diadesmis biceps Arnott ex Grunow in Van Heurck	Oph-in	al-il	ind	RA,T	1	–	–	1	–	–	–	–
Diadesmis confervacea Kuetzing	Oph-in	al-il	ind	RB,S	3	5	10	2	–	–	1	–
Luticola minor (K.M.Patrick)Mayama	Oph-in	al-il	ind		1	5	6	7	–	–	–	–
Luticola mutica (Kuetz.)D.G.Mann	Oph-in	al-il	ind	RA,S	2	3	3	2	–	2	3	–
Neidium ampliatum (Ehr.)Krammer	Oph-in	ac-il	f-ph		1	–	2	1	–	–	1	4
Neidium bisulcatum (Lagerst.)Cleve	Oph-in	ac-il	ind	RI	–	–	–	1	–	–	–	–
Neidium iridis (Ehr.)Cleve	Oph-ha	ac-il	ind	O,U	–	–	–	–	–	–	1	1
Neidium tokyonensis H.Kobayasi	Oph-ha	ac-il	ind		–	–	–	–	–	–	1	1
Neidium spp.	Oph-un	unk	unk		–	–	–	–	–	2	–	–
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Oph-in	al-il	f-ph	U	1	–	–	–	–	–	2	–
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Oph-in	ind	f-ph	RB	–	1	2	1	–	–	1	1
Caloneis limosa (Kuetz.)R.M.Patrick	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	–	–	–	1	–
Caloneis minuta (Grunow)Ohtsuka et Fujita	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	1	–	–	–	1
Caloneis silicula (Ehr.)Cleve	Oph-in	al-il	ind		–	–	–	–	–	1	13	8
Caloneis tenuis (Greg.)Krammer	Oph-in	ind	ind	U	–	–	–	–	–	–	–	1
Caloneis undulata (Greg.)Krammer	Oph-ha	ac-il	ind		–	–	1	–	–	–	–	–
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Oph-in	al-il	f-ph	O	–	–	2	–	–	2	6	4

表4 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種	調査地点・試料名							
					1弥井戸				3-2区南走アゼ			
	塩分	pH	流水		1	2	3	4	4層	4-5層	5上層	5下層
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-in	ind	ind	RA,U	–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia brauniana (Grun.)Mills	Ogh-bi	ac-i	l-ph	P,U	5	1	1	–	–	–	–	–
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-in	ind	ind	U	–	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia brevicostata Cleve	Ogh-in	ac-i	ind		2	2	–	–	–	1	–	–
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-in	ac-i	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	1
Pinnularia divergentissima (Grun.)Cleve	Ogh-in	ac-i	ind		1	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia episcopalis Cleve	Ogh-in	ac-i	ind		–	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-in	ac-i	ind	O,U	5	3	5	3	–	–	1	2
Pinnularia gibba var. *linearis* Hustedt	Ogh-in	ac-i	ind		1	2	–	–	–	–	–	–
Pinnularia gracilioides Hustedt	Ogh-in	ac-i	ind		1	–	–	–	–	–	–	–
Pinnularia maximiformis (Ehr.)Cleve	Ogh-in	ac-i	l-ph		–	–	–	–	–	–	–	2
Pinnularia mesolepta (Ehr.)W.Smith	Ogh-in	ac-i	ind	S	2	–	–	–	–	–	1	–
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-in	ac-i	l-bi		–	2	1	1	–	2	–	1
Pinnularia obscura Krasske	Ogh-in	ind	ind	RA	–	–	1	1	–	–	–	–
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-bi	ac-i	ind	O	2	3	–	–	–	–	3	3
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-in	ind	ind	RB	–	–	2	–	–	–	–	–
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-in	ind	ind	RI	–	–	–	–	–	3	–	–
Pinnularia similis Hustedt	Ogh-in	ind	ind		–	–	–	1	–	–	–	1
Pinnularia stomatophora (Grun.)Cleve	Ogh-in	ac-i	ind		–	–	–	2	–	–	–	–
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-in	ac-i	ind	RB,S	1	–	4	1	–	–	1	1
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata* (Grun.)Cleve	Ogh-in	ac-i	ind	U	–	–	1	1	–	–	–	–
Pinnularia substomatophora Hustedt	Ogh-bi	ac-i	l-ph		1	–	–	2	–	–	–	1
Pinnularia viridis (Nitz.)Ehrenberg	Ogh-in	ind	ind	O,U	–	–	–	–	–	2	–	–
Pinnularia spp.	Ogh-un	unk	unk		–	–	–	–	7	15	9	11
Sellaphora bacillum (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-in	al-fi	ind	U	–	–	–	–	–	–	4	2
Sellaphora laevissima (Kuetz.)Mann	Ogh-in	ind	ind	U	–	1	–	–	–	1	6	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-in	ind	ind	S	2	2	4	–	–	1	7	2
Sellaphora seminulum (Grun.)D.G.Mann	Ogh-in	al-fi	ind	RB,S	–	–	–	–	–	3	1	–
管縁濃類												
Bacillaria paxillifer (O.F.Mull.)Hendey	Ogh-in	al-fi	l-ph	U	–	–	–	–	–	–	1	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-in	ind	ind	RA,U	1	2	2	1	–	5	–	3
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-in	al-fi	ind	U	1	1	1	1	–	–	–	–
Nitzschia clausii Hantzsch	Ogh-in	al-fi	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-in	al-fi	ind	S	–	–	1	–	–	–	–	–
Nitzschia nana Grunow	Ogh-in	ind	ind	S	1	1	–	–	–	–	–	–
Nitzschia signoidea (Ehr.)W.Smith	Ogh-in	al-bi	ind	T	–	–	–	–	–	–	1	1
Tryblionella levidensis W.Smith	Meh			S	1	–	–	3	–	–	2	3
Tryblionella plana (W.Sm.)Pelletan	Meh				–	–	1	1	–	–	1	–
Tryblionella victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-fi	ind	S	–	–	–	–	–	–	2	2
Tryblionella debilis Arnott	Ogh-in	al-fi	ind	RB,U	1	–	–	2	–	–	–	–
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-fi	ind	U	3	1	–	5	–	2	8	5
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-in	al-fi	ind	U	–	–	–	–	–	–	1	1
異管縁濃類												
Surirella angusta Kuetzing	Ogh-in	ind	ind	U	–	1	–	–	–	–	–	–
Surirella biseriata Brebisson	Ogh-in	al-fi	ind	U	–	–	1	–	–	–	–	–
Surirella minuta Brebisson	Ogh-in	ind	r-ph	U	1	–	1	1	–	–	–	–
Surirella tenera Gregory	Ogh-bi	al-fi	l-ph	U	–	1	–	2	–	–	–	–
切縁濃類												
Eunotia arcus Ehrenberg	Ogh-in	ind	ind	U	1	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-in	ac-bi	ind	U	21	8	15	19	–	–	–	–
Eunotia flexuosa (Breb.)Kuetzing	Ogh-in	ac-i	l-ph	O	4	–	1	1	–	–	–	–
Eunotia implicata Noepel & Lange-Bertalot	Ogh-in	ac-i	ind	O	2	–	–	–	–	–	–	–
Eunotia intermedia (Krass.)Noerpel & Lange-Bertalot	Ogh-in	ac-i	ind	T	3	6	14	4	–	–	–	–
Eunotia minor (Kuetz.)Grunow	Ogh-in	ind	ind	O,T	7	12	11	8	–	–	1	1
Eunotia monodon var. *asiatica* Skvortzow	Ogh-in	ac-i	ind		–	1	2	2	–	–	–	–
Eunotia naegelii Migula	Ogh-bi	ac-i	ind	T	3	10	3	1	–	–	–	–
Eunotia pectinalis var. *undulata* (Ralfs)Rabenhorst	Ogh-in	ac-i	ind	O	–	–	–	–	–	–	1	–
Eunotia veneris (Kuetz.)De Toni	Ogh-in	ac-i	ind	T	2	–	–	–	–	–	–	–
海水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	0	0	0	0	0
汽水生種					1	0	1	4	0	1	3	4
淡水～汽水生種					4	2	1	6	0	2	11	7
淡水生種					201	199	202	192	9	97	186	137
珪藻化石総数					206	201	204	202	9	100	200	148

凡例

H.R.:塩分濃度に対する適応性　pH:水素イオン濃度に対する適応性　C.R.:流水に対する適応性

Meh　:汽水生種　al-bi　:真アルカリ性種　l-bi　:真止水性種

Ogh-Meh　:淡水～汽水生種　al-fi　:好アルカリ性種　l-ph　:好止水性種

Ogh-bi　:貧塩好塩性種　ind　:pH不定性種　ind　:流水不定性種

Ogh-ind　:貧塩不定性種　ac-i　:好酸性種　r-ph　:好流水性種

Ogh-hob　:貧塩嫌塩性種　ac-bi　:真酸性種　r-bi　:真流水性種

Ogh-unk　:貧塩不明種　unk　:pH不明種　unk　:流水不明種

環境指標種

K:中～下流性河川指標種, M:湖沼浮遊性種, O:沼沢湿地付着生種, P:高層湿原指標種(以上は安藤, 1990)

S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe, 1995)

ク亜科、タンポポ亜科等も検出される。また、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属も、わずかながら認められる。なお、多産するイネ科花粉中には、栽培種のイネ属に類似する形態を示すもの（以下、イネ属型とする）も含まれていた。

・3－2区

第5下層～第4層は、158井戸の試料と比較すると花粉化石の保存状態が良好である。群集組成をみると、木本花粉ではマツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が多く産出し、モミ属、ツガ属、ハンノキ属、シイ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。層位的な変化を見ると、上位層に向かってアカガシ亜属やハンノキ属が減少し、マツ属が増加する傾向が認められ、最上位の第4層では多産する。

草本花粉はイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科等を伴う。また、水湿地生植物のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ゴキヅル属や、栽培種であるソバ属に由来する花粉も検出される。なお、158井戸と同様に、優占するイネ科花粉中にはイネ属型も含まれている。

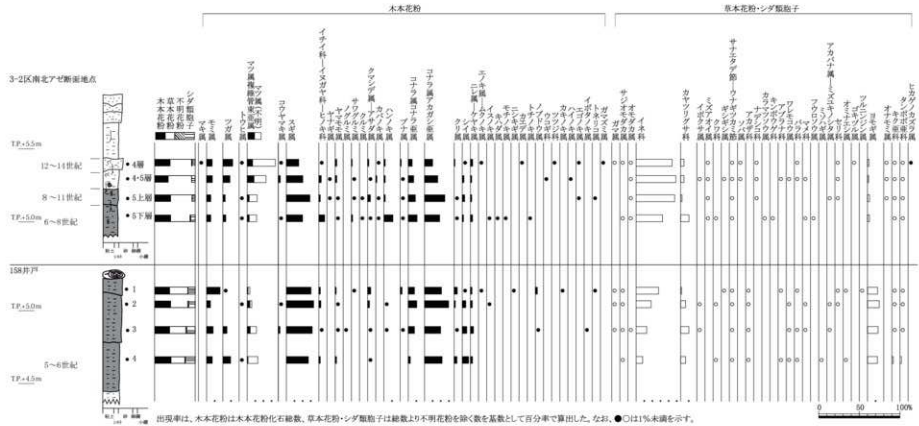
4．考察

（1）158井戸の古環境

6世紀代に機能していたとみられる158井戸を充填する堆積物は、層相は大きく変化せず、やや腐植にとむ砂質泥で充填されている。試料採取は調査担当者が行なったこともあり、実際に現地を確認出来なかったため、堆積構造については不明であるが、現地調査時の断面写真をみる限り、機能期ないし放置期に自然状態で堆積したことが推定される。珪藻化石群集は、珪藻殻の保存状態が良かったことから、風化作用の影響を受けていないことが窺える。また、各層準の珪藻化石群集は近似しており、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種が多産することが特徴である。以上の層相および珪藻化石群集の特徴を踏まえると、158井戸埋積期を通じて、堆積環境は大きく変化せず、沼沢湿地のような湿潤な環境下で埋積が進行したことが推定される。詳細な層相を踏まえた評価が必要であるが、井戸が放棄された後、埋め戻されず、放置されていた可能性がある。

一方、158井戸内堆積物の花粉化石群集を見ると、木本類ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属が多産する。このうちアカガシ亜属は、シイ属、ヤマモモ属等と共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、スギ属は、モミ属、ツガ属等と共に温帯針葉樹林要素である。よって、当時の周辺域では、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が分布しており、部分的にスギ属等の針葉樹がモザイク状に林分を形成していたと推測される。また、より標高の高い場所には、落葉広葉樹のブナ属等が生育し、周辺の河川沿いなどの適湿地には、サワグルミ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属等の河畔林要素、ハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属、トネリコ属等の湿地林要素も認められたと考えられる。平成19・20（2007・2008）年度に調査したC 8地区やC10地区でも、ツガ属、スギ属等の針葉樹やアカガシ亜属等の常緑広葉樹が多産する傾向が認められている。

大阪平野におけるボーリングコア等の花粉分析に基づく、完新世の植生変遷をみると、6000年前以降はシイ、カシなどの照葉樹林が段階的に増加し、約3000～2500年前頃にスギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガなどの針葉樹が増加する（古谷,1979; 前田,1984; 那須,1989など）。これらの針葉樹が大阪平野の周辺山地に増加したことは、気候が悪化したこと、とりわけ多雨化したことを意味するとされている（那須,1989）。また、温帯針葉樹は標高700m以下の照葉樹林域においてかなり生育して



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

図 102　花粉化石群集の層位分布

表5. 花粉分析結果

種類	地点・試料番号							
	1泉井戸				3-2区南北			
	1	2	3	4	4層	4-5層	5上層	5下層
木本花粉								
マキ属	–	–	–	–	1	–	–	–
モミ属	35	10	19	8	20	17	12	14
ツガ属	1	–	12	11	35	21	7	10
トウヒ属	–	1	–	1	1	–	1	1
マツ属複維管束亜属	2	7	9	1	19	20	6	7
マツ属(不明)	5	5	18	14	81	35	22	24
コウヤマキ属	–	1	5	–	2	6	–	2
スギ属	64	70	75	31	44	48	67	53
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	4	5	2	2	2	7	4	19
ヤナギ属	–	–	–	–	–	2	1	–
ヤマモモ属	3	1	1	2	6	5	2	2
ノグルミ属	–	–	1	–	–	–	–	–
サワグルミ属	1	–	–	–	3	2	1	4
クルミ属	–	–	–	–	–	–	1	1
クマシデ属－アサダ属	8	5	1	1	4	1	8	1
カバノキ属	–	–	–	–	2	3	1	2
ハンノキ属	–	2	2	–	5	4	4	30
ブナ属	5	–	1	–	4	1	2	2
コナラ属コナラ亜属	16	22	18	3	14	16	20	29
コナラ属アカガシ亜属	44	62	47	25	29	39	50	30
クリ属	8	3	1	4	3	–	1	1
シイ属	2	9	13	9	1	5	7	4
ニレ属－ケヤキ属	4	5	9	3	8	4	4	7
エノキ属－ムクノキ属	1	–	–	–	1	–	–	–
イスノキ属	–	1	–	–	–	–	–	1
キハダ属	–	–	–	–	–	–	–	1
モチノキ属	–	–	–	–	–	–	–	1
ニシキギ属	1	–	–	–	–	–	–	–
カエデ属	–	–	–	–	1	–	–	–
トチノキ属	–	–	–	–	–	–	–	1
ブドウ属	5	–	1	–	–	–	–	–
ウコギ科	–	–	–	–	–	1	–	–
ツツジ科	–	–	–	–	1	–	–	–
カキノキ属	1	–	–	–	–	–	–	–
ハイノキ属	–	–	–	–	–	1	–	–
エゴノキ属	–	–	–	–	1	–	1	–
イボタノキ属	–	–	1	–	–	–	–	–
トネリコ属	1	–	–	–	–	–	1	–
ガマズミ属	–	–	–	–	1	–	–	–
草本花粉								
ガマ属	1	3	1	–	1	–	–	–
サジオモダカ属	1	2	3	1	1	–	–	2
オモダカ属	–	–	1	–	2	3	4	6
イネ科	154	97	81	22	330	351	280	217
カヤツリグサ科	7	32	63	17	30	29	10	68
イボクサ属	–	1	4	–	–	1	–	–
ミズアオイ属	–	–	–	–	3	1	2	2
クワ科	–	1	–	2	–	–	–	1
ギシギシ属	1	–	–	–	2	1	1	–
サナエタデ節－ウナギツカミ節	4	3	6	2	2	4	2	1
ソバ属	–	–	–	–	1	1	–	–
アカザ科	1	1	2	1	–	–	–	–
ナデシコ科	–	–	–	–	1	1	1	–
カラマツソウ属	–	–	–	–	–	–	–	1
キンポウゲ科	–	–	–	–	–	–	–	1
アブラナ科	1	–	–	2	–	1	–	–
ワレモコウ属	–	1	2	1	1	1	–	–
バラ科	2	–	1	1	1	2	–	–
マメ科	–	1	2	–	–	1	–	1
アカバナ科	–	–	–	–	–	–	1	–
ミツバ科	–	–	–	1	–	–	–	1
アカバナ属－ミズユキノシタ属	–	1	1	–	–	–	1	–
セリ科	1	1	–	–	1	1	1	–
オミナエシ属	1	–	–	1	–	–	–	–
ゴキヅル属	–	–	–	–	1	–	–	–
アムニンジン属	1	–	–	–	–	–	–	–
ヨモギ属	69	76	81	34	14	11	15	16
オナモミ属	–	–	–	–	1	1	1	–
キク亜科	1	5	5	5	2	3	1	5
タンポポ亜科	4	2	4	5	6	3	4	1
不明花粉	13	11	16	5	11	4	11	8
シダ類胞子								
ヒカゲノカズラ属	–	–	–	–	1	–	–	–
他のシダ類胞子	94	88	132	68	56	62	36	78
合 計								
木本花粉	211	209	236	115	289	238	231	267
草本花粉	249	227	257	95	397	416	322	323
不明花粉	13	11	16	5	11	4	11	8
シダ類胞子	94	88	132	68	57	62	36	78
総計(不明を除く)	554	524	625	278	743	716	589	668

いたことも推定されている（高原,1998）。これらの植生変化は、遺跡の花粉分析調査でも確認されているが、遺跡の場合、より詳細な時間・空間スケールでの検討が可能であり、温帯性針葉樹の増加が縄紋時代中期以降の地形変化とも大きく関係していることが確認されている（辻本,2007）。また、縄紋時代晩期から古墳時代にかけて、生駒山西麓などの多くの地点でスギ属が増加することが確認されており（辻本,2009）、今回の結果も既存の調査事例と同調的といえる。

一方、草本類をみると、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く認められる。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、キク亜科、タンポポ亜科等も同様である。よって、これらの草本類が生育する草地が井戸周辺に広がっていたことが推定される。また、少ないながらもガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属等の水湿地生植物に由来する花粉化石も検出された。これらは、井戸が埋没していく過程で、井戸内に生育していた可能性もある。

（2）３－２区の古環境

７世紀～ 10 世紀の遺物が出土する第５下層～第５上層は、黒色～黒褐色を呈する細粒砂混じり泥からなる。未分解の植物遺体などはほとんど認められない。珪藻化石群集は、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産することが特徴であり、沼沢地あるいは湿地のような湿潤な環境を指標する。ただし、珪藻化石の多くが壊れたり溶解を受けており、産出種の多くは殻の丈夫な種類に限られていた。珪藻化石の分解過程については不明な点が多いものの、乾湿を繰り返すような場所では分解消失すると言われている。以上の層相・珪藻化石群集の特徴を踏まえると、第５下層～第５上層形成期の調査区は、乾湿を繰り返す、後背湿地のような比較的安定した堆積環境であったことが推定される。

第４・５層形成期以降は、その層相変化から、堆積環境が変化したことが推定される。第４・５層は、著しく擾乱されている灰～黄灰色を呈する砂質泥、第４層は擾乱されている灰色を呈する砂質泥からなる。これらの堆積層における珪藻化石群集は上記の５層の群集に類似するものの、大気に曝された好気的な堆積場所に生育する陸生珪藻の種群が増加するなどの変化が認められ、相反する環境を指標する種群からなる、混合群集の特徴を示している。混合群集は氾濫堆積物や水田耕作土などに特徴な群集である。以上の層相および珪藻化石群集の特徴から、第４・５層形成期になると、調査域の基準面が上昇し、氾濫堆積物が流入し、堆積後には好気的な場所へ変化する、氾濫原の堆積環境に変化したことが推定される。第４層で珪藻化石が産出しなかったことは、このような堆積環境が関係しているものと思われる。

古植生についてみると、第５下層～５上層では、上記の 158 井戸内堆積物の群集と類似する花粉化石群集が認められた。草本花粉の占める割合が高く、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属等の人里植物を含む分類群が多産し、オモダカ属、ミズアオイ属等の水・湿生植物が随伴して産出した。また、優占するイネ科花粉中には栽培種のイネ属型も含まれており、随伴する水・湿生植物は水田雑草としても生育する種を含む分類群である。上記の堆積環境を踏まえると、第５下層～５上層形成期には、これらの草本植物が生育する草地（湿地）が広がっていたことが推定される。本層準で特徴的に産出する木本花粉のハンノキ属は湿地・河畔林の構成要素を含む分類群であり、当時の調査域において林分は形成していないものの、生育していたことが推定される。また、第５下層～５上層形成期には、湿地ないし近辺において、稲作が行なわれた時期を挟在している可能性もある。

第４・５層では、草本花粉の占める割合がさらに増加する。上記したように堆積環境が変化することから、河川氾濫等の植生撹乱要因により、草地の成立領域がさらに拡大した可能性がある。また、第４

層については、発掘調査所見として、耕作土の可能性があることから、人為的な植生撹乱による草地領域の拡大の可能性も考えられる。

このように第５層形成期以降の調査区一帯は、草地が卓越する領域であり、林分が発達することはなかったと推定される。そのため、検出された木本花粉の多くは、周辺の台地や丘陵などの植生を反映していることになる。第４・５層では、ハンノキ属、コナラ亜属花粉の割合が減少し、マツ属が増加傾向を示すようになり、第４層では急増し、卓越するようになる。マツ属のうち、亜属まで同定できたものは、全て複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、生育の適応範囲が広く、極端な陽樹であることから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。従って、第４・５層形成期には台地上などにおいて、マツ属が分布を広げ、第４層形成期にはマツ属二次林が成立していたことが推定される。河内平野および周辺地域の花粉分析結果では、12 世紀後半および 16 世紀後半頃にマツ属が段階的に急増することが確認されている（辻本・辻 ,2008）。今回の第４層における急増は、第４層から 12 ～ 14 世紀の遺物が出土することと同調的である。

引用文献

安藤　一男 ,1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 . 東北地理 ,42,73-88.

Asai, K. & Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10, 35-47.

原口　和夫・三友　清史・小林　弘 ,1998, 埼玉の藻類　珪藻類 . 埼玉県植物誌 , 埼玉県教育委員会 ,527-600.

古谷　正和 ,1979, 大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷 . 第四紀研究 ,18,121-141.

Hustedt, F.,1937-1939,Systematische und okologische Untersuchungen　uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. Archiv fur Hydrobiology, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:63 8-790,16:1-155,16:274-394.

伊藤　良永・堀内　誠示 ,1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用 . 珪藻学会誌 ,6,23-45.

小杉　正人 ,1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用 . 第四紀研究 ,27,1-20.

小林　弘・出井　雅彦・真山　茂樹・南雲　保・長田　啓五 ,2006, 小林弘珪藻図鑑 . 第１巻 , internal 内田老鶴圃 ,531p.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA.eine Monographie der europaischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26. J.CRAMER,353p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1. Gustav Fischer Verlag,876p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae,Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2. Gustav Fischer Verlag,536p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales,Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3. Gustav Fischer Verlag,230p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae.4.Teil: Achnanthaceae,Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band2/4. Gustav Fischer Verlag,248p.

Lowe, R.L,1974,Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms.

334p. In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005.Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

前田　保夫 ,1984, 花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積 (更新) 世後期以降の植生変遷 . 宮脇　昭 (編著), 日本植　生誌　近畿 , 至文堂 ,87-99.

那須　孝悌 ,1989, 活動の舞台：概論 . 永井　昌文・那須　孝悌・金　関恕・佐原　真 (編著), 弥生文化の研究 1　弥生人とその環境 , 雄山閣出版 ,119-130.

Round, F. E.., Crawford, R. M. & Mann, D. G.1990,The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.

高原　光 ,1996, 近畿地方の植生史 . 図説 日本列島植生史 , 安田喜憲・三好教夫編 , 朝倉書店 ,114-137.

辻本裕也 ,2007, 1 万年の植生史－大阪湾岸地域の考古遺跡における古植生調査を基に . 日本植生史学会第 22 回大会講演要旨集

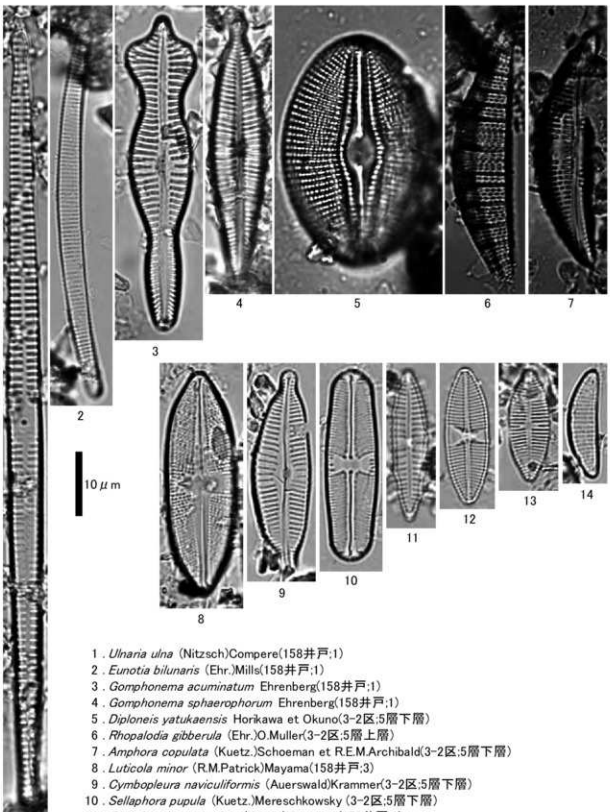
辻本　裕也 ,2009, 完新世後半の温帯性針葉樹花粉の産状について－大阪平野とその周辺地域の遺跡調査成果を基に－. , 日本花粉学会第 50 回大会講演要旨集 ,

辻本　裕也、辻　康男 ,2008, 生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷. , 日本花粉学会第 49 回大会講演要旨集 ,83.

Vos, P.C. & H. de Wolf,1993,Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects.Hydrobiologica,269/270,285-296.

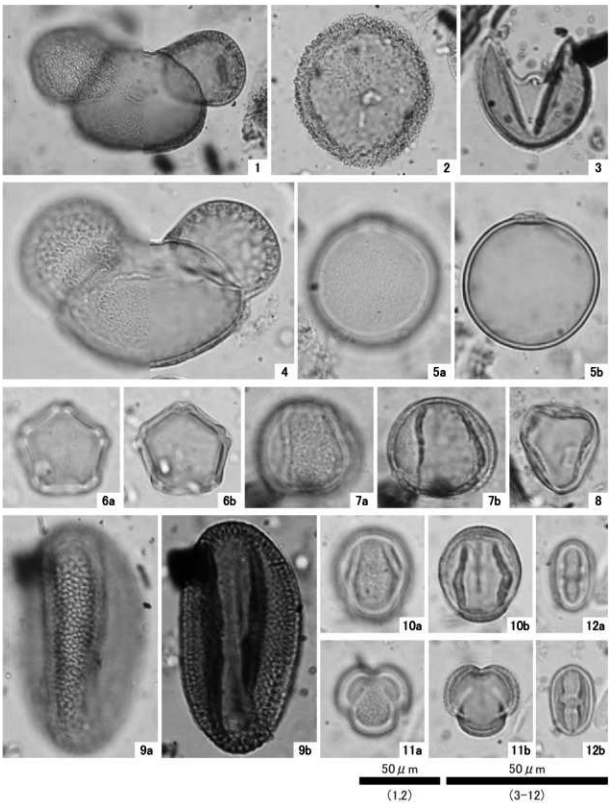
渡辺　仁治・浅井　一視・大塚　泰介・辻　彰洋・伯耆　晶子 ,2005, 淡水珪藻生態図鑑 . 内田老鶴圃 ,666p.

柳沢　幸夫 ,2000, Ⅱ -1-3-2-(5) 計数・同定 . 化石の研究法－採集から最新の解析法まで－ , 化石研究会 , 共立出版株式会社 ,49-50.



1 . *Ulnaria ulna* (Nitzsch)Compere(158井戸;1)
2 . *Eunotia bilunaris* (Ehr.)Mills(158井戸;1)
3 . *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg(158井戸;1)
4 . *Gomphonema sphaerophorum* Ehrenberg(158井戸;1)
5 . *Diploneis yatukaensis* Horikawa et Okuno(3-2区;5層下層)
6 . *Rhopalodia gibberula* (Ehr.)O.Muller(3-2区;5層上層)
7 . *Amphora copulata* (Kuetz.)Schoeman et R.E.M.Archibald(3-2区;5層下層)
8 . *Luticola minor* (R.M.Patrick)Mayama(158井戸;3)
9 . *Cymbopleura naviculiformis* (Auerswald)Krammer(3-2区;5層下層)
10 . *Sellaphora pupula* (Kuetz.)Mereschkowsky (3-2区;5層下層)
11 . *Gomphonema parvulum* (Kuetz.)Kuetzing (158井戸;1)
12 . *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(縦溝殻:158井戸;3)
13 . *Lemnicola hungarica* (Grunow)Round & Basson(無縦溝殻:158井戸;2)
14 . *Eunotia intermedia* (Krass.)Noerpel & Lange-Bertalot(158井戸;3)

写真3　珪藻化石



1．モミ属(158井戸;2)
2．ツガ属(3-2区;4層)
3．スギ属(158井戸;2)
4．マツ属(3-2区;4層)
5．イネ科(158井戸;2)
6．ハンノキ属(3-2区;4・5層)
7．コナラ属コナラ亜属(158井戸;2)
8．カヤツリグサ科(158井戸;2)
9．ソバ属(3-2区;4層)
10．コナラ属アカガシ亜属(158井戸;2)
11．ヨモギ属(158井戸;2)
12．シイ属(158井戸;2)

写真4　花粉化石

第5章　総　括

これまでに吹田操車場遺跡では、数次に亘る発掘調査が行なわれており、旧石器時代から現代に至る様々な営みの痕跡を明らかにしてきた。今次は吹田操車場遺跡における西端部での調査となり、今まで調査の及んでいなかった部分の様相を明らかにするといった点において、重要な意味をもった調査となった。以下に、今回の発掘調査及び自然科学分析を通して明らかに出来た点について最初に概要を述べ、後に時代毎のまとめを簡単に記しておきたい。

今次の調査においては、調査地最東端に位置する5－2区と他の調査区と大きく2つのグループに土地利用の様相を分けることが出来る。

5－2区は北摂山地から南側に派生した丘陵部の西端にあたり、調査地内において最も安定した高い地形を占地している。従前の調査〔平成19・20（2007・2008）年度調査第8区〕において、この丘陵上は居住域であったことが確認されている部分である。今回の調査では明確な建物を確認することが出来なかったが、中世の木棺墓や焼土坑などを検出しており、居住域の西端付近を押さえることが出来たものと考えられる。この調査区から西側へは緩やかに下がる地形となっている。

一方、5－2区以西に広がる低地部は、古代以前に形成された谷状地形を利用し、連綿と耕作地として使用していたことが明らかとなった。この耕地の開発は、平安時代の終わり頃に特に進んだと思われ、低地部は埋まり、高い場所は削られて次第に平坦化され、広範囲に水田や畠などの耕地が拡大し、大正時代に操車場が出来るまでは耕作地としての景観が維持されていたことが明らかとなった。

縄紋時代：長原式土器の底部やサヌカイト製凹基式石鏃等の遺物が出土しているが、人為による遺構は確認出来なかった。しかし、5－4・5－3区第7（最終）面において谷状地形を検出し、縄紋時代の古い段階は非常に起伏の大きい地形であったことを明らかに出来た。この谷状地形は東西幅約35m、深さ約1.6mを測り、北西から南東にはしるものであった。谷は埋積を続けた結果、最終的に5－4区中央を流れる幅約5mの流路へと姿を変える。流路は断面観察の結果、一時のものではなく、多時期に亘って流れたようである。そのことは流路内から出土した流木に対し、放射性炭素年代測定を実施した結果からも首肯出来よう。

流木の放射性炭素年代測定は、最下層出土試料が約11000年前の縄紋時代早期前葉～中葉、中層出土試料が約4900年前の縄紋時代中期末～後期初頭との成果を得た。最下層試料のデータは、5－4区西側に位置する平成19・20（2007・2008）年度調査の第9地区第5面16流路で行なった同測定の数値（約8700年前、縄紋時代早期中葉）に近いもので、16流路と今回検出の流路が同一である可能性が高いことを示す。

流路内出土の流木は樹種鑑定の結果、コナラ亜属であった。これは、先述の16流路における花粉分析の結果を支持するものである。すなわち、16流路周辺ではハンノキ属の湿地林とコナラ属コナラ亜属を主とする落葉広葉樹が分布していたとされ、コナラ亜属である流木はこの後者を示すものと言える。

谷は縄紋時代早期前葉には流路へと姿を変えることが明らかとなったが、その形成はそれ以前である。谷を形成するベースが低位段丘構成層上部にみられる黄褐～黄色粘土に類することから、後期旧石器時代には存在していた可能性を想定しておきたい。

なお、5－4区から西へ約110mのところに位置する片山荒池遺跡では、調査区東側部分で東西に

流れる幅約30mの谷状地形を検出している。この谷は完掘されておらず詳細は不明であるが、規模やその走流方向から考えて今回検出の谷と一連のものとなる蓋然性が高いと思われる。

弥生時代：5－2区第7（最終）面で弥生土器を出土する不定形土坑を数基検出した。この土坑群は東・南側に隣接する平成19・20（2007・2008）年度調査の第8地区第5面で検出されたものと同種の遺構である。今回検出した土坑出土の弥生土器は破片であり、磨滅が著しく時期を特定するには至らなかったが、前回の調査成果から弥生時代中期後半とみて差し支えないであろう。

また、弥生時代の遺構には伴っていないが、中世の包含層や遺構から弥生土器片や、サヌカイト製石鏃・楔形石器・石核・剥片、太型蛤刃石斧などが出土しており、遺跡西端部周辺には弥生時代の集落が広がっていたものと推察される。

古墳時代：遺構・遺物共に希薄であった。1区第6面、5－2区第6面でそれぞれ158井戸・435土坑（水溜状施設）を検出した。158井戸は、井戸を覆う第5層（133谷埋土）から5世紀末～6世紀代（TK47～MT15型式・TK10～TK43型式）の須恵器が出土していることから、古墳時代後期には完全に廃棄されていたと言える。

第5層出土の古墳時代須恵器の出土位置は限定的で、1区でもY＝－43,330以東でしか出土しない。ここから約60～70m北西には、6世紀前葉・6世紀後葉～7世紀初頭に形成された密集土坑群や掘立柱建物を検出した片山荒池遺跡が位置する。出土須恵器の年代も一致することから、第5層に包含される古墳時代資料は片山荒池遺跡から供給された可能性が高いものであろう。

さて、第5層は黒色や黒褐色を呈するシルト～粘土である。この層準に関して珪藻・花粉分析を実施した結果、沼沢地或いは湿地のような湿潤な環境にあったことが指摘された。すなわち、調査において133谷と呼称したように、東西にはしる低まった谷状地形に溜まった湿地状堆積物と言える。このことから、追加調査を行なった下水管区や片山荒池遺跡のように、標高がやや高くなる地点では明瞭な黒色シルト～粘土層が確認出来なかったことも理解されよう。

一方、1区の南側約150mに位置する昭和町遺跡B地点では、5世紀中頃の須恵器を出土する黒灰色粘土層が確認されている。黒色シルト～粘土層が堆積する谷状の地形は、本調査区から南西に向けてはしるものと想定される。

古代：遺構・遺物共に非常に希薄であった。平成19・20（2007・2008）年度の調査において指摘された、古代の集落は前回調査の第8地区以東にみられる微高地上に点在し、第8地区以西の低地部は耕作地として使用したとの見解を追認する結果となった。

第8地区以西の低地部に位置する今回の調査区では、古代の遺構面である第5面（第5層上面）が地震による揺れのためか、上層の第4層や下層の第6・7層を巻き込んだマーブル模様状を呈しており、明確な耕作痕を捉えることが出来なかった。しかし、3－2区で実施した第4～5層における花粉・珪藻分析によれば、第5層の形成期において湿地ないし近辺で稲作が行なわれた可能性が指摘されており、耕作地として使用されていたことを窺わせる。

なお、低地部に位置するが、5－4区第6面において第5～7層のブロック土を埋土とする平面長方形を呈する土坑を1基検出している。遺物が出土していないこともあり、性格や時期は不明であるが、平面形態や規模等を勘案すれば土壙墓であった可能性を指摘しておきたい。

遺物に関しては、1区第6面133谷（Y＝－43,330以西の第5層）・3－2区第6面133谷（第5層）出土の墨書土器（図86－17・図88－49）が注目される。前者は8世紀前半の須恵器杯Aの体

部外面に記号を、後者は8世紀後半の須恵器杯Bの底部外面に「秦」と墨書されたものである。当該期の集落は、吹田操車場遺跡中央部で検出されているが、西端部付近では確認されていない。1km以上離れた当該期の集落からもたらされたとは考え難いことから、今次調査区の北側に広がる微高地上に集落が存在していた可能性を想定しておきたい。また、吹田操車場遺跡ではこれまでも施釉陶器（灰釉・緑釉陶器）の出土が注目されてきたが、今次調査においても少ないながら出土がみられた。大半が細片となっているため、隣接する平成19・20（2007・2008）年度調査の第7・8地区に広がる集落から廃棄されたものと考えたい。

なお、従前の調査（吹田操車場遺跡中央部付近）で確認されていた、七尾瓦窯・吉志部瓦窯産と推定される軒丸瓦等はみられなかった。遺跡内における土地利用の相違を示す一例と言える。

古代以降：調査区東端に位置する5－2区以西は生産域となり、嶋下郡南部条里の条里地割（N－33°－W）に則る耕作地が近代に至るまで連綿と営まれることになる。中でも、5－4区においてはY＝－43,230ライン付近で、中世から近代に至る条里関連遺構（第0・1面510大畦畔、第2面519～521溝、第3面525～527溝、第4面530溝、第5面538溝）を検出したことは大きな成果といえる。今回の調査区は、嶋下郡南部条里の復元案によれば、17条7里七坪・八坪及び18条7里十二坪に属することが想定される。検出した条里関連遺構は、このうち七坪と八坪の坪境になるものと考えられる。そして、そこから西に目を向ければ、1.5町分（約160m）西側には1区第1面32池東肩、第2面62溝、第5面155落込み東肩が存在する。調査時には条里関連遺構との意識はなかったが、条里関連遺構であった可能性を指摘しておきたい。なお、1町分西側は3－2区に当たるが、近世の溜池の造成によって改変が著しく、条里関連遺構の存在は判然としていない。

一方、微高地の縁辺部となる5－2区においては、居住関連遺構は確認出来なかったものの、焼土坑（394土坑）や395木棺墓を検出した。焼土坑・木棺墓とも吹田操車場遺跡で初めて検出した遺構であり、今後の集落構造の復元に際して貴重な資料となる[1]。

焼土坑の性格や時期は明確に出来なかった。このような焼土坑の近傍での類例として、同じ北摂地域で調査が行なわれた箕面市所在の粟生間谷遺跡のものが挙げられる。粟生間谷遺跡では12世紀中頃から13世紀の集落が丘陵上に展開しており、その集落縁辺部で多数の焼土坑が構築されている。やはり性格や使用時期などを明確にし得ていないが、北摂では炭焼きが盛んであったこと、平安時代から鎌倉時代には「木灰」が肥料として使用されたとの重要な指摘がなされている。北摂地域の古代から中世集落において看過出来ない遺構として焼土坑は注目されるものである。

なお、こうした焼土坑は古墳時代以降の鍛冶関連遺跡や製鉄遺跡でも多数の検出例がみられ、伏せ焼式の炭窯として性格付けされることが多い。394土坑とそれらを比較しても、大きさや被熱痕跡の状況が酷似している。先の粟生間谷遺跡での指摘と併せて、394土坑も伏せ焼式の炭窯と理解しておきたい。

395木棺墓は、吹田市域検出の中世墓として、垂水遺跡の2例に次ぐもので重要な資料となった。

該墓は12世紀中～後半頃に築かれたものである。墓の主軸ラインはN－37°－Wを示しており、嶋下郡南部条里の条里地割を意識して構築されたことが窺える。半身の瓦器椀や頭頂部に被せたような土師質皿の副葬方法は、当該期の葬送儀礼を検討する上で看過出来ない資料と言える。また、木棺の大半は腐朽していたが、一部に桟木が遺存していたことは木棺の構造を復元する際の材料として貴重である。

この時期の北摂での墓は、箕面市粟生間谷遺跡や豊中市小曽根遺跡などでみられるように、概して、屋敷墓的な位置付けで建物の近辺から検出される例が多い。翻って今次調査においてはもちろん、隣接

する平成19・20（2007・2008）年度調査の第8地区においても、当該期の集落は確認されていない。近隣の調査事例からすれば、埋葬された人物が生活を営んだ集落は、395木植墓からさほど離れていない場所に存在するものと想定され、未だ調査の及んでいない5－2区北側部分に求められるであろう。今後の調査が待たれるところである。

中世段階の出土遺物は、従前の調査での出土傾向と大きく変わることがなかった。これまでの指摘通り、瓦器椀や土師質皿などの日常雑器の他、東播系捏鉢や瀬戸・美濃焼卸皿・香炉、常滑焼甕・鉢、備前焼甕・擂鉢、輸入陶磁器（青磁・白磁・青白磁合子蓋）などの他地域からの搬入品が比較的多く存在することが、この遺跡の特徴の一つと言えるであろう。

註

1）中世墓は同時期に調査を行なっていた吹田信号場基盤整備工事に伴う調査の13区（吹田操車場遺跡C地点）でも1基検出している。従って、当遺跡では2基の中世墓が確認されたことになる。
（財）大阪府文化財センター　2011年『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第216集　吹田操車場遺跡Ⅴ－吹田操車場遺跡・同C地点・明和池遺跡－』

参考文献

橘田正徳　1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究　Ⅶ』日本中世土器研究会

橘田正徳　1993「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究　NO.13』日本貿易陶磁研究会

香川　一　1996「焼土坑に関する再検証」『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』論集しのぶ考古刊行会

吉野滋夫　1996「所謂木炭焼成遺構について」『論集しのぶ考古－目黒吉明先生頌寿記念－』論集しのぶ考古刊行会

吹田市教育委員会　1998「第3章　昭和町遺跡B地点の発掘調査」『平成9年度　埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

吹田市教育委員会　1999「第2章　昭和町遺跡B地点の発掘調査」『平成10年度　埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

黒須亜希子　2001「第4章　A地区の調査成果　第8節　A地区のまとめ」『（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第66集　吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点』（財）大阪府文化財調査研究センター

信田真美世　2003「Ⅴ　総括　第2章　集落」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第85集　粟生間谷遺跡（本文編）』（財）大阪府文化財センター

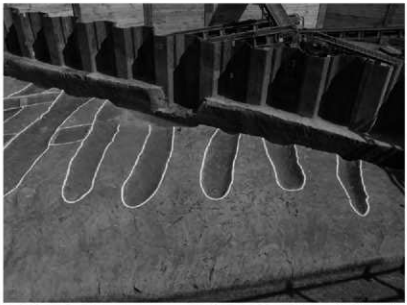
山元　建編　2006『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第145集　片山荒池遺跡』（財）大阪府文化財センター

中岡　勝編　2008「第Ⅴ章　遺構・遺物の検討」・「第Ⅵ章　総括」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第180集　吹田操車場遺跡Ⅲ』（財）大阪府文化財センター

岡本圭司他編　2010「第Ⅳ章　自然科学分析」・「第Ⅴ章　まとめ」『（財）大阪府文化財センター調査報告書　第201集　吹田操車場遺跡Ⅳ』（財）大阪府文化財センター

図版31 通信立坑・下水管1区 1．通信立坑 第2面（南から）
2．通信立坑 第3面（南から）
3．下水管1区 第2面（北から）
4．下水管1区 第3面（北から）
5．下水管1区 第4面（北から）
6．下水管1区 第4面 6溝 断面（北から）
図版32 下水管2区 1．下水管2区 第3面（南から）
2．下水管2区 第5面（南から）
3．下水管2区 断面（南から）
図版33 1・2区 遺構出土遺物
図版34 3－1・3－2区 遺構出土遺物
図版35 3－2区 遺構出土遺物
図版36 4・5－4・5－2区 遺構出土遺物
図版37 5－2区 遺構出土遺物
図版38 1・2区 包含層出土遺物（1）
図版39 1・2区 包含層出土遺物（2）
図版40 3区 包含層出土遺物
図版41 5区 包含層出土遺物
図版42 石製品・木製品・鉄滓
図版43 石器

写　真　図　版



1．1区　第1－1面
西端（北から）

2．1区　第1－2面
西半（西から）

3．2－2区　第1－2面
全景（西から）

図版２　１・２区

１．１区　第２面
西半（西から）

２．１区　第２面
62 溝断面（南から）

３．２－２区　第２面
全景（西から）

１．１区　第３面
東半（南西から）

２．２－１区　第３面
全景（西から）

３．２－１区　第３層
遺物出土状況
（西から）

図版４　１・２区

１．１区　第４面
東半（南西から）

２．１区　第５面
東半（南西から）

３．２－１区　第５面
全景（西から）

１．１区　第６面
西半（南から）

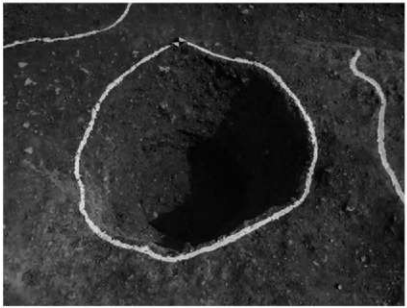
２．１区　第６面
133 谷西半断面
（北東から）

３．１区　第６面
159 遺物集中部
墨書土器出土状況
（南東から）

図版６　１区

１．１区　第６面
158 井戸検出状況（北から）

２．１区　第６面
158 井戸断面（西から）



３．１区　第６面
158 井戸完掘状況（北から）

1．2－1区　第6面
全景（北から）

2．2－1区　第6面
151・152 土坑検出状況
（東から）

3．2－1区　第6面
154 土坑断面（東から）

図版８　３－２区

１．３－２区　第２面
東半（南東から）

２．３－２区　第２面
192 池東端断面（北から）

３．３－２区　第２面
192 池遺物出土状況
（南西から）

１．３－２区　第５面
西半（南東から）

２．３－２区　第６面
東半（南西から）

３．３－２区　第６面
204 落込み遺物出土状況
（南から）

図版 10　3－1区

1．3－1区　第2面
西半（西から）

2．3－1区　第2面
165 池断面（西から）

3．3－1区　第3面
東半（東から）

1．3－1区　第6面
全景（東から）

2．3－1区　第7面
全景（東から）

3．4区　第1面
東半（北西から）

図版 12　4区

1．4区　第3面
東半（南西から）

2．4区第5面
西半（南東から）

3．4区　第6面
東半（北から）

1．4区　第6面
503 落込み断面
（東から）

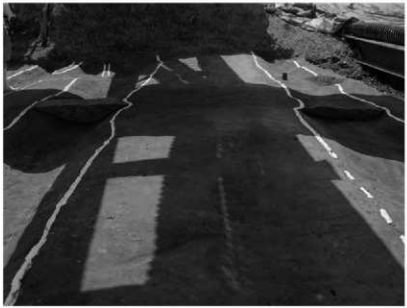
2．4区　第7面
全景（北から）

3．4区　第7面
504 落込み断面
（北東から）

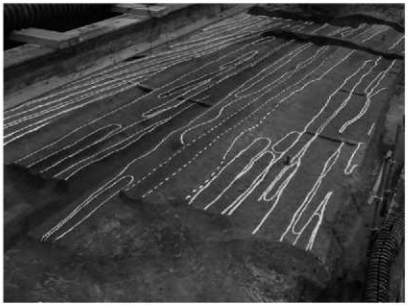
図版 14　5－1・5－4区

1．5－1区　第3面
全景（東から）

2．5－1区　第6面
全景（西から）



3．5－4区　第0面
510大畦畔（北から）



1．5－4区　第1面
東半（北西から）

2．5－4区　第2面
西半（西から）

3．5－4区　第2面
516・517 土坑
（東から）

図版 16　5－4区

1．5－4区　第2面
516 土坑断面（西から）

2．5－4区　第3面
東半（北西から）

3．5－4区　第4面
西半（西から）

1．5－4区　第4面
530 溝（南から）

2．5－4区　第4面
530 溝断面（南から）

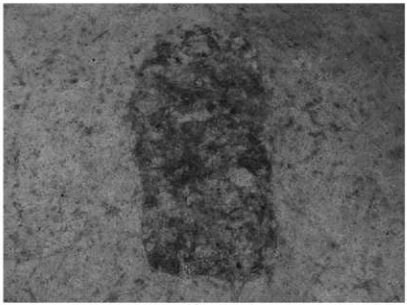
3．5－4区　第5面
東半（北東から）

図版 18　5－4区

1．5－4区　第5面
538 溝断面（南から）

2．5－4区　第6面
中央（北西から）

3．5－4区　第6面
540 土坑断面（東から）



1．5－4区　第6面
539 土坑検出状況
（南から）

2．5－4区　第6面
539 土坑完掘状況
（南から）

3．5－4区　第6面
539 土坑断面
（南から）

図版 20　5－4区

1．5－4区　第7面
542 谷（南から）

2．5－4区　第7面
542 谷西肩付近断面
（南東から）

3．5－4区　第7面
542 谷中央断面（南から）

1．5－3区　第2面
西半（北西から）

2．5－3区　第4面
東半（北西から）

3．5－3区　第6面
東半（西から）

図版 22　5－3区

1．5－3区　第6面
484 土坑断面（南から）

2．5－3区　第6面
486 溝断面（南から）

3．5－3区　第7面
全景（北から）

1．5－2区　第1面
293 土坑断面（東から）

2．5－2区　第3面
全景（北西から）

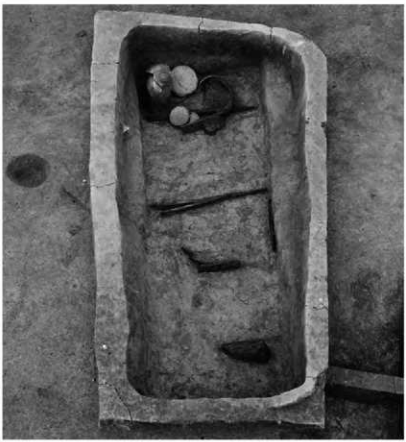
3．5－2区　第3面
352 溝断面（南から）

図版 24　5－2区

1．5－2区　第4面
全景（北西から）

2．5－2区　第5面
全景（東から）

3．5－2区　第5面
393 溝（南から）

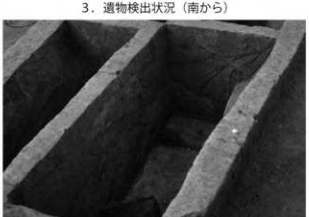


1．5－2区　第5面　395 木棺墓完掘状況（南から）

2．木棺検出状況（南から）

3．遺物検出状況（南から）

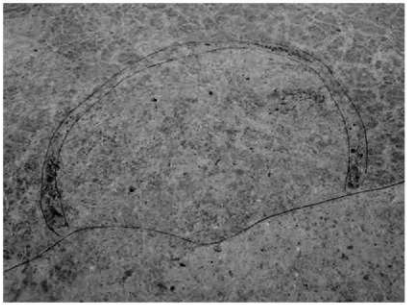
4．395 木棺墓断面（北西から）



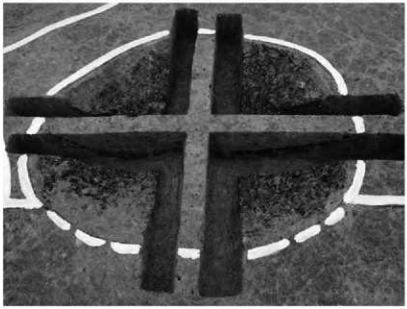
5．395 木棺墓断面（南東から）

図版 26　5－2区

1．5－2区　第5面
396 溝断面（南西から）



2．5－2区　第5面
394 土坑検出状況（南から）



3．5－2区　第5面
394 土坑完掘状況（南から）

1．5－2区　第6面
全景（南東から）

2．5－2区　第6面
435 土坑完掘状況
（南東から）

3．5－2区　第6面
409 溝（南西から）

図版 28　5－2区

1．5－2区　第6面
408 土坑完掘状況（北西から）

2．5－2区　第7面
427 土坑完掘状況（東から）

3．5－2区　第7面
427 土坑断面（北東から）

1．5－2区　第7面
全景（南から）

2．5－2区　第7面
436 土坑断面
（北東から）

3．5－2区　第7面
445 土坑完掘状況
（西から）

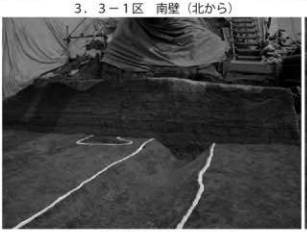
図版30　2～5区

1．2－2区　西壁（東から）

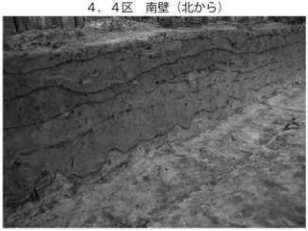
2．3－2区　南壁（北から）

3．3－1区　南壁（北から）

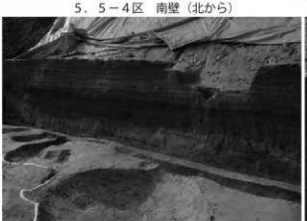
4．4区　南壁（北から）



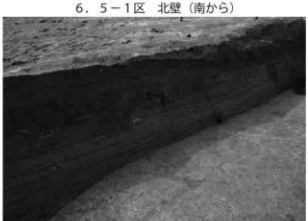
5．5－4区　南壁（北から）



6．5－1区　北壁（南から）



7．5－3区　西壁（東から）



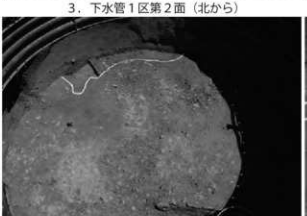
8．5－2区　西壁（東から）

1．通信立坑　第 2 面（南から）

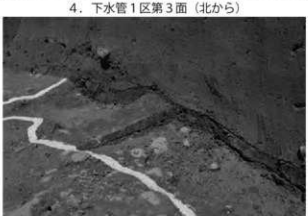
2．通信立坑　第 3 面（南から）

3．下水管 1 区第 2 面（北から）

4．下水管 1 区第 3 面（北から）



5．下水管 1 区第 4 面（北から）



6．下水管 1 区第 4 面　6 溝断面（北から）

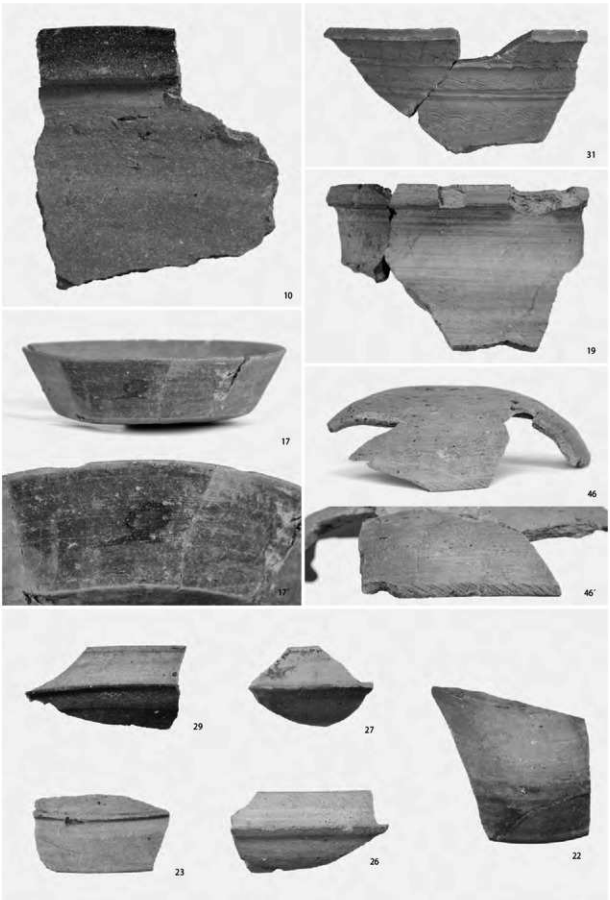
図版 32　下水管２区

1．下水管２区　第３面
（南から）

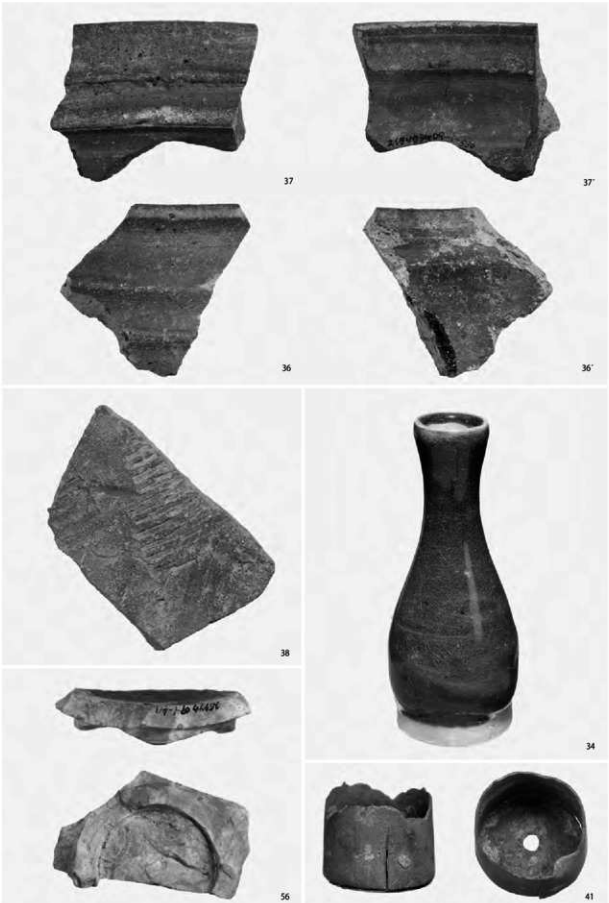
2．下水管２区　第５面
（南から）

3．下水管２区断面
（南から）

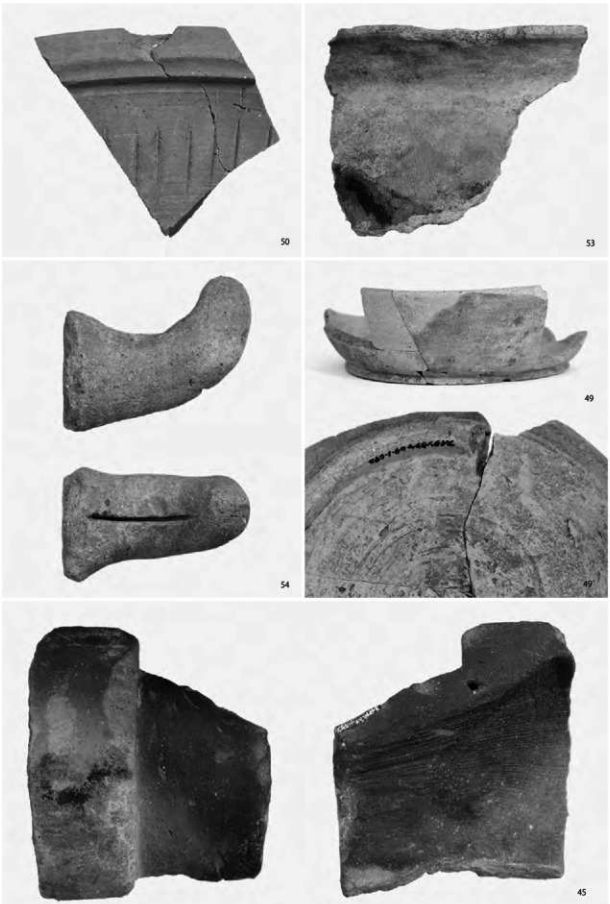
図版 33　1・2区　遺構出土遺物



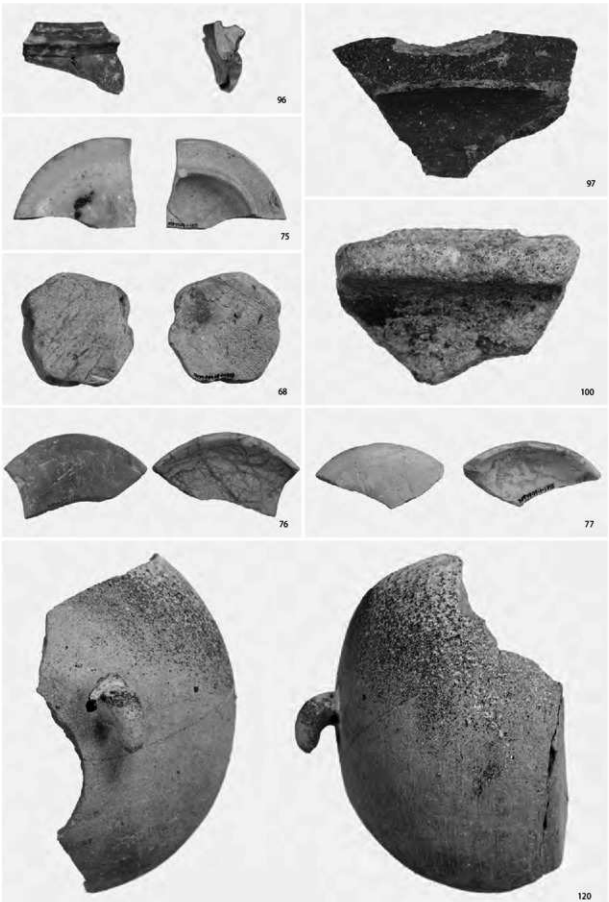
図版34　3－1・3－2区　遺構出土遺物



図版 35　3－2区　遺構出土遺物



図版36　4・5－4・5－2区　遺構出土遺物



図版 37　5－2区　遺構出土遺物

105～111

105

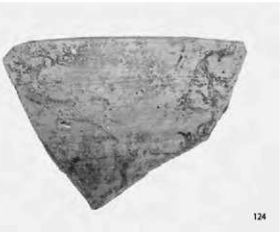
106

107

108

図版 38　1・2区　包含層出土遺物（1）

123


124

127

137

141

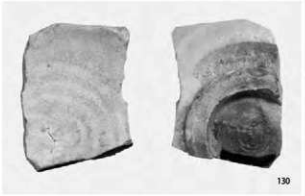
134

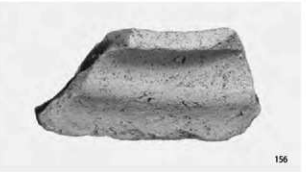
135

図版 39　1・2区　包含層出土遺物（2）

148

131


130


156

158

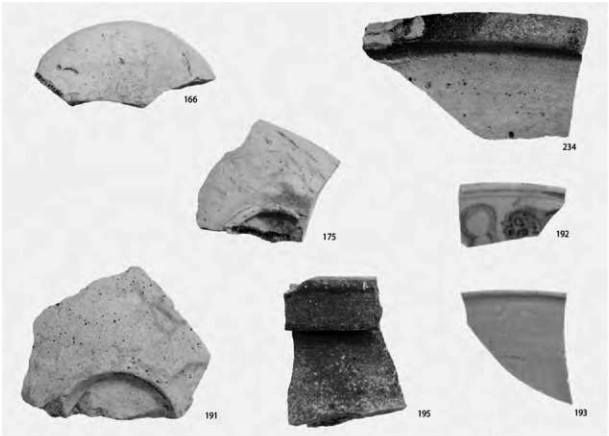
162

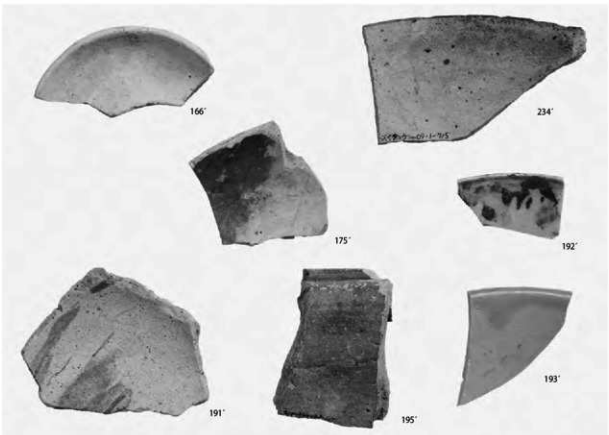
159

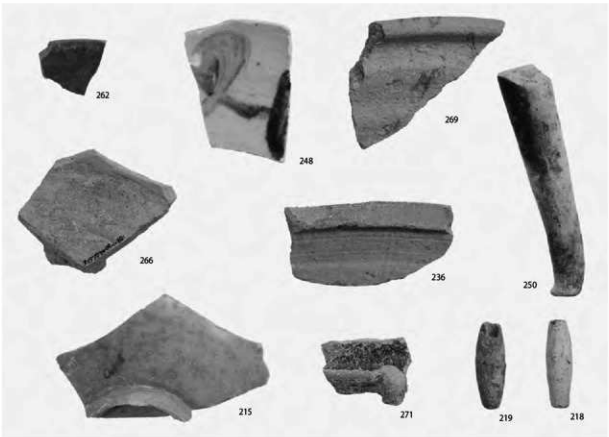
161

163

図版 40　3区　包含層出土遺物





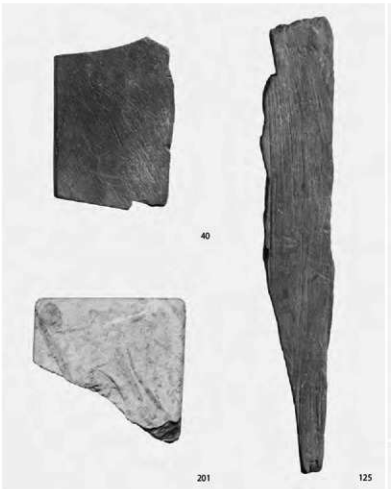

262
248
269
266
236
250
215
271
219
218

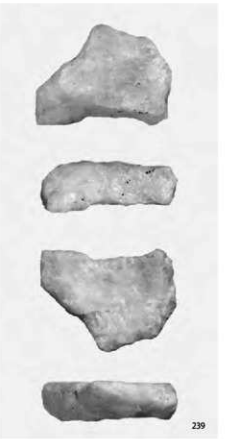
238

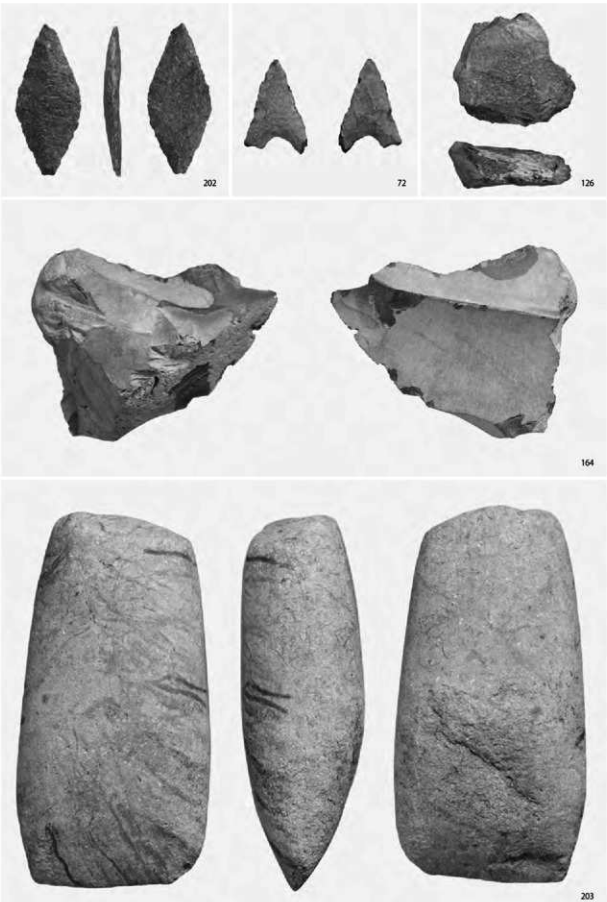
237

268

図版 42　石製品・木製品・鉄滓






202
72
126
164
203

報告書抄録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき ろく
書名	吹田操車場遺跡VI
副書名	吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	(財) 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第217集
編著者名	新海正博
編集機関	(財)大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市中区竹城台３丁21番４号　　TEL072(299)8791
発行年月日	2011年月３日31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
すいたそうしゃじょう 吹田操車場 いせき 遺跡	おおさかふ 大阪府 すいたし 吹田市 かたやまちょう 片山町 いっちょうめちかい １丁目地内	27205	73	34°46′01″ ～ 34°45′58″	135°31′35″ ～ 135°32′31″	2009.4.1 ～2010.7.30	2067㎡	吹田信号所 基盤整備工事 （貨物専用道路）

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹田操車場遺跡	集落	弥生	土坑	弥生土器、石鏃 太型蛤刃石斧	
	集落	古墳	井戸、土坑	須恵器、土師器	
	集落 田畑	古代～中世	鋤溝、溝、土坑、 木棺墓、焼土坑	土師器、須恵器、 黒色土器、瓦器、 瓦質土器、施釉陶器 輸入陶磁器、石製品	墨書土器 中世の木棺墓

要約

今回の調査区は吹田操車場遺跡の西端部に位置する。

調査地は丘陵縁辺部分と低地部分に分かれ、高位に位置する丘陵縁辺部では、居住域の西端であることが判明した。

一方、低地部分には嶋下郡南部条里の条里地割に則った耕作地が中世以降、広範に展開することが明らかになった。

古代以前には、丘陵縁辺では弥生時代の土坑が複数掘削され、後世の包含層や遺構から弥生土器や石器（石鏃・石斧）が出土しており、調査地周辺に弥生時代の集落が存在していた可能性を示唆している。低地部分では古墳時代の井戸が掘られており、その位置関係から遺跡北側に広がる片山荒池遺跡との関係を窺わせる。

また、丘陵縁辺部西側には縄紋時代早期以前に形成された谷状地形がみられ、縄紋時代は起伏に富んだ地形であったことが解った。

（財） 大阪府文化財センター調査報告書 第217集

吹田操車場遺跡VI

吹田（信）基盤整備工事（貨物専用道路）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 2011年3月31日

編集・発行 財団法人 大阪府文化財センター
〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・編集 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号